
裏現実紅殺戮 白と黒と紅

B-零 a s u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏現実紅殺戮 白と黒と紅

【Nコード】

N4702P

【作者名】

B・零 asu

【あらすじ】

裏現実がざわめく。哀別した血に染まった少女は独り異国の地へ。そこに現れる黒の殺戮者。黒と白の避けられぬ衝突。裏現実に戦争。そして紅色の黒猫に怪しげな影が迫る。

「狂った裏現実へ、ようこそ」

裏現実紅殺戮

第参章

白と黒と紅

あたしの負け

白と黒。

白あつての黒。黒あつての白。

白あつての黒。黒あつての白。

光と影のように、対象でありながら繋がる存在。

けれども決して交わらない。

交わることなんて、溶け合うことなんて、ない色だ。

主張しあつて、灰色にはならない。

互いを塗り潰す。

白の殺戮者。黒の殺戮者。

鏡のようにそっくりなくせに対象になつて対立する存在。

裏現実で今最も恐れられている殺し屋。

このどちらかに狙われても最期。二人に狙われても最期。いい死に

方はしない。

対立する白と黒。

殺し合いを始めれば誰も止められない。

白と黒の衝突。

終わらない殺し合い。

決着のつかないぶつかり合い。

紅い血が、舞い飛ぶ。

アカ紅い

この色が好きだ。

白よりも、黒よりも。

爪で掻き裂き、刃で切り裂く。

逃げ惑うとした人間が暗い部屋で生き絶える。

壁も床も彼らの返り血で血塗れだ。

あたしも、そう。

紅色のコートも、ブーツも、手も手にするカルドも、髪も顔も血塗れだ。

紅に塗れる紅色の黒猫。

ポタポタと紅い血が滴る音に耳をすます。

ポタン、ポタン、ポタン、ポタン。

立ち尽くしてその音を聴く。

殺した人間のことなんて無機物にしか思わずにただぼんやりとした。

「くひゃあ、真っ赤だあ」

唐突に、背後から声。

後ろに、生きている人間がいた。

あたしはバツと振り返って首筋にカルドを突き刺す。

後ろに居たのは、黒髪で黒い上着に黒いズボン。黒づくめの若い男だった。

この場にいたマフィアの幹部とは違う。誰だコイツ。

「！」

「くく……」

男はカルドを掴むあたしの手を握って、笑いを洩らす。そして深々に刺したカルドを引き抜いた。手を振り払い距離をとる。

カラン、とそれは床に落とされた。

「やっと会えたね、紅色の黒猫」

「…… 黒の、殺戮者……！」

につこり、血に濡れた笑みを向けられてやっと気付く。刺しても平然と立っているのは　　吸血鬼。声には聞き覚えがある。黒づくめの吸血鬼。

黒の殺戮者。

見付かった。

逃げなくては。

パグ・ナウを振り上げて身体を裂く。返り血を浴びる。

しかし、吸血鬼はそれだけでは死なない。足留めにもならない。

血飛沫だけにして傷はもう塞がったようだ。猫のように眼を細めて口元を吊り上げる顔は、誰かを連想させた。

「血がこびりついた匂いで甘い匂いが消えてる。血の匂いしかない。これは洗っても」

投擲ナイフをコートの中から出して頭に突き刺す。黒の殺戮者はすぐに顔を起こし、額からナイフを抜き取った。

「中々とれないよ。こびりついてる」

ナイフについた血を、ペロペロと舐める。

駄目だ。首をはねないと逃げ切れない。カルドは黒の殺戮者の後ろだ。代わりになるのは短剣か。

「！」

「っーかあまえた」

「くっ！」

短剣を抜き取る前に、爪を出す左手を掴まれる。短剣は両腕の袖の中だ。これではとれない。

パグ・ナウで足掻こうとしたが、黒の殺戮者が先手を打つ。

ガシツと首を掴まれて、壁に叩き付けられる。
しまっ……！

咬まれた。肉に突き刺さる痛みがする。

「っ……っ！」

振り払えなかった。吸血鬼の腕力がどれくらいなのかは知らないが、本当にビクともしない。

ゴクリと彼があたしの血を飲み込む音が聞こえた。

このまま血を飲み尽くされてしまう。

けれども、抵抗が効かない。

ゴクン、ゴクン。

体内の血液が吸いとられるのを感じる。

「う………あ……あ」

力まで吸いとられているようだ。

意識が、身体が、沈む感覚がする。まるで落ちるような感覚。足元がなく、落ちるような感覚だ。

前にも味わった感覚。

いつだっけ？

嗚呼、そうだ。死にかけた時だ。

嗚呼、いいか。このまま死んでも。もう死んでしまおう。

どうせ　　独りだ。

瞼が落ちる。

意識も、落ちた。

暗い闇の中に、落ちていく。墮ちていった。

夢を見る。

白い部屋は暗くて、黒い影が白を塗り潰していく。
全てが黒になる前に、いつも目が覚める。

「……………」

瞼を開けば、見慣れない天井。

次に目に入るのは点滴。ポタポタと滴が垂れている。
だけど病院の病室ではない。

カーテンの隙間から差す光で見えたのは、散らかったオフィスのよ
うな広々とした部屋。

机がいくつか並んであって、資料のような紙が散乱している。椅子
は無造作に置かれていて、人の気配はしない。

あたしが横たわっているのはベッドじゃなく、背もたれのないソフ
アが二つ合わせているだけだ。

「おはよう、気分はどう？」

それから、黒の殺戮者が一人。

椅子を持ってきて背もたれをあたしに向けて向き合って座った。
笑みは保ったまま、にっこりとあたしを見つめる。

今まで見てきた吸血鬼と同じ、綺麗な顔立ちをしていた。

「ごめんね、ついつい飲みすぎちゃった。あんまりにも美味しいか
ら、まあ君が俺を切りすぎたせいでもあるけどさ」

首に触れると絆創膏が貼られていた。この点滴もどうやらこの為の
ようだ。

悪いと思っているようだが、反省の色は微塵も見えない。

睨み付けた。

「怒ってる？俺は勝負に勝った、勝ったら君の血を飲む約束だ」

……くそ。首から額に手を置いて舌打ちをする。

負けた。勝負に負けた。

負けた、クソツ、悔しい。

肋骨に顔に出たらしく「くひゃ」と笑いを溢す黒の殺戮者。

「君、栄養失調だよ。人間なんだから、食べなきゃだめだ。何が好き？食べ物買ってくるよ」

椅子をギコギコと揺らしながら黒の殺戮者は訊く。

栄養失調。

この一ヶ月は大したもの食べていない。気が向けばフード店に行ったが、週に一二回程度だ。至極空腹のまま、今まで仕事をしてきた。

「なんででめえがそんなことをするんだよ。関係ないだろ。血を吸い付くして殺せば」

「ありゃ？空腹で不機嫌だねー。殺しちゃ意味ないじゃん」

「なにか企んでも無駄だ。でめえと誰かさんの戦争なんかに関わるつもりはない」

背もたれに肘を置いて暢気に笑っていた黒の殺戮者は、そこできよとんとした表情を見せた。その表情も、誰かさんを連想させる。

「あれ……もしかして…白はくから聞いてない？」

「は？何が？」

「まあーたく、白状な奴だなあ」

呆れて肩を竦めたが、黒の殺戮者は気を取り直して笑いかけた。

「仲間にならない？ 紅色の黒猫　　の椿」

黒の殺戮者はにっこりと気軽に言う。

「なんだかそつちの名前を呼ばれたのは久しく感じる。その名前を名乗らずに一ヶ月を過ごしてきたからだ。あたしの名前を知っている者に会うこと自体久しい。……そんなことを考えてる場合じゃないか。」

「は？ 何言ってるんだ」

「仲間に入って、そう言ってるんだよ」

「……仲間って……。レネメンや遊太ゆうたや火都かとと一緒にアンタの率いる集団の一員に入れと？」

「そおゆうこと。……あれ、火都とも知り合いだったの。縁があるんだね、椿」

「楽しげにクスクスと笑う黒の殺戮者。」

「ぼかーんとする。あまりにも唐突なことに理解が出来ない。」

「黒の殺戮者……あたしは、白瑠はくろさんの弟子だって知ってるの？」

「知ってるよ、白が自慢したもん。白の弟子だからって俺が君を誘っちゃだめなのかい？」

「いや……駄目だろ……」

白はく。親しそうに呼ぶのに、仲が悪いんだろつ。

仲が悪いからこそ駄目に決まっている。

彼の名前も、口にするのは久しい。

「それとも師匠が俺の仲間にはなるなって言ったのかい？」

「……………言っていないけど……………」

黒の殺戮者があたしを仲間にするこことさえ、教えてくれなかった。白瑠さんが知っていたかどうかはわからないが、知っていたからこそあたしに会わせないようにしていたのだろう。

きつと知っていて皆で隠していたに決まってる。…みんな。

嗚呼、そっか。レネメンの伝言は、この勧誘のことだったのか。

「……………断る」

「！」

「断る。黒の殺戮者、お前の仲間にならない」

あたしはきつぱりと断って、点滴の針を抜く。

「そんなこと言わずにさ、一緒に楽しもうよ。樁」

黒の殺戮者はちつとも動揺せずにそう言う。

「お前とつるむ気はない。この話は終わりだ。もう用はねえだろ」

床に足をつけて脱がされたコートを掴む。袖を通して立ち上がる。少しクラツとした。

「駄目だ、病み上がりだぜ。腹に何か入れないと」

冷たい手があたしの手を掴んだ。反射的にあたしはその腕にナイフを突き立てた。

「おっと」

「触るんじゃない。あたしに関わるな」

睨み吐き捨ててあたしはその部屋を後にした。

少しフラフラするがあたしはゆっくりと歩んだ。

何が食べたいと問われて考えたら空腹を感じてしまった。何か買っていこう。

先週見付けたチーズバーガーの美味しい店に寄った。

「チーズバーガー…十個に、ポテトとドリンク二つ」

「十個…ですか」

可愛い顔の店員さんは顔をひきつらせたがあたしは頬杖をついて待つ。

チーズバーガーが詰め込まれた紙袋を抱え一つ食べながら、寝泊まりしている部屋へと戻る。

アメリカのアリゾナ州のある街。

今はここに滞在している。

この一ヶ月、あちこちとしていた。

海外に行くために、武器職人の松平^{まっだらうな}兔無さんに頼み込んだ。

最初はアメリカのニューヨーク。生活費を稼ぐために仕事をやったら、忽ち噂が広がって黒の殺戮者がニューヨークに現れたと情報を掴んだ。直ぐにアメリカを発つて、ロシアに。ロシアでも滞在がバレ、今度は白の殺戮者も現れたと聞いてロシアも発つた。

それだけで一ヶ月経ったと思えたが、まだ五日も経っていない。

次はイタリア。マフィアの殲滅で忽ち噂が広がったため、PCを使つてガセネタを広げた。

ギリシャやブラジルにも行つて、またイタリア。韓国に中国。日本に一度戻つてはまたイタリア、フランス。そしてアメリカ。

たまに藍さんの追手もきてそれも振り払つてきたが、今回は黒の殺戮者に捕まつてしまった。

「はあ……次は何処に行くか」

螺旋階段のあるアパートの狭い部屋に入つてソファに荷物を置いて、コートやブーツを脱ぎながら浴室に向かう。

シャワーを浴びて適当に拭いてからブラウスに短パンを着て、チーズバーガーをもう一つ食べてコーラを飲む。

「なんでお前はまた沈黙してやがんだよ、^{ワイ}V」

食べ終えてゴミ箱に放り投げる。返事はない。

ちっ、と舌打ちをしてからまたチーズバーガーに手を伸ばす。

「へえ、チーズバーガーが好きなんだ？」

チーズバーガーを置いたソファの背凭れに頬杖をついた黒の殺戮者が洩らした。

ギョツとしたが直ぐにソファの下に隠したショットガンを出して銃口を向ける。

「おっと」と黒の殺戮者は銃口先をずらし、引き金に指を挟んで発砲を阻止した。

「血はたっぷり飲んだんだからもう危害は加えないよ。殺し屋としてはいい反応だけど、俺だって痛いんだぜ」

「……吸血鬼のクセに昼間の街を歩いてんじゃねえよ」
「苦手は克服する努力をしないと」

油断した。吸血鬼だから太陽がキラキラ差した昼間で尾行が出来るとは思わなかった。畜生、寢床までバレた。さっさとここを離れないと。

ギギギギイ。

なんとか銃口を黒の殺戮者の頭に突き付けて引き金を引きたかったが無理だ。笑いながら黒の殺戮者はショットガンを動かさないように固定する。くそ、吸血鬼の腕力強。

こうなったら。

あたしは右足を横から振り上げて頭を蹴り飛ばそうとした。

パシッと銃を掴む手で黒の殺戮者は受け止める。

その掴まれた膝で銃口を額に突き付けてトリガーを引いた。が、まだ黒の殺戮者が指を挟んでいて発砲ができない。

「きゃっ」

足首を引つ張られてバランスを崩して床に倒れた。その際にショットガンを取られる。

「そんな警戒しないでっつてば、椿。危害は加えないって言うてるだろっつ？」

バキッとショットガンをへし折って黒の殺戮者はソファに腰を下ろした。

「……あのね、黒の殺戮者。あたしは白瑠さんの弟子だ、敵対するお前の仲間になるのはあり得ない」

「他人行儀だなあ、椿。電話の時みたいに俺の名前を呼んでよ」

話を聞いていない。

そっくりだな、本当に。

疲れを感じて息をついてから起き上がる。

「出てけよ、吸血鬼を招いた覚えはない。出てけ」

「出ていったらまた姿を眩ましちゃうだろう？」

「……………関係ねえだろ、もう勧誘は断ったはずだ」

「俺は諦めが悪いんだ」

だろうな。

ニコニコと黒の殺戮者は笑みを貼り付けたままであたしを見下す。全く、妙な者に目をつけられた。

「なんであたしを誘うんだ？黒の殺戮者」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………なんであたしを誘うのよ、コクウ」

黒の殺戮者 コクウ。

子供のように無視をしたので致し方無く名前を呼べばパツと振り返った。

疲れる。へとへとな時に誰かさんの相手をしているようだ。

「名前を馳せてる皆を集めてるんだ。君もその一人だろ？丁度結成したのと君が流星の如く現れたのは同じ時期だ。運命感じない？」

「……………ああ、そうか。そうだったな、お前のチームは有名人だらけ。

…だがあたしはそこには入らないって言ってんだ、さつさと諦めて出ていけ」

「諦めないけど、君が行方を眩まさないと約束すれば出ていくよ」

黒の集団。

黒の殺戮者率いる集団。

名を馳せる裏現実者が異例の数で集まり群れをなしている。

「わかった、約束するから出てけ」

「ふふ、約束を守らなかつたら俺は日本に行って白瑠に会う。それで君に会ったことを話し、仲間になるように説得してと頼みに」

「約束する！！守る！！」

さつさと出ていってもらおうと適当に追い払おうと嘘の約束をしたら、それは見透かされて脅しを出された。慌てて言ったが、そうされた白瑠さんは一体どうするのだろうか。どうするんだろう。

…わからない。

彼が今どう思っているかさえわからないんだ。

「ん、じゃーね。また後で」

しつかり約束が出来、満足気な笑みでコクウはあたしの部屋を後にした。

「……………疲れた」

ボタンとベッドに倒れ込む。

紅色の黒猫。

あたしが裏現実姿を現した時期と黒の集団が結成した時期は確か

に重なっている。

師匠である白瑠さん、白の殺戮者或いは頭蓋破壊屋に並ぶ存在と謳われるあたしと同様にこの時代で名を馳せる裏現実者が集っている。その理由は未だ謎。

とんでもなく大きな仕事をやるだとか、国一つを滅ぼすとか、誰かに喧嘩を売るとか。どれも信憑性がない。

「知りたいか？あの黒ヴァンパイアが何を企んでるか」

頭の中から声が響く。

「仲間になればいい。わかるだろーよ」

「仲間にはならない。アンタ、吸血鬼の前だからって沈黙すんな。アンタが喚けば逃げ切れたのに」

文句を吐いてチーズバーガーをとってまたベッドに倒れる。

頭の中の悪魔は「ククツ」と喉で笑った。

「ラトアっつー吸血鬼を足止めしてやったのはお前を殺さない吸血鬼だからだ。お前が吸血鬼に殺されたらオレまでくたばる」

「殺されたらどうするつもりだったのさ。……ヴァッサーゴ、知ってたのか？コクウが殺さないって」

「声音と殺気でわかるさ。黒野郎はお前を殺す気なんてないぜ」

だから大人しくしていたのか。

死ぬのは御免だからと今まで助けてきたそうだ。

あたしの中に住み着いた悪魔。何を言っても出ていかないの一点張りの悪魔の名前はヴァッサーゴ。面倒臭いから普段はVと呼んでいる。

吸血鬼を滅ぼすとかいう野望は持っていないらしいのでそのままだ。

あちこちしても、悪魔退治のジエスタには会えないでいる。

「なんで断る？今フリーなんだから入りゃいいじゃねえか、椿」

答えを知っているくせにヴァッサーゴはわざと問う。

答えたくない時は銀色の指輪を嵌める。そうすればヴァッサーゴはいつものように沈黙。

黒の集団の一員である那拓遊太なたくゆうたの弟である那拓蓮真なたくれんまからもらったものだ。

彼とも一ヶ月会っていないし、連絡もとっていない。連絡手段である携帯電話は彼の部屋に置いてきてしまったのだから当然だ。仲間になりたくない理由は一つだけ。

黒の殺戮者と居れば、必ず白瑠さんに会う。

「……………」

食べ掛けのチーズバーガーを握り潰してゴミ箱に投げる。視なくともスポツと入った。

本当に疲れた…。

この一ヶ月も、昨夜に続く今日も。本当に疲れた。

枕に顔を埋めて目を閉じる。ベッドに沈んだ身体は鉛のように重い。海に沈むように眠りに落ちた。

気だるい眠気を引き摺って目を開く。ボヤけた視線の先には、ベッドの隅に腰を下ろすコクウがいた。

手には紙　じゃなくて写真。連想するのは。

「何してる!？」

咄嗟にあたしはその写真を取り上げる。だけど写真に写っているのは、あたしだった。
ベッドで眠っているあたし。

「昨日撮ったんだ。ちゃんとノックしたから、怒るなよ。君が丸二日眠るほど気付かないのが悪いんだぜ」
「二日!？」

あたしはギョツとする。

写真はどうやら昨日撮ったもの。あたしは丸二日寝込んだらしい。念のためにコクウが突き付けた携帯電話を視たが、二日経っていた。

「嗚呼、畜生!今日は仕事じゃねーかつ!」

ベッドから飛び降りて慌ててニーソを履いてブーツを履く。ブラウスの上に面倒だからコートを着た。

「仕事?手伝う」

「必要ない!あたしの仕事だ!」
「……………」

沈黙を返されたから、振り返ってみればベッドに寝そべったコクウがにっこりと笑いかける。

「じゃあ獲物を横取りする」

「はあ!？」

「暇なんだ。今夜は君の寝顔を眺めて過ごすつもりだったから」

「てめっ…………!あたしの許可なしに部屋に二度と入るな!!」

怒鳴ってパタパタと支度をする。獲物を今夜仕留めないといけない約束なんだ。遅刻したら仕留め損なう。

部屋を飛び出してからも、コクウはついてきた。

「ついてくるな、コクウ」

「今夜の予定は君と過ごすって決めたから。車ないなら送るよ」

アパートの前で睨み付ければ、ニコツと返された。そして黒いアレクスの助手席に座るようドアを開けられる。丁重にお断りをしたいが、時間は迫っていた。

「じゃあ、借りる」

「え？」

助手席に座ると見せかけ、鍵を奪い取って車を盗んだ。エンジンをかけてアクセル全開で走り去る。

借りるだけだもん。

吹っ飛ばして来たが、現場は最悪だった。

マフィアかギャングの抗争、或いはテロリストの自爆テロのような有り様。

完全に遅刻した。

今回の標的は億万長者のパトスという男を殺すこと。

彼の遺産が欲しい身内が殺し屋を雇った。それを知りパトスは暫く身を潜んでいたが、愛人の誕生日である今日にレストランを貸し切りにするという情報を掴んで今日を狙っていたんだ。

だが、身内が皆殺し屋を雇った為に、殺し屋同士の殺し合いになってしまっていた。

貸し切りのレストランの中で数人が喧嘩。店の外でも数人。パトスの首を巡って殺し合いをする様は滑稽だ。

金の為に家族全員に殺し屋を差し向けられたパトスも至極哀れな男だ。

全く失笑してしまう。

暫く車の中でそれを眺めた。

一人になるまで待つて、その一人を殺せばいい。

待つていたが殺し屋達の実力は互角のようで決着が中々つかない。

一人も減っていない。

もうこの仕事から降りようかと思ったら、二人が同時に倒れた。

それからもう一人が倒れる。

撃たれた？にしては銃声が聴こえなかった。身を乗り出して確認しようとしたら、プツ！とクラックションを押してしまう。

残りの殺し屋も殺し屋を射った奴もあたしの方に振り返った。

幸いスモークガラスのため、彼らには視えないはず。

ひらひら。

ボウガンを持った男が手を振ってきた。勿論、あたしに。

「……弥やたべかこ太郎火都……」

手を振るのは、弥太郎火都だった。狩人で、飛び道具の名人。

黒の集団の一人だ。

きつとあたしにではなく、コクウに手を振っているつもりなんだろう。

この車は、コクウのだ。

んー、どうしようかな。

車は返さないと。逃げたら追われそう。

だけど彼は狩人。あたしは殺し屋。

火都はボウガンでレストランの殺し屋を射抜いた。百発百中。

火都と殺し合うのは骨が折れる。疲れたくはない。

話せばわかるかな。

一応指輪を外してから、あたしは車から降りた。

「……………椿…？あれ……………これ……………黒の車じゃあ……………」
「久しぶり、火都。借りたのよ、貴方のボスにね。返しておいて」
「うん」

歩いて近付けば、火都はきよとんと首を傾げた。やる気のない顔きをして車のキーを受け取る。良かった、殺されないみたいだ。
視てみれば射たれた殺し屋は息があるのがほとんどだった。あまり殺しをしない狩人だったっけ。

「あそこに死んでる奴の首を貰っても構わないかしら？ターゲット
なんだけど」

「ん、ああ、いいけど。おーれはたまたま通りかかったただけだし」

よし、楽しんで大金ゲット。

仕事が被っていたらどうなっていたことやら。

あたしは扉が吹っ飛ばされた出口に入ってから愛人を庇うように倒れたパトスの首をカルドで切り落とす。

愛人を愛していたせいだ。

それでも命を狙われてもう愛人しかいなかったせいなのか。

最期は愛人とともにくたば……………。

「ゴホツ……………ゴホツ……………」

「……………あら、生きてる」

パトスが死守したからだろう。多少の怪我はしているものの、愛人の女は生きている。

「火都。彼女を病院に送ってくれない？掃除屋を呼ぶから」

「ん、わかった」

訳も聞かず火都はすぐに引き受けた。
あたしはオーナーらしき男の背広で首を包んでから女を死体の下から出す。

「大丈夫ですか？お姉さん」

「うう……あの人は……？パトスは？」

「貴女を庇って死にました。これから彼が貴女を病院に連れていきます」

それだけを伝え、火都に任せた。

「椿」

「ん？」

「仲間に入ったの？」

「……いいえ」

「ふーん、そっか」

「…断ったって聞いてないの？」

「おーれ、空港についたばかりだから」

「…そう。じゃあまたね」

「また」

あたしは生首を片手にその場から離れて依頼人の元に行く。

火都は引き受けるだけでそれ以上引き留めも勧誘もしなかった。

この国に来たばかりとは、召集でもかかっているのだろうか。

そろそろ動く気か？

それともあたしを引き込むためにコクウが何かを企んでいるのか。

どっちだろうとあたしはこの国を離れることにしよう。

「愛人は生きてるだって！？」

確認の為に生首を見せて説明をすれば、依頼人であるパトスの息子は声を上げた。

「なんで女を殺さなかったんだ!？」

「……あたしはパトスを殺せとしか言われていない」

「お前はその場にいる全員を皆殺しにする紅色の黒猫だろ!？なのに、あの女を見逃すなんてっ!!！」

パトスの息子は喚き散らした。

あたしはただ黙ってソファで寛いで終わるのを待つ。

どうやら女も殺して欲しかったらしい。しかし仕事内容はパトスを殺すだけ。あたしが彼女を殺す理由は何もない。

「あの男が愛人に遺産を渡すと遺書を残してたらどうしてくれるんだ!？あの女を消せなかったら金なんて払えないからな!!！」

ドガッ!

頭を鷲掴みにしてソファに押し潰し、短剣の刃を首に突き付ける。その途端に依頼人は凍り付いて大人しくなった。

「引き受けた仕事の内容は貴様の父親を殺す。それだけのはずだろう?殺してほしいけりゃ初めからそう言えよ、父親殺し」

「っ……!!！」

「愛人の生死より、他の身内に遺産をぶんとられないようにせいぜい弁護士と相談しろ。次は誰が死ぬか、わかってんだろ?」

耳元に囁く。金が払えないならば、あたしがお前を殺すだけだ。

「わわ、わかった!」と依頼人は頷いた。

あたしはさっさとその部屋を後にする。収入なし。

やべーな。国を出るにはベッドの下の金では足りない。

イタリアとフランスに、あとはロシアだったかな。そこに借りっぱなしの部屋に金を置いてある。どれかに戻ればなんとかやっていけるか。ここでまた仕事をやるには足がついてしまう。

ガセネタを流すと藍あいさんに捕まる。

穀田藍乃介。通常工アイ。

依頼人と殺し屋を繋ぐ仲介人であり、天才的なハツカー。

ガセネタを流す方法はその藍さんに教わったものだから、あたしだとバレてしまい居場所を探ろうとしてくる。

以前ギリギリで逃げ切つて、只今PCをいじれない状態だ。そして身動きとれない状態。

「……………あれ」

アパートの前に来たが、コクウの姿は見当たらなかった。追い掛けていったのか。まあいっか。

部屋に入るなり、クスクスと笑い声が響いた。

「お前が出てくるってことはコクウは近くに居ないんだな」

「ククツ、居ねーよ」

「あっそ。今のうちに支度をするか」

ベッドの下からトランクを取ろうとしゃがんだが、そこには何も無い。

「……………アイツ、パスポートを盗みやがったのか？」

「そうみたいだな」

「そうみたいって…。なんだよ！気付いてたならあたしを起こせよ！偽造パスポートがいくらか知ってるんだろ！！」

「起こそうとしたらバレちまう。だいたい、姿を眩ましたら師匠に

チクられるだろーが」

このくそ悪魔…！

寝てる間に物色されてパスポートが盗られた。これであたしが簡単にはこの国を発てないと把握されただろう。

「これでイタリアとフランス、ロシアに行く選択肢は消えたなあ。

椿。クククツ、黒ヴァンパイアの仲間になるか。あとは…そうだな。白野郎に電話して迎えに来てもらって選択しもある」

「… ああ？」

目を細めて低い声で聞き返す。ヴァッサーゴは毅然としてもう一度言った。

「白野郎に迎えに来てもらう。もう一人でやりつくして飽きただろ。心配しなくともお前をちゃんとして捜してるじゃねーか、そろそろ帰ってやれよ」

「……………ほざくなよ、ヴァッサーゴ」

あたしは強く吐き捨てた。

それでも悪魔は喋り続ける。

沈黙が多い分、お喋りな奴なんだ。

「ロリコン野郎は特技でお前の居場所を突き止めようとして、白野郎は全く仕事をやらずにフラフラしてる。微笑野郎の情報はねーが白野郎と一緒にフラフラしてるはずだな」

「黙ってる！」

「お前は拗ねて家出をしてる餓鬼でしかねえよ、椿。ちゃんと飯を食わねえとオレが身体を乗っ取るぞ」

全く腹立たしい悪魔だ。
乗っ取るつもりならもうやってるはずだろう。そのつもりはない。
或いは出来ない。
煩い奴だ。
本当に煩い奴。

「あそこはもうあたしの帰る場所なんかじゃない」

吐き捨てて、あたしは指輪をもう一度嵌めた。

もう。

ただいまなんて。

言えないんだ。

「……………くそう」

腹立たしくなつて髪を握り締めた。

あれやこれやと思ひ出す。

嗚呼、もう。忘却してしまいたい。

そう思う度に記憶の奥にしまい込めたのに、その夜は延々とあの日々が蘇った。

「……………今何してるんだろ……………」

胸が、苦しい。

あたしの負け（後書き）

裏現実紅殺戮。

前回から読んでくださっている方も初めてのの方も、観覧ありがとうございます。
ございます。

ダークな話のくせにたまに面白おかしくふざけてしまう妙な物語です。

やっとコクウと絡ませることができて嬉しいです、待ち遠しかった。
一応恋愛要素がありますが、主人公の椿ちゃんのお相手は決まっております。

暫く師匠である白瑠は出てきず、コクウが椿を独占する…と思われ
ます。

感想をくださると喜んで執筆を急ぎますが残念ながらお返事が出来
ません。ご了承ください。

「愛情は狂言」に引き続き

「白と黒と紅」を楽しんでくださいませ。

黒の集団の始動

振り払えない、彼らの影。

振り払えない、思い出。

振り払えない、憎悪。

振り払えない、闘争心

振り払えない、自己嫌悪。

振り払えない、逃走心。

振り払えない、殺意。

振り払えない、死。

「やあ、おはよう。朝食食べたかい？まだだったら一緒に食べたいな」

「……………帰れ。」

色々突っ込みたかったが一言だけ言うことにした。

太陽ものぼっていない時間にやってきて、朝食を食べたわけないだろうが。つうか朝食を食いに来たのか、お前は。そして抱えてる花束は一体なんなんだ。

早朝と言つべきか深夜と言つべきか。

一日経ってコクウがまた部屋を訪ねてきた。紅い薔薇の花束を抱えて。

聞くまでもなくあたしへのプレゼントで、何も言わず持たされた。

そして許可を得たような顔でずかずかと部屋に入る黒の殺戮者。

「出て行って言ってるのよ、コクウ。つうかパスポートを返しなさい」

「どうして？姿を眩まさない約束だから必要ないだろう？」

ソファにどっかりと座ってニコーと笑いかける抜け目ない奴。くそ、ひねくれた策略家め。こうやって罠に填めていく気だな。

「姿は眩まさない。アンタのケー番は知ってたから、気が向いたら連絡してやる。だから返せ」

「でも俺は知らない。それに椿は携帯電話を持ってないじゃん。せっかく苦勞して見付けたのにまた隠れられちゃうとねえ。俺一ヶ月半で世界一周しちゃったんだぜ」

「知るか。アンタが勝手に行ったんだろ。あたしは師匠にチクられたくないから姿を眩まさない。さっさと返せ」

このひねくれた策略家から取り返すのは苦勞しそうだ。つうか盗んだんだから素直に返せっつーの。掌を出せば冷たい手で握られた。

「君が俺の誘いを断る理由には白はくがいるよね」

「……………だから？」

「君は白はくの弟子と言うより……………女？」

思わず掌を振り払う。

それで伝わってしまったたらしく、にんやりと楽しげな笑みを向けられた。

「白瑠とそおゆー関係なんだあ？」

「……違うわよ。師弟の関係」

「ふうん、肉体の関係なんだ」

「……言ってるねーよ」

「ふうん、こりゃあ面白い。白瑠が愛した女を俺が横取りしたら俺はますます嫌われちゃうな、くひゃひゃ」

「……………」

なんだろう、この違い。

「……貴方は、嫌いじゃないの？白瑠さんのこと」

白瑠さんは名前さえ口にせずあからさまに不機嫌になるのに対して、コクウは親しげにそして楽しげに名前を出して笑う。
この違いは大きい。

「嫌いだったら、もうとっくの昔に殺してるよ」

満面の笑みで、コクウはそう答えた。

……ふうん、そうか。

「じゃあパスポート返せ」

「お腹空いたなあ」

無理矢理話題を戻したら妙な言葉を言われた。肋骨に嫌な顔をする。吸血鬼の空腹は血を欲しているということだ。

「あ、椿の血じゃなくていいよ。人間の朝食でいいから。そしたらパスポート返すよ。あっ、血をくれるならありがたあくもらう」

「……………」絶対に返せよ」

血を吸われてたまるか。いくら吸血鬼が大好きだからって血をやるほど自虐にはなれない。

仕方なくキッチンに立った。

…あれ、吸血鬼って普通の料理食べたの？

「さっきさ」

思わずビクリと震え上がる。忽然とコクウは寄り添うようにあたしの背後に立っていた。

「俺のこと、“貴方”って言ったよね？電話の時と一緒に 機嫌治った？」

「……鬱陶しい」

あたしは掌を振ってコクウを退ける。

コクウは掌を避けて反対側の肩に顎を乗せてあたしの腰に腕を回した。

「何作るの？」

「っ鬱陶しい!!」

蹴り上げようとしたが避けられる。ちっ！おしい！

「あ、そっか。日本人ってスキンシップはしないんだっけ？ごめんごめん。花は花瓶に入れとくね」

「……」

「なんか新婚みたいだね、椿」

殺意が芽生えた。

キッチンに立って勝手に花を花瓶というかコップに入れているコク

ウ。

疲れるだけだから構うのはやめてフレンチトーストをさっさと作った。

そう言えばこのキッチン初めて使った。

ペロリ。頬をざらついた舌で舐められた。

……………ぶちギレたいんですけど。

冷やかに睨み付けければ、頬を舐めた位置のままコクウは見つめてきた。

クンクンと鼻をひくつかせて匂いを嗅いでいる。

「甘い匂いがする」

その匂いを堪能するように目を閉じて微笑むコクウは、あたしの髪を掻き上げた。あたしのうなじと耳の裏を
ゾワツとして肩を震わせる。

「匂いって、あたしは香水なんてつけてないわよ」

これだけはバレないように自然な仕草でコクウの手を振り払う。弱点がバレたら色々まずい。今後酷い目に遭う。学習したんだ。

「生き物はそれぞれのおいを放ってるんだ。動物と一緒に吸血鬼も嗅ぎわかるんだよ。椿はね、甘い匂いがする。花みたいなあまあい匂い。舐めたくなくなっちゃう」

「ああそう。だからって舐めるな、朝食が食べたいなら大人しく座れ」

「椿が食べたいならどうすればいい？」

「バラバラにして燃やす」

ギロリと睨み付けければコクウはソファに大人しく座った。

吸血鬼。

吸血鬼を生み出したのは悪魔だ。人間が願い悪魔が叶えた。生き血を摂ることで命を半永久に絶えなくする、そんな呪いをかけたのだ。

願いを叶えた悪魔は自分より力を持たないように程よい力オプシヨンを与えた。人間よりは強く、悪魔よりは弱い。

しかし第一世である最初の吸血鬼は悪魔の推定より強く、彼に噛まれて吸血鬼になった第二世達は強い能力を手に行っていた。

第三世達も二世から能力を引き継いだ吸血鬼が多くはなかったがいたそう。

詳しいことは闇の中だが一世紀前に、悪魔と最初の吸血鬼が仲違いをし、悪魔と吸血鬼の戦争を始めて、残り少ない三世の吸血鬼が勝った。

これはヴァッサーゴから聞いたことだ。

そんなヴァッサーゴは戦争にはまともに参加せず、ただ人間に封じられただけらしい。

だからヴァッサーゴは吸血鬼を殲滅するだとか復讐するだとかは考えていないと言う。

例え、人間に助けを乞うと提案した吸血鬼が目の前にいても、ヴァッサーゴは何も言わないし何もしない。

黒の殺戮者、コクウ。

吸血鬼を救った男。人間と交渉をし、残り少ない仲間の安全の為に自分の身体を売った吸血鬼。

何十年も、彼は人間に身体をいじり回された。

その事実を仲間の吸血鬼は解放された頃に知ったそう。

これを話してくれたのは、ラトアさん。最後に会った時には磔にされた。

ラトアさんは憎たらしそうに話していた。

何十年もいじり回されたにも関わらず、コクウは笑ってこう言ったそう。

「 あれ、バレた？」

「 ん？何か言った？」

「 何でもない」

あたしはフレンチトーストを乗せた皿をコクウに差し出す。

「 ありがと」と笑顔で受け取るコクウ。

根は悪い奴ではないのだろう。仲間の為なら身だって売る。黒の集団の一員であるレネメン・ジャルットを助けたお礼もきちんと言う。

目的の為に手段を選ばないだけ。

じーっ。

ムシヤムシヤ。

あたしを見上げながらコクウはトーストを食べていく。

彼の勧誘は恐らく悪くない話だろう。決して彼が裏切るようなことはないのだから。

じーっ。

コクウはあたしをジロジロと見上げる。あたしは黙って見下ろす。

一体何を視ているのだろう。

彼が口を開くまで待つ。

コクウは食べ終えてから、口を開く。

「 椿、その傷は誰にやられたの？」

傷と問われても直ぐにはわからなかった。傷は大抵悪魔が残さずに消してしまう。

噛まれた傷は消してはコクウに気付かれる為、そのままにしているがそれはコクウがつけた傷だ。

チリリン。

コクウが鈴のついたチョーカーを指で回すのを見て、やっと気付く。

首に残る傷のことだ。

今までチョーカーをつけて隠していた傷。

触れられた時にでもチョーカーを盗られたのだろう。

バリリン！と皿が割れる音が響く。

ポタリと紅い血が滴る。

目に突き刺さった皿の破片をコクウは抜く。忽ち突き刺さって出来た傷は消えてなくなる。

「痛いなあ。俺死なないけど痛みは感じるんだぜ」

「出てけっ！！！」

あたしは怒鳴り声を上げた。

コクウは、あたしを見上げる。

激怒して睨み付けるあたしを見つめて、一回ほど瞬きをしてから立ち上がった。

「わかった」

そう一言だけを残してあたしの部屋から出ていく。
パタン。

あたしは奪い返したチョーカーを握り締めてソファに崩れ落ちた。
首に触れればわかる傷の痕。

一番最初に、死にかけたあの時。

床に落ちている紅い滴を視て思い出す。

目を閉じて、思い出す。

ガタンガタンと揺れる音。

真っ赤に染まる電車の中。

「
…
」

胸が、痛い。
心臓が、痛い。

「みゃあ」と猫の鳴き声を聴いて、目を開く。
地下鉄で移動していて、居眠りしていたらいつの間にか目の前に黒猫がいた。
黒い猫が乗車していた。

「何処にいくの？黒猫さん」

あたしはそんな黒猫に話し掛ける。日本語だから周りにはわからな
いだろう。
組んでいた脚を直して膝を空ければ猫はあたしの膝に飛び乗った。
それから喉を鳴らして顔を擦り付ける。

指先で顎を撫でてやった。
人懐っこい猫だな。
きっと人間にご飯を恵んでもらっているのだろう。
だけどあたしはご飯を持ち合わせていない。

丁度降りる駅になったので猫を膝から下ろしてあたしは電車を降り
た。

「みゃあ」

「……………何も持ってないけど」

猫はあたしの後を追う。
何を望んでいるのか、チヨロチヨロとあたしの後ろを歩んでついて
きた。

ついてこられてもな…。

これから仕事なんですけど。

今日はへマをして依頼人の怒りを買った殺し屋の始末。

パトスの件の金が入ればパスポートが買えてさっさとこの国を発てたのに。

これで足がついたらどうしよう。

「……………ハア」

妙なことになることだけはやめてほしい。何があっても黒と白が衝突することは避けないと。あーやだやだ、めんどくせえ。

「じゃあ」

「ん、ちよつと…邪魔しないでよ。退いて」

黒猫が足にすがり付く。危うく蹴り飛ばすところだった。

ついてきたら死ぬぞ。

あたしは黒猫を飛び越えて、駆け出す。黒猫も駆け出して追い掛けた。きた。

しつこつ…！黒猫しつこいっ！

本気でダッシュをしたが猫を振り払うことは出来なかった。

結局、黒猫は標的のアパートまでついてきてしまう。

なんであたしは、人間以外の生き物にまで追われなきゃいけないんだ。

なんで構ってほしくない時に限って付きまとう？

「……………こつから先はついてくるな。わかったわね？」

あたしは厳しい口調で黒猫に言う。伝わったのか黒猫はそこに座り込んだ。

ふう。あたしは階段を上がって部屋に向かう。

コンコン。

その部屋のドアをノックしてパグ・ナウの爪を出した。

ズキッ。

頭痛が走る。これが意味するのは、“危険”。

ドッカーンッ！

ドアをぶち破って散弾が飛び散る。間一髪避けれた。

発砲した殺し屋の男は直ぐ様中から出てきて階段を駆け上がる。ばかめ、階段を上がるなら逃げないだろう。

あたしも立ち上がって階段を駆け上がる。狭い階段。手摺を掴み壁に足を付けて飛び、距離を詰めた。

そして予備動作なしに爪で突く。

ガチャン！殺し屋は散弾銃で防いだが、爪の方が強度が強く散弾銃を砕いた。

びゅっと顔目掛けて足を振られる。右手で防ぐ。左手の爪でその足を切りつけようとしたが避けられた。

殺し屋はまた階段を駆け上がる。だから上に行っても逃げ道はねーよ。

投擲ナイフを放ったが、壁に突き刺さるだけで空振り。ちっ。

階段を駆けてナイフを回収して追う。あー、また走ってるよあたし。五階建てのアパート。

直ぐに屋上に出た。袋の鼠。

…と思っただが、殺し屋は隣の建物に飛び移った。

「おい、まじかよっ！」

超めんどくせえ！

標的を取り逃がすような失態はしたくない為にあたしは追跡を続けた。

建物から建物に飛び移っていく。

一ヶ月、数え切れない（数えてないだけ）仕事をやってきたが映画みたいに屋根での追跡をするのは初めてだ。

パツリン。

やっと飛び移る建物が無くなったかと思えば、殺し屋は隣の建物の窓に飛び込んだ。

なんて諦めの悪い奴！

あたしも遅れて飛び込む。殺し屋はまた階段を上がるうとした。させるか。

足を狙ってナイフを放つ。直撃はしなかったものの、傷はつけれた。

「くそつたれ！」

「！」

バキユンツ！

殺し屋が拳銃を出して放った。

弾丸を避けたらズルツと段から手を滑らせて誤って階段から転がり落ちる。

「痛つ……あ……ぜってえぶつ殺す！」

ガバツと起き上がって五六段飛ばして階段を上がったら。

「にゃあ！」

「うお！？……おまつ、まさかついてきたのか！？」

飛び込んできた窓から黒猫が飛び込んできて咄嗟に受け止める。まさか一緒に屋上を飛び移ったようだ。

この猫の執念は一体…。

「ここにいなさい！」

怒鳴ってから黒猫を降ろしてあたしは標的を追った。
ナイフを投擲。腕に命中。それでも標的は走り続けて階段を上がる。
ガチャガチャ。
屋上を開けることに、標的は手間取っていた。よし、追い詰めた。
カルドを取り出して、向かう。
ガチャガチャ、と標的はいつまでも開けようとしていた。
ガチャン。扉が開いたの同時にカルドが心臓を貫く。

「…ふう。あー、疲れたあ」

カルドを引き抜いてよろよろ歩いて座り込む。ノンストップで建物を飛び移ってへとへとだ。今更上がる息を整えようとする。
これでパスポートが買えるな。うし、金を取りに行つて、明日にでもこの国を発とう。

「みゃあ」

「…ん？」

身体を起こして扉を視たが、黒猫はそこにいない。
あれ？今確かに鳴き声があったよな？

「んにゃあ」

「……」

また聴こえた鳴き声に振り返れば、隅をてくてくと黒猫が歩んでいた。

際どい場所を、歩いている。

落ちたら、死ぬぞ。

少なくともこの建物は五階建てではない。

「その黒猫。こつちおいで」
「じゃあ」

黒猫は返事してあたしを振り返った。ズルリ、そして足を踏み外して黒猫が
落ちる。
慌てて飛び出した。

「じゃあ！みゃあにゃあ！」

一階下の窓枠に黒猫が必死にしがみついて鳴いている。猫はペシャ
ンと落ちずに済んでいた。

あたしは身を乗り出して手を伸ばす。猫の手を掴むしかなかったが、
猫は暴れてあたしの手を引っ掻いた。

思わず、手を離してしまう。

当然のように、黒猫は落ちる。

もう一度、身を乗りだして黒猫を掴んだ。が。

身を乗り出しすぎて、あたしまだが 落ちた。

落下する感覚。

あたしは黒猫を抱き締めて、地上に背を向けた。目を閉じて落下を
待つ。

痛いだろうが、死なない。

悪魔がどうせ、治すのだから。

ドッ。

背中に衝撃を感じて目を開く。

それから。

がしゃん！！

ピピピピピピピピピピピ！

車の上に落ちた。衝撃を喰らって咳き込む。しかしあの建物から落
ちたにしては、衝撃が軽すぎる。

そして背中にある感触が、車とは違う。胸の上には猫。腹には誰かの腕。

「ゴフツ……ん、あー内蔵やられちゃったなあ。ま、いつか」「コクウ!？」

頭の上で聴こえた声は、間違いなくコクウだ。飛び起きれば激痛が走った。

「つつあ!……んんっ」

「あはっ、椿の血だあ」

ぺしゃんこになった車の硝子がブーツも貫き右脹ら脛を貫いて血が流れ落ちている。起き上がったコクウはそれを手にとって啜った。

「痛っ……!お前……何して……」

振り返ればコクウは血塗れだ。黒いジャケットの中のYシャツが真っ赤に染まっている。コクウの血だろうか。肋骨がYシャツを貫いた痕が見えた。

「何って……椿を助けた」

唇から垂れている血を舌で舐めとってコクウはにっこりと笑う。三日ぶりに顔を見せたかと思えば、なんなんだ。

「猫は無事みたいだね。にゃー」

こしよこしよと黒猫の顎を撫でてコクウは笑う。

「なんで助けたのよ」

「猫を助けるべく自分で身を乗り出した少女を助けずにいられないだろ」

「……………」

嫌なところを視られたらしい。

黒猫を助けようと落ちた紅色の黒猫。

頼むから口外しないでほしい。

「椿、抜くよ」

「え？ちよつと…痛い！！」

コクウが硝子を引き抜いた。

流血を掌で押さえ込む。それから懐からハンカチを出して止血をした。

コクウがいるからヴァッサーゴが放置しやがってる。くそう。

あたしはコクウの上から、車から降りた。

「椿、何処行くの？」

「依頼人のとこよ」

「そんな足で？血が勿体無いほど零れてるけど」

「関係ないでしょ」

「俺が無傷で助けられなかったから、ごめん」

「……………助けてなんて言った覚えはないわよ」

右足を庇って歩いたが、コクウが変なことを言ったので睨み付ける。

「助けるために勝手に飛び出したのは俺だけど、命の恩人にはかわりないぜ」

「ありがとう、この足以外は助けてくれて」

そう吐き捨ててまた歩いたが、足が地上から離れた。

「手当てしなきゃ出血多量で死んじゃうぜ。俺の家近くだから」

「ちよっ、いいっ！手当てしなくていい！」

「やだ。椿が死ぬなんて嫌だよ」

死なねーよ。お前さえ離れれば死なねーんだよ。

コクウはあたしを抱えあげて逆方向に歩き出す。

どうやら潰したのはコクウの車だったらしい。だから徒歩。

片足が重傷なあたしは振り払えずに運ばれてしまう。

「……諦めてなかったわけ？」

「俺は諦め悪いんだ」

「……くそつたれ」

「悪態つくと食べちゃうよお」

こつん、と軽く頭で小突いてきた。三日すればあたしの怒りがおさまるとでも思っているのか？コイツ。

睨み付けければコクウは「言い忘れたけど、朝食美味しかったよ」と微笑んだ。

「…アンタが人間と同じ味覚を持つてるとは思えない」

「似たようなものさ。美味しいものは人間の二倍美味しく感じて不味いものは人間の二倍不味く感じる」

ほんとかよ。

「猫なんて飼ってなかったよね、椿。なつかれたちゃった？」

コクウは後ろをついて歩いてくる黒猫を振り返った。
まだついてくるようだ。
何が目的なんだろう。

「家って、この前のとこ？」

「いや、詳しくはその上だ。椿を寝かせてた部屋は俺達のオフィス」

「オフィス？…黒の集団の？」

「そ。椿が入る予定の俺達のオフィス」

「……………やっぱり降ろして」

「そこにいかなきゃ手当てができない」

「拉致に等しい。さっさと降ろしなさい」

「やだあ、椿が死んじゃう」

「人間を貧弱呼ばわりすんな！」

あたしは拳でコクウの頭を殴った。2ヶ月前なら恐れ多い行為だが、
もう怖くはない。

痛覚があるなら多少は効くだろう。

「ごめん。椿」

黒の殺戮者の口から、謝罪の言葉が出た。

「女の子は傷を気にするよね。ごめん。俺ってば嫌がることしちゃ
った、ごめん」

一瞬何のことかわからず、きょとんとしてしまふ。

三日前にチャョーカーをとったから怒鳴ってしまったことだろうか。

コクウは視られたくない傷と解釈したらしい。

確かに視られたくない傷でもあるが、あたしはチャョーカーをとられた
たことに怒りを覚えた。

このチヨーカーは、白瑠さんに貰ったものだ。
コクウにとられて、恐怖を感じた。壊されるんじゃないかと。

「…気にすることじゃないわ。別にあたしは…」

「そんな傷がついても、椿は可愛いよ」

誤解を解こうとしたら、コクウは穏やかな微笑で言った。

「とびつきり魅惑的で可愛い娘だぜ」

そう告げて、額に口付けを落とす。

嘘を言っているようには見えない顔。穏やかな微笑。

あたしは何も言えずに黙りこくった。

結局、あたしは黒の集団のオフィスに運ばれてしまう。

電気がついていることに気付いたが今更逃れることも出来ず中に運ばれた。

「お客を連れてきたよお、紅色の黒猫の椿だ」

入るなりコクウは部屋にいた一同にそう声をかける。…あたしはまた策略にハマったのかもしれない。

その場にいた者が静寂を作ってあたしを振り向く。

「おお！やつほー椿！」

静寂を真つ先にぶち壊したのは、那拓遊太だった。

「うわっ、なんだよ。怪我したのか？」

「遊太…。ちよつとね」

「あー、黒っち。手当てする？よな。火都ー、救急箱って何処だっ

「け？」

「……おれ知らない」

座っていたソファから立ち上がりあたしに気さくに笑いかけ、それから救急箱を探し出す。火都もソファから退いた。

コクウはそのソファにあたしを降ろしてから救急箱探しに向かう。

「ハイ、レネメン。元気そうね」

「…アンタのおかげで」

向かいに机に腰掛けたレネメン・ジャルットと目があったので挨拶をすれば肩を竦められる。

「伝言を聞いて電話がくるのを待ってたんだが」

「伝言のあとに貴方のボスと賭けをするって決めちゃったもの。出来るわけないじゃない」

あたしはしれつと返す。

「だよな」とレネメンは苦笑してみせた。

知った顔が三人　否、四人だ。

後ろから忍び寄る気配。

ザツと爪を出して突き付ける。

「おっと！相変わらずだね、お嬢さん」

「…アイスピック？」

そこにいたのはレネメンと一緒に会った殺し屋のアイスピック。名前は確か…ジエームズ。

レネメンと同じで瀕死だった彼を病院に送った。

「アンタも生きてたんだ。…しかも、黒の集団の一員？」

「お嬢さんは私のラッキーガールさ。ガトリングの罠から逃れ生還したしかの有名な黒の集団の仲間になれたのさ」

ふうん。仲間に入ったのか。

それなりに名前が通っていたのだからその資格はあるのだろう。とりあえず、近付くなと睨み付けた。

「椿、ブーツ脱げ」

「ん」

救急箱探しから戻ってきた遊太に言われてあたしはブーツとニーソを脱ぐ。まだ血は垂れ落ちる。

「こりゃあ、縫わねーと」

「平気よ。きつく縛ればいいの。あたし、治りは速いから」

ね？ヴァッサーゴ。

「そうか？まあ…出血が酷いだけで神経は損傷してないみたいだから大丈夫か。黒っち、まだあ？」

どうやら救急箱探しはコクウと火都に任せたらしい。柱が邪魔で二人は見えないがちゃんと探しているようだ。

「やっと会えたな、椿。ちょー捜し回ったぜ？逃げるの上手いな」「負けず嫌いだから。…負けちゃったけど」

褒められたので威張って見たが、結局は負けてしまったのだから威張れない。

あー、負けた。悔しい。

「そんな落ち込むな。ほら、これでも飲んで元気出せ」

レネメンはペンをあたしに差し出した。ペンを飲めというのか？
そう思っていればペンは一瞬で瓶へと変わった。おお、手品だ。
思わず笑みを溢してそれを受け取る。

丁度そこに救急箱を持ってコクウと火都が戻ってきた。

「へっ。頭蓋破壊屋に並ぶ殺し屋だと聞いていたが…ただの小娘じゃねーか」

初めて見る男が口を開く。

壁に置いてある机の上に一人座ってあたしを観察するように視ていた男だ。

左目には傷痕があり、その周りに六つのピアスをつけ、派手な髪色をしている。手が隠れる程の長い袖のジャケットを着ていた。

「その小娘の何処がスカルクラッチャー頭蓋破壊屋に並ぶって言うんだ？」

その口振りはあたしに訊いていない。

仕事以外であたしに会えば誰もがそう思うだろう。

なんせあたしは、見た目ただの少女の殺人鬼。

何もせずにいるあたしの素性を、ベテラン刑事でも腕利きの殺し屋でも殺し屋に敏感な狩人にも、イカれた殺人鬼だっで見抜けなかった。

「そりゃスカルクラッチャー頭蓋破壊屋に劣らない殺しの才能さ」

答えたのはアイスピック。

「てめーは頭蓋破壊屋の殺しを見たことねーだろ。こんな小娘がアイツ程の殺しの才能があるとは思えないね」

顔面ピアスはあたしを指差してそう吐き捨てる。だからあたしはシレッと肯定をした。

「ええ、あたしはクラッチャー程の才能なんてないわ」

そうすれば、その場がしんと静まり返った。

「なんなら、試してみる？」

ニヤリと挑発的に笑いかける。

しかし数秒後に「んひゃあう！」と情けない奇声をあげた。怪我した脹ら脛をコクウに握られたからだ。

「なあに言ってるの。この脚じゃあ武器職人に勝てやしないよ」

「うつ……ああ、じゃあ彼は武器職人のカロライね」

武器職人のカロライ：なんとか。腕利きの武器職人。

どちらかと言えば殺し屋のようなナリだが、彼は武器職人だそうだ。

「そうだよ、天才的武器職人だけ。椿も武器作ってもらえば？」

「誰が名だけの殺し屋如きに作らなきゃいけないんだ、くそつたれ」

「頼まねーよ、顔面ピアス」

「土下座されても作らねーぞ、ちんちくりん小娘」

「わーあ、仲良くなってくれて嬉しいなあ」

「黒っち、これどう見ても陰悪だ」

ギロリと睨み合う。

コクウはにこにこ楽しげに笑うがちゃんと遊太が突っ込む。彼にしたら睨み合いなどじゃれてる程度にしかとらえてないのだろうか。頭蓋破壊屋の睨みなんて挨拶にしか思ってたなかったりして。

「でも、椿の武器って中々いいものがあるよね」

「ほーう？見せてみる」

「例えば、この短剣とか」

足を掴んでくるコクウの外そうと格闘していればあたしの武器を褒めた。

それから、気付けば あたしの左腕にいられた短剣が、コクウの手に。

刃に黒猫が描かれた短剣。

それをコクウがカロライに投げ渡した。

その短剣は。その短剣は。

「 つ返せ！！！」

あたしはコクウを踏み潰し、レネメンの腰掛ける机に飛び乗る。右足に痛みが走った。だけど痛みより怒りが勝ってカロライに向かう。パグ・ナウの爪を出して、切りかかろうとした。

しかし、カロライに届かない。

俊敏な吸血鬼のコクウが立ち塞がって、あたしを掴み、机に押し倒した。

「放せつ！！」

「暴れちゃ出血が酷くなる。…ほら……こんな…ハア……もつたいない…んっ」

切り裂きたかったが、右手は固定され動けない。畜生！

コクウは笑っていたが怪我を見るなりうっとりした顔をし、あたしの左足を上げて太ももまで垂れる血を舌で器用に舐めとり、それから傷口から吸いとる。

あたしは上げたその足でコクウの頭に踵落としを決めておく。倒れたコクウの頭にヒールを叩き付けてから、カロライを睨み付ける。

少なからず強張ったカロライは、短剣を差し出す。

あたしはそれを奪い返して短剣をしまう。

そのままこの場をあとにしようとしたが、コクウがあたしの腕を掴んで引き留めた。

「悪かった、椿。ごめん、ごめん。大事な物だったなんて知らなかったんだ」

「……………」

別に、大事な物なんかじゃあ……………ないけど。

「椿……………手当て。しなきゃ、死んじゃう」

「……………うん」

手招きをする火都が静かに言うため、あたしは大人しくソファに戻る。

「……………。手当ては俺がする」

遅れてコクウも戻ってきてあたしの手当てを再開させた。

「ほらほら、椿。飲めよ」

「…中身は何？」

「ジンだ」

「ごめんなさい、禁酒してるの」

「うわあ、椿、えらあい」

「禁酒って…歳いくつだよ」

先程レネメンが出した瓶を遊太に渡されたが、酒と聞いてレネメンに返す。

ボソリ、とカロライが呟いた。あたしとは目を合わせない。恐怖を植え付けられたようだ。

「じゃあ……こっちでどうだ？」

レネメンはズボンのポケットから出したハンカチで瓶を隠し、一秒もしない内に出す。瓶は変わった。コーラだ。

また手品。あは、ちよつと顔が緩む。

レネメンは微笑んであたしにそれを持たせた。

「……………」

「ありがとう、レネメン」

「……………」

「椿、お菓子もいる？あつ、つかさ！これから椿の歓迎会しね？いいよな、黒っち！」

「歓迎会なんてしなくていい。別にあたしは仲間になったわけじゃないわ」

やっぱり勘違いしていたのか。

ノリノリな遊太には悪いがそこはきっぱりとっておく。

一同は目を丸めた。とは言っても火都とコクウ以外の四人。

「え？お嬢さん、仲間に入るからここに来たんじゃないのかい？」

「コクウが手当てする為に連れてきただけよ」

「ええ！？椿入らないのかよ！？いいじゃん！入ろうぜ！！」

遊太がただっ子になった。

「嫌。ほら、あたしって頭蓋破壊屋には劣るし？仮にも師匠である彼と敵対するコクウの仲間にはなれないわ」

カロライを視て言うてから手当てを終えたコクウを視る。

「……………」

コクウは沈黙を返してあたしを見上げていた。そう言えばさっきから黙ってたなコイツ。

「コクウ…黙らないでくれる？貴方が黙るときって何かを企んでるんでしょ」

「！！」

凶星だったのか、コクウはにつこりと笑みを浮かべた。

「これから俺達大仕事をやるんだ、椿。それを見学してからでも返事を頂戴」

「大仕事？」

大仕事を見学。見学、ねえ。

それであたしを巻き込む策ならば、乗ってはいけない。

「はぁ？馬鹿言ってるじゃねえよ、黒。仲間どころか敵対の小娘に手の内を晒す気か」

反対のカロライが口を挟んだ。コクウの背中を睨み付けて。カロライの言う通り。大仕事が出来なくなる可能性がある。あたしが情報を漏らしたりすれば。

「椿にも白瑠にも、手の内がバレたっていいじゃん。これで面白さが伝われば仲間に入ってくれるだろ？そしたら椿は仲間だ。どうだい、椿。見学する？」

「……………」

しかし、そんなリスクなんてないみたいにコクウは笑って誘ってくる。

「…仕事の内容は？」

問えば簡単にコクウは簡潔に話した。

カロライは苛立ちを隠さず大きな舌打ちをして「勝手にしろ！」とそっぽを向く。

黒の集団の大仕事を聞いてあたしは 俄然興味が沸いた。見学どころじゃない。自分も参加してみたいと思う。

また策略家の罠に嵌まったらしい。しかし、この好奇心は拭えない。

この久々の胸の高鳴りはいつ以来だろうか。どっかの億万長者の美しすぎる政治家のボディガードをやった時以来だろう。

「ほら、椿は怪我をして仕事は暫く出来ないだろうから、火都達と一緒に視ててよ」

あ、そうだ。怪我で参加できない。うわ、最悪。

どうやら火都も参加しないようだ。内容が、内容だからな。

大仕事なんて言えるものではない。何せ依頼人など存在しないのだから。

あくまでこれは“黒の集団”の活動に過ぎない。最強の殺し屋集団でなければ最強の狩人集団でもない。黒の殺戮者率いる名の馳せた多士済済の集団。その結成の訳は、誰も知らない。本人（彼ら）しか知らない。

「ねえ、コクウ。何のために集団を作ったの？」

あたしは訊いた。

きよとんとした顔をしたコクウは、やっぱり誰かを連想させる。やがてにっこりとチエシヤ猫のように口元を吊り上げて笑った。

「それは仲間に入ったら、教えてあげる」

やっぱりあたしは、誰さんと同じように、誘われてついていってしまう。

「治せ！」

「やだね！」

「治せ！」

「やだね！」

「治せ！」

「やだね！」

「治せ！」

「やだね！」

このやりとりはかれこれ一時間やっている。
ヴァッサーゴがいくら言っても足を治してくれないのだ。

「治したら黒吸血鬼ヴァンパイアにバレるだろうが！」

「怪我したフリをすればいいんだろ！てめえ吸血鬼ヴァンパイアにビビりすぎだ
！」

「他人に頼む態度じゃねーな！」

「なによ！頼まなくてもいつも治すくせに！」

この一ヶ月も、その前でも。ヴァッサーゴは許可なしに傷を治したが、今回コクウがつけた傷と目の前で負った傷は治さない。

まだコクウに存在をバレていないのに徹底的に隠れるつもりらしい。こんな臆病者だったとは知らなかった。

「臆病者だと？ハッ！吸血鬼LOVEな椿は好かれてさぞ浮かれてやがるな。お前、吸血鬼に殺される立場だって忘れてんのか？オレがいるってわかるなり首が胴体からなくなんぞ。そうすりやお前もオレもくたばんだ！」

「好かれても浮かれてもいねーし！どこが好かれてんだ、この野郎！ストーキングが好かれてると思って浮かれる女子が何処にいやがんだ！このチキン悪魔！」

「てめえを守ってやってんだよ！この鈍鈍感女！メロメロになってめえの血を飲んでたじゃねえか！何が女子だ、ちたあ女の勘を磨いてから言いやがれ！自称女子！」

「てめえこの引きこもり悪魔！！出てきやがれっ！首を撥ねてやる
！！」

「オレの首を撥ねたらお前の首も飛ぶって言っただろが！！」

ヴァッサーゴまで声を荒げて口論するのはこれが初めてだったりす

る。

いつもは一方的だが余程“臆病者”が効いたらしい。そう言えば前にあたしの前に現れたから、ぶつ殺そうとしたらそんなことを言っただけ。またあたしの中に戻ったから試せなかったんだけど。

「試したら死ぬっつーの」

ヴァッサーゴはあたしの心の声を聴いて突っ込んだ。

「ほんつと、お前って鈍感だよなあ。奥手な奴らが哀れで俺泣きそうだぜ」

「血も涙もねーくせに」

まじでコイツは血がない。悪魔の身体は煙状なのだから。涙は知らないけど。多分出ないだろ。悪魔だもん。

「お前鼻屑しすぎだ。オレだって涙ぐらい出る」

「涙ぐらいって言うてる時点でお前の目から出てくるのはただの水と成り下がる。血も涙もない悪魔になりました、おめでとうワイ」

「ハツハツハー、頭痛くしてやるつか？」

「じゃあ治せ！」

「お前、オレの話聞いてないだろ」

ちっ。この臆病者め。

仕方なくあたしは包帯を巻き、ジーンズを履く。仕事ではないので革ジャケットに武器を仕込んで腕を通して底の低いショートブーツにする。髪をポニーテールに結んで準備完了。

「仲間に入るって言うなら治してやってもいいぜ」

「は？はいんねーよ」

「興味が沸いてるくせに。クククツ、入れよ。仲間に入れば黒野郎だつて手出ししねーだろ。なんてつたつて仲間想いの吸血鬼なんだからよ」

もう調子が戻つて、ヴァツサーゴは喉で笑う。

吸血鬼を嫌うくせに、なんでまた黒の集団に入れたがるんだ。

「そんなつもりはない」とあたしは返しておく。

今回はただ、見学するだけだ。

面白そうだから。

怪我したあたしが参加することはないのだから、成り行きで仲間になることはない。

「…おい？V？」

ヴァツサーゴが沈黙をした。潔く諦めたのか？

そう思ったが違う。いつも同様に隠れたただけだ。

コンコンと目の前がドアにノックされた。それから聞き慣れた猫の声。

開けてみれば昨夜の黒猫を抱えたコクウが立っていた。

「Vって誰？椿の視えない友達？」

にこつと笑いかけコクウ。独り言を聞かれるのは二度目か。

その質問は聞き流して黒猫に挨拶する。昨晩はコクウが預かっていたがあたしのことを覚えていたようだ。

「仕事に連れていく気なの？」

「椿が退屈しないようにと思つて。待機するのは口下手なハッカーに火都とカロライだから」

「…退屈するようなものをあたしに視せるわけ？」

冷やかに見上げれば、ものともせずココウは微笑を返した。

ココウがあたしの手を引つ張り、アパートの下へと連れて行く。別に痛くないんだけど、怪我は。

アパートの前には、悪目立ちする真つ暗の高級ベンツが在った。…長すぎる。

ココウは猫を片手で抱え、ドアを開いた。「どうぞ」と紳士に中へと促す。

あたしは、乗り込んだ。

中は高級感溢れる匂いに満ちていた。かなり広々していて、十人乗車してもまだ広く感じる。

運転席側にはPCが置かれ、一人前に座っていた。彼がハツカーなのだろう。右側には画面が六つ。なんだか藍さんのバンを思い出すが、バンとベンツは違うだろ。

「おっすー！椿！」

気さくに遊太が挨拶してきたので手を振り返す。あとからアイスピックも手を振ってきたが気にせず席に座る。

「へー、これがかの有名な紅色の黒猫か。可愛い娘じゃないか」

目の前に見覚えのない男が腰掛けた。

「おれさんは、マイキー・ハウントンだ。ん？スコピオン蠍爆弾って言った方がわかるだろ」

「……………爆弾使いの殺し屋、か」

黒の集団の一員。

起爆装置を巧みに使い仕事を遂行する殺し屋の蠍爆弾。
爆弾使い。いやな奴だ。

あたしが冷ややかな殺気を放ったことは車内の誰もが気付いた。

「嫌われたみたいだな、マイキー。離れた方がいいぜ」

それでもお茶らけて遊太が言う。

「マイキーも知り合い？」とコクウはあたしの膝に黒猫を乗せて、しゃがんだ。

「機嫌直してよ、椿」

「…あたしは猫じゃねえ」

あたしの顎を撫でるから、右足で踵落としをする。黒の殺戮者、倒れたり。

「おー、怖い怖い」と蠍爆弾はさっさと離れて元の席に座る。その隣は目隠しされている男が一人。

「あ、彼はチクリ屋。彼には目隠しをさせておいたよ、ほらっ白にはまだバレたくないだろう？」

チクリ屋。つまりは情報屋だ。名前はナヤ・リウン。

今期最も凄腕の情報屋だと謳われる男。何でも父も凄腕のチクリ屋だったとか。

コクウなりに気を利かせたようだ。彼なら世界中に広め兼ねない。

「くそっ！ 紅色の黒猫に会えたって言うのに、情報を流すなって…
…拷問だ！ くそったれ！」

何言っつてやがる。拷問を受けたことがないやつがほざくな！

…なんて。拷問ならば、彼の方がよく知っているだろう。
不機嫌なチクリ屋から足元のコクウを見る。

「うおーい！紅色の黒猫。一つ、確認させてくれよ。ポセイドンと
交際してるって噂が一時期あったんだけどさー、そのネタ本物？」

変な質問をするから車内が変な空気に変わってあたしに視線が注が
れる。

顔が引きつった。てつきり狩人内での噂で留まったとばかり思っ
ていたのにな。

ポセイドン。狩人の鬼と呼ばれる狩人。

本名、秋川秀介。

鬼と呼ばれるにはあたしに甘過ぎる男。

あたしに、愛していると最初に告白した男だ。

「デマよ」

「へー、そっか。なあんだ、残念だな。ポセイドンも蛙の子だと思
ったのに」

「…何それ？」

「ポセイドンの両親も狩人と殺し屋の異色カップルだったんだよ」

目を丸めてナヤを振り返る。

異色カップル。そう言えば秀介は生まれつき裏現実者だって前に聞
いたな。

両親の話は初めて聞いた。

お互い、血の繋がった家族のことなんて話していなかったからだ。

家族は嫌い？

…あ、でも。

俺もおんなじ

一度だけそんな質問をされたっけ。

家族は嫌い。あたし同様に両親は嫌いだったはず。

なのに、なんでまた……。
異色カップルになってしまふあたしに愛していると言いつける？ 変な子だな。

やっぱり白瑠さんが絡んでいたから熱を上げていただけなんだろうな。うん。

「そう言えば、椿。椿は流星の如く現れたけど、両親は何やってる人？」

コクウがそんなことを聞いてきた。

ああ、そっか。こいつらはあたしの素性を知らないのか。まあ知ったところで何の役にも立たない。

どうせただの表の履歴。それも既に死んだことにされている。

「父親は警察。母親は水商売してた」

「まっじで？ こりやまた異色カップル！ ね、これだけ流してもいい？ 別にいいよね？」

「流したら殺す」

「何かネタを流させてっ！！ 禁断症状起きるっ！！ もう黒の集団なんて抜けて洗いざらい流したいーっ！！」

チクリ中毒者を発見。一体精神科は彼の中毒をどう治療するのか。是非とも知りたい。

「くっひゃっひゃー。レネメン、手足縛っておいて」
「了解」

コクウの指示でレネメンは腰を上げた。マジックに使いそうなハンカチを取り出してそれでナヤを縛る。ナヤは暴れながら愚痴を撒き

散らした。

「いいネタがあるから集団に属したのに我慢ばっかだ！有名人の赤裸々ゴシップは企業にバカ売れすんだぞ、このヤロー！挙げ句にはブラックキャットも見れず目隠しで拘束っ！んだよ、まじでえ。なんだよこの扱い。まじで情報流したい。嗚呼、流さないと死ぬー」と息もつかずに言い切るチクリ屋。なんかコイツのキャラ好きかもウケる。

「今回の仕事が終わったら流してよ。ほら、謎に集う集団の初仕事だあ。いいネタだろ？」

コクウがそう言えばナヤガピタリと暴れるのを止めた。
了承したのか一度だけ頷く。

扱いには慣れているのか、こいつ。あたしも手玉にとられないように気を付けなければ。今回の手には二度と乗らないと固く誓っておく。…神でもなく、悪魔でもなく………うし、お前に誓おう。

あたしは膝の上の黒猫の額を撫でた。

それから、先程から気になる背中を見る。

背中から感じるのは、緊張。目を細めてその背中を射抜いた。

「そんな睨むなよ、椿。こいつは見ての通りただのハッカーだぜ。

コミュニケーション苦手なんだから勘弁してやれ」

視線に気付いて遊太がそう笑う。自分が睨まれていると知り、ハッカーは強張らせたが決して振り返らなかつた。

「彼はハッカーのバリユードよ。口下手で臆病だから、苛めちゃだめだよ」

コクウが紹介した。バリユード？なんだか聞いたことがあるようなな

いような。

「ふうん、じゃあ…このベンツに残るのは」

「火都、カロライ、バリユー、ナヤ。寂しい？俺がいてあげようか」
「リーダーがサボってどうするんだ」

足元にいるからまたもや蹴ってしまう。黒の殺戮者を黒の集団の目の前で、蹴るなんてあたしも大物になったものだ。

「殺し屋が四人と大泥棒が一人」

「遊太は怪盗だよ」

「ああ、ごめん、遊太。たった五人でどうやってあのビルをジャックする気？」

黒の集団。初めての活動。

それは超高層ビルのジャック。

ジャック。それも真昼間に決行。

下手をすれば表で捕まるというなんとも間抜けな結果になりかねない。

何が目的なのかはわからないが、これが成功すれば大騒ぎになるだろう。

凄腕の情報屋のナヤが広げるならば、裏現実者全員に届いてしまうはずだ。

「五人じゃないさ、お嬢さん」

「下調べした。八十三人が今日いて、その全員が表現実者。邪魔者は無し。ハッカーに情報あげたしね」

「オレ様の作品だ」

「………火都は？」

「………なんだっけ？」

「やだなあ、火都。邪魔者を排除したじゃあん」

ちやんと集団に属しているだけあって一同が仕事をしたようだ。火都はビルにいた殺し屋を追い出したらしい。あとはハッカーの手と殺し屋の腕で遂行するだけ。

「くひゃひゃ、まあ楽しんで視てて」

にんまり、とコクウは目を細めて口を吊り上げた。

目的は教えてもらっていない。ただビルをジャックするとしてしか。何をするかも何をどうするかも聞いていない。

黒の集団の初見せ場の目撃者になるだけだ。

初なのは、黒の集団の活動だけじゃない。

裏現実者がジャックするにも関わらず、死者を一人も出さないそう
だ。

これは大量殺戮するよりも歴史上に残る試み。

しかし、そんな試みをして何になるのだろうか？

そもそもそんなのが成功するのだろうか？

誰も逃がさず、外部に騒がれず、誰も殺さずにジャック。

黒の殺戮者と呼ばれる吸血鬼率いる集団が、死亡者零で動く。

見物だな。成功しなくても、失敗してしまっても。

黒の集団のスキルとコクウの策略をしつかり見定めてやろう。

「じゃあ始めようか」

高層ビルに着いて、早速開始した。コクウの軽い掛け声一同がそれぞれに返事をして車を降りる。

ハッカーはビルの監視カメラにハッキングした。

ビルに入る五人は通信機をつけて、こちらに自由に話せる。

「先ずは何するのかしら？コクウ」
「先ずはジャック」

話し掛ければエレベーターに乗り込んだコクウが答える。遊太も一緒だ。

ジャック、ねえ。

無数に並ぶ画面を見る限り、コクウと遊太は上に向かっていて蠍爆弾は下に向かっている。

レネメンはフロアに留まって、アイスピックは見当たらない。

やることは決まっているのか。ひねくれた策略家の作戦だろう。

何をするんだろうか。

身を乗りだし頬杖をつく。

居残りのナヤは縛られたままで座席に寝転んでいて、火都とカロライは黙って画面を見て、画面の隣でハツカーがキーボードを叩いている。

「バリュー、準備できた？」

「ま、まだです」

コクウがハツカーに問う。初めてハツカーの声を聞いた。やけに焦った様子に見える。

「こっちはついた」

「まだかかる？バリュー」

蠍爆弾は準備できたらしいが、バリューはまだ無理そうだ。

「何を待ってるの？コクウ」

「システムのハッキングだ。監視カメラのデータをクラッキングして、シャッターを降ろせば誰も逃げられない。そこで蠍爆弾が電源

を落としたらショーの始まりだあ」

ハッカーのハッキング待ち。というかこれが終わらないと始まらないじゃないか。膝から猫を降ろして腰を上げる。

「邪魔をするな。ただでさえ臆病なんだぞ」

ハッカーに近付くあたしにカロライが呼び止めたが、気にせずPCを覗く。

「くひゃ、殺さないでよ、椿」

「なあ、こっちも準備できちまったんだけど。せめてカメラを停めてくんね？」

コクウが笑ったあとに遊太も準備ができてハッカーを待つ。振り返れば二人はまだエレベーター。エレベーターで足止めを喰らっているようだ。

ハッカーは大慌てして震えながらキーボードを押していく。そしてヘマをやらかした。

ハッキングがバテて追い回されている。ハッキングどころじゃない。拳げ句にはコクウと遊太のいるエレベーターに会社員が乗り込んでしまい、二人が気絶させた。

「バリユー。遅すぎるよ」

コクウが画面越しにバリユーに笑いかければ震え上がった。次にエレベーターに乗り込まれたら、騒ぎとなってしまう。顔を見られたなら殺さなくてはならない。

ジャックする前に、ミッションが終わる。

そんな最悪な事態になりかねない。

そんなことはどうでもいいが（寧ろ見てみたい）、目の前でおたおたするハッカーを見ると苛々する。

こんな幼稚なシステムに捕まりそうになるハッカーを何故選んだんだ？コクウは。

嗚呼、もう！

「退け！のろま！」

「ひい！！」

「おいっ！何やってんだ！」

我慢できずに椅子からハッカーを蹴り落とす。カロライが声をあげ、コクウが問う。

「なに？何事？」

「椿がバリューを蹴り飛ばして……………代わりにハッキングしてるみたい」

「え？」

コクウに火都が教える。

「ひゅー！ブラックキャットは殺すしか脳がないと思ってた！」

目隠したままだがナヤが飛び起きた。

嗚呼、うっせーな。

あたしは捕まえようとするシステムから逃げ切って、ハッキングを開始する。んだよ、こんなの藍さんのシステムに比べたら楽じゃねーか。何を手間取っていたんだか。

カチャカチャとキーボードを押しながらあっけらかんとしているハッカーをチラッとみる。

「おい、コクウ。通知しないようにシャッターを降ろせばいいんだな？」

「くひゃ、君がいてよかったよ椿。合図したら降ろして」

いなかった至極傑作な噂が聞けただろうな、裏現実の皆は。

コクウの合図であたしはビルのシャッターを落とした。一階の玄関と防火シャッターが一斉に降りる。

それと同時に停電となり、画面は真っ暗になった。

視えないじゃない。

文句を言おうとすれば、レネメンの声が聴こえてきた。

「紳士淑女の皆様。お静かに。たった今から、このビルは我々がジャックさせていただきました」

演技かかった声で言う。

「もしも外部に助けを乞いたり、騒いだのなら」バァンツ！と銃声が轟き悲鳴が聴こえた。

「射殺いたします。さあ、皆様、床に寝転んでください」

おーこわいこわい。

真っ暗で見えないぜ。

「おい、退け。まだ仕事が残っているんだ」

カロライがハッカーを無理矢理立たせてあたしに言う。ふうん。あたしは素直に退いて画面が一望できる席に戻る。あ、万が一の為に電波妨害もしてあるから外部に漏れることはないだろう。

あとは目的を達成するだけだ。

その目的はわからない。
視えないではないか。

「ちよつと、コクウ。視えないわよ」

「音声だけでお楽しみください」

「これ見学じゃない」

文句を漏らして画面を視る。

やっぱり真つ暗で視えやしない。

カタカタと音が聴こえた。何してんだろう。やけにコクウの声にエコーがかかっている。

ん？エレベーターの外に出たのかな。

「ねえ、コクウ。なんでこんなやわなハッカーなんかを仲間に入れたの？」

「ん、勧誘したかったのは別のハッカーなんだ。でも断られちゃつて、代わりに寄越されたのがバリュー」

「あらあら、貴方をふるのはあたしだけじゃないのね」

退屈しのぎにバリューの勧誘の訳を聞いた。なるほど。バリューは力不足だったというわけか。それならば納得できる。

「それで、貴方をフツたハッカーは有名なの？」

「くひゃひゃ、有名なものにも、ハッカーの中じゃあ神と讃えられてる男だ。椿は知らない？I・C・H・I・Pって名前だけど」

聞き覚えのある名前。

「アイ……………チップ…」

今。思い出した。

I・CHIPは、穀田藍乃介のコードネームだ。

そしてバリューは。藍さんが黒の集団の情報を集めさせている手下。

まずい。

あたしは必死で作業をするバリューを見た。

藍さんに居場所がバレる。

面倒事と仕事

簡潔に言えば、黒の集団の初舞台は成功に終わった。終わるなりチクリ屋が情報を広げ、裏現実に知り渡ることになる。きつと大騒ぎになるだろう。

「椿も打ち上げしようぜ！」

「あたしは何も…嗚呼、ハッキングしたんだっけ」

「ひいつ」

「あんまバリューを苛めんなよー」

帰ろうと思ったが遊太に手を引かれて部屋に入る。バリューが藍さんにチクらないように見張っておかないといけないし。

機嫌がいい黒の集団は酒とつまみを抱えてソファや椅子を集め、祝勝会を始めた。

結局、目的はわからない。

教えてもくれなかった。

多分、レネメン達が一階で見張っている最中に別行動をしていたコクウと遊太が何かをしていたのだろう。

遊太だから、何かを盗んでたとか。

この行為自体、なんだか誰かに向けた挑発とも思える。

問題は誰かってことだ。

やはり、戦争を目論んでいるのか。

「椿はワインでいい？」

「禁酒してるって言ったろ」

「はい、炭酸水」

隣に座るコクウにワイングラスを差し出されたが叩いて押し返す。そうすれば向かい側から仕切る遊太が差し出してくれた。

「さて、諸君！我等黒の集団の始動を祝して今宵は
あつー！！」
宴だあ

「かんぱあい！！」

かなりノリノリの興奮した様子で乾杯。グラスがぶつかり音が響き、男達はその中に入っていた酒を一気に飲み干した。

「ぶはあつー！！」といい声を出すのをただあたしは眺める。

…多いな。裏の仕事でこの人数は多すぎる。多くてせいぜい五人が普通。

こんな景色は珍しいんだろう。

…なんだか、思い出すな。白瑠さんに、藍さんに、幸樹さんとの打ち上げ。

「いやあ、めでてえな。初仕事も終わったし、黒猫も仲間に入つてめでてーなあ」

「は？仲間に入つてねえけど」

記憶から意識を戻し、蠍爆弾の独り言に漏らしたそれに返事をする。

しーん、と沈黙が降りた。

賑やかだった部屋が静かになったのは何故かな？椿、わかんない。

「え？仲間に入つてくれないの？」

コクウはこれでもかと思いを開いてそう問う。ひねくれた策略家の予想外。

「はいんねーよ」

「は！？今回の仕事が成功したら入るんじゃないのか？」

「んな約束はしてない。あたしはただ見学しただけ」

「そんなぁ……」

黒の集団一同がそう思っていたらしが、バツサリと切り落とす。バリューの手前だし。黒のメンバーにははつきり言っておこう。

コクウは完全にモノにしたと思ひ込んでいたらしい。ハン、黒に勝つたぜ。

「じゃあなんでここにいやがる？さっさと出てけ！」

「だって遊太に誘われたんだもん。帰るわよ」

「ええ、やだぁー居てよぉー。帰らないでえ、一晩で口説き落とすから」

「帰らせる」

カロライが不機嫌丸出しに怒鳴るからあたしは立ち上がったがコクウが掴み引つ張りソファに戻る。

一晩中策略の罫を目論む奴なんかと喋りたくなんかない。

「樁い！いいじゃん！今日楽しかったろ！？仲間に入ろっぜ！」

「遊太、もう酔ったの？あたし、今日はハッキングして黒い画面見てただけなんだけど」

「じゃあ次は一緒にやるっか、樁」

「成り行きで仲間にする手には乗らん」

「樁いーんっ！！」

「んう、どうすれば仲間に入ってくれる？なんでもするよ、なんでも言っつて」

コーヒーテーブルを乗り出して顔をぐいんと近づく遊太。その遊太よりも近付けてくるコクウが下から顔を覗く。なんでも。

この男はきつと。

文字通り、なんでもするだろう。

目的の為ならば、自分の身体だって売る男だ。

「本当に……なあんでもするの？」

少しだけ顔を近付ける。少しと言っても元から近いから、近距離だ。あたしの前髪がコクウの顔にかかる。息だって触れていた。

「…なんでも、するよ」

そつと、囁いてコクウは微笑む。

「……じゃあ…」

「…ん…」

またコクウが顔を近付ける。鼻が触れた。冷たい。

コクウはまた顔を動かし、そして。

パリンッ！

グラスが割れる音が聴こえ、あたしは顔を上げる。

「ひい……！」

「おっ、おっと…」

「おお………」

「は…ははは」

身を乗り出す蠍爆弾とナヤと遊太が渴いた声を漏らす。グラスを落

としたのは、バリユーだった。

「お嬢さん、私もなんだってしよう。あんなことやこんなことまで、さ」

「アイスピックで刺し殺してもいいの？」

「あはは、それは無理さ」

下心丸出しのアイスピックは一蹴。

「ちけーよ、退け。レネメン、おかわり頂戴」

まだ目の前にいるコクウを押し退けて呆然としているレネメンにおかわりをねだる。

いそいそと一同はまた騒ぎ始めた。

「レネメンは何を飲んでるの？」

「カシスのカクテルだ」

「へえ、いいな。あだし、カシス好きなんだ」

「飲むか？一口」

「んー……………。一口だけ、頂戴」

隣のレネメンの持つ赤いカクテルに目を奪われて、誘惑に負けて一口だけでもらうことにした。

レネメンの持つグラスから一口。

カシスの甘さと久しいアルコールが喉を通った。

「美味い……」

へにゃとして笑ってしまう。

「もう一口飲むか？」

「あと一口だけ」

レネメンが笑ってもう一度勧めるから、もう一口。
そこに、かぷつ。

膝の上にいた猫を撫でていた手を、噛まれた。

「にゃ!？」

バツとみたら、噛んだのは猫じゃなくてコクウ。
いっせーのグーでパンチ。

「何すんだと阿呆！」

「間違えた。猫の耳を噛もうとしたの」

「てめえ、何度噛む気だ？」

短剣を出して突き刺したが。刺さったのはコクウではなくソファ。
華麗に避けられた。

「…紅色の黒猫は猫だった」

ポツリとナヤが呟く。

「これだけ流してもいい？」

「…は？なにそれ。意味がわからないんだけど」

「紅色の黒猫は猫だった」

「…意味ワカメ」

「流していいんだな!？」

「あたしがいつ了承した言葉を発したんだ」

「くそう…!これもだめなのかあ!畜生お、紅色の黒猫のネタが流

最後にバリューの耳元に言ってから、踵を返す。
さよならも言わずに、その家を去った。

問題発生だ。

いや、コクウと出会してから問題ありまくりだが。
バリューの存在はまずい。

今で脅したが、ちゃんと口止めをしなくてはならない。
藍さんにコクウと会っていることが伝われば、当然白瑠さんの耳に
も届いて 大事になりかねない。

そんなの絶対避けないと。つつか恐い。何が怖いって。コクウ絡み
で怒る白瑠さんが。

…白瑠さんが。

「つつばき」

「ひゃあ!？」

後ろから冷たい吐息を耳元にかけられて震え上がる。
後ろにはにっこり笑うコクウが立っていた。

「送るよ」

「…いらないわよ。リーダーがいないで打ち上げてどつすんのよ」
「送ってからでも間に合う。椿は怪我してるし。ほら」

ほら、と言ってコクウはあたしに背を向けてしゃがんだ。

「………………。何の真似?コクウ」
「何って…………おんぶ」

まじか。

散々イケメンにお姫様だっこされてきたあたしに、おんぶ。新しい発想、ありがとう。ごちそうさまでした。さようなら。横を通り過ぎようとすれば、腕を引っ張られ、視界が横転したかと思えば。

あたしはもうコクウの背中だった。

「ふふ、屋上に行くのと道路に行くの。どっちがいい？」

「…屋上」

脚はがっちりと捕まれている。これはまたもや脱出不可のようだ。仕方なく答えれば、コクウは軽く飛んで建物の屋上に降り立った。それから歩き出す。

「あれ、よく力入れなかつたね、今の」

「高いところは好きだし。吸血鬼に運ばれるのは初めてじゃないから」

「ふうん、吸血鬼におんぶされたんだ」

「おんぶは貴方が初めてよ」

「くひゃひゃ」

あたしを抱えて夜空を飛んだあの吸血鬼が今どうしてるのかも、あたしにはわからないことだ。

コクウはなんだか機嫌のいい笑い声を漏らして軽く屋上を飛び越え隣の建物に移る。

「吸血鬼と言えば、もう一人紹介してない奴がいるんだ」

「！、あれで全員じゃないの？」

「うん、昼間だからパスしたんだ。吸血鬼だからね」

「…貴方は出たじゃない」

「リーダーだもん」

リーダーなら打ち上げに参加してろよ。

「……………」

少しの振動。大きな背中。

おんぶされるなんて、初めてに等しい。

多分、記憶にはない。

歩む度に揺れる。抱きつく背中。コクウの匂い。漆黒の髪。広い肩。

なんだか。

落ち着く。

抱えらるよりも、落ち着くのは顔を見られないからだろうか。なん
でだろう。

落ち着くな。

「ん？どうかしたの、椿」

ホツと息を吐いてしまった。その息が彼の耳に振りかかった。それ
でコクウが振り返る。

「……………別に」

「ふうん。俺、耳弱いから息を吹き掛けないで」

「……………フー」

「ひゃあっ」

耳が弱い。お前もか。

ちよつとした好奇心で息を吹き掛けたらコクウは震え上がった。笑
いを堪える。

あたしを背負う大きな背中。

なんだか、眠くなってきた。

もう一度、ホツと息を吐く。

「……………眠い」

「寝てもいいよ、ちゃんと運ぶから」

「寝ねーよ」

起きてお前が隣にいたら世界の終わりだ。あたしは即座に自分の首を掻き切るだろう。

「……………ねえ、椿」

「嫌」

「まだ何も言っていない」

「何を言われても嫌」

「白はくのことだけどさあ」

「アンタ、自分が背を向けてること知らないの？」

「ふむ…不機嫌になった」

は？なんだよ。

首をはねるぞ。

「白瑠の奴と何かあったの？アイツ、一ヶ月前から仕事してないんだぜ。多分人っ子一人殺してない」

……………知るかよ、そんなの。

「喧嘩して家出してるの？」

……………。

「原因は知らないけど、もう仲直りしなよ」

.....。

「アイツも探し回ってるみたいじゃん。許してあげなよ。さもないとアイツは
本格的に壊れる」

振り返らず、コクウは背中にいるあたしに言う。

「世界で愛する人が突然消えてしまったら、アイツだってボロボロのぐちゃぐちゃになるぜ。アイツが今まで他人を庇うなんてなかったんだ。椿のこと、本気なんだよ。そんな椿が逃げ続けるなんて、酷い仕打ちだぜ。化物の殺戮者でも、愛する人間の前じゃあただの男。連絡、してあげなよ」

理解しきつた口振りでコクウはそう言った。
理解してるのだろう。

同類なのだから。そっくりな二人なのだから。

白と黒で対照的でも、似た者同士の殺戮者。

酷い仕打ち、か。

あたしは鼻をコクウの髪に当たった。シャンプーの匂いがする。そつと鼻で首筋をなぞった。甘い匂いは肌から発しているようだ。

コクウが足を止めた。

あたしのアパートの屋上だから。それからあたしが首に息をかけたからだ。

あたしは白い首に唇を這わせ
と、噛み付いた。

かじっ！！

「っひゃう!？」

震え上がったコクウはあたしを放して首を押さえる。あたしは転倒しまいと右足でしっかり着地。

あたしの唇には噛んだことで溢れ出た血がついた。ハンバーガーを食べるように容赦なく噛んだのだから当然か。

「…初めて噛まれたんだけど」

「だろうね。あたしは吸血鬼になるのが夢なの」

「叶わない夢だぜ」

「知ってる。貴方が教えてくれたもの」

吸血鬼になって以来、噛まれるのは初めてだったらしくコクウは茫然とした顔をしている。

あたしはシレッとした態度で返して舌で血を舐めとった。

吸血鬼の血を飲んでも、吸血鬼にはならない。

あたしは背を向けて階段に向かう。

「椿、あの猫は今日も俺が預かる」

「預かるもなにも、あたしのペットじゃないわ。好きにしたら」

「じゃあまた明日」

「……ええ、また明日」

また明日。と言われても会うつもりはなかったが、またあの家に行くなら仕方ない。

ちよっとした用事があるし。

「ケツ。吸血鬼女か、お前は」

部屋に帰るなり、ヴァッサーゴが口を開いた。

「アンタは吸血鬼が嫌いななの？」

「お前ほど好きにはなれないな。押し倒されキスされたり噛まれて血を吸われても尚好きなんてどうゆう神経してんだ」

押し倒されキス。
嗚呼……ハウン君か。そう言えばあたしは小さな吸血鬼に押し倒されキスされたことがあったんだ。その時にはもう、ヴァッサーゴは頭の中にいた。

「あれはお礼よ」

「じゃあ噛んだのは何の為だ」

「……………噛みたくなつたから？」

「男を噛むのか」

「噛んだ仕返し。噛みたい肌だったの」

「そりゃあお前の方だろ！」

「うわあ!？」

ふわつと周りに黒い煙が現れ、男が背中に抱きついてきた。あたしより大きな彼の体重は支えきれぬわけもなく倒れる。倒れたあたしから離れるどころからそいつはあたしの首に噛み付いた。

「ぎゃあ!？なにをするっ！てめっ^{グイ}V!!」

「おー、なんだ？噛み返すか？」

ニヤリ、あたしの背中に寝そべって笑いかけるのはヴァッサーゴ。悪魔は姿を持たない。煙だから。とり憑いた人間のイメージを元に姿を作り目の前に現れるそうだ。つまり背中に寝そべっている切れ目の黒ずくめ男は、あたしのイメージ。

なんでヴァッサーゴがイケメンなんだ。畜生。ぜってえあたしがイケメンに弱いから顔を整えやがったに決まってる。

「ちげーよ。まんまお前のイメージだ」

「じゃあイメージ変える。よれよれのじじい」

「へっ。やだね」

「いつまであたしの背中にいる気だ」

「ん？そうだな……………一発やってから」

くびれを両手でなぞりながら、首筋をやけに長い舌で舐めるヴァッサーゴ。

「悪魔も欲求不満になるんだあ？」

「お前こそ……………うずいてるんだろ？」

耳元で囁いて、ヴァッサーゴは右手をズボンの隙間にいれてくる。

「酒飲んで勢いであそこにいた誰かとヤっちまえばよかったじゃねえか。蓮真の兄貴でも、火都でも、レネメンでも……………クククツ…黒野郎でもいいだろ。白と黒と寝た女はいないだろーよ」

ぐりんっ、と体勢を変える。ヴァッサーゴも巻き込み、今度はあたしがヴァッサーゴの上に乗った。

止まらずあたしは腕から短剣を取り出して首を目掛けて振り下ろす。ヴァッサーゴは一瞬にして、煙になって消えてなくなる。

それからまた沈黙。

ふん。

あたしは短剣を戻して立ち上がる。

ん？と気付く。

左足が治されていた。

…まあ、許してやるか。

白瑠さんの話もしなかったし。

浴室の鏡を見つめ、呟く。

「吸血鬼だったら、よかったのに」

血だけを求め続ける冷血な吸血鬼。

鏡に映るのは、魂が抜けてしまった人形だった。

翌日、朝はきつと飲み潰れた黒の集団がソファで寝てるだろうか
ら昼過ぎにあたしは黒の集団のオフィスに向かった。

壁際の机に二人。そこにはナヤとバリユーしかいなかった。

「黒つちなら、上だよ。呼ぶかい？」

「いいえ、寝てるならいいわ。貴方に話があるの、ちょっといいかしら？ そのこのファミレスに行きましょう」

「ヒューー！ 黒猫のお誘い、有り難く受け取る」

コクウもいなくてよかった。

まずはナヤを引き離してから、バリユーと話すか。

コクウの家はこのオフィスの上。起きないうちに早くすませないと。
ナヤは直ぐにバリユーから離れて出口に向かう。

あたしも一緒に出ようとしたが、キーボードを叩く音を耳にして立ち止まる。

カチ、カチ、カチヤン。

カチ、カチ、カチヤン。

カチ、カチ、カチヤン。

聞き覚えのあるリズム。

「先行つてて」とあたしはナヤに一言言ってから引き返す。ナヤが行ったあとにカルドを出し、バリユーの背後に立つ。

「今、Iに連絡しようとしたら？」
「!？」

カルドを首に突き付け、短い髪を鷲掴みにする。バリユートの顔は恐怖に凍り付いた。

藍さんがたまにそのリズムで叩いていたのを覚えている。多分バリユートとの交信キーなのだろう。

「言つたる。チクつたらためえを真つ先に殺すつて。このまま裂いてやるうか？」

「ち、チクつてません！」

「チクつてたらぶつ殺す。先ずはその舌と指を切つて生きたまま腸を引きずり出して口の中に詰め込んでやる。わかつたな？」

「はっ、はいっ！」

「アンタ。黒にスパイだつてバレたくなきゃ、あたしをチクるなよ。仲間なら優しいが裏切り者なら…あの殺戮者はどう料理するかしらね？」

「……………っ！」

氷柱のように囁いてやれば、恐怖の支配で強引に約束させた。

他の黒の集団ならばこんな脅しは効かなかつただろう。ハッカーが小心者で助かつた。

そう言えば、あたしはコクウが殺戮する場面を一度も視ていない。白瑠さん並みならばバリユートが蒼白な顔になつても無理はない。

風船のように片手で、人間の頭蓋骨が割れるなんて恐怖を覚えるだろう。まともな人間ならば。

コクウは血塗れにするんだっけ？頸動脈を切つて血飛沫？それとも腕を引きちぎつて血飛沫？

どちらにせよ、散らかるんだろうな。あたしは頬を軽く切りつけてから、その場をあとにしてレストランに向かつた。

「話ってなんだい？情報流していいなら喜んで！」
「情報が欲しいの。今金欠で、仕事をちょうだい」
「仕事？」

ナヤが座る向かい側の席に座り話す。店員を呼んで頼んだ。
トマトソースのチキン。サラダ。ライス。ステーキ。

「……………チキンに、ステーキも食べるの？黒猫は大食いなんだね」
「朝食は食べなかったの」

「ダイエツト？」

「違う。単に摂る気がなかっただけなの。めんどくさいなら作らないし、買いにいかないし。不規則な生活だから」

「お肌に悪いじゃん！…って、綺麗な肌してつか。でも顔色は良くないな。そのうち病気になっちまうよ？やめてくれよ、一年やそこらで消えるなんてさ」

ナヤはやれやれといった風に首を振って笑う。

「流星の如く現れ、流星の如く消えるなんてダサイじゃん。ウルフって知ってる？」

「シヨットガンの一匹狼？」

「それはウルフマン。彼が殺した方のウルフ」

ん？

ウルフって、あのシヨットガンのおっさんだよな。

嗚呼、そう言えば最初に殺した奴の名前だった。…言っていたようがないような。

「ウルフは君と同じで流星の如く現れた期待の新人だった。もしか

したら、白や黒の殺戮者に匹敵する殺し屋だったかもしれない」

ニヤニヤとしながらナヤはそう話し出す。

白瑠さんやコクウに匹敵する殺し屋。

「あの番犬から獲物を奪って生還したのはウルフぐらいさ」

「！、番犬から？」

それは驚いた。事実らしい。

裏現実の番犬だと恐れられた史上最強の狩人。

彼から獲物を奪って逃げ切ったのか。

片っ端から名を馳せていた殺し屋を一掃していた最強の狩人から……。それは白瑠さんやコクウに匹敵するとも噂されるだろう。

「だがしかし。ぶわーん、とウルフマンに殺られちゃったんだよね、これが。ウルフマンのデビューさ」

あたしの反応に気をよくしたナヤは自分のこみかみに銃を真似た手を突き付け撃った。

ふうん。

素人にあっさり殺されて流星の如く消えたってわけか。

「それが五年前。その後には番犬も消えちゃった。歴史に名前を刻むなら長生きしてほしいなあ、黒つちみたいにさ。黒つちはいい。歴史におっもしろいもんを刻んでくれるから」

ウルフが消え、番犬も消えた。

黒の殺戮者、コクウは長生きをしている。そして名を馳せている殺し屋。

今も歴史に名を刻んでいる。

昨日のビルジャックもまた、裏現実の歴史に残るだろう。

「だから黒の殺戮者の仲間に入ったの？」

「黒の殺戮者の情報がいち早くチクれる」

チクリ中毒者。

裏現実には中毒者に溢れているのだろうか。

「コクウって昔も派手なことしてたの？」

「個人で派手にやってたよ。小さい国を一人で地図から消したことがあるってさ、ひゅー見てみたかったあ」

小さい国。どんなに小さくても国は国。それを一人でか。

成る程、名前を馳せるわけだ。

吸血鬼は目立つことを嫌って名前を伏せて闇の中を蠢くが、コクウは一人だけ目立っている吸血鬼。

吸血鬼の中では変わり者だろう。

「それで、黒猫。仕事紹介と引き換えにどんな情報をくれる？」

明るいところじゃないと気付けない。

青い瞳と黄緑の瞳をしているナヤは身を乗り出して微笑んで問う。

あたしは金欠。金よりも情報を欲しがる情報屋。情報を買うなら情報で払えってことだ。

「日本で起きたレッドトレイン。あたしがやらかした最初の大量殺戮の唯一の生存者、山本椿はあたし。気付いたらデザインカッターで五十六人を殺してた」

去年の秋。日本列島を恐怖で震わせた電車に乗った五十六人の人間

を殺した。

カッターナイフ一つで殺戮。

生存者はあたし。犯人だが、そこに居合わせた白瑠さんの手により致命的を喰い、被害者の一人となった。

唯一の生存者があたしだってことはほとんどが知らないからいい情報だろう。

ナヤはあんぐりと口を開けた。

「な、ななななな、流してい!？」

「……これだけなら」

「黒猫大好きっ!！」

告白された。

日本ではもうレッドトレインの犯人は捕まり、山本椿は死んだことになってる。

表に漏れても支障がないだろうからいいだろう。

ナヤは感激して今にも飛び跳ねそうだ。

「じゃあこの情報に見合う仕事を直ぐに探す!」

「ええ、お願い」

話が終わった頃に料理が運ばれた。

チキンからナイフで切って食べていく。美味しい。

ナイフにフォークでご飯を乗せて食べる。それを見たナヤがきょとんと首を傾げた。

「……………お上品だなあ、黒猫」

「ん?何が?」

「食べ方。お嬢様みたいにお上品。実はお嬢様?」

「普通の食べ方じゃない」

「えー、そんなお上品に食べる女なんてみたことないよ」

そう言っただけならナヤは両手で頬杖をつく。それからまじまじと見つめられた。

食べにくいじゃないか。

じーとナヤはあたしの顔を見る。

「なに？」

「美人だなあとと思って」

「それはありがとう」

「その眼って、カラコンだよな」

指差したのはあたしの眼。

紅く揺らめく瞳。

長い睫であまり目立たないが、ナヤの目と同じで明るいところでは気づく。

カラコンではないと言えば、裏現実では。

ふと、あたしは顔を上げてガラスの向こうを見た。

「どうかした？」

「……誰かが死んだ」

「うおーい、そんなの感じちゃうわけ？」

「違うわ、血に敏感なだけ」

近くで、誰かが死んだ。

これは多分、あたしの眼を紅くしたヴァッサーゴの能力だろう。血に敏感になってる。

近く。近くだ。

その方向は、黒の集団のオフィス。

あたしはステーキの半分を口に突っ込んでから金を置き、レストラ

ンから飛び出した。

「うおーい！どうしたんだよ、黒猫！」とナヤは後を追う。急発進する車を目撃。

迷わずに階段を駆け上がってオフィスに入った。

血塗れだ。

血塗れのバリューが椅子の上で生き絶えている。周りに飛び散っているのは彼の血だ。

そして彼の血で、壁には文字が書かれていた。

紅色の黒猫 殺す

狙いは あたしか。

「あー、いてえ」

頭から血を流したコクウが奥の部屋から出てきた。コイツは殺しても死なない。

どうやら寝込みを襲われたらしい。頭を一突きナイフが刺さっていたみたいだ。

「あれ？バリュー殺られちゃった？」

コクウはあっさりした反応でバリューを見てから壁を視た。

あたしはバリューを視る。獲物は恐らく刃物だ。

きつとあたしの居場所を問われ脅されたはず。しかし、これといった抵抗した痕がない。

それが少し、気になる。

抵抗できないほどに小心なわけがない。

藍さんだつて銃を携帯してた。何らかしら身を守る武器を持っていたはずなのに、それを手にしていない。妙だな。

「ナヤ」

「紅色の黒猫を殺してくれって仕事の情報がある」

「心当たりは？椿」

「依頼人の名前は、パトス・クライシス」

パトス・クライシス。

生首を思い出す。

心当たりはある。

「未払いのクライアントの仕業だ」

「未払い？払うまで待つなんて言ったのかい？椿。そりゃあ殺されちゃうよ」

「そんな理由だけならいいけど……。火都は何処？」

金が払えないから他の殺し屋を雇った、だけならまだいい。

パトスの愛人。

彼女の生存を確かめないと。

「火都なら見舞いに行ったよ。病院」

「病院ですって？何処の？」

「そこまでは」

「ああもっつ！」

「なに？椿」

何処の病院かはわからない。

あの愛人は火都に病院に連れていくよう頼んだ。きっとその愛人の見舞いに行ったんだろう。

「火都が危ない！」

「待って、椿。ナヤ、車を」

「いい！あたし一人で！」

「怪我してるんだから車で」

直ぐに飛び出そうとしたが、コクウに腕を捕まれた。怪我。言われて気付く。

足は怪我したことになる。忘れていた。下手をしたらヴァッサーゴが喚き散らす。

「あれ？さつき…」

「ナヤ、車を出して。早く病院に」

足元を見るナヤを急かしてあたしは足を庇うように階段をゆっくり降りた。

「ちっ、めんどくせえ。」

パトス・クライシス。

依頼人はその息子。ドリップ・クライシスだ。

バカな行動に走ったな。父親を殺す為に殺し屋を雇った時点で大馬鹿か。

あたしを消し、約束の金はバリユーを殺した奴にやるのかしら。その為には遺産を手にするため、あの愛人を殺すだろう。

さっさと遺族同士で殺しあえばいいのに。その方が手っ取り早いじゃないか。めんどくせえな。

キーン！

黄色のRXが停まったのは、フェニックス病院。

火都と会った現場から一番近い病院だ。ここにいないはず。

「コクウ、アンタを殺した奴はここにいない？」

「んー。血のおいがいつぱいでわかんないなあ」

「じゃあ火都のおいを見付けなさい！」

「はあい」

コクウの鼻を頼りに、病院の中から火都を探し出す。直ぐに見付かった。

「あれ？どうしたの」

ベッドの隣に椅子を置いて座った火都が、何ともやる気のない声で出迎える。

そのベッドには、パトスの愛人が静かに眠っていた。殺し屋は来ていないようだ。ほっと息をついて髪を掻き上げる。

「何故彼女のお見舞いに？」

「椿に、任されたから」

「……………。もういいわ、あたしが引き継ぐ」

責任持って面倒を見てくれていたらしい。こんなにも真面目な奴だとは思わなかった。

入院費まで出したらしいからあたしが返そう。…金欠なんだけど。

「来週、退院、だって」

「そう」

今はただ眠っているというわけか。起きたら何から話そう。

なんとか元が取れるように話を持って行こうか。そうしよう。

「こんにちわ」と看護師が一人入ってきた。ナイスバディなナースにナヤとコクウが目を向ける。

カッカツと踏み鳴らすヒールを穿く素足がセクシーだ。男なら誰もが釘付けだろう。

あたしもそれを視た。

セクシーなナースはあたしの向かい側で点滴を変えようとする。
血のおいがした。

廊下ですれ違った医者達とは違う。

裏現実者のおい 殺し屋の臭いだ。

「!」

あたしは点滴を振り払い、ベッドに乗り込んでナースの女の首を掴む。

そしてナイフを女の顎に突き付けた。

「誰に雇われた？」

その質問をして首を握り締める。

女は答えるどころか、震え上がって助けを乞う。

「お、お願い命だけはっ！乱暴しないで！私が何したって言うの！
？お願いやめてえ」

鬱陶しいと思つたから、急所を外して腹にナイフを突き刺す。
そして乗っているベッドに押し付ける。

「あたしが誰だか知ってるでしょ？この病院の人間、全員殺してか
ら問おうか？」

表で五十六人を殺して裏現実に入った殺人鬼。紅色の黒猫。
表の人間のフリしたって、助かると思ふなよ。

「きゃあ!」

悲鳴を上げたのは、目を覚ました愛人。えーと名前は…名前。

「カトリーナだっけ？あたしのこと覚えてる？」

「……え、ええ……」

「彼女、貴女を殺しに来たの」

「えっ!？」

名前はカトリーナだ。

家族に財産目当てで命を狙われたパトスの愛人。

「依頼人の名前は？」

とりあえず確認をしよう。

髪を握り締めて問うとナースの殺し屋はドリップの名前を口にした。やっぱり。

「コクウ、こいつはやる」

用が済んであたしは女をコクウに向けて蹴り飛ばす。女は逃げる素振りも出来ずにコクウに捕まった。吸血鬼に口を押さえ付けられ、羽交い締めにされるナース。…駄作のC級映画みたいだ。

「カトリーナ。話を聞いてくれる？何故命を狙われたのか、わかる？」

あたしは静かにカトリーナに問う。カトリーナは首を横に振った。

「パトスが貴女に遺産を残すと思って彼の遺族が命を狙ったの。パトスは遺族の雇った殺し屋に殺された。あたしもその殺し屋の一人でも貴女を助けたことで遺族の一人であるドリップに命を狙われた」

あたしはそう説明をする。簡潔に、戸惑い震えるカトリーナに言った。

「そこで提案。カトリーナ、あたしを雇わない？ 貴女を殺そうと狙う殺し屋を排除してやるわ」

「え……」

「勿論、これはただの提案。雇う雇わないは貴女が決めて構わない。ただ貴女がパトスの遺族達に目の敵にされているのは事実よ、遺書に貴女の名前が記してあるかどうかは定かじゃないけれど。この殺し屋が来たなら狙われている。あたしは雇わないと言われたらドリツプを殺しにいくだけ。あたしはドリツプにしか狙われてないけど、貴女は遺族達全員。パトスの身内の数はご存知？」

ペラペラと話す内容は結局は雇うように勧めている。雇ってもらいたい。金欠だし、金で雇ってほしい。大体パトスの仕事の金は彼女を助けたことでパーになったのだから。

「金なら心配要らないはず、遺産がなきゃあたしがドリツプから奪うわ。あ、ナヤ。仕事の話はなしね」

「流すなって言うのか!？」

「代わりにパトスの遺産についてを調べて、あげた情報は流していないから」

「大好き！黒猫！」

イエイ、ナヤを手なづけたぜい。

「どうする？カトリーナ」

「……………雇う、わ……………」

カトリーナに顔を向けてもう一度問う。カトリーナは火都に救いを求めるかのように眼を向けたが彼は何も答えない。

カトリーナは雇うことにした。

一度は命を救ったあたしを信じるようだ。

「交渉成立ね。あたしは紅色の黒猫。退院次第……いつまでそこにいるの？早く出て行ってよ」

「え？ああ、うん」

ぼけえとしていたコクウに出てけと言う。つつかささと羽交い締めにしてるナースを始末しろよ。

「火都もいこう、探りにいくからちよつと護衛を頼む」

「…うん」

ナヤが先に立ち上がって、火都の肩を叩く。そして病室を後にした。続いてコクウもナースを連れて歩き出す。

「ねえ、コクウ。バリエーのこと、寄越したハツカーに知らせるの？」

「ん、そりゃあ…借りたものを壊したって言わないと」

「バリエーは借り物程度だったの？」

「本人がそのつもりだったからね」

バリエーが殺られたことに対する感情を抱いていないようだ。

派遣ハツカーは実はスパイだったなんて知ってもそんな薄い反応しかしないだろう。仲間だと思っただけから。

火都が危険と知って飛び出したのとは大違いだ。

「くれぐれも、あたしのことは話さないでちょうだい」

「話したら俺に喧嘩売るの？」

にや、と面白そうにコクウは訳を訊いた。

「霧のように消えてやる」

あたしは冷たく答えてやった。ドリップのところに強盗しにいけば金ができて夜逃げができるもの。

バリューが消えたことだし、ちゃっちゃと逃げてやる。

コクウは顔色一つ変えずに「わかった」と病室を出ていった。

「カトリーナ。退院次第、あたしの家に匿うわ。貴女の住所を教えとくれる？もう荒らされてるかもしれないけど、必要なものをとってくる」

「あ……………あの日、パトスがくれたジュエリー……。レストランで落としたの」

「ジュエリー？……………ああ」

そばにジュエリーが入っていきそうな箱が落ちていたのをみた。あれか。

「でもあれは……」

「お願い……………彼からの最後のプレゼントなの……」

さすがのようにカトリーナはそうあたしに頼み込んだ。

頼まれても、掃除屋が片付けてしまったんだ。ある可能性は低すぎる。

「最後とは限らないわ」

「愛人に遺産を残すわけじゃないじゃないっ！彼とは二年も付き合っ

ないのよ！」

本当に最後のプレゼントとして、遺産がある。かもしれない。確かではないが、あたしは可能性は高いと思っている。

「パトスを知らないけど……カトリーナ。彼は命を狙われているにも関わらず、貴女の誕生日を祝いに来たのよ？彼にはもう、貴女しかいなかった。血が繋がってても命を狙うような身内より、危険な最中に誕生日を祝いに会う愛人に残すはずよ。レストランで会った彼はどうだったの？」

あたしがそう問えば、カトリーナの目に涙が浮かんだ。ポロリと、透明な雫が落ちていった。涙なんて、久しい。

「世界の誰よりも、彼は貴女を愛していた。そうでしょう？」

ポロポロと涙が次から次へと落ち、カトリーナは嗚咽を堪えるように口を両手で押さえた。

そしてカトリーナも、彼を愛していた。目を覚ました時に、真っ先にパトスの無事を確認していた。愛している証拠。

「探しにいつてくるわ。病室を変えてもらって？知った顔のドクターとナース以外は信用しちゃだめ。殺し屋と思って。念のために」

だからこそ、最後のプレゼントを。

あたしは腰から銃を抜いてカトリーナの小さな手に握らせる。

「すぐ戻るから。肌身離さず持つのよ？襲い掛かったら迷わず撃ちなさい」

銃を持って怯えていたがカトリーナは頷いた。暴発しないといいが、病院に裏現実者の気配はしないから今のところは大丈夫だと思う。あたしは病院を出た。それから掃除屋に電話をかける。

「あーワリイ、仕事 중이다。他を当たってくれイ」

「掃除した物は処分した？レストランでジュエリーを見なかったかしら？必要なのよ」

「ああ、あの殺し屋の死体と首なし死体のレストランねエ。それならまだあるけど」

「今どこ？アメリカにいるんでしょ」

かかったるそうな声音はいつものこと。一度も会ったことはないが、アメリカに来てから彼に掃除を頼んでいる。

後始末。日本では掃除屋は頼まなかったが、あたしの殺し方だけでバテしてしまうから始末しないといけない。足がつくんだ。

「……………あ？」

顔がひきつる。目の前には車が停まった。真っ黒のフェラーリの中から、コクウがにっこりと笑いかける。

「乗る？」

「……………今からそこに行く」

あたしは電話を切って助手席に乗った。後部座席には横たわったナース。首の傷からして食事を終えたようだ。

今電話した掃除屋は黒の集団のオフィスに来て、バリューを始末しているとのこと。

ちっ、めんどくせえな。

「あの娘を守るんだ？それって狩人のやることでしょ、火都に任せればあ？そうすれば椿と俺は殺しに専念できるだろ」

「何故アンタとやることになるんだよ。意味わかんねー。あたしの仕事に首を突っ込むな」

「えー、でもあ」

スピードをかなり出してるのに、コクウは懐に片手を入れた。顔まで逸らしやがってる。事故った暁にはお前を閉じ込めてやるぞ。

スツと、コクウが出したのはパスポート。

あたしのパスポートだった。

奪い取るうとしたがひょいっとコクウが避けて空回り。

「返そうと思っただけど… 必要ないみたいだねえ」

そう言って窓から捨てようとした。

まさか。捨てない。交渉道具を……。

パツ。

コクウの手からパスポートが消えた。

「ちよっと!?!」

「くひゃひゃ!」

慌てて飛び出し、運転席に乗り込んだらコクウが哄笑。そしてあたしを羽交い締めにした。

片腕で拘束される。暴れたら、視界にあたしのパスポートが現れた。コクウが加えている。

奪い返そうとしたが両腕が出せない。

「わからないなあ、椿が仲間に入らない理由」

「…明確だろうが」

「白はくが怒るからなんて言い訳だろ。今、怒らせて逃げちゃったんでしょ？」

「……」

「何が怖いのか？何が嫌なんだ？」

唇であたしの髪を弄びながら問う。

怒らせるのが怖いんじゃない。

怖いのは。

怖いのは。。。

ガツンッ！！

「ぐあっ」とあたしの頭突きで悲鳴を上げるコクウはハンドルを誤り、車がキイイイツと揺れ動く。

「運転中に、危ないじゃないか」

「事故ればよかったのに」

事故る前に急ブレーキで停まった。運転中にあたしを捕まえるのが悪い。

あたしはパスポートを奪い返し、窓から車を降りた。

オフィスはもう目の前だ。

コクウはナースの死体を担いであとからオフィスに入った。

オフィスの中の血の匂いは、完全に消されている。きれいさっぱり掃除されたようだ。血文字も跡形なく掃除されている。

「これも始末、お願い」

「ひゅー、こりやまたべっぴんな死体じゃねエか。血が全くない…黒の殺戮者らしい」

掃除道具を片付けていた男にコクウはナースを渡した。抱えただけで男はそう洩らしてにやつく。

黒い髪を一つに束ねた髭面の男は、首を傾けてあたしを視た。

「さつき電話したキヤットよ」

「お前さん……… もしや紅色の黒猫かい？」

ナースの死体を抱えたまま掃除屋はあたしの顔をまじまじと見つめ、それからあたしの名前を当てた。二つ名を使うと広まるからキヤットと名乗っていたのに、何故顔を視ただけでわかったんだ。

「…そうだけど、何故わかったの？」

「あーやっぱり！メイクしてなかったが顔付きとその眼でわかった。秀介にゴスロリの姿を見せられたんだ」

「………秀………介………？」

彼の口から出た名前に、あたしは目を丸める。メイク……？ゴスロリ……？

思い当たるのは、無理矢理撮らされたあの日。そう言えば、写真、撮ったんだ。

「なあ？秀介」

掃除屋は振り返ってそう呼び掛ける。

そこに立っていたのは、目を丸めて立ち尽くす秋川秀介。狩人の鬼。ポセイドン。あたしに愛してると言った最初の男。

「…っ…いいいい！！！！！！」

「…わっ、秀介！？」

人前であろうと黒の集団の前であろうと、秀介は再会の抱擁をしてきた。あたしに言わせればボディタツクルだ。

「うわ！？つばきちゃん、痩せた！髪伸びて色っぽさが増して…カラコンも妖艶で綺麗だ！」

「ちよっ…どこ触って…」

直ぐに解放されたかと思えば髪の毛先から足の爪先まで眺められ、内腿を鷲掴みにされて痩せたことを確認される。

「嗚呼！椿！会いたかった！一ヶ月と三週間ぶり！」

ギユウと秀介はあたしをもう一度抱き締めた。

一ヶ月と三週間。最後に会ってからの明確な時間だろう。

まだ、それしか経っていないのか。

あの日からまだ　　一ヶ月と三週間。

「……久しぶり、秀介。篠塚さんは？」

「久しぶり！相棒なら一人で仕事かさ」

ニツと笑う整った顔の青年。

しのづかけんたろう
篠塚健太楼。記憶を無くした裏現実者。表では刑事。

記憶を取り戻す為に、秀介と仕事をやって度々噂を耳にしていた。

秀介とコンビを組んでいるから、ゼウスと言う通り名がつけられている。

秀介がポセイドンだから、ゼウス。雷鳴のような銃声を轟かせるからゼウス。

もう一人で仕事をやるくらい裏現実慣れたってことか。

「それで貴方は…何してるの？」

「ドミーと暇潰してたら黒の集団だったから遊びに来た」

ドミー。掃除屋の名前だ。

仕事ではなく狩人としてではなく、単に興味本意で遊びに来ただけのよう。

相変わらず怖いもの知らずだな。

オフィスにはカロライと蠍爆弾とアイスピックの三人が戻っていた。多分喋っていたんだろうな。

「ん？つばきちゃんはなんでここに…？」

秀介が首を傾げて訊いた。

この様子からして、秀介は白瑠さんにも会ってないみたいだ。

白瑠さんの元を離れたなんて言ったら、めんどくさい事になりかねない。

何か気を逸らすことを言わないと。

「……………しゅーすけ」

あたしは甘えた声で彼を上目遣いで見上げた。

「頼みたいことがあるんだけど……聞いてくれる？」

「も、勿論っ！」

手を握れば秀介は内容を聞くよりも前に目を輝かせて頷く。惚れた弱味に漬け込むのは愛された本人の特権だ。

「あたし、今命を狙われてるの。それで」

「なんだと！？どのどいつだ！？俺が潰してやるっ！！！」

「そ、れ、は、あたしがやるから！貴方はとある女性を守って欲し

いの。生憎お金がないんだけど…タダでやってくれる?」
「愛の為に喜んでっ!!」

かなり簡単な奴だ。

喜んで引き受けてくれた。これで守りと攻めを同時にやらずに済む。しかもタダで、やったね。

「ありがとう、秀介。とりあえずドミィが持ってるジュエリーを取りに行つて。あたしは病院で待つてるわ」

「病院?なんで?…椿、病気!?そう言えば顔色よくねえ!」

「違うわ…病院に守つてほしい人がいるのよ。あたしは元気だから」

身体が悪いのか!?!と本気で心配するから落ち着くよう宥める。

顔色…悪いのかしら。

ちよつと気にして顔に触れてみる。

それに気づいた秀介はその手を取って微笑む。

「椿は可愛いよ、病的な今も」

久しぶりに触れる秀介の温もりが頬から伝わる。物凄く、懐かしく感じた。

長年会つてなかったみたい、何か沢山話さなきゃいけない気がする。

だけど口にしたくないと、あたしは唇を閉じた。

その唇に、秀介は迷いなく口付けをする。

これはまた懐かしい感触。

懐かし過ぎて、目を丸めてしまう。

「?、どうかした?椿」

「…いや、別に」

挨拶となったキス。

それに戸惑った反応をしたから首を傾げられる。あたしは顔を逸らして別の事を考えた。

最後に会ったときにきっぱりと断ったのに、何故またこう接するのだろうか。

何度傷付けても、変わらないのだろうか。

彼は変わらない。

いつまでも一途。

あたしには勿体ないのに。

「おー二人さん。行くなら行こうぜ」

ドミーが咳払いして急かした。

「そうだな、行くか。椿、何処の病院に行けばいいんだ？」

「フェニック病院」

「オツケー。じゃあそこで」

「あつ、秀介！篠塚さんには言わないで！」

「え？ああ、うん。わかった」

ドミーを連れて行こうとした彼を慌てて呼び止め言う。篠塚さんは白瑠さんの連絡先を知っている。連絡されては困るんだ。

それに、離れていることは知られたくない。

秀介は深く考えずに頷いてから、投げキッスをして行った。

ちよつと危険な選択をしてしまったかも。白瑠さんと繋がりがある裏現実者と関われば彼に居場所がバレかねない。

これもみんな、コクウに見付かったからだ。

あー、やんなっちゃう。

一息ついてから、カトリーナが心配だから病院に行こうとすれば、

腕を掴まれ引き留められた。
振り返れば、元凶であるコクウが。

「なによ？」

「今のなあに？」

「何が？」

「てめえ、ポセイドンとはできてねえって言ったじゃねーか」

「できてないわよ、そう言ったじゃない」

にこーと問うコクウのあとに離れた机に座ったカロライが言った。
そう言えば昨日堂々と交際否定したなあ。

「じゃあ今のあっつい抱擁とフレンチキスは何なんだ？」

手振り素振りで蠍爆弾が続けて発言。アイスピックは「お嬢さんのその脚を鷲掴みに出来るなんて羨ましい」と洩らしている。

「再会の抱擁と、挨拶のキスじゃない。妬いてんの？」

「うん」

「……………あっそ」

悪戯に言ってみたらコクウが頷いた。カロライが何か叫んでるが聞かなくてもいいだろう。

「じゃあ質問に答えたし、失礼しましたあ」

と行こうとしたが、未だにコクウの手はあたしの腕を握っている。
顔を見れば、物欲しそうな顔をしていた。
じーと黒曜石の瞳で見られる。

「なに？」

「……………」

「この件には関わらないで頂戴。邪魔しないで」

「…椿。何言ってるの？」

何も言わないのが不気味だから、断りを言えばコクウは首を傾け猫みたいに目を細めた。

「バリユーが死んだんだ。椿のせいで」

「……………」

「これは椿だけの問題じゃないよねえ？」

「……………」

あたしは睨み上げる。

邪魔する気満々なのか、コイツ。

「くひゃひゃ……………手が足りないだろ？貸してやる。黒の集団を無料で」

右腕を広げて、後ろにいる三人を指す。

これであたしが借りれば、あたしを仲間に入れる罠に入れられてしまつ。借りるかよ。

あたしはコクウの胸ぐらを掴み引き寄せた。まだ血で濡れている。

「勝手にほざけ。二回目の活動にするにはダサすぎ。仲間の敵討ちならお前らだけでやってろよ」

「！」

冷酷に睨み、吐き捨てる。

コクウは目を丸めた。

「あたしの邪魔すんなら、全力でアンタを殺してやる」

殺気を放ち、コクウから手を放して背を向ける。

「……………」

「ケツ！ポセイドンとずいぶん態度がちげーじゃねえか」

「怖い怖い、すぐくお怒りだ」

「黒、今回はやめとけ」

コクウは何も言わず、凄んでも後ろにいる二人は軽く笑う。あたしは気にせず扉を開く。

「いやあだ」

扉を閉じる前に、聴こえたのはコクウの声だった。

だだっ子みたいな口振りは誰かさんみたい。全く、腹立たしい。

どうせコクウが病院の駐車場で盗んだ車だから、あたしはフェラーリを拝借して病院に向かった。

「カトリーナは何処？」

「クククッ」

病院の独特のにおいを嗅いでうんざりしながらヴァッサーゴに問うと彼は珍しく人前に姿を現した。

あたしの隣を黒を纏った姿で歩く。コクウ達の尾行がないってことだな。

病院の大嫌いな雰囲気の中にいるのに、この笑い声は絶対にあたしを怒らせる気だ。

「あの小僧と再会してよかったなあ、椿」

ほら、きやがった。

「久しぶりの熱い抱擁に口付けの感想は？」

「……………」

「お前のだーいすきな温もりとあまーい感触。キスされてなんでお前戸惑ったと思う？もっとして欲しいって思った自分に驚いたんだろ」

ビュッ。患者とナースが通る廊下で人の眼を盗んでナイフをヴァッサーゴに振るったが避けられた。

「あの小僧と、寝ちまえよ」

「アンタ、欲求不満ならその辺のナースを誘ってこい。そしてそのナースの中に住んでろ」

「告白の返事もしてやらねーとなあ、あんな一途な野郎は椿にぴつたりだろ？尻尾が向くままにどっかほつつき歩く黒猫の尻をいつまでも追ってくる野郎じゃねえと、黒猫はたった一匹ぼっちになる。」

…まあ、歩く度にコケティッシュに振る舞っては野郎を釣るから野郎には不足しねえか」

「あ？一人言なら他所でやれよ。おら出てけっ！」

ヴァッサーゴの背中に向けて蹴りをお見舞いしようとしたが、しゃがんで避けられる。ちっ！

「愛人女はここだ」とヴァッサーゴはしゃがんだまま親指で横の病室を指差した。

それから黒い煙になって消えてなくなる。

結局出ていかねーのかよ。出てけよまじで。

「次は白野郎と再会できることを祈ってやるよ」

……次出てきたらその舌を切り落としてやる。

呆れて溜め息をつきながら、病室に入ればカトリーナがいた。

秀介が持つてくることを話して待つことにする。カトリーナがおどおどしながらこれからどうするかを問われた為、今考えている予定を答えた。

まずはドリップ側の始末。パトスの遺族がカトリーナを狙うなら殺す。

その可能性は高いだろう。パトスに殺し屋を送るのだから、あり得る。

あたしがいない時には秀介が護衛をすることも伝えた。腕は確かだから心配は無用だとも言っ。

頭蓋破壊屋には負けるが、守りの強い狩人だ。あたしも心置きなく殺しにいける。

んー。ヴァッサーゴを殺せなかった分、血が見たくなってきた。

秀介が来たら直ぐにこの前足を運んだドリップの家に行こう。

秀介、早く来てくれないかな。

「病院は嫌あい。何故かって？雰囲気嫌い、色が嫌い、においが嫌い
死のにおいがプンプンするからだろう？」

足から伸びた影が歪み、笑う悪魔の形を作り上げた。

「ここはいつ来ても死臭がする。それが嫌いなんだろう？そこにいるだけで自分が病気になったみたいで気持ちわりいんだろ」

その声はカトリーナには聴こえない。

「死が怖い。死が怖いんだろ。自分で屍の山を作るより、病院の方が死を感じて怖いんだろ。クククツ、怖がりな殺戮者だな」

ブーツから影が上り詰めてきた。

ズズツと素足に届く前に足を退けて避ける。しかしこの影は決して離れない。

あたしに住み着いた悪魔だから。

「心配するなよ、オレがいる限りお前は死とは無縁だ。クククツ！」

ザクツ！ナイフを床に突き刺したが、影は二つに裂けて消える。

お前がいる限り楽には死ねない。そうゆうことだろ。

吸血鬼と同じ。長生きできる代わりに楽には死ねない。

悪魔は死ぬことを許さない。

「許さないのはオレじゃねえだろ。どいつもこいつも……おら、来たぞ。一途な海小僧がよ」

いつまでも聴こえるヴァツサーゴの声。

丁度よく病室のドアを開けて秀介が入ってきた。

何故この病室がわかったんだろう。

そんな疑問はさておき、あたしはパイプ椅子から腰をあげて秀介に抱き付く。

「待ってた、来てくれて嬉しい」

「え……椿」

腰を上げた時は秀介に抱き付くつもりだったが、この甘えた声を出すつもりはなかった。もう恋人がやっと迎いに来てくれた時みたいなのとろとろに溶けた甘い声。

「いい例えじゃねえか」とヴァッサーゴが喉を鳴らす。ヴァッサーゴの言葉だ。ぶっ殺す。

「ジュエリーは彼女に渡して。紹介しておく、カトリーナ、ポセイドンよ。秀介、カトリーナ。彼女は任せたわ」

さらっと平然に淡々と紹介。

そしてさっさと病室を出ようとした。

「え？ 椿、一人で乗り込むつもりなの？ つかどうゆう事情？ てか、クラッチャーは？」

最後一番嫌な質問をしてきやがった秀介。

「さあ、なんて誤魔化す？」とヴァッサーゴがケラケラと笑い声を上げる。

「一人の仕事の問題だから、彼と会えないわ。今度こそ潰そうとか考えてたの？ 残念だったわね」

あたしは振り返って笑って答えた。

「椿、何かあった？」

秀介が真顔でそう訊いた。

その刹那に、心臓が停まる。

日本の病室でのことを思い出す。

嗚呼、あの時と同じだ。

さよならをすると決めて、目一杯笑ったのにそれが仇になって気付かれたあの時。

下手な笑みで、バレちゃう。

嘘を見抜かれる。作り笑いが見抜かれる。強がっていると見抜かれる。

「…疲れてるの。この件が片付いたら、食事しましょう?」

あたしは薄く笑ってから、一步踏み出して病室を出た。ゆっくり閉まるスライドドア。

お互い目を合わせていたが何も口にせず、パタンとドアは閉まった。

銀色の指輪を嵌めて、盗んだ車でドリップの元に向かう。突き進む風を受けながらにも考えないようにした。

そう、一ヶ月と三週間前からやってきたのと同じ。

そうしてドリップの屋敷に来た。

なにも考えず、仕事しに来たら

屋敷の使用人

は血塗れに飾られ、あたしを派手に出迎えた。

身体中の致命的な頸動脈は切られ、身体中の血液は廊下を濡らす。

水浸しじゃなくて血浸し。

それをぺちゃぺちゃと歩いて、ドリップの書斎に向かった。

扉を開けば、そこには殺し屋が五人。情報屋が一人。武器屋が一人。

「くひゃひゃ

遅かったね、椿」

ソファでしゃがむ殺し屋の一人、黒の殺戮者が機嫌良さそうに笑う。返り血を浴びた吸血鬼。

「ん?これは椿の邪魔なんかじゃないぜ。バリエーの復讐さ」

ドリップは書斎の机の上で、一匹の吸血鬼に血を吸われていた。黒の集団、最後の一人だろう。

少し目を移せば、レネメンが気持ち悪そうに口を押さえていた。二日酔いなんだろう。

蠍爆弾の方が酷そうだ。しゃがんで呻いている。そんな彼のアイス

ピックは背中を擦りながらあたしに手を振った。
ナヤとカロライは物色中。情報収集しているのか。
くそっ。やりやがったな。この血塗れ殺戮者。

「あたしの見せ場を潰すつもりか、てめーら
いてやるつか？」

切り裂

パグ・ナウの爪を出してカルドを握る。

あたしの手で、殺させる。

紅と黒の不機嫌

ビュツ、ガキンツ、ガタン！

カルドが銀色の光を放ち、風を切り裂く。切りたいのは、風じゃない。

パグ・ナウの三つの爪は、蠟燭立てを弾く。もう一度振ったカルドは本棚を壊すだけだ。切りたい肌は切れない。

「くひゃひゃひゃひゃひゃっ！」

黒の殺戮者の哄笑が響き渡る。

笑うほど余裕があるのも、切り裂けないのも、むかつく。ソファを引っくり返しても、食事中の吸血鬼の邪魔をしても、本棚を倒しても、止まらず殺しにかかる。

黒の集団は、止めるどころが避難した。二日酔いに青ざめていた二人も、口をあんぐりと開いて見ている。暇があるならその口を足で閉じてやりたい。

優先するのはこのしつけえ野郎を殺すこと。

ナヤとカロライは非戦闘員。壁と同化して存在を消していた。

アイスピックはなんか騒いでたからどさくさに紛れて蹴り飛ばす。

それを軸にコクウに飛んでカルドを振った。俊敏なくせにギリギリでコクウはかわす。

あたしはパーカーの下からナイフを出して、それを投げる。

コクウは目にも止まらぬ速さで避けた。

ナイフは力カカッとレネメンの頭上の壁に突き刺さる。

目にも止まらぬ速さなのは知っているさ。今この瞬間でも彼はあたくしを取り押さえることができる。

それをしないことを、絶対に後悔させてやるわ。
速いのは承知。

ここはあたしの得意フィールド。
狭ければ狭いほど、動きやすい。
障害物があればあるほど、有利だ。

ガツ、バシユツ！

爪で床に落ちる本を突き刺し、ぶん投げる。ページを裂き撒き散らす。

反対側に素早く飛び込み、こっちでも本を切り裂き撒き散らす。
刹那だけ、部屋中の空中に紙切れが舞う。

ドリップの死体の上に立つコクウはあたしの意図がわからず、きよとんと足を止めた。

そこにナイフを放つ。そこだけじゃない。コクウが向かうであろう方にも続けて放つ。

壁に貼り付いていたナヤとカロライの顔の横に突き刺さる。…当たってもあたしのせいじゃないんだから。

カサカサカサ。

予想通り、コクウはナイフを放った方に避けていった。ナイフは突き刺さらない。それも予想通り。

そして予想通りならば、今だ。

後ろに向けて、カルドを振り上げる。

ブシユツ！！！！

血濺きが上がった。血があたしの顔に飛び散る。ニヤツとあたしはざまーみろと笑みを向けた。

狙いは首だったが、まあいい。

黒の殺戮者の右手首を切り落とせた。驚いている隙に、首を。

裂こうと左手を振り上げようとしたが、その腕をがしりと掴まれた。
目を向ければ、あの吸血鬼。

「フーン、アンタが紅色の黒猫？仲間に入る予定のメス？」

冷めた眼で吸血鬼はあたしの顔を品定めするかのように視る。

「せっかくのハーレムがぶち壊しじゃない」

「……………は？」

間抜けな声を出してその吸血鬼を見た。吸血鬼はどいつも人形みたいに整ったぞつとするような美しさを持っている。彼も例外ではない。

ハーレム？ハーレムって…黒の集団のこと？あ？どうゆう意味？

「ほら、コクウ」

その吸血鬼は服を掴んであたしの肩を晒した。それだけでその意味はわかる。

コクウは当然のように顔を近付けて、牙を晒す。

怪我した吸血鬼は人間の血を飲めば、回復をするのだ。

ふ・ざ・け・ん・なっ！！

あたしはコクウの顎に下から蹴りを喰らわせてやった。見事命中。

「ざけんなっ！！次あたしを噛んだら、てめえを噛み殺してやるからなっ！！！！」

「…椿ならやりかねない」

コクウはしょげた顔をして自分の右手を拾い、殺し屋三人に目を向けた。

三人はぎよつとして青ざめる。

それから目を逸らした。

黒の殺戮者、仲間に献血を断られる。

「……やる、やるよ、ほら」

仲間に見捨てられたコクウが憐れに思い、左手を差し出す。仲間に尽くすのに報われない。…憐れすぎる。

パツとコクウは目を輝かせてあたしの左手首に噛み付いて血を飲んだ。

コロツと表情が極端に変わるのも、どうして似てるんだろうか。否、どうして同じなんだろう。

「……もういいだろっ！」

手首が完全にくっついてても血を飲み続けるコクウの頭をぶん殴り離す。止血しようとポケットを探ったがハンカチ忘れた。

「ほら、貸せ」

「ん、ありがとう。レネメン」

まあいいや、と思ったがレネメンが後ろから来てハンカチを出して手首に巻いてくれる。このハンカチはマジックに使ったやつかなあ。

「てめー黒すけ。あたしの獲物を殺して、情報が引き出せないじゃねえかよ」

「聞いてたのと感じが違う」

「今機嫌が悪いから」

「あーなるほど」

「おい、聞いてんのかコクウ」

青筋が立つ。

のほほんとコクウはもう一人の吸血鬼と話をする。殺したい。

「なんで吸血鬼にこんなにも腹が立たなくちゃいけないんだ…ラトアさんが恋しい」

「ん？ラトア？」

つつい心の声が漏れ、吸血鬼二人は反応した。

「今ラトアって言った？」

「…ええ、言ったけど」

吸血鬼は数が少ない。知らない吸血鬼はいないだろう。反応しても可笑しくはない。身内なのだから。

「懐かしい……彼、元気？」

「ん……元気だと思っ」

「ふうん…次会ったら今度こそモノにしよう」

「……………」

最後に会ったのは碟にした時。きっと元気でいるはずだろう。適当に答えたら獲物を狙う猛獣の眼がキラリと光った。

……うわ。コイツゲイだ。今確信できた。

どつりで黒の集団をハーレムと呼ぶわけだ。

思わず好奇の目を向ける。

「…なんだよ、女に興味はない」

「…いや、初めて同性愛者に会っの」

すげえー。

「黒猫黒猫っ！！」

「んだよ……」

コクウに怒ることを危うく忘れるところだった。話を戻そうとしたら、ナヤが声を上げる。かなり眼が輝かせていた。

「ポセイドンとはどんな関係!?」

「……………。なんでもねえって答えただろ」

「ポセイドンと熱い抱擁とキスをしたとの確かな筋の情報を掴んだっ！ー！隠しても無駄だぞうっ！ー！」

「目撃者の証言だろ」

ナヤが噂好きの女子高生みたいなノリになってる。

「ポセイドンのアソコはトライデントみたいなの？」

「いきなり下ネタ出すんじゃないやねえ」

吸血鬼が、名前はディフォ、があたしの肩に腕を置いて真顔で訊いた。こんな吸血鬼嫌だ。

「聞いた話では暴れん坊らしいじゃない、アレも暴れ馬なの？」

「アレの話はやめろ」

「やっぱり付き合ってた？破局？セフレ？」

「付き合ってもねえしセフレでもねえよ」

「じゃあ抱擁とキスをしたんだ？」

「挨拶だっつーの。大体あたしが何しようが関係ねえだろ、ポセイドンとの仲なんてどうでもいいだろうが。それより」

「どっつてもよくない！ー！」

ナヤとディフォはきっぱりと言いつつ切った。

「いいのかなあ、黒猫。しょーじきに答えなきゃパトスの遺産について情報を教えてやらない!」

「はあ?」

ナヤはにやりと笑って告げる。信じられないと目を細めて睨み付けた。

「そうすれば情報は同等さ」

「……どこがだ」

さっきやったあたしの本名も容易く手に入る情報だが、あたしと秀介の関係なんて価値があるとは思えない。表も裏もゴシップ大好きなのか? 低レベルだ。

「ポセイドンはトライデントなのかを教えろつ!!」

「なんでアンタにそんな情報をやらなくちゃいけねーんだ!」

「どうなの? どうなの? 恋人なのセフレなの?」

「なんでその二択なんだよ!!」

「お嬢」

「てめえら質問したら息の根を止めてやる!!!」

ナヤを挟んで吸血鬼二人が情報を引き出そうとした。吸血鬼にツッコミを入れるあたし。どうしよう、悲しい。返して、あたしの理想の吸血鬼。気品ある吸血鬼。

ラトアさんに会いたい、ハウンくんに出たい。

後ろから参加しようとアイスピックが拳手したからギロリと睨み付ける。今至極不機嫌なんだ。

くそつ、なんであたしが集団の相手しなきゃならねえんだっ! 大人数なんて卑怯だ!

「あたしとポセイドンは親友なんだっ！！親しい挨拶！これが真実よ！」

「嘘ね。男女の中に友情は存在しない」

ゲイが冷めた眼で言い切りやがった。

「なんだっ！てめえらは恋人かセフレって言わなきゃ納得しねえのかよっ！！」

「そう！！」

「っ！！ざけんなああ！！」

ぶちギレて番犬の剣と短剣を手に暴れだす。非戦闘員は即座に離れて、吸血鬼二人を主に標的にする。さつきより一層に暴れ部屋を破壊した。

机もソファもカーペットも吸血鬼の代わりに切り裂いていく。カロライは痺れを切らして止めると喚いたため、レネメン達が止めようと乗り出したがそれは蹴散らす。

蠍爆弾が接近戦であたしを止めようと隙をついて懐に入ったが、触れる前にあたしは左腕の肘を蠍爆弾の顎に喰らわせる。

次はレネメンが背後に現れた。

黒の集団に属しているだけあって連携には慣れているようだ。しかし、あたしだって大人数相手の戦いには慣れてる。

床に手をつき、後ろに向けて蹴り飛ばす。蹴りはレネメンの腹に入った。

前転して体勢を直してから、コクウに向けて剣を振り上げるが、飛んできた三つのアイスピックに邪魔される。勿論、アイスピックの仕業だ。

あたしはお返しに投擲ナイフを放つ。

もう一度、蠍爆弾が向かってきた。真っ直ぐ、丸腰で。

あたしは顔面に向けて蹴りを飛ばす。蠍爆弾は両手をクロスさせて

防ぐ。そして両手を開いた。
その手から二つの蠍の玩具が落ちる。それはチクタクと鳴っていた。
しまっ
!

ばああんっ。

蠍爆弾の十八番。爆弾だ。小さなボムと変わらない威力にあたしは
床に叩き付けられるように倒れた。

グラリと感覚が歪む。

前にも味わったこの痛み、そして感覚が、あの時の感情も呼び覚ま
す。

怒りが沸々と煮えたぎる。情報の件なんかより、殺してやりたい情
感に身体が突き動かされた。

「つてめえら!!」

「っ!!やべっ...」

止めたと油断した蠍爆弾はあたしが飛び起きて剣を突き出しても受
け身が取れなかった。

それを救ったのは、コクウ。

蠍爆弾の目頭に穴が開く前に、剣を掴んで止めた。

「落ち着いて、樁。先に始めたのは樁だぜ、なに怒ってるの?」

「ム力つくんだよ!!!」

先に始めたのはお前達だ。構うな、構うな。あたしに付きまとうな。
ム力つく。ム力つく!

あたしは怒鳴り付けて、剣を引こうとしたがコクウは放さなかった。
そして剣を取り上げる。

切り換えて短剣を振り回したが叩き落とされた。

殺す。殺す、殺してやる!!!

あたしは今所持している投擲ナイフ全てを両手に持つ。数打ちゃ当

たる。吸血鬼は殺せなくても、人間なら殺せる。ダメージも十分に与えられるだろう。

机にデIFO。その奥の隅にナヤとカロライ。レネメンは本棚があった壁。コクウは蠍爆弾と部屋の中心。アイスピックは扉の隣で投擲ナイフで礫になっている。

コクウにもデIFOにもたった一瞬でこの全てのナイフを叩き落とすのは不可能。全員を守るのだって不可能だ。

今てめえの目の前で仲間を殺してやる、黒の殺戮者！

それぞれがあたしの次の攻撃に気付き、自分の身を守ろうと動くが遅い。

あたしは今持っている限りの投擲ナイフを放つ

としようとしたが邪魔された。

スパパパッ。

あたしの身体に何かが横切る。貸すかに見えたのは先端が尖った槍のような物。殺気がなく、全く気付けなかった。

ボウガンの矢だ。

その尾に糸がついていて、あたしの腕を止めた。ボウガンだけではなく、ブーメランか何かが部屋を回りあたしに糸を巻き付けたく拘束される。

扉の方に目を向ければ、やはり火都。隣に遊太も立っていた。

「やめる、樁」

火都はそういつもの落ち着いた呑気な声を出して言う。あたしはもがいて拘束を解こうとしたが、壁に突き刺さった武器は愚か、糸さえもびくともしなかった。拘束用の糸か、くそ。畜生っ！

「樁！落ち着けて。大丈夫か？」

遊太が近付き、あたしの顔を覗く。鼻がつきそうなくらい顔を近付

けるのは兄弟共通の癖。弟とよく似た顔に顔をしかめる。

息が乱れて、心臓が肺を押し潰し潰しそうだ。胸が焼けるように痛い。苦しい。息苦しい。

「おい…椿、大丈夫かよ」とそんなあたしを遊太が心配して問う。あたしはただ睨み付けた。

「そんな怒るなって。俺やなにもしてないぜ？」

ははつと笑って遊太はあたしの頭をくしゃくしゃと撫でた。余計に苦しくなる。気管に何か詰まったみたいに息が出来なくなった。胸が痛い。……痛い。

「椿…？ほらほら、深呼吸！吸って、吐いて！火都、お前締め付け過ぎじゃね？」

「……ごめん、椿。平気？」

「外してやれよ」

「それはだめ。…椿が暴れないって約束するなら」

俯くあたしの頬を両手で持って遊太が慌てる。それにつられて近寄った火都が心配そうにあたしの顔を覗く。

ちゃんと息をしようと深呼吸。

段々落ち着いてきた。

あたしは深く息を吐いてから、火都に約束をする。暴れないって。

火都は直ぐに取り出したナイフで糸を取った。

解放されたあたしは足元に転がる投擲ナイフと番犬の剣に、短剣を拾う。

それからフラフラと出口に歩む。

「椿……？」

「ナヤ。パトスの遺族の全員の居場所を次会った時に教える。ふざ

けたら殺す」

あたしは振り返らずにナヤに伝える。それからもう一つ。

「黒の殺戮者、あたしの獲物に次手えだしたら
仲間、一人残らず殺してやる」
貴様の

あの時の殺意と似たものをコクウを睨み付けるとともに向けて言い放つ。

あたしの本気も殺意も伝わったはずだ。

その場をあとにして車を飛ばして、やっと見つけた公衆電話の近くで車を捨てて公衆電話に硬貨を入れて記憶に残る秀介の電話にかけた。

病院で電源を切っているのか、出ない。
だから留守電を入れておく。

「秀介、あたし。疲れたからあたしは帰る。ごめん、カトリーナについててくれない？明日行くから。まだこの件、片付いてないの。お願い」

疲れた溜め息とともにメッセージを入れて、受話器を置く。

本当に疲れて、その場にしゃがんで一息ついた。
あれ。これも前に味わったことがある。

なんだっけ。嗚呼、やっぱり思い出さなくていい。思い出したくない。

この付近にいる人間を殺戮したくなる。

「……………ふふ……………」

笑いを溢す。

ここであの人が来ないかな。

そんなことを思ってしまった。

あの時は、間に合わなかったから。

電話したら飛んでくるかな。

でも会ったら会ったでめんどくさい問題が怒るからごめんだ。現れないでくれ。再会ラッシュかよ。

「つうばあき」

代わりのように、公衆ボックスの前にはコクウがしゃがんで現れた。

手を伸ばして指先であたしの頬を撫でる。

「う……………」

「椿？」

「うえっ…！」

耐えきれず、嘔吐。酷い気分だ。ゲホゲホと朝食べた物を吐き出す。

「椿、大丈夫？あちゃー無理矢理胃に入れたんだ。それともストレス？ごめんごめん、俺のせいだね。ほら、吐けるだけ吐いちゃいな」

コクウは眼を丸めたが、直ぐに背中を擦って言う。

「それともレネメンのカシスカクテルかなあ」とのんびりとした口調で漏らす。

あたしはただひたすら吐いて気持ち悪いものに堪える。

「椿、落ち着いてきた？もう吐くものない？」

「うっ……………うっ……………」

「ほら、背中」

あたしの顔を伺ってからコクウは背中を差し出す。散々殺しに飛び掛かったというのに、無防備な背中を晒すとは。知らない振りをしてそっぽを向く。というか動けない。

そうしたら、コクウが手を伸ばしてあたしを背負った。

そして背負ったまま、歩き出す。

気のせいか、あまり震動を与えないようにゆっくりと歩いている。

…全く。

暫くコクウは黙ったままあたしを運んだ。

彼がただ無駄に黙っているはずはない。きっとまた勧誘やら脅迫やらの策略を練ってるに違いない。

そう気持ち悪さを紛らわそうと考える。

「ねえ、椿」

するとコクウが口を開いた。

「足、治ったんだね」

……………。

昨日治った。そんな軽口を叩けないほど、喋れない状態だ。

「噂以上にいい動きだ。絶対に仲間になっほしいなあ、ふふふ」

ますます仲間に欲しがられた。

仲間の命を奪おうとしたと言っのに。

「ねえ、椿。あの脅し文句はなあに？」

黒の殺戮者、あたしの獲物に次手えだしたら

貴様

の仲間、一人残らず殺してやる。

最後に吐き捨てた脅し文句。

脅しなんて、黒の殺戮者には通じないと思う。

何もかも笑ってしまう、黒も白も。

何にも動じない。

そう思うのは、あたしだけじゃない。

裏現実の常識。

でも、それは弱味がないと思っただけであって、脅す程に向き合える人間がいないだけである。

コクウの弱味は、“仲間の為ならなんでもする”ことだ。

人間でそれを知るのは、多分あたしだけだから。

「そりゃあ火都が止めなきゃ誰かしら死んじゃってたけど、君に全員を殺せるのかな？」

そっちかよ。

「仲間に入れる君を殺す気はなかったから蠍爆弾もレネメンも本気を出さなかったって知らない？くひゃひゃ、有言実行は難しいぜ」

有言実行していいのかよ。

つか、邪魔する気満々か。てめ。

「まるで俺が仲間を殺されるのが嫌みたいじゃん。そう思ってるの？椿」

そう思っている。

でも、答えてやらない。

「それとも、椿。

君が仲間を失う気分を一番嫌だと思

「つているとか？」

「……」

「答えて、やらない。」

コクウはそれ以上何も言わなかった。

頬を添えた背中では笑う素振りを感じさせない。笑ってはいないのか。仲間を失う気分、か。仲間。失う。

「ねえ、椿。あの黒猫の名前、何にしようか？」

返事が出来ないというのに、コクウがそんな話題をふった。知るか。つか飼う気満々かよ。

一方的な会話はずっと続いた。あたしの部屋についても微笑を絶やさずコクウは話をする。

「ねえ、椿。君は吸血鬼になりたいって言ったね。もしも君が吸血鬼になってたら、どうだったと思う？幸せだったかな？笑ってられたかな？もつと違う人格だったかな？想像したことくらいあるだろう？吸血鬼になった俺の予想だと、それはないと思う。きっと人間じゃなく吸血鬼という生き物になって血を啜るようになっただけの、そのまま紅色の黒猫になったはずだ。似たような経験をし、人格も今のままで。変わらなかつたはずだよ」

「そんなわけない。」

吸血鬼になれたなら違う人生だったはずだ。

あたしの人格？それをお前は知っているのか？

「言おうとして口を閉じた。喋りたくは、なかつたんだ。」

「でも君が吸血鬼になってたら、さぞかし今より美しかっただろうね。絶世の美女と言っても過言じゃないはずだ。悪魔だって君を殺

すのは躊躇するだろう。あー見てみたい、噛むだけで君を吸血鬼に出来たらどんなによかったか」

シャワーを浴びて出てきても、コクウはあたしの部屋にいた。ちゃっかりお粥を作って待っていたのだ。

「あつ、今の君に不満があるわけじゃないぜ。君は十分魅力的で美しい。魅惑的なその睫毛の下のルビーに光る瞳も、煌めく黒髪も、噛みたくなる肌も、キスしたくなる唇も、美しいよ。病的な一面は可愛らしいのに、セクシーでクール。どんな女性も君には敵わないさ。嗚呼、なんて君は素敵なんだろう。美しいと言葉だけじゃ物足りない、もつと椿の魅力的について褒め称えたい。まるで猫みたいに色っぽく気まぐれな君には目が離せなく」

「……………貴方、あたしが口を開くまで喋り続けるつもりなの…?」

「追い出さないから話を聞いてくれるんじゃないの?」

「ごめん、忘れてた。出てけ」

「ほら椿、あーんしてえ」

帰れと言っても居座る黒の殺戮者。

スプーンを差し出されたがあたしは体力の限界でベッドに横たわる。そうすればコクウがお粥を持って目の前に来てまたスプーンを差し出された。

白瑠さんにも、こうされたっけ。

そんなことを思い出したら、余計に気持ち悪くなって顔を逸らす。

「椿って本当に可愛いね。この世には椿に敵う可愛さなんてないと断言できる。君の可愛さにメロメロにならない男はいない、否、女性さえもメロメロにしちゃうだろう。君を目にしただけで気にして、一言話すだけでも惹かれて、一緒の時間を過ごす度に愛が膨れ上がる」

.....。
なんだ。誉め殺し作戦なのか？ひねくれた策略家ともあろう方が、そんな幼稚な策で攻めてきたのか？

とりあえずうざかったので、起き上がって口を開ける。そうすればコクウはニコツと笑ってあたしの口にスプーンを運んだ。

口の中で味を確認するとまた吐きそうだった為、すぐに飲み込む。あーさすがに酷い生活習慣で身体にガタが出たのだろうか。ヴァツサーゴがいるなら大丈夫とばかり思ってしまったのがいけなかった。臆病悪魔はちつとも使えないんだ。

「...あたしと貴方...似てると思う？」

こうやって看病されて、白瑠さんを思い出して、あたしはコクウにそう訊いた。

白瑠さんに、訊いたことがある質問。

あたしのことを、自分のようにわかっていたあの人。

あの人と同類であるコクウは、なんて答えるのか。好奇心が湧いた。

「思わないよ。共通点なんて、ないじゃないかい？外見だつて似てないし、人格だつて似てない。どうして？」

「...別に」

コクウはきつぱりと微笑んで答えた。また差し出されたお粥を、一口飲み込む。

あたしも。そう思う。

白瑠さんとは似てると思うのに、どうしてだか。コクウとは似ていると思つたことはなかった。

白瑠さんを見ると自分に似ていると思うのに。

コクウを見ると白瑠さんに似ていると思うのに。

コクウはあたしに似ているとは思えなかった。

「じゃああたしと白瑠さんは？似てると思っつ？」

その問いには、コクウは眼を丸めてきよとんとあたしを見上げる。

「…んー……そうだなあ」

少し悩んだ末に白瑠さんのそっくりさんが出した答えは。

「似てないよ」

…そう、とあたしは眼を閉じる。

お粥はもう要らないと布団に潜り込んだ。

湿った髪も気にせず眼を閉じる。

気持ち悪さは渦を巻いて消えてはくれない。

きつと一眠りすれば、忘却できる。

そう思い、眠りに落ちるのを待った。

朝日で目を覚ました翌朝。コクウはそこにはいなかった。

代わりにテーブルの上にはチーズバーガーが一つ。

あたしはそれを手にして、一口食べた。

「……似てるのは、何処だっけ……？」

自分に問うが、答えはわからない。

答えは思い出せなかった。

紅いコートを着て、あたしはカトリーナのいる病院に向かう。

秀介はちゃんとそこにいた。

「椿！おはよっ！」

「…おはよ、秀介」

パツと向けられた笑顔に、あたしは微笑みを返す。

「遅かったな、手こずったのか？」

「…留守電にいれたはずだけど」

「え！？まじで！？永久保存しなきゃ！」

「……………」

どうやら本当に気付かなかっただらしい。携帯電話を開いて直ぐ様彼は保存しようとしている。

先ずは伝言を聞けよ。

あたしはパイプ椅子を出してそこに腰を降ろした。

「具合はどう？カトリーナ」

「ええ、大丈夫」

カトリーナに問えば彼女は微笑んで答える。

なんだか昨日より表情が柔らかい。

「昨日はドリップを始末した。でもまだ安心はできない、パトスの身内が貴女を狙っているかどうかを調べているところ」

「は、はあ……」

「あれ、まだ終わってなかったんだ？てっきりまとめて片付けに行つたのかと……」

「……………邪魔がいてね」

意外だと眼を丸めた秀介に肩を竦めて答える。
邪魔者のせいで体調崩してぶっ倒れたんだけど。それをクライアン
トの前では話せない。

「！」

気付いたら秀介が携帯電話を耳に当てている。何しているか直ぐに
わかって慌て手を伸ばしたが遅かった。

「なにこれ……超元気ねえー声」

伸ばした手は宙を切る。

秀介が立ち上がって怪訝そうにあたしを視た。

相手の出方を待つて黙っていれば、宙に留まったあたしの手を秀介
が掴んだ。

「椿、ちょっと食いにいこうぜ」

「え？」

「じゃあカトリーナ、少し開けるな」

「はい、いつてらっしゃい」

「は？ちよつと、なに言ってるの？」

「大丈夫、留守の間はコイツがいるから」

あたしの手を引いて病室を出ようとする秀介。

カトリーナとかなり仲良くなったようだ。

病室には長身のネックウオーマをつけた男が立っていて、秀介が「
少しの間頼む」と一言を告げただけですれ違つ。

男は「へい」とだけ返事して病室に入った。

「誰……？」

「狩人。大丈夫、夜も殺し屋一匹も来てねーんだしすぐに済ませばいいって」

「…あたし、もう食べたんだけど」

手を引かれたままぐだぐだと秀介の後ろを歩きながら、そう言う。寧ろ食べたらまた吐いてしまう気がする。

「椿。なんかあつたる」

振り向かないまま秀介はあたしに訊いた。

「椿のその顔に、その声は

頭蓋破壊屋が原因だろ」

見透かした、声音。

静まっている廊下を、歩いていく。あたしの手を握る力が、強まった。

「あのイカれ野郎、次は椿に何しやがったんだ？」

「また無神経なこと言いやがったのか？今度は椿を殺すとか？ハッ！ぜってえ潰す！…何があつたんだよ、椿。他殺志願の話をしてた時以上に…椿、危うい感じだぜ」

カタンコトン。

思い出す、あの電車の中。いつもの真っ赤な電車じゃない。

ゆったり走る電車。ドアに寄り掛かって、目の前に蓮真君がいて、後ろには秀介がいたんだ。

あの時はなんだっけ？

嗚呼、そうだ。

この鼓動。

俺。

止めるつもりなんて、
ない。

……って言われたからだった。

本当に、あそこは。

あたしの最後の居場所じゃなかった。

「う」

「……？」

秀介が微かに聞こえたあたしの声に足を止めて振り返る。

「……違う」

あたしは呟く。

「何もされてない」

もう一度、呟く。

「何もされてないんだ」

何も、されてない。

それが、それがそもそも……。

視線の先にある廊下を視ていて、ふと気付く。

静かすぎではないか？

いくら朝でも、患者も医者も廊下を通らないなんて。

そして感じ取った。

異常な空気に。

秀介も廊下の先を睨み付けた。

殺し屋だ。

どこにいる？

いつでも武器がとれるように手を構えて、敵の居所を探す。身も気配も隠している。

一步、秀介が下がった。

眼をあわせる。

病室に戻るぞ、と秀介が目で云った。

病院であろうがお構いなしに廊下を二人で走り出す。

その途端に殺し屋が姿を表して追い掛けてきた。病室に隠れていたよう。

確認するやいなやあたしと秀介は受けて立つと武器を構える。

あたしは剣、秀介はトライデント。

殺し屋の男が二つの剣を振り上げて向かってきた。

トライデントがその二つを防いでがら空きの腹に剣を振り上げる。

ガキン！とブーツの底から出てきたナイフで防がれた。その衝撃で男は回転してあたし達を飛び越えて背後に降り立つ。

あたしと秀介は攻撃される前に彼に蹴りを入れた。食らっても男は踏みとどまり、剣を構えて剣を振るう。

それを避けて、秀介がトライデントで叩き潰した。

男は倒れる。

秀介は留めの一発を喰らわせて男を捕らえた。

「へっ！ポセイドンと紅色の黒猫のコンビは最強だぜ！」

えへん！と胸を張る秀介。

そう言えば以前も共同線をやったこともあったっけ。今回のように仲良くではなかったが。

不意に秀介があたしを振り返った。

「……………」

「…なに？」

「…いや……前みたい……殺さないのかなあと」

「……ああ、殺したら雇い主がわからないじゃない」

「あ、そっか。冷静なんだ」

以前は飛び掛かった人間は容赦なく殺してたっけ。殺す元気がないとは言わないが、正直そんな気分ではない。ここは病院だし。雇い主を吐いてもらわなくては。

武器をしまつて彼の隠れた病室に運んで尋問。

ガツと胸に足を置いて壁に押し付けて問いただす。安易に答えを聞けた。

雇い主はパトスの妻。ジーナだ。

これは本格的にカトリーナが危ないみたい。

「おい、どうする？大人しく引き下がるなら逃がしてやる。もう一度来たから殺すぞ」

秀介がそう言えば殺し屋は頷いた。自分の命を張る殺し屋はそうはいない。

「あつ、ごめん…椿、勝手に逃がして」

「いいよ、約束は守るべきだわ」

「なんだ、毎日殺すつてわけじゃねえのか」

「毎日つてわけじゃないわ……これから殺しに行くけど」

「あーそっか。今日も殺しに行くんだ？」

……。

昨日は一人も殺せていないが。

病室から出たが、秀介はまだ病室に立ち尽くしている。

「椿、他のやつに頼めば？」

「…何故？」

そんなことを言われてあたしは首を傾げた。

「椿、具合悪そうだし」

「…秀介、さっきの動きじゃあ仕事が出来ないと思うの？」

「……んーまー、平気そうだな」

少し具合が悪い気もするが、それはこの一ヶ月と同じだ。先程のようにはちゃんと動ける。

「でも精神的に」

「それも…」

この一ヶ月と、同じだ。

「仕事に支障はない」と告げてからカトリーナの病室に戻ろうとしたら、秀介に腕を掴まれて引き留められた。

「何があつたんだ？クラッチャーと。なに言われたんだ？」

「…何もされてないってば」

「何かなきゃ椿がんな暗い顔をするわけないだろ」

険しい顔で彼はあたしを鋭く射抜く。

あたしはただ見つめ返す。

じつと秀介は動かない。

あたしは溜め息をついて視線を落とす。

それから一步、踏み出して彼の肩に顔を埋めた。

「由亜さんが死んだの」

静かにあたしは答える。

「あたしのせいで」

顔を見なくとも秀介が驚いた反応をしたのがわかった。

「まいちゃって」

あたしは囁く。

「今、彼らと距離を置いてるの」

懐かしい名前。

感じるのは空虚。

悲しくはない。

彼女が死んだことは、一つの原因だ。

彼女の死にずっと悲しんでいたわけではない。

ただ。

そう。

ヴァッサーゴの言う通り。

「……椿」

そっと秀介の腕があたしを抱き締めた。

「なんで早く言わなかったんだよ……俺のここに来ればよかったのに。俺を頼れよ、いつだって受け止めるから」

ギュッとときつく抱き締める。

あの時は秀介に頼るなんて選択肢は浮かばなかった。
愛しているという彼を、利用する余裕なんてなかったんだ。

「……ねえ、まだ…あたしを……」

「愛してる」

「……」

まだ愛しているのか。

「愛している、椿」

「…うん」

「ずっと、愛している」

「……うん」

わかってる。何度も聞いた。
何度も云ってくれたでしょ。

あたしはいい加減、秀介から離れる。

そしたら、秀介があたしに顔を近付けて唇を重ねてきた。

「……」

「…？昨日も…椿、変な反応したよな。どうかした？」

「…いや、別に」

「…うさ…ちゅ…ほら、戸惑った反応」

またもやキスされてあたしは後退りをする。追い詰められて壁と挟まれた。

それほどあたしの反応が気に入らないのか、あたしの顔を怪訝に見る秀介。

それが数秒続いたかと思えば、にんまりと楽しげな笑みを浮かべた。

「つばきちゃん。今日も明日もカトリーナの護衛をするから、お礼のキスして」

「お礼はねだるものじゃないでしょ」

「じゃあ報酬頂戴」

「…別のにして」

「なんで？キスが駄目な理由でもあるの？」

「付き合ってもいない人としたくないのよ」

「え…椿、恋人が!？」

「いないわよ、いないけど」

「隙あり!」

キスが駄目なんて常識でわかるだろう。壁に挟まれたまま説教しようとしたら、秀介があたしの頭を両手で固定して口付けをした。

さっきのフレンチキスではなく強引に吸い付くキス。深く深い口付け。

押し退けようとしたが、出来ない。男女不平等。

「んっ、んん!」

秀介は身体を密着させてあたしの耳を撫でてキスしながら笑う。あたしの反応に気を良くしているようだ。こんにゃろ。

「美味しかったあ」

にっとはにかんで秀介は言う。あたしはムカツとして睨み付ける。何をにやにやしているんだ。

「椿、愛してる」

「…離れなきやその口引き裂くわよ。それとも屋上行ってロープなしパンジーやる?」

「それただの飛び込み！」

やっと解放されてあたしは肩を竦める。秀介だけは至極機嫌が良かったみたいだ。

ふと、あたしは廊下の向こうに眼をやった。遅れて秀介も眼を向ける。

「…殺し屋？」

「いや…視線を感じたけど…気のせいみたい」

「殺気もないし、気のせいだろ」

患者が行き交う廊下。多分患者が見てただけだろう。

「これから行く？この件片付いたら椿が今住んでるところに転がっていい？」

なんでそうなるんだ。

「この件が終わったら食事に行こう、なっ？」

「…うん」

それなら、いい。

軽く挨拶を交わしてからあたしは病院を出た。

殺そう。

あたしはストレッチしてからお預けにされていた殺しをする。

パトスの妻であるジーナを始末しておいた。

何故カトリーナを狙ったのかを問い詰めれば、やはり遺産はカトリーナのものになると書かれていたようだ。それが動機。ならば他の遺族も狙うだろう。

それだけわかれば十分だ。

アパートに戻って見ればテーブルの上には、更に盛られた料理が置いてあった。

「……………」

料理から部屋に目を向けたが、荒らされた形跡はない。荒らされた形跡があるならば料理が置いてあるわけないだろう。

そっと触れてみれば、冷めていた。

掴まんで口に入れてみる。

何も起こらない。毒はないようだ。

椅子に腰を降ろして、置かれたフォークで食べる。

料理、出来るんだ。

なんて思いながらゆっくり食べる。

あたし以外にここを出入りするのはコクウだけ。恐らくコクウが作って置いていったものだ。

本当に悪いと思ってくれたのだろうか。それともまた畏か？

どうでもいいか。

明日にでもナヤに会いに行つてパトスの遺族全員を教えてもらつて姿を眩まそう。

コンコンコン。

もう眠ろうとベッドに入ろうとしたら、ドアがノックされた。

またコクウだろう。どうせ黙って入るならノックをするな、めんどくさいな。

あたしはめんどくさがりながらもドアを開けに向かう。しかし。

ドアの前に居たのは、コクウではなかった。

「つ」

そこにいたのは、一ヶ月ぶりのあの人。

「椿お嬢っ！！！！」

藍色のラフな格好で黒縁眼鏡をかけた男

穀田藍乃介が、

目を見開いてそこに立っていた。回転の速い頭があたしだと理解した途端、飛び付くように抱き着く。

危うくあたしは倒れそうになったが踏みとどまる。

痛いほどの抱擁。

ドクドクと心臓が張り裂けそうなほど高鳴る。

「お嬢！？お嬢！？本物だよね！？椿お嬢おお！会いたかったっ！！」

「……藍……さん」

「嗚呼！すごくその声聴きたかった！！もつと聴かせて！お嬢！」

「……何故、ここが……わかつたんです？」

目に涙を浮かべてあたしの肩を掴んで放さない藍さんにあたしは問う。

「すっごく捜したんだ……！音信不通だし、追えば逃げるし！僕の部下がこの住所を突き止めたんだ！」

バリユーの野郎。

死ぬ間際にも連絡したのか。だからあんな妙な死にかただったのか。

くそっ……。

藍さんに知られたなら……。

「白くん達は捜すのやめちゃったし、確信があったわけじゃないから、二人には言わずに来たんだよ」

「椿お嬢、帰ろう。二人とも、怒ってないからさ。皆、君の帰りを待ってるんだよ。僕達の家に戻るっ！」

ばっ！

と、藍さんの手を振り払った。

「…お、嬢？」

「…ないっ、帰らない！」

「えっ？」

「帰らない！あそこはっ…もうあたしの帰る場所なんかじゃない！」

「な、なにいつ…違っ！帰る場所なんだ！」

「あの家には、戻らない！！！」

藍さんを睨み付けて、あたしは吐き捨てる。

気圧されて藍さんは固まった。

次第に苦しそうに顔が歪む。

「な…なんで…そんなことを言うんだよっ！！な、なにが、嫌なんだ！？指鼠はいないし！由亜はお嬢のせいじゃないし！ラトアも怒ってないしっ…それにっ…白瑠の言葉だっって本気じゃなくって…僕だっって怒ってないからっ！！！」

藍さんは声をあげて言った。

彼がこんな風に言葉を詰まらせて声を上げるのは、多分初めて見る言葉を探しながら藍さんは、何かを堪えようと自分の前髪を握った。

「…違いますよ、藍さん。怒られるから戻らないわけじゃない。由亜さんが殺されたことに後ろめたさがないとは言えませんが、それも理由でもないんです」

「……じゃあ……なんで……？」

「さよなら」

「え……」

「さよならと、言ったはずです」

あたしは静かに告げる。

倒れそうだったから、壁に手をつけて伝えた。

「もう、終わりです。もう終わりなんですよ。家族ごっこは終わり。あたしは駄目なんですよ、戻ったとこでまた壊す。もう、構わないでください、忘れてください。もう、嫌なんです。さよなら、なんですよ」

帰らないから、終わり。

戻らないから、終わりなんだ。

もう、嫌なんだ。

温かい場所から突き落とされるのは。もう、御免なんだ。

「……なに……いつて……るんだ……おじよ……」

蒼白な顔の藍さん。

「終わりって……」

「……関係」

「……家族ごっこって……」

「……もう、うんざりなんです」

「……どうして……？」

足元に視線を落とした僅かな時間で、藍さんは涙を流していた。

「…どうして、そんなことを……言っただっ…！」

辛そうに、弱々しく、紡ぐ声。

それがまた胸を、きつく締め付ける。

堪える。

奥歯を噛み締める。込み上げたものを飲み込んだ。

「どうしてっ…さよならなんて……酷いことを言っただっ…！ず
っと…ずっと…！探してきたの… ……帰ってきてほしいの…
…！…！」

ポロポロと落ちていく藍さんの涙は、あたしをズタズタに引き裂く。
お互い様か。あたしもまた。さっきの言葉で藍さんを切りつけた。
藍さんの両手があたしの肩を掴む。

「…帰ってきて……帰ってきて、お嬢っ…！」

苦しくもがくようなすがる声は、あたしの胸を引き裂いていく。
血が流れても可笑しくないのに、流血はない。血も涙もない。

トンッ。

軽く押しただけなのに、藍さんは簡単に後ろによろめいた。部屋の
外。

「もう来ないでください」

冷めた声で言う。

前に言った時は、藍さんを抱き締めたっけ。そんなことを思い出し
て、もう一度告げる。

「さよなら」

ボタン。ドアを乱暴に閉めた。

最後に見えた藍さんの表情が脳裏に焼き付く。

悲しみと苦しさと 絶望に満ちた表情。

ドアの向こう側に、暫く藍さんの気配を感じた。

でもやがて気配は消えてなくなる。

あたしの顔が歪む。

目に涙が浮かんだが真上を向いて堪えた。

フラ、フラ、と歩き回っても込み上げた情感が収まらなくてバスルームに駆け込む。

自分の吐いた言葉が何度も頭の中で回る。藍さんの戸惑った罵声。

泣き顔。落ちる涙。あんな風に泣ける人だったんだ。ふざけた曲者の、一面。それでも冷酷にさよならを告げたあたし。最後の藍さんの表情。

声にならない叫びを上げる。

鏡に映るのは、自分の顔を押しさえて、紅い目を涙目にしてる少女。

込み上げるのは、ナニ？

悲しい？苦しい？怒り？

パリンッ！！

鏡に拳をぶつけて叩き割った。洗面所にはらまく鏡の破片。

それでも情感が収まらない。

胸が苦しくて息も出来ない。

苦しくて、苦しくて、苦しくてしょうがない。

白くん達は捜すのやめちゃったし。

その言葉を聞いて、痛かった。

それでいいんだと思う反面悲しくてしょうがない。

何もされてない。

何もされていないからこそ。

きっかけはなんだっけ？

由亜さんの復讐。殺戮者のあたしが復讐という矛盾。無感情に殺戮

する血も涙もない殺し屋。

欠けた鏡で右手を切り裂く。血は。血は出る。紅い紅い紅い、血だ。でもすぐに傷口は塞がる。悪魔の力によってだ。ぐちゅ。とまた切り裂く。

帰って来てほしいのにつ…。

ぐさり。と掌に突き刺す。

「っ…!!」

駄目なんだ。もう、嫌なんだ。御免なんだ。こんな思いはもう嫌なんだ。

失くした痛みなんて味わいたくない。

もう少しで忘れるから。もう少しで空虚に変わるから。

「……違う……」

そんなの。無理だ。

忘れるなんて、不可能。

生きている限り。あの半年はあまりにもあたしの人生の中で大きすぎた。

生きてる、限り。

イキテル、カギリ。

嗚呼、どうしてこんな簡単なことを忘れてたんだろう。

死ねばいいんだ。

もう嫌だから。死ねばいい。

手を見た。切りつけた傷痕しかない。

嗚呼、この悪魔が邪魔だった。

自殺は効果ない。他殺だ、他殺しかない。

一番に思い浮かべたのは、白瑠さんだった。

今ならあの方は、あたしを殺してくれるだろうか。でも今近くには

いない。

その辺の殺し屋。弾丸が頭にきても跳ね返るなら並の殺し屋なんかじゃだめだ。

「……コクウ」

口にする名前の主ならば。

悪魔の天敵、吸血鬼ならば悪魔ごと殺せる。

ヴァッサーゴが存在を明かさぬよう黙るくらいだ。吸血鬼は悪魔を殺せる。

殺してもらおう。

簡単だ。

自分の中に悪魔がいる、そう言えば殺してもらえる。

吸血鬼に殺される。

なんていい最期なんだろう。

バスルームから出て、部屋を出る。階段を降りずに上がり、屋根からコクウの家である黒のオフィスに向かう。これなら藍さんの尾行なんてないはずだ。

「あれ、椿じゃん」

そこにいたのは、遊太一人だけだった。

「一緒に飲もうぜ」

そうやってあたしに缶ビールを投げ渡す。反射で受け止めてしまったあたしは沈黙して手の中の缶ビールを見る。

「あ、そーいやあ、禁酒中だったか？悪い悪い。そうだ、蓮真とは連絡とってるか？」

窓枠にどっさり座った遊太は弟の話題を出した。黙って前から姿を消したあの子。心配、してるのかな。

してるだろうな、あの子は優しい子だもの。

「ケータイ、日本に置いてきちゃったから」

「ふうん、じゃあ今どーしてるかはわからないんかあ。帰国したら一緒に遊ぼうぜ」

缶ビールを開けてグビツと一口飲む遊太。

帰国したら。

蓮真君を思い浮かべて、そっと目を閉じる。

まずは死ぬことを諦める。

鼻がついてしまうほど顔を近付けて言ったあの時を思い出す。

嗚呼そうだった。白瑠さんも秀介も篠塚さんもそれから蓮真君も、死ぬことを許さなかったんだっけ。

今さっき死にに来たというのに、思わず吹き出して笑ってしまった。

「なんだよ？急に笑って」

遊太は首を傾げながらも笑って問う。

「いえ…ちよつと思ひ出して、笑っちゃっただけ。蓮真君は面白いこと言うんだもの」

「ははっ、どんなこと？」

「秘密」

「ずりー」

先程の高ぶる感情は落ち着いてあたしは声を洩らして笑う。

そうだったな。

もう振り返してはいけない。

殺してもらうことは、諦めよう。死ぬことを、諦めよう。
もうちよつとだけ。

生きてみよう。

秀介も、篠塚さんも、蓮真君も、あたしが死んだときに怒ってほしくない。

「なーなー、帰国したらよ、三人で強盗しね？」

「強盗？怪盗の美学と反するんじゃないか？」

「うん、まあ、でも二人は素人だから銀行強盗がいいっしょ。猫仮

面強盗団！」

「なにそれ」

「歴史に残す強盗団になろうぜ」

「かつこよくないよ」

机に腰掛けて飲みながら指を立てて格好つける遊太と笑って話す。

「蓮真君が銀行強盗なんてやると思う？」

「えー、椿の話じゃ誘えば何でもやってくれそうだけど」

「そうね…好奇心をくすぐってやれば喜んで参加すると思うわ。彼

が強盗に興味を惹かれるとは思えないけど」

「椿がセクシー衣装でやるって言ったら？」

「彼はそんなんじゃないわよ、女の子嫌いだって知らないの？」

「女の子嫌いだって？オレの弟はゲイだったのか……！」

「そうじゃないわ、古い人なのよ。逆ナン嫌い」

「ええーもつたいねー！ナンパでも出逢いは出逢いなんだからデー

トの一つや二つしてやりゃいいのに」

「貴方って………本当に那拓家の人間？」

首を傾げてあたしは問う。

那拓家の人間である蓮真君ならあのお堅い考えに納得いくが、遊太はチャライ。格好から言動まで。

自由奔放な彼が、交際にも厳しい那拓家で本当に育ったのかは疑わしい。

「…あー、でも神奈かんだいも女癖悪かったつけ」

「あれ、神奈に会ったんだ？」

「ええ、弟の恋人にまで手を出そうとしてた」

「うえー、相変わらずだなあ。小学生の高学年からああなんだぜ」

六人兄弟である那拓家。

女癖の悪い神奈。彼の影響かと思えば遊太は嫌そうに顔を歪めた。嫌っているのか。無理もないか、あんな兄貴。

そんな遊太は爽乃そつだいに嫌われていたりする。

遊太は別に女癖が悪いわけじゃない。どちらかと言えば基準。

「なに？貴方もお兄ちゃんに寝盗られたの？」

「まさかつ！ぜってえ彼女（恋人）は隠し通したし！……あれ、ももって…なんそれ」

「ん、ああ、別に。あたしもアイツが兄だったら家出するなあと思
うわ」

「椿が妹だったら性奴隷にしてるぜ、あの変態」

うわ、それ超嫌だ。

…兄か。兄。脳裏に浮かぶのは白瑠さんに幸樹さんに泣き顔の藍さん。

そこにはいないのに、つい、後ろを振り返った。

「そーいやあ、椿。今日は誰に用？」

それを黒の集団の誰かを待っている素振りにとつた遊太が訊く。

「ああ、コクウよ。…コクウに用があつてきたの」

「黒っちなら上だぜ」

コクウに殺してもらいに來た。なんて言ったら遊太はどんな反応を示すのだろうか。

すぐに遊太はコクウの居場所を教えてくれた。

真上。コクウの部屋だ。

なんだ、いるのか。てつきり出掛けているとばかり思った。

夜だから起きてるはずだし、吸血鬼ならばあたしの訪問に気づいてるはず。

「でも今日はやめておいた方がいいぜ」と遊太は窓枠から降りてこちらに歩み寄る。

「何故？」

「たまあに不機嫌な時があんだよ、黒っちはさ。その時は部屋から出てこないし、話だつてしてくれないぜ」

コクウが、不機嫌。

想像できなくて眉毛を片方上げて首を傾げる。

「昼間に帰ってから部屋に閉じ籠つてる、挨拶無視されちつたよ。

不機嫌っーか、なんて言えばいいのか…何か考えてトリップして
る感じ。そんなときはマジ無理、デイフォでさえ無反応なんだ。試し
にストリップを送ったらさ、二秒で追い出したんだぜ。なんか話
があるなら明日にした方がいい。喧嘩は相手してくれねーと思う」

「ストリップを送るって、誰が思い付いた案？」

「蠍爆弾」

「下品ね」

「オレって言ったらなんて言った？」

「ハーレムにしたら効いたんじゃないかしら」

「送ったのは五人」

… おやおや、殺戮者はあまり興味ないのか。

確か白瑠さんも大して女に関心を持たなかったっけ。多分白瑠さんにも効かないはずだ。機嫌が悪ければ、ハーレムは真っ赤な残骸になって部屋に散らばるだろう。

「……………ふうん」

不機嫌な黒の殺戮者。

とても、とっても、興味がある。

あたしは机から降りて上に繋がるドアに歩み寄った。

「人の話を聞けって。今日はやめとけよ」

「あら…彼が不機嫌だから不味いことがあるの？」

「何があるかわかんねーぜ、勧誘してるから甘いけど…あれでもかの有名な黒の殺戮者だ」

「大丈夫よ、あたしは不機嫌な人の相手は慣れてる」

遊太が引き留めるが気にせずドアを開く。

「特にかの有名な殺戮者と謳われる人の、ね」と悪戯に笑いかけながら付け加えて閉じた。

入ってすぐに木製の階段。軋むそれを踏んで上がる。

昼間に帰ってから、と言うことはあたしの部屋に料理を置いてからか。

その間に何か不機嫌になる出来事があったのだろう。

白瑠さんが不機嫌になる原因は、コクウに認めたくないがあたし。

じゃあコクウは何だろう？

部屋をノックしても返事はしないだろうから、ノックして返事を待たずにドアを開けた。

出迎えたのは、あの黒猫。

あたしの足にすりよって甘えた声を出す。

黒猫から視線を外し、部屋の中にいるコクウを探した。

吸血鬼の住みかは生活感のない部屋だとばかり思い込んでいたが違うようだ。

小さな吸血鬼の住みかはコンクリートの部屋でテレビとソファークラシカ家具はなかった。

テレビとソファはなかったもののコクウの部屋は、ベッドがありタンスがありテーブルがあり絵画もある。キッチンだってあるし、奥にバスルームも見えた。

そして部屋の主はベッドの上。

無表情で冷たい目であたしを視たが、何も言わない。

いつもの笑みは跡形もなく、なんとも近寄りがたい空気を放っていた。

白瑠さんとは種類の違う不機嫌だ。

白瑠さんならば、そう。八つ当たりをする。不機嫌な笑みを浮かべて怒るが、コクウの場合はその逆で無表情に黙りこむ。

これは不機嫌というよりなんと言えばいいかわからないな。遊太の言った通りだ。

「こんばんわ、コクウ」

「……………なに？」

でもコクウは口をきいた。
会話、出来るじゃないか。

「明日にして」

そう言つてコクウは目を閉じる。それを眺めながら彼の不機嫌な理由を推測してみた。がわからない。かの有名な殺戮者の地雷はイマイチわからない。ふと、目にはいるのは黒いワイシャツから覗くコクウの肌。傷痕一つない腹が見えた。

遙か昔、悪魔と吸血鬼の戦争に終止符を打った一匹の吸血鬼は、人間が手を貸す見返りに身体中をいじくり回された。そつとコクウの右手が腹を撫でる仕草をする。

例え目的の達成の為ならば手段を選ばない吸血鬼でも、身体をいじくり回されたことを何とも思わないわけではない。

死なない人間。血を啜る強靱な生き物。

それを調べる方法は何かはわからないが、あらゆる臓器を抜かれたりしたのだろう。何年も、何年も。

全ては数少ない生き残つた吸血鬼の為に。仲間想いだから、悪いやつではない。そう、思うからこそ。

あたしは何も言わずにコクウに歩みより、空いている枕元の方に腰を降ろした。その行為を目で追っていたコクウは無表情のまま「何してるの？」と問う。

「貴方が不機嫌だと誰も近付かないんでしょ？静かでもいいわ、下に居たらナヤとアイスピックが煩いしここに居るわ」

あたしはしれつとそう返す。

コクウは下の階に目を向ける。静寂の中、内容は聞き取れなかったが話し声が聞こえた。誰かが来たようだ。

コクウには誰の声で何を話しているかもわかつているだろう。

「一晩中ここに居るつもりなら襲っちゃうよ」

「いいわよ、別に」

「……………」

コクウの何とも感情の入っていない冗談に頷いたら、コクウは少しだけ目を見開いてあたしを見上げた。少しの間黙っていたが漸く口を開く。

「君は機嫌がいいんだね」

ぷいつ、とそつぽを向いた。

数秒考えて出た台詞がそれか。ふむ、かなり不機嫌だとみた。

「いえ、さつきまで至極不機嫌だった」

「……………ふうん」

チツ、理由を訊けよ。ここから話をもって行って不機嫌な理由を訊こうと思ったのに。

かなり口数が少ない。昨日は雄弁に喋っていたくせに。

ポン、と弾く音が聴こえた。音の出所を探せば、先程はドアで見えなかったがオルガンピアノがあり、鍵盤の上にあの黒猫が座っている。

「ピアノ、弾くんだ」

これには返答はない。

「貴方っていい身体してるのね」

「……………。すつごく機嫌がいいんだね」

「見せてよ、コクウ」

反応した、反応した。

なんかこの台詞、前にも誰かに言った気がする。

コクウは起き上がってワイシャツのボタンを外して、本当に見せてくれた。

うわお、まじでいい身体。

月光で白さがわかり大理石みたいなしなやかな光を放つ。細い括れでも適度に引き締まった筋肉があり、鎖骨は出てて色っぽい。

思わず手を伸ばして触る。

体温のない肌。それでも人間の肌だ。

心臓は動いていて、呼吸をしている。

「……………俺のこと…誘ってる？」

コクウがあたしに向けてそう言う。

さっきの発言といい、ベッドの上で、そして男の身体を触っている。これは誘っているようにしか見えないのだろう。

「……………あはっ」

あたしはそこで吹き出して笑った。

「バーカ、誘ってたら押し倒してるわよ。残念でしたあ」

笑いながら胸板を叩く。硬い。

コクウは叩かれても何の反応も示さなかったが、あたしを目を丸めて見ていた。

「椿が……………笑った」

そしてやっと発した台詞がそれ。

「は？なにそれ、前から笑ってるわよ」

「違うよ…初めて……………」

失礼だな、と思い首を傾げる。

何度も笑みを向けたはずだ。覚えてはいないが。

何かを言いかけてやめたコクウはやがてにんまりと笑みを浮かべた。

「機嫌がいいんだね、椿」

そう言うコクウの方が、機嫌が良さそうに見える。

あれ？いつものコクウじゃね？

「えーと、なんだっけ？襲っていいんだよね」

「冗句よ」

だめだ、コイツ。完全にいつものコクウだ。

立ち上がって部屋を出ようとする、手首を掴まれた。見ればコク

ウが心底驚いた顔であたしを見上げている。

「何処行くの？一晩中いるんじゃないの…？」

「……………いや、帰る」

機嫌が良くなった途端に引き留めるのか。意味がわからないやつだ。

そう言ったら、呆気なくコクウは手を離してまた無表情の仮面にな

って「…そう」と呟く。

……………なんなんだ？

あたしは超難問を与えられたのだろうか。

パタン、とベッドに横たわり片腕で顔を隠すコクウ。あたしは難問

を解こうと少しの間そこに留まる。

というか、あたしはなにがしたいんだろうか。

死なないことにしたが、藍さんはどうしよう。

だからと言って帰るつもりは、戻るつもりはない。
嫌なんだ。冷えてしまった場所に引き返すのは。
怖いんだ。あたしのせいで変わった日常を目の当たりにするのが。

「ユアって誰」

それは。

一瞬空耳かと思った。

コクウの口から出たのは、確かに由亜さんの名前。
どうして彼が、彼女の名前を知っているのか。

焦りが刹那だけ走り、やがて冷静を取り戻す。あの時感じた視線は、
コクウだったんだ。

吸血鬼は耳が優れている。

今日あたしが口にした名前を聞き取っていたんだ。

「……あたしが殺した人」

「……ふうん」

あたしは答えた。コクウはあたしを見ずに、一拍置いてから「なに
で？」と訊く。

殺害方法。彼女の最期は爆死。

あの笑顔が木っ端微塵に吹き飛ばされたという事実を思い出すとゾ
ッと震え上がってしまう。

「……あたしのへま」

「……ふうん」

またコクウは興味ないような反応を返す。
訊きたいのはそれだけか。

コクウはそれ以上訊くことはしなかった。

苛立ちが戻って煮えたぎる。余計なことしたな、黒の殺戮者。

「腹を抉られるって、痛いわよね」

「……………」

「ナイフで何度か刺され、抉られたことあるの。腹の中掻き回された、あの感覚は二度と味わいたくないわね」

ギリ、と歯を噛み締めて怒りを堪える。その音を聴いて腕を退かしたコクウにはあたしのしかめた顔がよく見えただろう。

「それは可笑しい、君のお腹にはそんな傷はなかった」

「……………バツチリ視たのね、貴方」

まあ、それは今更怒ってもしかたあるまい。

傷痕がなくて当然だ。ヴァッサーゴが跡形もなく治したのだから。

「貴方はどうなの？何年も何年も

身体をいじくりまわさ

れ調べられた吸血鬼の救世主さん」

あたしは怒りを煽る言い方で、それを口にした。

ぴくり、とコクウは反応して目を細める。

あたしはただ見下す笑みを向けて、彼の次のリアクションを待った。コクウは少しの間、思考をしながらあたしを観察したと思えば、にんまりと笑みを浮かべる。チェシヤ猫の笑み。

「何の話？」

「あら、吸血鬼は嘘をつかないと聞いたけれど」

「嘘はつかない、そうだね、基本は」

とぼけるコクウにあたしは問い詰める。コクウは、普段以上にムカ

つく態度だ。

「吸血鬼の救世主？なあにそれ、一体誰がそんなことを君に吹き込んだんだい？そんな大昔の話、ほとんど知らないと思ったのになあ」

そう言ってひょいっと立ち上がるコクウは笑みを貼り付けたままあたしの隣に立つ。

「特に貴方が身体を売った、てところ？」

「……おつかしいなあ、そこらへんは吸血鬼しか知らないと思っただ。…嗚呼、吸血鬼の友達がいるんだっけ？それって、誰？」

「……………」

そう問うコクウの感情は読めなかった。

もしも名前を出したら、一体どうするつもりなのだろう。

「珍しいこともあるもんだ、少ない故に仲間意識が高い吸血鬼が話すなんて。よっぽど信頼されてるんだ、椿」

聞き出して八つ裂きにでもするかと思えば、ニコニコしたままあたしの目の前にベッドに腰掛けた。

「それがどうしたの？」と首を傾げるところを見ると、不機嫌な原因はコレではないようだ。チツ。また機嫌を直してしまった。

「痛かったでしょ、って訊いてるのよ」

あたしはブーツでコクウの胸を踏み、押し倒した。きっとダメージはないのだろう。

がしっ。と足首をコクウが掴む。

「押し倒したね？てことはあ、誘ってるんだあ」
「あ？…わっ」

ニヤリ、と不吉な笑みを浮かべたかと思えば、引っ張られあたしはベッドにダイブ。
ベッドではなくコクウの上だった為、それなりに痛かった。

「なにす…」
「これ、自傷行為の跡？」

怒ろうとした、その前に。
コクウがあたしの手をとって、見ていた。
微かに見える、先程の傷痕。
何故だ。

いつもはこんな傷痕さえも消すと言うのに。何を考えている？ヴァ
ッサーゴ。
手を振り払おうとしたが前回同様それは無理だった。その行為で肯
定ととったコクウは「ふうん」と頷く。

「するなら俺が吸うのに、勿体ないじゃん」

そう言ってあたしの指を舐めるコクウ。
あたしはその舌を詰まんで握ってやった。

「あら、じゃあ貴方の自傷行為の流血は一体誰が吸うのかしら？」
そう問うがコクウの舌をしっかり掴んでいるのでまともな返答はな
い。答えは求めていない為、好都合だ。

「自己犠牲なのは生まれつき？それとも吸血鬼になってからかしら

「？」

今日はあたしが一方的に喋らせてもらう。

「貴方はあたしは吸血鬼に向いてないと言ったけど、あたしはそうじゃないと言うわ。吸血鬼に慣れてた自分の性格なんて想像出来ないけど、きつと冷酷で殺す度愉快に笑う吸血鬼になるんじゃないかしら。あたしも貴方も、仮定の話でしかないけれどね。でもね、コクウ。吸血鬼じゃない今のままのあたしを“吸血鬼みたい”だと言った人がいるのよ。それは吸血鬼。貴方の事を話してくれた吸血鬼よ。」

間抜けな感じに口を開いたままのコクウは何かを喋るが舌が動かさないため言葉になつてない。

「仲間を殺せば貴方が何かしらアクションをすと思うたのは、貴方の自己犠牲の武勇伝を知ってたから。仲間を傷つけられるとダメージはあつたけど、昔の話よ。仲間なんていないもの、クラッチャーとももう仲間なんかじゃないわ。だから告げ口したって意味ないし、クラッチャーと喧嘩する理由にもならない。カトリーナの件が終わればまたいなくなるわ。今日はさよならを言いに」

あたしが話す間もコクウは何かを言うがあたしに通じない。

するとコクウはあたしの指に牙を降ろした。チクリとしてあたしは話し、溢れる血をコクウに舐めさせないで自分で舐める。

「君が吸血鬼に向いてないなんて言つてないぜ。それに白に喧嘩売るために君がほしいんじゃない。仲間がいらないなら仲間になるつよ、椿」

微笑んでコクウはそう勧誘の言葉を口にした。

仲間がいないなら、仲間になろう。

何を言っているのかわからない。

そんな口説き文句が訊くわけないだろう。

嗚呼、でも。

あたしは迷った。

どうせ帰れないなら、違う場所に居ようか。

馴れ合わず、心を開かず、一定の距離を離して、違う場所に居てしまえば。

命を絶ちたい思いに駆られることもなく、生きていけるのかもしれない。

「仲間に入ってくれるなら、どんな条件も呑む。ねえ、仲間になる

う」

「…相変わらずの自己犠牲ね、何年経っても直さないつもり？それ」

軽蔑の眼差しを送ってからその条件を考えてみた。…ニヤリ。

「そうね。条件を呑むなら…入ってあげてもいいわ」

「ほんとっ？」

「一つ目、あたしが黒の集団の一員になった情報は流さないこと」

「うん、呑むよ。二つ目は？」

「二つ目、貴方があたしの言いなりになること」

ぱあっと笑顔のコクウの顎を親指と人差し指で掴み上げて告げた。
きよ、とん。

コクウは笑みが消えた顔で数秒固まってから目をぱちくりさせる。
その間に理解が終わったようだ。

「うん、呑んだ」

そう頷く。

至極自己犠牲心が旺盛だ。

「貴方の指示は、聞きたくなければ聞かないわ。それでもいいの？」
「ああ、いいぜ」

ニコツとコクウは無邪気な笑みで頷く。こうあっさり承諾されるとかえってつまらない。何かこの綺麗な顔を歪まず発言がしたくなる。嗚呼、あれがあるじゃない。

「コクウ。もうあたしは仲間よね？」

「そうだね、椿」

「貴方は仲間を傷付けないわよね？」

「うん、俺は味方を傷付けない」

「ふうん　　あたしの中に悪魔が居ても？」

目を細めて猫のような笑みを浮かべてコクウを見下ろす。

それだけで十分のはずだ。

紅い瞳が妖しく煌めくだけで彼は解る。

あたしの下にいるコクウは黙って見上げていた。

次の瞬間、浮遊感を味わい体勢が逆になる。コクウが真上に、下のあたしの両手を押さえ付けていた。

「へえ　　知らなかった。全然気付かなかったよ、綺麗すぎる眼だと思っただら……悪魔の眼だったのかぁ」

顔を近付け今度はコクウがあたしを見下ろして、妖艶な微笑で覗き込む。

「血を啜ったみたいがいい紅だから、椿に似合いすぎて気付かなか

った」

長い舌が頬を舐める。
それから額を重ねて、あたしの頭の中にいるヴァッサーゴに呼び掛けた。

「出てきなよ、椿の中の悪魔^{デビル}」

しかし、呼び掛けても返答はない。

あたしはちらりと自分の指に嵌めている指輪に目を向けた。これでヴァッサーゴは喋れない。

例え外したとしても、ヴァッサーゴが喋るとは思えないな。

だがあたしの視線で気付いたコクウが指をパクリと加えて指輪を外した。

刹那の沈黙。

喉の奥で笑う声が響き渡る。

「初めまして！吸血鬼野郎^{ヴァンパイア}！」

そしてコクウに、挨拶をする。

これでコクウはあたしの中の悪魔の存在を知った。どう出る？

「やあ、悪魔。会うのは久しいな、まだ生き残ってたんだ？頑張ってるねえ」

普段通り、コクウは微笑んであたしの中の悪魔に言う。

「頑張ってるよ、オレは自由気ままにやってんだ。そっちこそ長生きしてんじゃねーか、御苦労なこった」

対するヴァッサーゴも笑いを含んで言葉を返す。
宿敵同士の割りには、かなり平穏な空気が流れている気がするの
気のせいだろうか。

「聞いてたと思うけど椿は俺の仲間になった。別に構わないよね？
君が何の為にソコにいるかは知らないけど、攻撃する気がないなら
敵意はないんだろう？」

「敵意だあ？んなもんでめえら吸血鬼に最初から持つちゃいねーよ。
そもそもオレは戦争に参加してねえ悪魔だ。好きにしるよ、椿の下
僕」

「ああ、そうなんだあ。それなら問題ないね。正し君の命令じゃな
く椿の命令しか聞かないよ、俺は椿の下僕だから」

なんとも穏やかに会話が進んでいる。

「……ねえ、なんでそんなに冷静なの？貴方達」

「え？どうして？俺は椿が昔男だったってカミングアウトされても
驚かないよ」

「それは驚け、つか他に例えがなかったのか」

「クククツ！残念だったな、椿。黒の吸血鬼の歪んだ顔がみれなく
って」

「歪んだ顔が見たかったの？命令すればするのに」

「もういい。指輪を返せ」

つまらない結果になってあたしはコクウを押し退けて起き上がる。

ゴクリ。

ずっと指輪を唇に加えていたコクウが、飲み込んだ。蓮の花をモチ
ーフにした銀色の指輪をゴクリと飲んだ。

あ……。と眼をパチクリさせるコクウ。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

沈黙したがやがてコクウはにこりと笑った。

「このっ…バカーッ！」

怒鳴り付けてラリアットを食らわせる。このバカ！おバカ！おバカ！！

そのままコクウの首に腕を回してベッドから降りて、下の階へと向かう。乱暴にドアを蹴り破ってオフィスに来てみれば、デイフオとアイスピック以外の黒のメンバーが揃っていた。

一同がギョツとした顔でこちらを向いたがお構いなしにあたしはレネメンの元に行く。

「レネメン！コイツが指輪を飲み込みやがった！マジックで出して！」

「へ？え？…マジックにはタネがあるんだ、無理だ」

「ええっ…！」

手品師のレネメンに泣きついたがやはり無理らしい。

「自然に出るのをまちやいーじゃねえか」

「んなもん指につけねえだろ」

軽口を叩く蠍爆弾を睨み付ける。

「新しいの、買ってあげるからさ」

「お前の腹にある指輪じゃなきゃだめなんだよっ!!」

もう一度コクウにラリアットを食らわせてやった。

「大事な指輪？」

「…蓮真君にもらった指輪なの」

「蓮真に？あの蓮真が指輪を？」

遊太は驚いた顔をする。

蓮真にもらったクリスマスプレゼント。お気に入りの指輪。好きな花の指輪。大事な指輪を、汚されてたまるか。

ツンツン。

肩をつつかれ、振り返ってみればにんまりと笑ったコクウ。

「タネも仕掛けもありません」

そう言ってからコクウは体内に自分の右手を突き刺して、腹の中の指輪を抜き取った。

そしてあたしにそれを差し出す。

「はい」

「……………」

本当にタネも仕掛けもない。自分の身体に手を突っ込み、胃から取り出した。

勿論、コクウの手も指輪もどす黒い血に染まっている。自然に出て

くるよりはましなんだろっけど、受け取るのに躊躇してしまう。
あーあ…血塗れの指輪になっちゃった。

「貸せ」

自分の手の中にある指輪を見つめていればカロライが手を差し伸べる。それをあたしはじとつと睨む。

「壊さねーよ、拭き取って磨いてやる」

早く寄越せと手を振るカロライに、一応信じて渡す。武器職人なのだから指輪を磨くぐらい出来るのだろう。壊したらただじゃおかない。

「なんでまた蓮真が指輪をくれたんだ？」

「クリスマスプレゼントよ」

「クリスマスプレゼントだって？そんなの習慣にしてないはずだぜ」

「彼は祖ないものつもりで買ったそうよ、あたしを死んだと勘違いして」

「ははっ、なにそれ」

遊太が納得したように頷いて笑う。

あたしはカロライから眼を放さない。

「ほらよ」

「！、ありがとっ」

「……」

少し経ってからカロライが投げ渡してきた。指輪は血を拭かれて前よりきらびやかな銀色の光を放つ。

素直に礼を言えば、沈黙を返された。

「…黒猫…キャラ違うじゃん」

ナヤが珍獣を見るような目であたしを見る。

「なにが？」

「年相応に見える……。て、あれ？黒猫、歳いくつ？」

「十八」

「若っ！！！」

ほぼ全員から驚かれツツコミを入れられた。

「若っ！ピチピチじゃんか！せいぜい二十歳だと思ってたぜ…」

「こんな子供を持って嘸すなんて世も末だな」

「小さいからそれなりに若いと思ってたけど未成年だったんだ」

「雰囲気騙されたな」

「あーよくよく見ればみえるな、年相応に」

「年相応な娘なんだね」

「年相応な娘なんだ、うん」

言いたい放題な黒の集団。

「るせー、精神年齢〓年齢じゃ駄目なのかよ。」

「今の笑顔、キュートだし。ポセイドンがちやほやするのもわかるなー」

「なるほどな、ポセイドンが黒猫に骨抜きにされたのか」

「可愛い顔した殺し屋ってギャップが萌えなんだ！なんでクールでやってるの？キュートにやったら面白くなるんじゃない？こう可愛い女の子らしい面を全面的にだして」

「何故キャラをキュート系に直さなきゃいけないの」

暴走気味のナヤを止めて一息つく。

振り返ってみれば、コクウが黙ったまま立ち尽くしていた。

「コクウ？」

「…ん？」

「仲間に言わなくていいの？」

「あ、そっか」

ただ足元を見つめていたコクウは顔を上げてニパツと笑う。

「コクウはあたしの下僕になりました」

「くひゃ！？そっち！？」

ナイスな反応をしたコクウだった。

「皆、新しい仲間を紹介する」

あたしの肩に両手を乗せて、コクウはあたしを紹介する。

「紅色の黒猫、椿は今日から俺達黒の集団に属することになった」

血塗れの鼓動

ドクン、ドクン、ドクン。

自分自身の鼓動を感じる。

ドクン、ドクン、ドクン。

自分自身の鼓動が聴こえる。

ドクン、ドクン。

何度でも、動く。

止められない、鼓動。

止めてもらえない鼓動。

生きている証の鼓動。

ドクン、ドクン。

「ねっ！椿っ」

「……………なによ」

黒の集団の一員になったその日。紹介と条件を話してさっさとアパートに帰ってきて、ベッドに倒れて眠った。が眠りについた頃に突然現れたコクウの声に飛び起きる。

「勝手に入ってこないでよ」

「一つ、言い忘れてたんだ」

「なに……」

「親友になろうっ」

「……………は？」

「親友。いいだろ？」

ベッドに横たわるあたしをニコニコと見下ろしながらコクウはそんな妙なことを言った。

親友？なんでまたそんなものにならなきゃいけないのだろうか。

親友にならなきゃいけない何かがあるのだろうか。彼の策に必要なこと。

なのかもしれない。

うん。どうでもいい。

眠くて思考が働かないあたしは考えることを放棄して頷いておいた。

「じゃあ、おやすみ。親友」

ちゅ、とコクウはあたしの鼻に傷を落として部屋から消える。

……謎な言動と行動をして消えやがった。

まあいいか。寝よう。

翌日はナヤに聞いたパトスの遺族達の始末に向かった。姪や従兄弟まで親戚中に狙われていたパトスは本当に気の毒に思う。関係ないけど。

「おかえりー」

二件潰して殺し屋二組を殺して今日のところは引き上げて、アパートに戻ってみれば不法侵入者が堂々とテーブルについていた。

「勝手に入るなって言ったでしょ」

テーブルの上には料理が並んである。二人分の料理。魚のソテーだ。

「なんで料理を用意するわけ？」
「椿の健康管理のため」
「……」

凄く疑問に思ったが、なるほど。あたしが吐くぐらい体調が悪かったから気を遣っているのか。

確かに栄養バランスは摂れそうだ。……主婦か。

「ドリップの身内、俺達も手を貸すよ」

「要らないわ、あと一日で終わらせるから」

「ヒュー、仕事が早いねえ」

仕方なく席について、一緒に食事を摂ることにした。

「じゃあ最後の仕事だけ、手伝う」

「要らないってば」

「終わったらすぐお祝いしたいし」

「クライアントに報告しなきゃいけないし、祝う理由はないでしょ」

「クライアントは遺産をもらう手続きあるから金をもらう時にすればいいじゃん」

「報告しなきゃいけないんだって」

「クライアントは火都に守らせよう」

「秀介：ポセイドンが守ってる」

「んーポセイドンも忙しいだろうし、火都にやらせよう」

「ポセイドンは平気よ」

「…あのね、椿。ポセイドンは狩人、君は殺し屋。あんまり仲良くするべきじゃない」

「なに、火都とも仲良くするなって言うの？黒の集団の属させておくせに」

「火都はいいんだよ、周りに流されない奴だから。でもポセイドン

は狩人の鬼だ、彼が殺し屋と仲良しなのは名前に泥を被ることになる」

「それはあたしも思うわ、でも彼がそれを気にしないの。獲物を取り合った時もあたしを潰す気なかったし、火都もポセイドンも仕事じゃなきゃあたしを狩らないわ」

「……親友ならさ、相手の面子を守るために会つのを控えるべきじゃないかい？」

「彼とはたまにしか会ってない、ばったり会うだけ」

淡々とかわす会話。

ふと首を傾げる。一体何処から秀介の話に変わったんだろうか。嗚呼、クライアントの護衛についてか。

「ああ見えて、狩人の鬼なのよね……」

実力は戦ったことがあるからよくわかっているが、鬼と呼ばれるほど恐ろしい存在とは思えない。

…あたしに甘甘だもんなあ。

一応、狩人の中では一目置かれているからこそ鬼なのだろう。

「カトリーナの件はもう関わらないで。一人で済むし、あたしの仕事なんだから。話はそれだけ？なら帰って」

「冷たいなあ、仲間じゃん」

「仲間だからって不法侵入して料理を作るな」

「椿の寝顔を見ないと落ち着かなくなってますあ」

「次見たら一曲Vヴイの歌を聴かせるぞ」

不法侵入の訳が寝顔を見るためだなんて許さない。

「Vが悪魔の名前だったんだ？一体悪魔とどんな契約を結んだんだ

い？」

「契約は結んでないわ、彼も結ぶつもりないみたいよ」

「へえ、じゃあ契約の証だと思ってた紅い眼が悪魔が憑いてる証なんだ」

「そうみたいね…」

悪魔は先ず、とり憑いた人間に契約を持ち掛ける。応じなければ人間を殺す。人間によって封じられた悪魔はそれぞれメモリーの中。そこから出ようと悪魔が人間の脳内に入り込む。

思い出す、もう一人の紅い眼をした男。

妙な空気を醸し出す男は、あたしと同じか或いは契約者か。

それは彼にいうべきかな。

「ねえ、ジエスタって知ってる？」

「生存してる吸血鬼は皆知ってるよ。ジエスタは悪魔退治屋だ、確か十年前に墓場の中に入ったって聞いたけど」

「去年起きたわ。Vを退治しようとして出来なかったの」

「あのジエスタが退治できない悪魔なんだ？」

少し驚いた顔をするコクウを見ると、ジエスタは優秀な悪魔退治屋でヴァッサーゴが異質なのだろう。

「クククツ、あの草臥れじじか。オレを椿の中に閉じ込めるしか出来なかった吸血鬼」

ヴァッサーゴが会話に入ってきた。

声はあたしとコクウにしか聴こえない。

「やあ、V。出てきて一緒に食事をしよう」

「食事なら椿が食べやすい」

「話がしたいんだ、なんで椿の中に留まるのか」

「オレの勝手だろ？」

「あたしの中にいるのはお前の勝手なのか？鬱陶しいし不快だからもう出てけ」

「命の恩人に出てけはねえだろ」

「命を助けるなんて言った覚えはないわ」

「心で思ってた」

「あの一瞬でも思っていない」

「椿の足が治ったのは悪魔のおかげってわけか。腹を抉られたってやつも」

ヴァッサーゴは何を言っても出ていくつもりがないらしい。その理由も口にしない。お喋りなくせに。

「あれ？」とコクウは首を傾げた。

「どうして他の傷は消して、首の傷は消さないんだ？」

あたしの首を指して問う。

チョーカーに隠れた傷。

首と言えばコクウに噛まれた咬み跡も残ってある。

「消してほしいのかよ？てめえの咬み痕」

「んー、どつちでもいいけど。チョーカーの下の傷は目立つだろ」

「その傷は裏に入った記念の傷だ。椿の大事な痕だから消さないでやってる、ククッ」

「へー、そうなんだ？」

余計なことを喋るんじゃないヴァッサーゴ。可笑しそうに笑ってる。コクウは首を傾けたままあたしの言葉を待つ。

「もう帰って」

フォークを置いて立ち上がる。

「この件が済んで黒の集団で動くことになったらオフィスに顔を出すわ。仲間になった今失踪すると思ってないでしょ」

「思っていない。そうだね、紅色の黒猫が入ったことだしアメリカ政府を殺戮しようか」

「……アメリカに何の恨みがあるの？」

「別にないけど？」

日本の次はアメリカどころか世界を恐怖に貶めなきゃいけない理由が見当もつかない。

「黒の集団のデビューの件もそうだけど、目的はなに？」

「くくく…知りたい？」

「教えないつもり？」

「教えるよ」

黒の集団の集結の理由と目的。

コクウは頬杖をついて妖しく光る瞳を細める。好戦的な猛獣のような眼。

「俺の目的は」

裏現実者の誰もが知りたがっているその目的を、コクウが口にしよ
うとしたまさにその時に、ノック音が聴こえた。

コクウ以外の訪問者に、ビクリと肩を震わせてしまう。

「…」

「つばきちゃん、いる？」

過った人ではなく、ドアの外から聴こえた声は秀介だった。ピリツと走った緊張が緩む。

「ポセイドンがきた、出て」

「なんで俺が出ていかなきゃいけないんだ？」

「黒の集団に属してることに、知らされたくないのよ。広まったら抜けるから」

秀介に聴こえないようコクウの背中を押す。駄々っ子のようにテーブルにしがみついたが言えばしぶしぶ立ち上がって窓に向かう。

「んー…じゃあさ、椿。片付いたら、オフィスに来てよ。バランスの取れた夕飯を用意してるから。必ず来てね」

「わかった、終わったら向かう」

健康を心配するほどあたしが必要なのか。仲間の体調不良を面倒見るほど気の利くリーダーなのか。コクウは窓からアパートを出た。それを確認してからドアを開いて秀介を迎える。

「やつほ、飯食いにいかね？」

「もう食べたわ」

「あ、本当だ。…あれ？誰か来てたのか？」

どうやらカトリーナを誰かに任せて食事に誘いに来たらしい。テーブルを見て気付く秀介。

テーブルには明らかに二人分の食べ掛けた食事がある。

「一人で食べてた」

「へえ、食欲は回復したんだ。俺はペコペコ、椿作って」

さらりと嘘をついてコクウの分も片付ける。

断る理由もないので秀介に作ってあげることにした。

オムライスでいいかな。

「ふーん、ここで一人暮らししてんのか」

椅子に座って待つ秀介が部屋の中を見回す。

特に見て面白いものなんてないが。

「殺風景だな」

「ほとんど借りた時のままなもの」

「いつからここに？」

「三週間前かしら」

「生活感がないな」

「長居するつもりなかったから」

ホテル感覚で借りているようなものだ。これぐらいが楽。

部屋の中で馴染めていないのは花瓶の中の赤い薔薇ぐらいだ。

「なあ、椿」

秀介がキッチンに立つあたしに向き直る。

「俺のここに来ないか」

「……」

言うと思った。

「クラッチャーと居たくないなら、俺のここに来ればいい」

「あたしの選択肢は貴方が頭蓋破壊屋だけなの？」

「俺のここに来てほしいんだ。会う男を魅了するから心配でしょうがねえ。椿の側にいたい！前はクラッチャーのここにいたからあんまり会えなかったけど、今なら毎日会えるだろ！」

むすーとした秀介は最後にニパツと嬉しげな笑みを浮かべる。

白瑠さんの元に行かなければ自分のところに来ていたと思っっているのだろうか。

「あたしは殺し屋、貴方は狩人よ。一緒にいたら大きな矛盾ができるでしょ」

あ、コクウと同じことを言ってる。

「殺し屋だろうが俺が椿を愛してる事実があるんだから、んな矛盾なんて関係ねえよ」

秀介は何を今更といった風に即答をした。

あたしを好きだから。ただそれだけだから、狩人と殺し屋という関係を気にしてない秀介。

有難いことだ。

狩人の鬼に狩られない殺し屋があたし。

「貴方の評判が気になるんだけど」

「関係ないって。実力は実力として歴史に残るんだからよ」

「歴史、ね」

狩人に歴史、と言えば番犬。

歴史上最強の狩人。

裏現実の番犬とまで謳われた狩人。

その過去の人に秀介は憧れを抱いている。

そんな彼は、殺し屋と狩人の子供。矛盾の子供。

彼自身が矛盾の存在だから、狩人の立場でありながら殺し屋のあたしを愛してると言えるのだろうか。

嗚呼、なんでこんなあたしなんかを好きなんだ。いつも残念に思う。

「ほら、出来たわ」

「おっ！美味そ！いただきます！」

誰でも出来るオムライスを出せば、パツと笑みを輝かせて食べ始めた。

「んー！美味い！椿の料理は世界一だ！」

「大袈裟な反応はやめてよ」

味も確認せずに出したからよくわからないが、世界一でないことは確かだ。最も秀介にとつたら世界一なのかも。

「好きなんだからさ、狩人も殺し屋も裏も表も関係ないっしょ」

「…狩人も表も…」

モグモグと食べながら会話の続きを話す秀介。

不意に彼女の言葉を思い出した。

表だからと、狩人だからと、理由をつけて好きにならないようにしている。

それを見抜いて言い当てたあの人。

「……………」

好きにならない努力は、生まれる前から愛が欠けていたせい。

ダツテ、ウマレルマエカラアタシハステラレテタ。

ぞつと気持ち悪いものが背中を駆け巡る。

アタシハ、アイサレナカッタ。

愛されなかった。愛がわからなかった。自分が誰かを愛せるなんて、思えなかった。

愛される資格も愛す資格なんてないと思っていた。

なのに彼女は。

あたしの為に泣いて、抱き締めて、愛されていることを告げた。

愛されてもいいんだと。

愛のある、場所だった。

愛で温まった場所だった。それが、それが。それが。それを。

それをあたし自身がぶち壊した。

「椿？大丈夫か？」

慌てたようにあたしの肩を掴む秀介。

思い出して沈んでいたあたしの顔は、情けない程曇っていただろう。

「あたしはあたしの居たい場所にいていいんでしょう？」

「……」

椿は椿の居たい場所に居る。俺はいつまでも想うから。

愛される資格があると言ってくれた秀介の言葉。

秀介は直ぐにあの目を思い出したようだ。

「今はここがいいの」

今は独りがいい。

「そっか」

秀介は頷いて腰を戻す。

スプーンを持ってまたオムライスを食べる。

「ずっと待つよ、俺は」

微笑んでそう答えた。

ずっと、待つか。

嗚呼、なんでこんなあたしなんかを好きなんだ。ばか、秀介のばか。そう思うのに言えない。

あたしは秀介が待っていることできっと安心してているんだろう。

「あ、やっぱり待てないかも。シビレ切らしたら椿をラチ
る」

「……………」

忍耐力は少々足りないようだ。

きっと白瑠さんの件をまだ怒ってるんだと思う。近くに居すぎたば
つかりに事故を起こした。

しかもその白瑠さんが……………。

愛してる、椿。

「……………」

白くん達は捜すのやめちゃったし。

「……………。秀介、もう休むから早くして」

「え？もう？」

「今日で終わらせたいの」

「じゃあ明日デートしようぜ！」

「カトリーナに会いに行くからその時ね」

起きたら、殺しに行つて終わらせよう。

藍さんの再会で割り切ったせいで、失った大きさを改めて気付いた。

今まで気付かぬフリをして、考えないようにしていたから。

重く感じる。

何かが重く感じる。

この重さがきつと、あたしの喪失感。喪失感と悲しみと怒りと嘆きと苦しみ。それと、少しの心残りと空虚。

刃が風を切り、肉を裂き、心臓を突き破る。悲鳴ごと喉を切り裂く。

殺し屋の弾丸を避け、ナイフを投げる。抵抗をする腕を足で受けて、腹を引き裂いてやれば血流き。

カルドを振って血を振り払い、次の標的の元へ向かう。

撒き散らされた赤。紅い血。

紅い花を咲かせる殺人鬼。

命を奪う殺し屋。

奪う側の人間。

血塗れの殺戮者。

「
フー」

血の海の部屋。

見栄っ張りの金持ちの遺族の屋敷は無駄に広いが、使用人はいなかった。

身を守る為に雇った殺し屋と標的だけ。

逃げればいいものの、金欲しさに立てこもりとは笑える。

パトスの遺族は皆、命より金なのだろう。

まあ、あたし達殺し屋も、こいつらとは変わらないか。

命を金に変えている。

別に金に執着しているわけではないが、ただ。ただ。

殺戮衝動を、仕事にしただけ。

死体だらけの部屋。

紅色に染まった部屋の真ん中に立ち尽くす。

身体が、重い。重い。

部屋を出ようと足を踏み出したが、ずしりと重さを感じてその場に倒れる。

グラリと揺れて沈む感覚。

血の匂い。

このまま気を失ってしまいたいののに、眼は覚めていて閉じることもしない。

墮ちるような感覚には程遠い。

天井が遠い。手を伸ばしても、届かない。

伸ばした先は、もっと別のところ。

そこにもきつと届かなくて。

きつと触れることも、できないんだろう。

それでいいんだ。

そう割り切って忘れてしまえばいい。

また気付かぬフリをしてしまおう。

もう、戻れない。

もう、帰れないんだ。

さようなら。

そう言っただから。

静かに眼を閉じて、深呼吸。

起き上がって今度こそ、その部屋を出た。

「…嗚呼、オフィスに行かなきゃ」

廊下を歩きながらコクウを思い出す。オフィスに来いと言われてたんだっけ。

どうしようかな。

迷いながら歩けば、ズキズキと頭が痛くなってきた。ヴァッサーゴの仕業だ。

いってえな。と置いていけば、廊下の向こうから男が一人歩いてきていることに気付く。

見覚えがあった。

「あれ？前に会ったよね？悪魔にとり憑かれた娘」

「…なんでここに」

灰色の髪をした悪魔に憑かれた男。

街中ですれ違ったただけだが相手も覚えていた。

薄く笑う男の眼は紅い。悪魔が憑いている証拠。

「バイト、殺し屋を殺してくれて頼まれたんだーけど…依頼者はもう死んだみたいだな」

あたしについた返り血で悟った男はなんとも思っていないようだった。

バイト、と言っている時点で軽く思っている。

「そつだ、可愛い娘ちゃん。お茶しよ」

「…用があるから」

そして前回同様に、ナンパしてきたので一蹴する。

「んー、残念だ。じゃあ次会った時に。雰囲気変わったね？じゃあまた」

そして前回同様に潔く諦め、さらりとまた会う気であたしとすれ違
う。

廊下の向こうへと歩き去る男。

このまま行かせてよかったのだろうか。

吸血鬼に危機が迫っていたら大変だ。

でもあの男が吸血鬼の殲滅を目論んでいるとは思えない。

「V、頭痛はやめろって言っただろ。…あの男に憑いた悪魔は、吸
血鬼の復讐を目論んでいるの？」

指輪を外して聞いたが、ヴァッサーゴの返答はない。チッ、仲間の
話はしないってことか。一応コクウに話すべきかな。

「二度とあの男に会うな」

「は？」

ヴァッサーゴが一言。

「会っんじゃねえ」

そう言つてヴァッサーゴは沈黙をした。

…なんなんだ？

引つ掛かったが考えてもわからないから放棄して、指輪をポケットに入れて屋敷を出た。

歩いてオフィスに向かえば、時刻は九時過ぎ。

ノックをせずに入つて見れば、コクウ一人がキッチンに立っていた。

「おかえりい、椿」

にこつ、とコクウはそう出迎える。

おかえり。

そんな言葉を言われる筋合いはない。

「ほらほら、食べて」

コクウに手を引かれ、テーブルに並んだ料理を食べるよう座らされる。サラダにステーキ。

これを食べる、か。

食べられなくもない。

出されるがまま食べることにした。

「コクウ、ナイフは？」

「え？持つてるでしょ」

「…殺人ナイフで食べる趣味はないわ」

きよとんとされてはこちらが困る。

食事に使うナイフを使って肉を食べる。殺人に使つたものじゃないことを祈ろつ。

んー、ソースも美味しい。イケる。

「自分に必要ないのになんで料理できんの？」

「人間には必要だろ。俺達吸血鬼にも味わうことができるから、暇潰しに覚えたんだ。椿の為に覚えててよかった、おかわりあるよ」

肉を切りながら話してみた。コクウはおかわりのため、肉を焼いている。

肉厚があるわりにはソースのおかげが食が進むのでおかわりをしておく。

「美味そうな匂いー！おつ、椿が来てんじゃん！」

騒がしく登場してきたのは遊太とナヤに火都。主に騒がしいのは一人。

「ステーキ好きだねー黒猫。…って！おかわり！？黒！黒猫をデブ猫にする気か！？」

「太ったら動かせば問題ないじゃん。てか、椿はちゃんと食べなきゃミイラになっちゃうよ」

ナヤとコクウのやりとりを見ながら黙々食べる。ミイラにはならねーよ。

食べなかった分を食べるからきつと太るんだろうな…。控えようかな。

「椿！あーん」

「ん」

遊太が身を乗り出してねだったので一口やる。火都は黙ったままあたしの隣に座った。

「美味しいな、これ。黒っちが作ったの？」

「あ、黒猫の手料理食べたい！」

「あっ、オレも！」

「くひゃひゃ、俺は食べたよー」

急にあたしの手料理の話になり詰め寄られるがあたしは黙々と食べる。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

あたしが無反応を返せば、三人が沈黙した。あたしは黙々と食べて冷めた眼を向ける。

「よし、今すぐ作って」

「わーい、黒猫の手料理！」

勝手に決定された。

「人間のソテーでいいかしら」

「いいよ」

笑顔で頷いたのはコクウだけだったり。

冗談に決まってるんだろ。

「パトスの遺産騒動の件はもう片付いたんだろ？黒猫。皆殺しだつて？」

にまにまと楽しげにナヤが話題にする。流石、情報が早い。ついさつき片付けたばかりなのに。

「じゃあ紅色の黒猫が入ったニュー黒の集団始動？」

「まだ。パトスの遺産を手にする為に手続きがかかるから報酬が遅い。報酬が入ってから」

「また後払い？やめなよ、椿。殺しを終えたらすぐに報酬を貰うべきだぜ」

「るせーな、遺産が入んなきゃ報酬がねーんだよ。ドリップと違ってカトリーナなら平気だ」

遊太がノリノリになってコクウに問うがあたしは水をさす。そうすればコクウに呆られた。

ドリップはともかく、カトリーナなら殺し屋を雇って依頼料を踏み倒さないはずだ。

「まー、そうだね」とコクウはそれ以上口出ししなかった。

「それで？入ったら何するの？まじでアメリカ政府殺戮じゃないでしょ」

「え？だめ？」

「だめに決まってるんだろ。また火都が暇になるじゃん、デイフォも参加できるやつにしなさいよ」

「だめな理由がそれなの？椿」

ボケてないのに火都にツツコミを入れられた。アメリカ政府を殺戮するのがだめであって、どうせなら黒の集団全員参加にしろ、と言ってるだけで……。

「デIFOオは今回不参加なんだ」

「今回も、だろ」

同性愛な吸血鬼、今回も不参加。

「てことは昼間にやる仕事なの？」

「んー、昼間っていうかあ、何て言うかあ」

早く答えろ、ひねくれ策略家。

「エジプトに行くから。太陽サンサンでキラキラだからパスなんだ
って」

エジプト？

確かに目の前のコクウはそう言った。

エジプト。エジプトに行つてまでやることがあるのか？

「エジプトのミイラを殺戮するの？」

「くっ！くっひゃっひゃっ！」

大笑いされた。

「くひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！！！！」

黒の殺戮者、哄笑。

一体今の一言の何処が面白かったのだろうか。腹を抱えるほど面白い何かがあるのかな。

ああ、さっきあたしがミイラになるって言ったからか？

「ピラミッドにでもいくの？」

「宝探しに行くんだよ」

「宝？宝を手に入れるのが重要なのか？」

「ああ、面白い宝なんだって。それが」

「ふうん。エジプトねえ……あつたかいならいいけど」

コクウを無視して遊太に眼を向ければ答えてくれた。エジプトの宝を取りに行くのが今回の仕事。

なんだか楽しそうだ。

アメリカ政府の殺戮より幾分も楽しそうだな。

前回の死者を出さないビルジャックも大して苦労してなかったが。

「黒猫いるかーっ？」

その目的はなんだ？という問いが見事に掻き消された。消したのは、蠍爆弾とアイスピック。

「いた！お嬢さん！歓迎会をしよう！」

「黒！黒猫の歓迎会をやるぞ！おらおらテーブル開けた！…ブラックとブラックキャットじゃあ被るなあ、黒猫は紅にしよう！」

「じゃあ紅公でよくな？」

「いいなあ紅公」

あたしの姿を見付けるなり、二人は駆け寄り抱えていたお酒をテーブルに並べた。

紅公って…ハチ公かよ。遊太命名。

「ブラックとブラックキャットでいいのにい」とコクウはブーイング。

「歓迎会はいらない、禁酒してるし」

並べられた缶ビールを指でテーブルから突き落とす。それをコクウが座ったままキャッチ。

「この前飲んだじゃん、カクテル。ほら、椿の好きなカシスだぜ」
「禁酒してるのに勧めんじゃねーよ」

カシスのカクテルをコクウが差し出したが、あたしはそれを部屋の隅に放り投げた。

だが、それもコクウがキャッチ。

黒の集団一同は、それぞれ好みのお酒を手にして飲み始める。あたしは溜め息をついて、立ち上がる。

「え？帰るの？椿？」

「おい、主役」

「るせーよ、飲まねえて」

満腹になるまで食べたあとに飲んだらきつと吐いてしまう。集団に属して気を抜いたら酔い潰れる可能性だってある。禁酒していた意味がない。本当に。

「そうだ、カロライは？」

「今夜は仕事だつて聞いたけど」

「カロライは武器を改造中で、レネメンはマジックショー」

「レネメンは聞いてないけど…カロライに昨日の礼を言いたいのに」

「ん！じゃあボク案内する！」

飲みかけの缶ビールを置いてナヤは拳手した。わざわざ会いに行くつもりはなかったがナヤが案内すると言うなら帰るついでに行こう。あたし歓迎の飲み会にあたしがいないことにブーイングが巻きおこ

ったが、ナヤとコクウ（ついてきた）と一緒にカロライの元に向かった。

「あたしの情報流したらただじゃおかないから」

「仲間の情報は売らない、ねえ？ナヤ」

「うぐおおお…売っておけばよかった！」

コクウと情報中毒のナヤをいじめながら車でカロライの仕事場に来た。

車を降りるとコクウの携帯電話が鳴ったため、コクウがそれに出る。携帯電話を所持した吸血鬼。

「えー…んー…わかったわかった」

話の内容も相手もわからないがコクウは明らかに気が沈んでいた。

「俺は戻るね、椿、ナヤ。カロライによろしく」

「あい」

「ん」

気が乗らなそうに車を置いて戻っていったコクウを見送って、地下にあるカロライの店に入った。

この店は裏現実専用。上の階に表現実専用のアクセサリショップがある。

「…妙な客が来たな」

カロライはその一言をあたしに向けてから、手元の武器改造に取り掛かった。

「昨日の礼を言いに来ただけよ。礼より殺したい奴がいるなら一人だけ無料で引き受けるけど」

「だったらそのお喋りを追い出せ」

四角い部屋の壁に沿った机の上に並べた道具や武器を見ながらペラペラと何か言っているナヤがそのお喋り。

武器の由来にその武器を愛用している殺し屋に狩人の名前を口にしているようだ。早くて聞き取れない。

「指輪、つけてねーじゃねえか」

「ん、ああ… 仕事中にはつけないの。違和感がでるから」

「ならつけなきゃいいじゃねーか… ああ、貰い物だからか」

貰い物で悪魔を黙らせる指輪だからつけている。

カロライはチラッとだけあたしの手を見てからまた作業を続けた。

「それは誰かの武器？」

「オレの作品だ。そののちよつとした改良。黒は来てねえのか？」

「そこまで来たけど、電話がきて戻ったわ。何故？」

「いつもアイツが試し切りを引き受けるんだ」

試し切り。

吸血鬼の身体で武器を試す。

コクウは進んで引き受け、カロライは躊躇いなく試すのだろう。

何処まで自己犠牲が好きなんだ、あの黒の殺戮者は。

「それならあたしがそこら辺の人間を切りつけるわ」

「……」

名乗り出たらカロライに変な眼を向けられた。

「黒猫、あんまり表の人間を殺しすぎると狩人のブラックリストのトップにあがっちゃうぜ」

「狩人のブラックリスト？」

ブラックリスト、か。

狩人の情報網。

……あの男も、ブラックリストに載ってて狩人では有名だったっけ。

「狩人のブラックリストは表の人間を殺しすぎるとランクが上がるんだ、今のトップはスカルクラッチャーだろうな。あ、いやあクラッチャーは最近大人しいからランクは下がってるかもなあ」

ブラックリストトップが頭蓋破壊屋。驚くことでもない。

あの人は裏も表も関係無く殺し、双方で有名な殺人鬼だ。

狩人の標的は殺し屋。それと連続殺人鬼。裏現実には殺し屋で趣味が猟奇殺人という人間もいる。

…白溜さんが動いていないことは、裏現実ではかなりの噂になっているようだ。

「どちらにしる、表の人間を殺戮してデビューした黒猫はブラックリストに入ってるだろ」

そりゃそうだ。

秀介にそこんとこ訊いてみよう。

「あたしは表を殺すなんて言っていないわ。そこら辺にいる裏現実者を切りつけるって言っただけ」

「そこら辺かつ裏現実者を見付けて通り魔紛いなことをするという

の？黒猫」

「問題ある？」

表の人間を殺すのは仕事だけだ。そこら辺の人間を殺すような通り魔紛いなことはやったことがない。

「試し切りはいい、お前壊しそつだ。そつだ、この前のナイフを見せろ」

「……………」

「…じゃあパグ・ナウ」

試し切りを断られ、武器を見せろと要求されて、ギロリと睨む。

そつすればパグ・ナウを要求された。

仕事の予定もないし、あたしはパグ・ナウを外してカロライに渡す。

「パグ・ナウは暗殺器！昔はよく使われてたけど、現代使っている殺し屋は少ないんだ」

「ここで爪を出すのか…大した刃だな、こりゃ首をはねるのも容易いな」

「火都と同じ武器職人のよ」

「チツ、火都の野郎が拘つてる武器職人か。成る程、火都が拘るだけあつて腕前はいいな」

「火都の武器職人つて誰？」

「前のナイフもその武器職人のか？」

「あれは違うわ」

「そつか。…あの白い刃はレア物だろ」

「レア物…？」

首を傾げて自分のナイフを思い出す。指輪と一緒にクリスマスプレゼント。

短剣とも呼べるナイフ。本当は二本だが、もう一本は失くした。思い出すと悔やんでしまいが今更探し出すことは無理だ。

失くしたのは白い刃に椿の花が描かれたナイフ。今所持してるのは猫が描かれたナイフ。

どちらも特注品だとは知っていたが刃がレア物だとは知らなかった。

「その刃はハイパーダイヤモンドで出来てる。ホワイトだとは珍しいな。ハイパーダイヤモンドをナイフにする武器職人は一人しかいない…“ヤガミ”がお前の専属武器職人か？」

「え？いや…知らない…。あのナイフも貰い物なの」

「貰い物貰い物…ヤガミの作品だって知らずに持っているのか。宝の持ち腐れだな」

カロライの皮肉も右から左へとすり抜ける。あたしの頭の中には、ハイパーダイヤモンドという単語がぐるぐると回っていた。ハイパーダイヤモンド。ハイパーダイヤモンド。

「ヤガミは大昔から武器職人の腕の立つと有名な裏現実者の一族だ。顧客にしか作らないと聞いていたがお前誰から貰ったんだ？」

「ヤガミかあ。ボクも名前しか知らないな、教えて教えて」

「ちょ、ちょっと…待って？これ…かなりの価値があるってこと？」

二人の質問なんて振り払い、猫が描かれた白い刃のナイフを出してあたしは確認する。

「当然だ。硬度も高い、デザインも評価が高く、何より作者が作者だからな。コレクターならば億をポンと出す」

「ヤガミだし、ハイパーダイヤモンドだしねえ。かなりの値段だろうね、コレクターじゃなくても高い金をポンと出して欲しがる輩は

いるはずさ」

高い金。ハイパーダイヤモンド。ヤガミ。億をポンと出す。二人の口からずしずしとくる言葉がズバズバと吐き出された。

ぐ……。あたしはテーブルに片手をついたままその場にしゃがんだ。武器だからいつもと大した差のない価値だろうと軽く思っただけが悪かった。

あの白野郎が笑顔でポンポン買う奴だと知っていたのに、あたしの失態だ。

思えば金が有り余った連中で、あたしの生活用品も躊躇いなく購入していた。万札の札束がポーンとなくなるくらいなんとも思っていない連中だ。

価値や価格ぐらい訊けばよかった。

きつと幸樹さんからクリスマスプレゼントに貰った椿の花のネックレスもかなりのお値段だったろうな。それは今、服の下だがちゃんとおつけている。

嗚呼、あたしは億単位の貰い物を失くしてしまったのか。

重い。重い、罪悪感が、後悔が、価格が。

ナイフ、一つが重い。

「おい、どうした……。チツ、昨日から調子が狂う。なんで急に変わったんだコイツは」

「可愛いじゃん。年相応でよくない？」

「暴れるコイツを見たろ。あの殺戮者の眼をもう忘れたか、海馬から出してもう一度今のコイツと比べてみる」

「………………。うん、ギャップ萌え」

「てめえの頭をまず直せ。今すぐ直せ」

「これが黒猫なんだって。猫は気まぐれだ、じゃれたかと思えばそば向いて、誘惑するみたいに色っぽく近付いたかと思えば尻尾振っていなくなる。それとおんなじっしょ。黒猫のデビュー知ってる

？電車の人間を殺戮。皆殺しだけど、黒猫は唯一の生存者のフリして表に捕まらなかったって」

「…つまりは猫被りか？」

「黒猫だから！…じゃなくて、素がこれで殺戮者の面が在る少女に過ぎないってこと」

なんかカロライとナヤがあたしのことを話している。

「ナヤ：あたしの情報は流さない約束でしょ」

「うっ…身内はセーフでしょ！」

「あと生存者のフリはしてない。表の連中が勝手に被害者だと思っ込んだのよ。あたしは一言も被害者だって言っていない」

「自分が犯人だとも言っていないんだろ」

「とーぜん、自白して精神病棟に閉じ込められるなんて御免なもの」

立ち上がり、さらりと答える。

今更自白しても、既に模倣犯が全ての罪を被ってくれているからややこしくなるだけだが。

「態度をコロコロ変えるな、対応に困る」

「別に変えてないけど…」

「ほら、意識的じゃないから猫被りとは違うんだよ」

「てめえは黙ってる、つか帰れ。仕事の邪魔だ」

「もう帰るわよ、ナヤ邪魔だって消えろだって消滅しろだって」

「そこまで言われてないよな！？ボクだけ聞こえなかったの!？」

「うるせえ、まじ消滅しちまえ」

「何故!？」

本当に黙れよ。あたしは肩を竦めてナヤの口を塞いだ。疲労が溜まると彼のお喋りも頭にくるな。

「あ、それは置いてけ。昨日の礼に拝見させてもらう」

「そう…壊さないでちょうだい。メンテナンスに出すと日本に戻らなくちゃならないんだから」

「壊さねーよ」

カロライの希望でパグ・ナウは置いていくことになった。

軽く挨拶をしてからナヤと店を出て、ナヤともそこで別れてアパートに向かう。

夜道で人気がない場所で白いナイフを投げて回してキャッチする。これが億単位の価値か。

使うのが気が引ける。

買い揃えた武器だって億はいつてないだろう。

…恐らく。

稼いだ金は数えていないため、わからない。実は億にいつてたりして。あり得なくもない。

「……………」

アパートの前で足を止めて見回す。

見張られている気配はない。彼のトレードマークとも言えるバンもない。

藍さんの尾行も監視もないようだ。

勿論、部屋に盗聴器やカメラも仕掛けられてはいない。

藍さんの動きがまるきりないところを見ると、本当に……帰ってしまっただろう。

「…ハンッ」

帰ってしまったのだろう、って。あたしが帰れと追い出したと言う

のに。

我ながら自嘲して呆れてしまう。

「これでいいんだ」

この方がいい。

それでいい。

平穩で何よりだ。

ベッドに横たわる。

静寂の中、呼吸と鼓動しか聴こえなかった。

悪魔がまだ、沈黙してることは気にならなかった。

翌朝。

カトリーナの元に向かった。

仕事が完了したことを報告。

これで遺産と安全が手に入った。

「あとは報酬の遺産だな、時間が掛かるんだろ。カトリーナはいつでも退院可能だ、でも命を狙われてた不安は大きいし、カトリーナの家は荒らされた。カトリーナの仮住まいが必要。俺が預かってもいいけど、男所帯だしなあ…」

「あたしの部屋で構わないでしょ？カトリーナ」

「は、はいっ」

「おっ、決まりだな！よかったな、カトリーナ」

秀介が誘導したがそれは仕方ないことだ。報酬も欲しい。彼女が不

安がるのもわかる。手続きが終わるまで自分の部屋に置いておくのがベストだろう。

それにしても。秀介とカトリーナは仲が良くなったな。カトリーナは心を開いて話している。

始めより穏やかになって秀介と話しているカトリーナは純潔そうな娘に見える。パトスが唯一信頼して遺産を残した女なのだから純潔か。生前のパトスを知らないが。

「もう退院しちまう?」

「そうね、貴方をタダ働きさせるのも悪いし。今日あたしの部屋に行きましょうか」

「俺もついでに」

「却下よ」

「クスクス……」

あたしと秀介のやり取りを見てクスクス笑うカトリーナ。

秀介は医者に伝えると病室に出た。

狩人の鬼をタダ働きさせるのも、病院にくるのも嫌だったのでさっさとカトリーナを部屋に連れていこう。

「仲が良いですね」

カトリーナが言う。

否、こちらの台詞だ。

「ポセイドンさん、貴女の話ばかり。凄く愛されていますね」

穏やかに微笑んでカトリーナはあたしに言った。

愛されているというならカトリーナの方だ。と言ってもパトスは亡

くなつたのでそんなこと言えない。
そもそも愛されていても、秀介は恋人ではないのだから。とも言えない。

「あたしの話ばかりでしたか」

「はい…あの人に愛されて幸せですね、黒猫さん」

「……そうですね」

愛されるということは、本当に幸せなことなんだと思う。
でも。

あたし。

本当に愛されて、いいのかな？

「……………」

口を開きかけて、あたしは閉じる。

そんな馬鹿げた質問を。

あたしは、口にしようとしていた。

カトリーナに訊こうとしていた。

あ……。

何故？と考えたら直ぐに答えが出てきた。

愛されているところが、その穏やかな微笑みが、彼女に似ていたからだ。

純潔な笑みを、あたしはいつの間にか彼女と重ねていた。

あーあ。

部屋に招いたことを、少し後悔。

秀介の車で送ってもらい、カトリーナを部屋に上がらせた。

コクウがまた料理を用意して待っている可能性が過つたが、コクウはいなかったので胸を撫で下ろす。

秀介にバレて騒がれたくない。

あ、でも秀介はコクウに喧嘩を売られていると思っただけだった。その誤解は黒の集団と話して解いただろう。黒の集団に入ったと知っても大した反応はしないかも。

秀介に知られれば、篠塚さんや白瑠さんに知られるかもしれないから、隠しておきたい。

「自由に使って構わないから」

「はい。…ハクチュン！」

ベッドにカトリーナの数少ない荷物を置いておく。いじって欲しくない物は、ベッドの下にあるトランクぐらいだから大丈夫だ。

カトリーナがくしゃみをしたと思えば連続でくしゃみをした。何かのアレルギー反応？

アレルギーになるものが部屋にあったっけ？と首を傾げて探す。

「ね、猫アレルギーで……」

「にゃ」

「わっ？…なんでお前、いるの？」

「あー！猫だ！」

カトリーナが答えたあとに聴こえた鳴き声。足元を見れば、コクウの元にいるはずの黒猫がいた。

秀介は見付けるなり抱える。

「くしゅんっ」

「ごめんなさい、カトリーナ。勝手に入ってきたみたい…秀介、やめなさい」

「えー。椿のペットじゃねーのか」

すぐにじゃれた秀介から黒猫を奪い取り、カトリーナから離す。

秀介はこれからカトリーナを連れて家に向かうのだから触るな。

「換気しておくわね」

「はい……」

「じゃあカトリーナの家に行くか」

二人が言っている間に、あたしはこの猫を送るついでにパグ・ナウを取りに行こう。

二人と別れて、あたしはカロライの元に向かった。

差し入れに何か買って行こうかと思っただが、馴れ馴れしいとカロライが調子が狂うと文句いうのでやめておこう。

カトリーナと少しの間、同居するならば食事を用意するべきだろうか。めんどくさいな。

食事なら秀介が面倒見てくれるだろう。

遺産絡みに慣れているらしく、遺産の手続きも秀介が面倒見てくれるそうだ。

何かと便利。

「お前は何か食べる？」

「にゃ」

「コクウからちゃんともらってるの？食べ物」

「にゃ」

何も言わなくても後ろをついてくる黒猫と話しながら行く。店に寄って餌を買ってやった。

カロライのところで食べさせてやろう。

「ハロー」

「……………ハロー」

まだ地下の店にカロライはいた。
あたしの来店に、彼は変な視線を送ったが受け入れたのか挨拶を返してくれた。

「猫アレルギーじゃないわよね？」
「散らかすなよ」

許可をもらってあたしは黒猫に餌をやった。カロライはパグ・ナウを横に置いて、何かを作っている様子だ。

「パグ・ナウ？」
「まあな」
「ふうん」

あたしのパグ・ナウを見て、自分のパグ・ナウを作っているようだ。カロライがどんなパグ・ナウを作るか、個人的に気になる。

「……………貴方、クラッチャーを知ってるのよね？」
「スカルクラッチャーか？知ってる」

カロライが初対面に言ったことを思い出してあたしは訊いてみた。

「彼の無茶な殺し、間近で見た口振りだったわね」
「黒の殺戮者とは黒の集団の中でディフォの次に付き合いが長い。クラッチャーとの対決も何回か見た」

成る程。コクウと付き合っている最中で白瑠さんとの対決を見たよ
うだ。

あたしは一度も二人の対面を見たことがない。

「化け物だな、あの男。人間のくせに」

嘲笑うようにカロライは言った。

「……」

否定も肯定もしない。

「何をしたら片腕で人間の頭蓋骨を破壊することが出来るんだ？破壊というより粉碎。吸血鬼と素手でやり合う人間なんて歴史の中を探しても、あの男だけだろうな」

「……そうね」

きつと他にはいない。

彼のような人間はいないし、彼のような人間が今後現れないことを願う。現れてはいけない。

影さえも真っ白な彼。

化け物と呼ばれても笑いのける人。危うい白さの無邪気な人。

「…化け物でも、人間は人間よ」

猫を撫でてあたしは呟く。

「人間と言っているものか迷うがな」

「人間だ。頭蓋骨を粉碎して撒き散らしても、あれは人間の力。悪魔の力を借りてないちゃんとした人間の力なんだから、人間と呼ぶべきよ」

そうだ。彼は、人間。

あたしよりも人間。

人間なんだよな。
人間でありながら、裏現実の化け物。

「ほらよ」

ほんとパグ・ナウが目の前に投げられた。

意図がわからないがあたしはそれを手に取り、見てみる。

あたしのより軽い。コンパクトさは同じくらい。刃は四つ。短いわりには鋭い光を放っている。

一晩でここまでのクオリティーで出来るとは、流石黒の集団に誘われた武器職人だ。

「すごいわね、流石はコクウが仲間に入れるだけある」

「やる。こつちよりは便利なはずだ」

「それに自信家。どうかしら…使ってみなきゃわからないし」

「フン、使ってみれば一目瞭然だ。火都もこつちに乗り換えた方が得策だぞ」

口元を吊り上げて少しだけ笑う。

なんだ、案外カロライとは打ち解けそうだ。

乗り換えることはないと思う。松平の武器は気に入っている。とりあえず貰えるなら貰っておこう。

「そうだ、ポセイドンとこの前喋ってたわよね？何の話をしてたの？」

「お前に喧嘩を売るのがどうかを黒に聞いたでした」

ああ、やつぱり。

秀介が問いたただす光景が安易に想像できた。怖いもの知らずだからコクウ相手でも怒鳴り付けただろう。

じゃあ誤解も解けたんだ。
だから黒の集団の話をしてないのか。

「喧嘩は売らないと黒が答えた」

「うん、よかった。煩かったのよ」

「煩い登場だった。答えを訊くなり交友的になった」

「元から交友的なのよ」

だからカトリーナとも仲良しになったし。敵意さえ抱かなければ誰とも仲良くなれる。

「それから黒は、お前を仲間に入れたがっっていると話した」

.....。

「.....え？」

あたしはひきつった笑顔で聞き返した。

「ハイ」

秀介の車で送られたカトリーナを出迎える。家から持ってきた荷物も少ない。

「じゃあまた明日。椿、愛してる」

秀介は車から出ず、あたしに投げキッスしてから走り去った。秀介はオープンカー好き。

黒の集団の勧誘を知っていて、秀介が何も言わないのは何故だろう。

答えは簡単だ。

秀介はあたしが断ると思っているから。

あたしの居場所が白瑠さん達だと、言った言葉を聞いたから、黒の殺戮者の仲間にならないと思っているのだろう。

だからこそ。訊かないんだとあたしは解釈しよう。

その予測を大いに裏切ったことに罪悪感が沸くが、白状したくないので黙っていていようか。あちらが会話に出さない限りバレないだろう。

「ずいぶん、荷物が少ないのね」

「小さなアパートの部屋だったから…必要なものはこれくらいしかなくて…」

服の入ったトランクが一つと鞆が一つ。

カトリーナの仕事は夜のストリップバーでのウェイトレスだった。生活ギリギリで決して裕福ではなかった故に少ない荷物。

最も、金さえあるなら小荷物で構わない。

自分が出ていった時を思い出す。

本当に必要な物は、あまりなかった。いざとなれば切り捨てる。

「食事は？」

「とってきました」

気が利くじゃないか。

どちらにせよ、いつかは食事を作らなくてはならないだろうから買い物をおこよう。

カトリーナとの同居は五日続いた。

その間、秀介が付き添いカトリーナが弁護士と話し合い。

「飲もうぜ!!」

五日目の夜にカトリーナと一緒にお酒を抱えた秀介が訪問。

あたしは禁酒をしているからと断った。

酔う前に現状を聞けば、明日カトリーナの銀行に遺産が入るそうだからあとは引き出してあたしに払うだけ。

万事解決。

ふう、よかった。

「樫も飲もうぜ!!」

「飲まないって言ってるでしょ」

「俺、明日からついていけねーから」

「そうなの?」

「おう、相棒が心配だし」

相棒。篠塚さんのことか。

「そうね、あの人を放っておくのは不味いわ。危険なことに首を突っ込むのが得意な人だから」

「ぶはっ! そうだっけ? まー相棒と仕事するから気を付けてな? 明日は振り込まれたか確認するだけだから大丈夫だと思うけど」

「あ、はい…大丈夫です」

話をしながら二人は缶ビールを飲んでいく。もうカトリーナの頬は赤みが出ている。お酒に弱いようだ。

「君のことだからまた大仕事なの?」

「おう、大仕事。ブラジル行って、日本行って、ロシアに行くから

また椿に会えなくなるんだよ」

しゅんと眉毛を下げて答える秀介。

流星は狩人の鬼。引つ張りだこだ。あちこち飛び回るのか。

「日本、に行くんだ？」

「うん」

「……………」

「多分会わねーよ。アイツは今、休業状態だから。会っても話さないから安心して」

「…ええ、お願い。篠塚さんにも話さないでね」

「まっかしえなしゃい」

あたしの言いたいことを言い当てる秀介は約束してくれた。恐らく会わないだろう。仕事をしてないらしいし。

頭蓋破壊屋の白瑠さん。

あたしは些細なおつまみを作ってる。

二人はどんと飲み干し、空の缶が十近くになれば潰れた。

「早……………」

テーブルに突っ伏したカトリーナと秀介を呆れてみる。

あたしはどうすればいいんだろうか。

秀介はソファに運び、カトリーナをベッドに運ぶ。…あたしの寝る場所がないぞ。

「秀介、泊まらせないわよ。酔いさまして帰ってちよーだい」

「んーっ」

「椅子から突き落とすわよ」

日本語で秀介の耳元で囁けば、唇が塞がれた。不意討ちにキスをされてしまった。この酔っ払いめ。

グイッ。

ひきつった瞬間、首に腕が回されて引つ張られた。重なる唇、アルコールの味が伝わる。

「ん、しゅ」

強引にされるキスを振り払おうと回された腕を外そうとしたが、彼は強く抱き締めて放さない。

ぐらり、椅子から落ちるかと思ったがこの酔っ払いは器用に椅子から降りて、あたしを抱き締めたまま後ろに歩く。

酔っているのか？わざとなのか？

カトリーナがいるのに。いてもいなくてもこの行為は怒る。くしゃりと秀介の左手があたしの髪を握り締めた。右手はあたしの腰を握る。

どこに向かって歩いているかと思えば、あたしのベッドだった。最近カトリーナが使っているベッド。

そこにドサリと押し倒された。

う、そ…？

上に覆い被さるように乗る秀介の目は、マジだった。

酔ったトロンとした目だが真っ直ぐとあたしを見つめている。

あたしの顔の隣に手を置いて、ゆっくりと顔を近付けてくる秀介。

「しゅ…う？ん、ちょ」

声をかけたが返答はなく、代わりにキスされる。ついたり離れたりを繰り返す口付け。

それに戸惑う。

何度も秀介にキスをされたが、大抵は挨拶的なキスだった。

このキスには妙な違和感がわき、頬が熱くなる。

この感じ、前にも味わったことがある。

白瑠さんに初めてキスされた時だ。

本人は記憶がないが、白瑠さんも酔っていた。

く……くそ！酒なんて嫌いだ！敵だ！禁酒じゃ避けられない！

「はあ、つばきっ…！」

秀介の行為がエスカレートした。

強引で深いキス。

これは。本当にまずい。

一線を越えてしまいそうだ。

いや、だめだめだめ。

あたしは酔ってないんだから一線を越えさせるなっ！

「椿…ああ、愛してる」

「…っ」

「愛してる」

熱のこもった吐息とともに囁かれる愛の言葉。

こんなときに云うのは、卑怯だ。

「っ…………しゅっ」

「…椿」

「んっ…」

愛してくれる秀介と、一線を越えてしまったら。一体どうなるんだろっ。

何度もあたしを愛していると云ってくれた秀介と一線を越えたら？

どうなってしまうんだろう。

白瑠さんと違って、困惑して気まぎすくはならないとは思う。多分、照れくさくなる。

それで、そこから。

うなじを撫でられ、髪を掻き上げられて声を洩らす。

そこ、から…

。

「秀介」

目を合わせずに、秀介の名前を呼ぶ。

それは自分でも驚くほど、冷静な声だった。

「秀介」

もう一度呼べば、秀介は動きを止める。あたしの額の上。

「椿、愛してる」

秀介は言う。

懲りずに云う。

何度でも云う。

「椿だけを愛してる」

永遠に云うだろう。

「俺のものになって」

耳元で苦しそうに囁かれた。

「俺は椿を、誰よりも愛してる。愛してる。愛してるんだ、椿」

それは知っている。

そして答えも、知っているでしょ？

沈黙が、流れた。ほんの少しの間。

「黒の…殺戮者が、仲間に、欲しがってるんだって？」

秀介は、その話を持ち出した。

なんで、今なんだ？

「誰もかれもが、椿を欲する。虜にしちまう。俺、怖いよ。椿が盗られるのが」

自嘲を含んで吹き出して笑い出す秀介は白状する。

「クラッチャーの次は黒に……椿を盗られるかもしれねえって」

酔った勢い、酔っているからこそ喋る秀介の言葉をあたしは黙って聞いた。

「それなら、また拐われるなら！俺が拐ってしまいたい！無理矢理でも椿を俺の物にして連れ去りたい！このまま椿を犯して、ここから連れ出して……白も黒とも離してっ」

しまいたい。

悲鳴みたいな、声だった。

見上げる秀介の顔は、辛そうで苦しそう。

そんな顔にしているのは、あたし。あたしだ。

「でもっ、そんなんじゃ…俺は嫌なんだ。椿を愛したい…！永遠に！椿を愛して、愛されたいんだ！無理矢理でも強引じゃなくて…！恋して、好きあって、愛し合いたいんだ！だから、だからっ、だから…！」

こんな風に苦しそうに言葉を紡ぐ人間を最近見たな、と頭の隅っこ
であの藍さんを思い出す。

「俺を見て、椿」

今にも泣いてしまいそうな、表情^{かお}。

「俺を好きになって、椿」

胸が苦しそうな、表情^{かお}。

「俺を愛して、椿」

愛しくて愛しくて、苦しくて仕方ない表情^{かお}だ。

「誰のところにもいかないで」

それを最後に、秀介はあたしの胸の上に倒れて動かなくなった。
酔っ払いが落ちたようだ。

嗚呼、今のが秀介の本音なのか。
云わない本音。

いや、あたしが落ち込んでいて言おうにも言えなかっただけかもしれない。

コクウが誘っていると知った。白瑠さん達と距離を置いていると知った。

でも自分の元には来ない。

椿は断るはずだ。今は距離を置いておくだけで必ずクラッチャーの元に戻る。そんなの、嫌だが。

でも、でも、もしかしたら。椿は黒の集団の方に行ってしまうかもしれない。

クラッチャーに惹かれて行ってしまったように、黒の殺戮者の元に行くのかもしれない。

俺を選ばず、あの男の方を選ぶのかもしれない。

とそんなことをずっと考えていたかもしれない。胸の奥で思っていたのかも。

どうしてこんなにもあたしを愛してくれるのか、理解が出来ない。

そしてそれに応えられないあたし自身も、到底理解出来ない。

愛してほしいなんて望んでいないあたしに、どうして二人は愛しているなんて言うんだ？

否、本当は愛して欲しいんだろう。誰よりも愛を欲している。欠けた親の愛情を埋めるように求めているかもしれない。

だけど愛せないし愛される資格がないからと怯えているから。

応えられない。

愛せない。

「胸が、苦しいよ……秀介」

あたしの胸に耳を当てて眠っている秀介に言っても、意味はないんだけどね。

ドクン、ドクン。

ねえ、秀介。

あたしの鼓動、聴こえる？

ドクン、ドクン。

聴こえるなら、あたしは生きてるよね。

「あの日からあたし
覚、失くしてるんだ」

生きてる感

それはいきなり突き落とされたせいなのか、あの電話に出る前までが幸せすぎたせいなのか、或いは彼女の死があまりにもショックだったせいなのか。

地獄の電話に出た瞬間、血の気が引いて、生きている感覚がなくなつた。

この一ヶ月。自分は死んでいるのではないかと、自傷行為をして何度も確かめた。

あたしは奇しくも、地獄に招待されたようだ。

地獄にいる。あたしは、死んでいるのかもしれない。

生きながら、死んでるみたいだ。

生きながら死んでるくせに、忘れられない。

忘れられなかった。

例えばだ。朝目を覚ますとコーヒーの匂いが香る。その匂いで、幸樹さんがテーブルにいると思ひ見れば由亜さんがそこに座つて

「あ、おはようございます」

「…………おはよう」

相当きているな。あたしはベッドから降りて、テーブルにいるカトリーナの元に歩む。

「貴女はお酒が弱いみたいですね」

「昨日は少し飲み過ぎちゃいました…」

眉間にシワを寄せ眉毛を下げて苦笑する顔が、彼女と似ている。嗚呼、本当にどうかしている。

秀介は朝陽が昇らない内に帰っていった。一緒にベッドにいたことに驚きを隠せず「え？何かした？」と訊いた様子からして記憶はないらしい。眠かったのではないと断言して追い出してやった。

「今日は入金の確認だけよね？あたしもついていくべき？」

「あ、いえ、大丈夫です。確認するだけですから」

「そう」

さっさと報酬を受け取って同居生活を解消したい。

朝食を簡単に済ませ、カトリーナが外出したあとあたしは一人ベツドの上で写真を見た。

家族写真みたい一枚。

白瑠さん、幸樹さん、由亜さん、藍さん。

そこに映っている自分が、一体誰なのか疑問に思ってしまうくらい。今のあたしと違うように見えた。

この写真の少女は、一体何処？

この写真の少女は、死んだ。

「クハハハハハッ！」

そんなあたしの思考を聞き取って笑う悪魔が一匹。

あたしは写真をコートの裏ポケットにしまい、久しぶりに口を開いたヴァッサーゴに声をかける。

「最近やけに黙ってたわね。カトリーナがいて緊張でもしてたのかしら？」

「それはお前の方だろ」

……………チツ、この寄生虫。

喋ってやればいい気になりやがって。このカス。カス。カスカスカ

ス。

「声に出して言えよ」

「チツ、この寄生虫。喋ってやればいい気になりやがって。このカス。カス。カスカスカス！」

「まじで言つな」

「口を開けば文句ばかり！このカスカスカス！」

「るせーよ！お前もるせーよ！」

せつかくお喋りに付き合つてやつてるのに失礼な奴だ。

「やればよかつたじゃねーか、ポセイドンと」

「るせーよ、酔っ払いとなんて二度と御免だ」

「白野郎は酔つてなかつたぞ」

「顔だけ出せ、首を切り落としてやる」

「クククツ！愛されればきつと愛せたんじゃねえか？」

「それはない、白瑠さんと同じだ」

あたしは断言する。

あまりにもはつきりと断言したからなのか、ヴァッサーゴはその話を続けなかった。

「最近、白野郎に会いたがつてるな。会いたいなら会いに行けばいいじゃねーか」

「お前の言う通り、あたしは拗ねてる。拗ねた餓鬼だ。拗ねて家出をした。んで帰らない」

「……………」

「会わないよ」

「……………」

思うようにあたしを逆撫でできなかったのか、ヴァッサーゴは沈黙した。

「開き直ったのか？」

「お前には筒抜けじゃないのか？」

「変態縁眼鏡野郎と会って死ぬ気満々だったくせに急に止めたのはビックリだったぜ」

「そう言えば、自殺を止めなかったわよね」

「黒野郎はお前を殺さねーってわかってたからな」

「ラトアさんの時と同じこと言ってる。あたしを殺さない吸血鬼はアンタの味方なわけ？」

「宿を壊さねーならな」

ヴァッサーゴが寄生虫ならあたしは宿か。言ってくれるな、この悪魔め。

フン、と鼻で笑い退けてから頬杖をつく。

「いつまで我慢大会を続ける気だ？ズルズル引きずってねえでさっさと帰ったらどうだ」

「あら？変ね、帰る場所、ないんだけど」

「ククツ。いつまで続くかな？忘れられず、どうせお前は帰る。あの家にな。お前が出てきた場所だぜ、家出少女」

「賭ける？あたしは戻らない。忘れられなくても。戻ることはないわ」

「この調子なら直ぐにでも恋しくなって衝動的に会いにいって、椿」

この調子？

それはどのことを指しているのだろうか。

カトリーナが由亜さんにダブって見えることか。あの写真を見ていることか。黒の集団に属したことか。白瑠さんを思い出しては沈ん

でいることか。

この疑問を聞いてくせに、ヴァッサーゴはただ喉で笑うだけで答えてはくれない。

腹立たしい寄生虫だ。

二時間ぐらい経ってカトリーナは戻ってきた。慌ただしく入金されていたことを報告して、報酬を今から引き出すかと問われたが明日にしようと答える。

今日はカトリーナの住むアパートを探して荷物をまとめ、明日使う金を引き出すと言うことに決めた。

「じゃあアパートを決めて、買い物をはじめよう」

「あ、はいっ」

カトリーナは頷き、また慌ただしく支度を始めた。

バタバタすると由亜さんに見えて仕方ない。これは末期症状かもしれない。だからヴァッサーゴがあんなに自信たっぷりなんだ。

でも衝動的に帰るなんて、到底思えなかった。

有り得なくもない。

思い立ったら、いつの間にか行動してしまうことがある。

思い付きで、吹っ切れたように、まさに衝動的に帰るかもしれない。そう思ったが、やっぱりそれはないと否定をする。

胸に感じる重苦しさがそう思わせる。

この思考について、ヴァッサーゴの冷やかしはなかった。

絶対お前は衝動的に帰る。とか悪魔の囁きをしそうなのに、またカトリーナがいると黙る。本当に緊張でもしているのか？わけがわからない。

「この部屋にするの？」

「ええ、やっぱりここにします。…だめでしょうか？」

「いいえ。貴女の家よ、貴女の好きなようにするべきよ」

空室のアパートに訪問して中を覗く。

「昨日は別のアパートに決めて、秀介とそのアパートの良さについて語っていたのに、
気が変わったらしい。」

「ポセイドンさんに連絡しないと。家に招く約束をしたんです…黒猫さん、伝えてもらえないでしょうか？」

「連絡先を教えてもらったでしょ？あたしは彼に連絡しないので
頻繁に取り合う習慣を持ち合わせていない。まめに連絡を取るの
は苦手だ。」

そう言うときカトリーナは眉毛を下げて「とるべきですよ、きっと彼は喜びます」と助言する。

別に付き合っていないので連絡して喜ばず筋合いはないが、もう会わなくなるので今更誤解を解くなんて面倒だから適当に頷いておいた。

管理人と契約を結び、明日支払えばあの部屋はカトリーナの物になって同居生活解消だ。

あたしの部屋に帰る前に食べ物の調達。

帰り道を歩き、あたしのアパートの部屋に来て、そこでヴァッサーゴが口を開いた。

「誰かいるぞ」

その一言を聞いてドアノブに手を置いて、耳をすませる。やけに静かだ。

気配を消しているが、血の匂いがする。
殺し屋だ。

吸血鬼の気配ではない。コクウじゃないのは確かだ。

この五日間、連絡のなかった黒の集団の誰かでもないだろう。そうだろ？ヴァッサーゴ。

ヴァッサーゴは答えなかったが、それが肯定だ。カトリーナを狙う残党か？

はたまた違う追手。名を馳せたくって紅色の黒猫を狙いにきた輩か。ああ、最悪だ。武器をあまり所持していない。刃の短いナイフや短剣しか持ち合わせていない。

平然と入り、ベッドの下から抜き取って瞬殺。

否、侵入したならば武器を別の場所に移した可能性がある。期待はできない。

まてよ。と思い出す。

コートのポケットにカロライのパグ・ナウが入っていた。ナイス。ぶつつけ本番。これが使えなかったらカロライの腕は最低決定だ。

そのカロライ作のパグ・ナウを左手につけて、心の準備をする。カルドがあれば助かるんだけどな。

「黒猫さん？」

いつまで経っても中に入らないあたしに疑問を抱いて首を傾げるカトリーナ。

彼女はどうしよう。

ここで待ってもらおうよりあたしの側にいた方が守りやすい。

某次期大統領の美女の護衛をした時のように。

抱えていた買い物袋をカトリーナに持たせ、なるべく寄り添うように一緒に部屋に入る。

部屋の中は異様なまでに静かで、違和感がある空気に包まれていた。四人、か。人数を読み取る。

それならば大丈夫だ。

ガチャガチャ！

殺し屋は飛び出すのと同時に銃口を向けてきた。

リビングの方に一人、窓の前に一人、ベッドの方に二人。挟まれた。しかし向けられた銃はマシンガンでもガトリングでもない。たった四人ならば、ヴァッサーゴに守られなくても弾丸を叩き落とせる。あたしはカトリーナを床に押し付けてからパグ・ナウの爪を出し、ナイフを手にした。

その瞬間にも発砲されるが、身体をずらして避ける。あとから弾丸が飛ばされるがそれも無駄のない動きで爪とナイフで弾いていく。全ての弾丸を見極めて、避けて叩き切る。

その時だ。

身体に衝撃を喰らう。

バンという先程から聞こえた銃声とは違う銃声とほぼ同時だった。銃弾の嵐が止む。あたしの身体も止まっている。胸に熱を感じた。

鼓動は、感じない。

チャラ、と服の間から椿の花のモチーフのネックレスが垂れた。胸から血が滲み、ボタボタと足元に落ちているのを目の当たりにする。

身体が今更、倒れ落ちる。

倒れて、見えた。

あたしの背後にカトリーナが立っていて、両手で握られた銃が。カトリーナに背後から撃たれ、心臓を貫通したと理解した。

「ゴボツ」

喉から込み上げたものを吐き出す。血だ。肺も損傷したらしい。咳き込む力は、どうやらないみたいだ。

ただカトリーナを見上げた。

笑っている。あまりにも似合わない不適な笑みだった。

…似合わない？いや違うな。

銃を持ったカトリーナには似合う。似合わないのは、似合わないの

は、由亜さんだ。

バカだな。本当にバカだ。

多分パトスのことは愛していたはずだ。最後のプレゼントを必死に探してと頼んだのも、演技じゃないはず。

ただ、遺産に目が眩んだただけだろう。欲が出て、あたしへの報酬が惜しくなったんだろう。

秀介がアメリカを発ち、そしてあたし達が頻繁に連絡を取り合わないと知り、殺し屋を雇った。

カトリーナはしっかりと聞いていたんだ。秀介が長い間アメリカを発つと。そして引越し先は秀介の知らないアパートを選び、あたしを殺して姿を眩ます気だったんだろう。

秀介はいない。あたしさえ排除すればいい。

そう推測だが理解した。

リビングにいた男が近付いてあたしの頭を踏みつけたので、その足を引つ張り爪で喉を引き裂いてやる。

ふむ。中々の切れ味だ。

指を動かせば柔らかい素材なのか、爪も動く。本当の爪みたいだ。

ガウンガウンガウン。

あたしが起き上がったことに動揺したが殺し屋の三人は発砲した。

あたしは避けない。だが当たらない。

今度は悪魔のバリアーが作動したようだ。

爪だけで、窓際にいた殺し屋を切りつける。腹を切り、腕を切り、首を切り裂く。

次はカトリーナ、の後ろにいる殺し屋にナイフを投げ付ける。額に命中。

残りの殺し屋の腹に爪を突き刺し、心臓目掛けて食い込ませる。傷口を広げて爪を抜き取ってベッドに押し倒す。

バタリと死体はベッドの上に倒れる。

「…全く、騙された」

あたしは自分の血で濡れた口を開く。血の味が感じられない。鼓動も感じられない。

カトリーナはさっきの不適な笑みはどこへやら、蒼白な顔になっていた。

「また笑顔を見破れなかった。いや、由亜さんがいい人過ぎたんだ。たつく。あの人と貴女を重ねていたなんて…幸樹さんに怒られちゃうな。はは、ヘドが出る」

反省してゴボツとまた血を吐き出す。どす黒い塊。

何やってんだよ、ヴァッサーゴ。さっさと治せ。

「ば、化け物！」

カトリーナはまた両手で握った銃を向けてきた。化け物、ねえ。

「うん、銃じゃ死なない」

あたしは肯定して言う。

「バカヤロー！避けろっ！！」

震えていたカトリーナの手。

ヴァッサーゴが叫んだ直後に発砲された。反射的にあたしは避ける。バカヤローじゃねえし。避けろってなんだよ。今まで頼んでもないのに弾丸を弾いてたくせに。

フラリとよるめいたが、そのままよるめきに合わせてカトリーナに

歩み寄って、左腕を振り上げた。

すぱん、とカトリーナの首は飛んだ。

これは松平からカロライに乗り換えることを考えてもいいかもしれない。至極いい作品だ。いい切れ味だった。

フラリ。

後ろによるめいたが、なんとか踏みとどまる。

ゴフ、と喉からまた血を吐き出す。

「V……はやく、なおせ」

「うるせー！喋るんじゃねえー！」

ヴァッサーゴは珍しく声を上げた。

頭の中に響いて煩い。

意識がぼやけてきた。

首を垂らしたまま立ち尽くす。

ポタリ。ポタリ。と唇から伝う赤い雫が落ちていく。

静かになったが、やはり鼓動は聴こえない。

おい、ヴァッサーゴ。

「うるせえっ！！今やってるっ！」

焦った声。これは手間取っているらしい。

嗚呼、息苦しい。酸素がほしい。こんな血の匂いが混じった空気じやなく、新鮮な空気がほしい。

片方の肺が損傷したせいで呼吸がままならないせいなのか、或いは心臓が止まって酸素が回らないせいなのかもしれない。

心臓って何分止まったらいけないんだっけ？

何気長くても平気だった気がする。ある時間を過ぎると、酸素のこなかった脳に障害が残るんだっけ。

そんなことを思いながら、フラフラと部屋を出て、階段を上がる。

新鮮な空気を求めて、屋上に向かった。
ただ肺が片方機能しないせいか、血が喉に詰まっているせいなのか。新鮮な空気なんて吸えない。

「V……」

「わかってる！！」

何分経った？

まだ焦っている声。これは手間取っているらしい。

骨折も傷跡も一瞬で治すくせに、どうして今回は手こずっている？

「うせっ！！黙ってるっ！！」

「V………ぶい……」

「治してやってんだから大人しくしてやがれっ！！」

これ以上ないくらい大人しいだろう。頭の中で騒ぐな。

何分経っただろう。

心臓に穴が開いても人間は立って喋るもんなんだろうか。

これは悪魔の力なのか、人間の力だろうか。その答えは出た。

あたしは仰向けに倒れる。

どうやら人間の力だったらしい。そして限界だ。

ゴフ、と喉から血が溢れ出るが口から出す力が、あたしにはなかった。

意識が徐々に遠ざかる。

落ちる感覚。身体が沈む。

これは何度も味わっている。

鼓動はない。

今、まさに死んでる。

何度も感じた死だ。

「ぶい…」

「黙ってるつてんたんだろ！」

「…っい…」

「!?、おい！待て！待て待てっ！肺も心臓も…もう少しで治る！意識を手放すんじゃねえ！！」

寝てんじゃねえ！！

起きろ！起きろ！

起きやがれ！椿！

起きろ！

おい！起きやがれ！

椿！

椿！椿！！

起きろ！椿！

バカヤロツ！

目を開け！

息をしろ！！椿！

起きやがれ！

死ぬんじゃねえ！！

てめえつ椿！

許さねえぞ！！

おい！椿！

死ぬな！！椿！

頭の中で響いているはずの声は、どんどん遠くなり消えてなくなる。とうとう、何も聴こえなくなった。

真っ暗だ。

真っ黒な闇の中。

静まり返った暗闇。

それが死。

これが死。
感覚はない。
鼓動もない。
暗闇の中の、無だ。
何も視えない。
何も感じない。
何も聴こえない。

死んだ。

由亜さん………

藍さん………

幸樹さん………

白瑠さん……

「 ゲホッッ！！ゴボッ、ゴホッゴホッ！！」

少し長い間暗闇の中にいたが、意識は戻り口に溜まっていた血を吐き出す。

少し長い、と言っても意識がなかった間がどれくらいだったかなんて正確にはわからない。

視界が回復する。

開くのがしんどい瞳で視えたのは、白く整った顔を黒髪が引き立てている吸血鬼のコクウの心底安心した笑顔だった。

そんなコクウはあたしの吐き出した血を受けて、顔を真っ赤に濡らしている。

どうして貴方がいるの？

口に出さなくてもコクウに伝わった。

「覚えのある血の匂いに誘われてみれば悪魔の喚き声が聴こえてさ。来てみれば椿が血塗れで心肺停止状態だったから心臓マッサージで生き返らせた」

微笑んで簡潔でわかりやすく答えてくれたおかげで大体わかった。

傷は塞いだだが、心臓は動かず呼吸まで停まったあたしを、コクウが間一髪助けたのか。

……生き返らせた。

左手で確認しようとするれば、パグ・ナウの爪が出っぱなしだと言うことに気付く。

するとコクウがボタンを押して爪を引っ込めてくれた。

あたしはその手を掴み、自分の胸の上に乗せる。

口元についたあたしの血を舌で舐めとってコクウは首を傾げた。

自分の指で触れて確認したら、血に濡れた服に穴だけ空いていて、肌には穴はない。ヴァッサーゴはちゃんと治した。

「心臓、動いてる？」

あたしはコクウに訊く。

胸に手を当てているコクウに問う。

「うん、動いてる」

コクウは微笑んで答えた。
ドクン。ドクン。

心臓の鼓動を感じる。

コクウの手の下にある心臓が動いていることがわかった。
ドクン、ドクン、ドクン。

「椿は生きているよ」

コクウは顔を近付けてそう言った。

その言葉は間違いいではない。あたしは生存を確認している。自分の生存を、胸の鼓動で確かめていた。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
また動き出す鼓動。

ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
ゆっくりと一定のリズムを打つ。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
あの人止めないと言った鼓動。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。

この鼓動。

俺。

止めるつもりなんて、
ない。

ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。

誰にも止められない鼓動。

その鼓動は動き続ける。

何度でも、動き出す。

生きている証の鼓動。

ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。

ン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
ン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。
ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。ドクン。

「生きてる」

ドクン。ドクン。ドクン。

あたしは生きている。

ドクン。ドクン。ドクン。

生きている。

ドクン。ドクン。ドクン。

生きています。

ドクン。

秘密、参

「ざけんじゃねえ……」

舌打ちと共に言葉を吐き出した。

ヴァッサーゴと同じ悪い口調は苛立ちを表す。

「ざけんなざけんなっ！暑い！くそ暑い！！」

「そうだねえ、暑いね、うんうん」

「煩い！全員暑いんだ、騒ぐな。余計暑くなるだろ」

「くそ暑いよな……」

「暑い」

「暑いな……」

「あちいつ！！」

「全員黙れ」

あたしは足を投げ出して喚く。それを宥めるコクウはやる気ない。

カロライが苛立ちつつ言うが、他の者も口々に暑いと言いあたしももう一度喚く。カロライは力を込めて吐く。

蝉の鳴き声が聴こえてきうなほど、暑かった。

真冬から真夏に移り、身体は心底ダルイ。

生暖かく重く鬱陶しい空気はカラカラ。ぎらつく太陽が砂を熱して、ジープで撒き散らし飛んだそれが身体についてまた至極鬱陶しい。

何より、暑い。

ここはエジプト。

砂漠をジープで移動中。

冬ならばエジプトも日本と変わらない気温で観光しやすい時期なのだが（だからこそコクウはこの時期にエジプトに行くとした）今日に限って真夏の気温だった。

「とうか猛暑だ。降り立った今日に限って異常現象で真冬に四十度、四十度だぞ。四十度。」

真冬のアメリカから、四十度のエジプト。

汗は瞬時に蒸発して消える。水分補給をしないと脱水症状で倒れかねない。

体調を崩す。苦しい。暑い。すげえ暑い。

寒いのは苦手なあたしでも真冬に帰国したいと思う。つうか帰国しようぜ。

「あたしもデIFOみたいにパスすりゃよかった…」

「いいじゃねーか、気分転換だよ。お前の大好きなミイラを見に行つてこい」

「椿、ミイラ好きなの？」

呟けばヴァッサーゴが口を開いた。別にミイラは好きじゃない。

ヴァッサーゴの言葉に反応したのは、悪魔の声が聴こえるコクウ。

他のメンバーは悪魔の声はおろか存在も知らないのに、コクウがいきなりミイラの話をしたようにしかみえない。

ジープの奥、運転席の後ろにサングラスをかけ毛布にくるまっっているコクウが、一番この気温に参っていた。今なら殺せるだろう。

予想外の気温に、太陽の陽射しに吸血鬼であるコクウは項垂れている。黒の殺戮者の情けない姿。

普段昼間も出歩く変わり者だが、流石に砂漠の猛暑は駄目だったらしい。

付き合いの長いカロライが隣にいて水を差し出す。飲まない吸血鬼がミイラになる。もしかしたら灰になるかもしれない。

「おい、黒野郎。砂漠の上に放置したらてめえはミイラになるのか
って椿が訊いてるぜ」

「椿が望むなら俺はミイラになるよ」

「ククク！なれだつてよ」

あたしが返答しないことを良いことにヴァッサーゴはコクウを騙す。
勿論、これは黒の集団にはコクウの独り言にしか聴こえない。

あたしの向かいに座るナヤもあたしの隣にいる蠍爆弾も、あたしと
コクウを交互に視る。

完全にコクウの独り言だと確認して、コクウに心配の眼差しを向け
た。

「いつそミイラになってこの環境に対応しろ」

幻聴が聴こえていると思われるコクウにカロライはペットボトルの水をドバドバとかける。そんな水も数分経てば蒸発してしまう。
なんてくそ暑いんだ。

そもそもなんで冬なのに猛暑なんだよ。

地球そろそろおしまいか？

異常気象の度、あたしはそう思うが地球もまだまだ生きていて破滅
はまだまだ遠そうだ。

「ブフツ！頭大丈夫か？椿。地球の心配かよ。どうせお前には地球
は救えねえ、考えるだけ無駄だぜ」

煩いな。人間誰しもが考える無駄なことをあたしが考えてもいいだ
ろう。どうせ暑さに耐えるしか出来ないんだから。

「V、ずるいい。椿と話して、俺も話すう」

嫌だ。お前と話す気力がない。
ここに連れてきたお前は嫌いだ。

「てめえは嫌いだよ」

「うえ！？なんでえ？何処が？」

コクウがやけにうざい。

お前大丈夫か。

ジープに乗った一同の心の声は一致しているだろう。

ガタン、とジープが大きく揺れる。運転しているのは遊太。

彼だけはエジプトに何度も足を運んで、この気温には慣れっこのよ
うで鼻歌をしながら運転している。

「紅公、黒がなんか話しかけてんぞ」

「るせーよ。なんで隣にいんだよ、どっか行けよ！」

「お前さんが隣に座ったからだろ……」

話し掛けてきた蠍爆弾を睨み付る。

蠍爆弾はとぼとぼとあたしから離れ、ナヤとカロライの間に座った。

蠍爆弾がいなくなり、あたしの隣はレネメンになる。

「レネメン。マジックで涼しくして」

「お前：手品と魔法は別物だぞ」

レネメンも暑さに頂垂れていた。

レネメンの隣の火都の表情はいつもと変わらない無表情。それでも

「暑い」と呟いている。

「なあ、日を改めようぜ。日を改めようぜ。日を改めようぜ。日を改めようぜ……」

「うるせえ！！お前鬱陶しさが増すから黙ってる！」

提案じゃなく希望を連呼したらカロライがキレて声を上げた。

「うつせ！暑いんだ！」

「誰だつて暑いんだよ！騒ぐな！」

「んにゃー！暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い！」

「わかってんだよくぞ猫！」

「何とかしやがれ顔面ピアス！」

「気候が操れたら苦労はねえ！！！」

「暑いっ！カロライ、言い忘れてたけどお前の作品、最高だな！」

「なっ……いまっ……どのタイミングで言ってるんだ！？」

冷たい物を求めてジープをペタペタ触りながらカロライと口論していたら、不意にカロライの作品を思い出したので言えばカロライはギョツとし動揺した。

不意打ちに弱いらしい。そしていきなりの誉め言葉に真っ赤になった。

カロライをいじめる時はこの手を使おう。口論の最中に寝める。

あたしはペタペタと触り、冷たいものを探す。

冷たいものといえば。

「黒猫が猫になってるー」とナヤが笑う中、あたしは起き上がり、よつんばでコクウに近付く。

きよとんとしたコクウに触ってみれば、そこだけ温度が下がっていると感じた。

吸血鬼は妙にひんやりしている。

毛布を剥がしてコクウにびったり寄り添った。

「おっ……」

コクウは戸惑ったままあたしの行動を許す。

うん、少しマシだ。すがり付いて冷たさを奪い取る。気持ちが悪かった。

しかし、長くは続かない。

冷たさを奪ったことにより生温くなり暑苦しさが襲う。

「暑いっ！」

「……………」

べしつとあたしはコクウを剥がす。

ダランと中心に横たわるが、全然涼しくならない。

「コクウ。アメリカに戻ろうぜ。アメリカを滅ぼそう」

「おい、アメリカ国民とエジプトの猛暑を天秤にかけたコイツを見る。これでも可愛いと言うのか？」

「カロライはどこ見てんだよ。めっちゃ可愛いじゃん、ギャップ萌えじゃん」

「なんだ…？何の話だ？」

「お嬢さんの話かい？お嬢さんは世界一可愛いと思うっ！」

「蟻地獄にハマって死ね、アイスピック」

「アイスピック？ねえ、アイスない？」

「ねえよ、アイスピックしか」

「暑い……………」

「椿の魅力についての話？俺もするー。椿はさ、やっぱり誰よりも可愛いんだと俺は思う」

「してねーよそんな話」

「…………… なんだかんだ、元気だな」

ガヤガヤと話すあたし達を遠目で見て、レネメンは呟く。
アイスピックは遊太の隣にいる。

運転席の遊太があたしを呼んだ。

「なあ、椿」

「なに。オアシスでも見付けたの？」

「そんな格好だから暑いんだろ」

そんな格好とは、紅いコートのことだろうか。

日本と同じくらいの気温と言われたから冬服だ。普段通り、コートに短パン。

「なによ、脱げってこと？」

「脱ぐの!？」

反応して飛び起きたコクウ。

丁度足が向いていたので横になったままコクウの顔面をヒールで叩き付けた。

これでも中身は薄着だ。

エジプトの空港に着いた時点で下着同然のキャミソールの上にコートを羽織った状態。ニーソも脱いでほぼ真夏のビーチにいそうな格好だ。

「いや、そうじゃなくってさ。着替えれば？エジプトの服に」

「……………エジプトの？」

顔を上げて運転席に繋がる壁を見る。

すると車は停まった。

……………くそ。

あたしは小さく舌打ちを溢す。

やられた。脱ぐんじゃなかった。

しかし今更コートを羽織りたくない。

あたしは嫌々ながら、遊太に渡された衣装を切ることにした。

「……遊太。蓮真君が友達じゃなきゃボコボコにしてたわ」

「え？なんで？似合うじゃん。黒っちー！着替え終わったぜ」

「どう、レネメン。このエジプト風のマジシャンの助手的な格好」

「アンタ、手品に変なイメージ持ってないか？」

着替えはジープの中。黒の集団は追い出した。

見張りに信頼できる遊太とレネメンを選び、火都には覗きに動こうとする者を（特にコクウとアイスピック）射てと頼んだ。

着替え中、カロライの文句が聴こえたがまあ気にしない。

「くひゃ、似合ってるう！可愛い。このままオアシスへ行って一緒に踊りたいな。まるでジャスミンのようだ、君はお姫様みたいに素敵だぜ。嗚呼、君こそ俺のオアシ」

「カロライ。コクウが失神しかけてるわ」

遊太に呼ばれてすぐに顔を出したコクウは日差しを避ける為に頭から被った羽織りの中で目を輝かせ微笑んでわけわからないことを言い出した。

あたしはムツと睨み付ける。

あたしの格好はベリールダンサーの衣装同然だった。

ブラにストラップがついて、ヘソを出した腹の前に交差する。光沢の黒。前にストリットのスカート。

…完全にベリールダンサーの衣装。

違うのは武器を嵌めたベルトを腰や足に手につけていること。

それとエジプトの羽織りであるアバーヤ。これは前開きで紅色。

透ける生地で先程よりは快適なのだ。露出が高いのだから当然だけ

ど。

「……」

続いて顔を出したカロライは、あたしの格好をじっくり吟味するように見て、そして一言。

「ダンス、するの？」

「ああ、踊るぜ。お前の作ったこのパグ・ナウとカルドで血の舞を見せてやらあ！」

「おーとっ！」

頭にきてカロライ作のパグ・ナウの爪を出してカルドを握ってカロライをぶっ殺そうとしたら、ジープの後部に腰を下ろしていた遊太に羽交い締めになれ止められる。

「ほら、最後の仕上げ」

「仕上げ？」

じゃらつと何かをつけられた。

解放されて確認したら、首にはネックレス。なんだかクレオパトラがつけていそうなネックレスが首につけられていた。

ルビーのように情熱的な赤い宝石がある。

「初めてエジプトで盗った宝石。お守りの効果があるんだってよ」

「エジプト……」

何年前かにエジプトで高価なジュエリーが盗まれたと日本でも流れたニュースを見た気がする。古代からある貴重な宝石がなんたらって…。

まさかこれじゃないだろうな。

「まじでエジプトのお姫様みたいだぜ」

吟味してもあたしには高価な宝石と安い宝石の区別はつかない。そもそもかの有名な怪盗の遊太は安い宝石など盗まないだろう。

ネックレスを見ていれば、遊太が顔を近付けてニカツと笑みを向けた。

蓮真君と同じ、鼻がつくくらい顔を近付ける癖。蓮真君とよく似た顔立ち。

「……ありがとう」

なんだか怒る気もなくして、笑って礼を言う。

この兄弟には弱いな。

…今どうしてるかな、蓮真君。

俯いてぼんやり考える。

「つうばき？」

「……暑いっ」

今度はコクウが羽交い締めしてきた。日差しを浴びた羽織りが熱を持っていて暑いのでべりつと引き剥がす。

「おら、野郎ども！水飲まねーと持たねーぞ」

そう言ってジープの中の水をメンバーに投げ渡す遊太。

「こっからは徒歩だぜ」

「は！？」

「あん!？」

「ああ!？」

「ワア!なんてセクシーな格好なんだ!おじ」

ガツン。

流石に耐えきれなくなつて八つ当たりでアイスピックに回し蹴りを決める。

どうやら嘘でも冗談でもなく、本気でこの砂漠を歩かないといけないらしい。

あたしは遊太を睨み付けた。

「いや…泣きそうな顔をされても…。歩かねーと帰りは徒歩になるぜ?」

どうやら睨み付けるのは失敗したらしい。

泣きたい。泣きたいさ。

ただでさえじりじりと眩しく暑いと言うのに、歩くなんて。

初めのミッションと違いすぎる!

長い距離を歩いて帰るよりは近場だという目的地に歩いて行く方がましだと考えて、水分を十分に摂つて出発した。

ピラミッドが目印。というか目的地なのだが、眩しすぎるし気が遠くなるので足元を見て歩いた。

サラサラの砂が踏み締める度、絡んで負担をかける。猛暑も手伝つて徐々に体力を奪われるのを感じた。

「コクウ……」

「なあに、椿」

「命令聞いて」

「いいよ」

「おんぶ」

「いいよお」

「一番フラフラが何言ってるやがる。黒猫、着いたぞ」

カロライがコクウを殴る音が聴こえる。着いたと言われ、顔を上げてみればピラミッドが在った。

思っていたより迫力があって大きい。

初めてみたので、映画を観ていると錯覚してしまう。でもこの暑さがその錯覚を容易く打ち砕く。

感動に浸る間もなくまた俯いて歩いた。

「遊太は前にも来たんだって？」

「そ。その時はろくに下調べしなかったからすぐ出てきたんだけどさ」

足元を見ながら先頭の遊太に訊けば、あははと笑い声を上げた。普段通り笑っているのは遊太だけだ。

…ん？

少しだけ顔を上げて遊太の背中に目をやる。

「どうしてすぐ出てきたの？」

「トラップが多いんだ、ここ。古代の人間が財宝を守るために仕掛けた罠がわんさかで、とてもじゃねーけどオレ一人じゃ無理」

振り返り後ろ向きに歩きながら手を振り笑って話す遊太。

「だから古代遺跡で盗むの、楽しいんだけどな」

そう無邪気な子供のような笑みを溢す。

そんな笑みは置いといて。

「……………トラップって…侵入者を殺す為の罠？」

罠といえば、レネメンと会ったきっかけのガトリングの件を思い出した。あれは建物自体がトラップだったわけ。

それとあの廃墟。あんにやるうの仕掛けた様々なトラップ。ちよつと不愉快。

「そ！ばねーのなんのって。超ウケるトラップでき、対処法わかんねーから引き返すしかなくて」

「遊太。もう行こう」

楽しみに話す遊太にコクウは遮るように急かした。急かさなくとも足は止めていないと言うのに。

それにしても遊太は怪盗というより冒険家のような格好だな。

「！」

口を開けたままの入り口に入れば、少しだけひんやりとした空気に包まれる。

外と明らかに気温が違う。

日光に照らされていないせいかな？

「なるほどな。黒野郎の狙いはアレか。つか、なんでまたアレを狙うんだ？」

ボソリと珍しくヴァッサーゴが独り言を洩らした。

「アレって？」

あたしはつい聞き返す。

しかしヴァッサーゴの返答はなく、コクウと数人が反応してあたしを振り返った。

「ここに何かがあるの？コクウ」

ヴァッサーゴが答えないので直接本人に訊く。

「宝だつて」

「それは知ってる。どんな宝なの？」

「世界に一つしかない宝さ」

「どんなのつて訊いてるのよ」

「まあ、見てのお楽しみ」

暑さの苛立ちから解放されたのに、曖昧にするコクウにイライラする。

「どんなのかわからなきゃ見つけれないでしょーが」

「大丈夫大丈夫、宝って感じで飾られてるはずだぜ」

何か引つ掛かるものを感じてコクウを凝視。

するとナヤに灯りをつけたランプを渡された。

「殺人トラップあるのに貴方達は大丈夫なの？」

「え？黒猫が守ってくれないの？」

「ただのお荷物じゃない…ナヤ」

「ニュースは現場で見付けるんだ！」

「あーはいはい」

非戦闘員のナヤとカロライ。デイフォみたいにパスすればいいのに。ナヤは情報を手に入れるためだが、カロライは何のために来ている

んだらう？カロライに目を向けた。
カロライは無線機の説明をしている。
コクウと武器を面倒見るためだらうな。

「くれぐれも壊すんじゃないぞ。万が一はぐれたら出れなくなる」

「そんなに難しい迷路なのか？」

「迷ったら出れなくなるさ」

「遊太から離れなければ平気だよ。じゃあ行こっか」

とりあえず、トラップを全員で回避しつつ、遊太についていくという手順。

この団体行動は実に楽しくない。

来なきゃよかった。

まあ、楽しい仕事はないんだけどさ。

雑談を交えながら砂の上を歩いてピラミッドの中を進んでいく。
太陽の光が届かない奥は何処までも暗い。お化け屋敷に入った感覚。
そのお化け類に入る者と共に歩いているのだが。

吸血鬼に悪魔。

…あれ？

こんなことを考えるとヴァッサーゴが笑い出すのに、沈黙をしている。

おい、ヴァッサーゴ？

頭の中の悪魔を呼んでいたら、黒の集団がする雑談の中からカチャリという音が聴こえてきた。

誰かはわからないが、トラップを踏んだらしい。

あたしの横にあった壁に穴が開く。

何かが出てくる前に隣のナヤの頭を掴み、一緒にその場でしゃがむ。

ザン！

「！」

ガキンッ!

まるで道を塞ぐように三つの槍が飛び出し突き刺さった。一番下の槍に刺さりそうだと理解した瞬間にカルドで受け止め、身体をずらし避ける。

「うわ……間一髪……」

あたしの後ろにしゃがんでいたナヤは最後の槍に危うく貫かれるところだったが、あたしが一時受け止めたおかげで脇の間に槍が刺さっていた。

まだ終わっていない。

天井にいくつもの穴があることに気付く。

前後に三メートルくらいある。これはまずい。

「走れっ!!」

ナヤを立たせ声を張り上げた。

一同は悟り駆け出す。

本当に間一髪だった。

無数の頑丈な槍がその空間を貫く。

あたしは兎も角、ナヤが間に合わなかったがコクウが引つ張り、投げ飛ばす勢いで救った。

「くひゃあ……こりゃ頑丈な槍だ。帰りはマイキーの爆弾で吹っ飛ばすか、レネメンの手品で切るかだな」

「帰りの心配より宝に辿り着く心配をなさいよ。最初からこんなトラップなのよ? ナヤが死ぬんだけど」

「え、死ぬの確実?」

槍の頑丈さに感心しつつ暢気に笑うコクウに呆れて言う。誰も受け止めてくれなかったナヤは砂まみれでギョツとする。

「遊太、前に来た時はトラップは避けたの？」

「いや……」

先頭にいる遊太は前後を交互に視て、可笑しな回答をした。

「その槍のトラップもこの先のトラップ数個は引っ掛かったんだけど」

トラップはトラップ。

仕掛けられた罠である。罠は一度きり。仕掛け直さないと、罠の機能は発動しないのが数多だ。

引っ掛かった。

遊太はそう言った。

つまりそれは、誰かが罠を仕掛け直したという意味だ。

あたしはギロリとコクウを睨み上げた。

「どうゆうこと？誰かが宝を守ってるの？」

「宝は何かに守られてるものだけ？椿」

コクウは悠然に微笑んで肯定の言葉を返す。

そんな彼に込み上がる苛立ちを息を吐いて吐き出す。頭が痛くなりそうだ。

「驚かしたいのはわかった……敵がいるならいるって予め言わねーと仲間が死ぬんだ。それでもリーダーか？あん？」

白瑠さんがあたしを驚かそうと直前に何かを言うてくるのと同じ。

コクウは何かを伏せている。それは遊び心で。本当にこの二人は似ている。

しかし、今は遊んでいる場合ではない。マジでナヤが死ぬ。すると、そのナヤが口を開いた。

「敵はいないよ、黒猫」

顔についた砂を払いながら、黄緑の瞳であたしを見上げてナヤは言う。

「ボクの調査によるとこのピラミッドにきた人間は遊太以来いない。地元の間人だつて近付かないピラミッドだ。そもそもこのピラミッドの中に宝が在るって知る者はほんの一部。あまりのトラップの数に科学者もトレジャーも来ないんだよ。トラップで死んだ人間は多いらしい、詳しい数まではわからなかったけど」

ペラペラと自分のかき集めた情報を口にして、ナヤは最後に付け加えた。

「まさに呪いのピラミッドなんだよ、ここは」

呪いのピラミッド。

そう言えば、ピラミッドが舞台の冒険物の映画、好きだったな。

あれも呪われてて、確かそう、ミイラが甦って、そいつと戦う内容。

呪い 呪いの指輪 悪魔の指輪 悪魔。

呪いと連想するのは、黄色いダイヤの指輪。悪魔の指輪。悪魔のメモリー。

悪魔が封じられたメモリーは存在する。

ヴァッサーゴもその一匹。

ヴァッサーゴが閉じ込められていたメモリーを調べた人間がいた。

しかし、ヴァッサーゴはどんな人間がメモリーを開こうが、何の動きも見せなかつたらしい。男でも女でも赤ん坊でも老人でも。まるで嘲笑うかのようにこちらを見る姿を時折見せるだけのヴァッサーゴは”沈黙の悪魔”と呼ばれるようになった。

普通悪魔は、メモリーから抜け出そうとメモリーを開いた人間を殺すか或いは契約を持ち掛ける。

ヴァッサーゴはそれをしなかった。

沈黙の悪魔はいつしか悪魔の指輪に変わり、吸血鬼の目を盗んでは裏の深い水の底で高値で売り買いされていた。

そして。

たまたま成り行きであたしの手元にきて、メモリーを開いたら、ヴァッサーゴが沈黙を破った。

ヴァッサーゴは喚いた。悪魔は視覚からあたしの頭の中に入り込み、頭の中で喚き暴れたのだ。

悪魔退治の吸血鬼が駆け付けて封じたのだが、半年も持たないうちにヴァッサーゴは出てきて悠々自適にあたしの頭の中に住み着いている状態。

こんなことを考えていてもヴァッサーゴのちよっかいはない。なんであたしの時に沈黙を破ったんだか。

今は関係ないと忘却しておく。

「じゃあ誰が罾を仕掛け直したと言うの？」

「まあ、そんなのいいじゃん。この先にトラップがある。それだけだろ？くく、ナヤは俺が面倒みるからさ。遊太、次は何がでる？」

「次は落とし穴、だったぜ。まっ！皆、死なねえように楽しめよ」

コクウに背中を押されて質問を流された。とことん秘密にするつもりだ。

秘密を知る遊太はなんとも気楽に一同に呼び掛ける。

黒の集団は不安げだったり怪訝そうだったり無表情だったりそれぞれ

れの顔で遊太に続いて歩き出した。

どうやら秘密を知るのは遊太とコクウだけのようだ。ナヤは今喋った情報しか握っていないみたい。

一体何があるのか気になるし、隠されるのは腹立たしい。

本当に、ムカつく。

黒の集団の目的を知らないあたしだけが茅の外だ。

あたしは何のために黒の集団に入った？

そんなの、ただの成り行きである。

あたしがここにいる理由は？

それも、ただの成り行きである。

流されて流されて流されて、今に至る。

自暴自棄になっているせいかもしれない。もう少し考えて行動しよう。

軽く反省しつつ、トラップだらけの通路を歩き始めた。

トラップは思っていた以上に多く殺傷力の高い物だった。

おかげでスリル満点のお化け通路を無我夢中で走るようになってくたきた。

槍は飛ぶは、地面は開くは、天井は降るは、刃は落ちるは、地面から刺が生えるは、硫酸が降り注ぐは、丸い岩が転がるは、斧が道を塞ぐはもうトラップ地獄。

それを楽しんだのは、本当にコクウと遊太だけだった。

「はぁ……見張り…見張りにしよう。ナヤとカロライはここで見張り」

「勝手に決めるな」

「うおーい、お荷物みたいに言うなよー黒猫お」

「これ以上庇うのは無理よ」

全力で疲れた。

ピラミッドの中心であろう空間に辿り着いて、一息つく。ピラミッド

ドの中心に着くまで歩いた。

あたし達が出てきた入り口の他に三つの入り口がある。そのどれかの先に宝があるのだろう。

遊太は知っているのか？それとも三つに分かれて探すのだろうか。

それこそ宝について話してもらわないとわからないではない。

どうするのか訊こうとした、その時。

「あっ……！！！」

遊太が声を漏らした。

何やら不味いものを今更思い出した様子だ。

「やべ！ここ床が開くんだった！」

反省の色もない、ただただ忘れていた事実を遊太はあたし達を振り返って言う。

その言葉を一同が理解するより前に、足元が消えて無くなった。

パカ。

そんなコミカルな音に腹立つ前に、浮遊感がぞわりと駆け巡る。

落ちていく。

真下へと落下する。

身体の中身を置いていつてしまったような錯覚。悲鳴を上げる隙なんてなかった。

開いた床。灯りが何一つないその闇に呑まれた。

ガツンッ！！

地面に着いたのか、足が着いたが着地に失敗した。誰かが痛みで悲鳴を上げる声と身体をぶつける音しか聴こえない。それと誰かのランプの光が数個。

それが消えてなくなるのとはほぼ同時、前方にも穴があるのか落ちる。今度は真っ逆さまに落ちる形になった。

これじゃあ頭を打つ。
受け身を取ろうと手を出すが、真っ暗闇で自分の手しか微かに見えない。

「っ！」

壁に手を着いてしまい、そのまま身体は落下するので手首を捻ってしまう。

「クソ！」

誰かの声。

武器を出して壁に突き刺しブレーキをかけようと思ったが、下手をすれば味方を殺すことになる。

ドスッ！

ガンッ！

今度は背中を打ち、続いて頭を打ち付けた。かなりの衝撃。打ち所が悪く、あたしは気を失った。

夢を見た。

すごく泣きたい気持ちに襲われる。

どうして。

いつの間にか、温もりがあるんだ。

目が覚めましたか？ 椿さん

目を開けば、幸樹さんが微笑んであたしを見下ろしていた。

つーばちゃん大丈夫？

白瑠さんも、あたしの顔を覗き込む。少し心配そうに聞く。
大勢の人間の血を浴びていたのに。

ストレスで倒れちゃっただけですよ。気分は？椿さん

解せなかった。わからなかった。

殺人を犯したのに。大勢の人間の血を浴びたのに。

どうしてあたしは温もりを手に入れているのだろう。

どうしてあたしを心配して見つめてくれる人がいるのだろう。

酷く、それは理解できないことだった。

.....。

ベンチで幸樹さんの膝の上にあたしは寝てた。白瑠さんが顔を覗いて頭を撫でてくれる。

いつも凍えていたのに、温かい。

温かい場所にいる。

温かい人に優しくされている。

喉が痛い。視界が滲む。

あたしは掌で目を隠した。

あたしは知ってる。

温かい場所なんて、長続きしなくて、すぐに消えてなくなる。それでまた凍える。

それを知っているから、温かい場所にいたくない。

だってすぐに凍える。

失望が苦しい。

だから。だから。だから。

嫌なんだよ。

何度も。何度も。何度も。

何度も。何度も。何度も。

なのに、あたしは。

大丈夫……。

お兄ちゃん。

あたしは起き上がって笑いかけた。

白瑠さんがはにかんで笑い、あたしの左手を掴んで立たせた。

幸樹さんがあたしの右手を握って歩き出す。二人に手を引かれていく。

ズキズキ、と痛い。

胸の奥。ずっと奥。

無くなる恐怖に怯えてる。

あたしはそれを振り払う。

幸樹さんと白瑠さんの間から、藍さんと由亜さんが見えた。

あたしは。

あたしは。

あたしは、冷たい場所に突き落とされてもいいからと、手を伸ばした。

あの人達に手を伸ばした。

温かい場所に手を伸ばした。

必ずくる痛みを

覚悟したフリをして。

あたしは手を伸ばした。

「おい！紅公！」

夢は肝心なところで終わり、無理矢理起こされて目を開く。
嫌な…夢。

揺らめくランプで見えたのは暗闇とそれから、蠍爆弾だった。
違和感のある頭に触れば、血に触れる。しかし痛みはない。もうヴ
アッサーゴが治したみたいだ。違和感はその血だ。
身体を起こして、周りを確認する。

確認しながら、あたしは冷静に今の夢について考えた。

過去を見る夢は、現在の問題点を表す。

全てはあの日の決断が悪かったのか。

あの日、後にくる痛みを覚悟したフリして、二人の温もりを受け入
れた。白瑠さんと幸樹さんの、温もりを受け入れたんだ。

怖くて気持ち悪くなるぐらいの気持ち良く温かい優しさ。

それから藍さんに由亜さんと増えて　そして失った。

そして壊れて。

そして突き落とされた。

「おい、紅公！大丈夫か？」

「…大丈夫よ」

顔を押しさえ、髪をくしゃりと掻き上げる。砂が混じっていて苛立つ
がそれは息と一緒に吐き出す。

「…他の皆は？」

「どつやはぐれたらしい」

蠍爆弾はランプを持ち、天井を見えるよう照らした。

穴の空いた天井。

そこからあたしと蠍爆弾は落ちたのか。気配からしてあたしと彼しかいない。
落下途中のへんてこな壁によってそれぞれ違う穴へと誘導されたようだ。ピラミッドの地下、になるのか。

「紅公…無線機は？」

「……………」

「…壊れた」

「……………」

蠍爆弾に問われ、無線機を出してみれば見事に壊れていた。沈黙していれば蠍爆弾も自分の壊れた無線機を出す。互いに着地に失敗し落下の衝撃で無線機を壊したらしい。

あーあ。カロライが煩いぞ、これ。

「ピラミッドの大きさってどのくらい？」

「あ？…さーな。大きんじゃねーの？」

「ここが真ん中だと仮定して……………うまくいけばすぐに合流できるはず」

ピラミッドの構造は知らないが迷路になってさえいなければ多分、バラバラになったメンバーと合流できるはずだ。

「迷路になつてなきゃいいんだけど……………」

「なんで合流できるってわかるんだ？」

「ランプの光。多分、四つに分かれて落ちたはずよ。いりくんできゃ出会うはずよ」

「余裕あつたんだな」

苛立ちが戻ってきてあたしは蠍爆弾を睨み上げた。

「……………チツ。なんでてめえと一緒になんだよ」
「……………仲良くしようぜ？」

冷ややかな殺気を放ってから歩き始めればランプを持った蠍爆弾も着いてきた。

どうせなら火都かレネメンが良かったのに、よりもよってコイツと二人つきりとは…。

「なあ、なんでおれさんを毛嫌いすんだ？紅公」

「……………」

落下地点に何か罠を仕掛ければいいものの、どうしてあそこはただ落とすトラップしかなかったのだろうか。

通路を歩いてもトラップはないみたいだ。

妙だな。

映画みたいに訳のわからない暗号がないのではっきりは言えないが、宝まであと一歩ということなのだろうか。映画だったら宝に辿り着く前にとんでもないトラップが出たり、宝をとった途端にトラップが発動したりするものだが。

この現実の場合どうなんだろう？

あのトラップの山を乗り越えたのはあたし達が初めてじゃない。

そうだ。

遊太も落ちたんだ。

落ちなきゃ、あそこで落ちるなんてこと知っていなかった。

遊太も落ちた。でも遊太はトラップの多さに諦めたと言っていた。だから、この先もトラップがあるはず。

油断ならないな。

「先ず一つ」

沈黙を返したが蠍爆弾が返答を待つので口を開いてやる。

「お前が爆弾使いだからだ」

「……………んー…」

嫌われている要素を知り、蠍爆弾は首を捻った。

それはどうしようもできない。

蠍爆弾は有名な爆弾使いの殺し屋。

あたしに好かれたいからと爆弾使いを辞めれない。

秀介ならやりかねなそう。…でも秀介にとって狩人は夢でありプライドであり信念なのだから、それはないか。

「二つ。近距離でミニボムを放ったからだ」

「それ……………ありやあ仕方ねえだろうよ！お前さんが暴れる…から…
……………すみません……………」

反論しようとしたがあたしが表情を変えないせいか、声は弱まり最終的には謝罪した。

「なんで爆弾使いが嫌いなんだ？」

その問いに、凍りつく。

凍てつく吹雪の中のように、心情では冷たさが広がっていく。

暑さなんて忘れた。温かささえも思い出せない。

掌の血が気になって擦る。

異常現象の猛暑だというのにピラミッドの中はクーラーをつけたかのように冷えていた。

「ムカつく野郎が爆弾使いだった」

あたしは冷たく吐き捨てる。

「ムカつく野郎が近距離でミニボムを放った」

無感情に近い凍てつく声。

「だから爆弾使いは嫌いなんだ」

込み上がる殺戮衝動。今すぐにも殺してしまいたいが、黒の集團のメンバーである蠍爆弾を殺してはいけないと堪える。自制する。一週間殺しをしていなければ確実に蠍爆弾の首を跳ねていただろう。

「……あー……。そりゃあ……ムカつく野郎を思い出させて……悪かったが……。外見も性格までおれさんと同じってわけじゃねえんだろ？ だったら仲良くしようぜ？ 紅公」

頭を掻いてから子供をあやすように言う蠍爆弾。

頭にくるが蠍爆弾からしたら傍迷惑な話なのだろう。

仲間であるあたしに毛嫌いされてはやりにくい。

「あたしは――一応（、）黒の集團に属してるだけだ。仲良しごっこはしない」

「……。あのなあ、紅公。……いや、うん、なんでもねえ」

何かを言いたげだったが蠍爆弾は何言っても無理だと判断したのかやめた。

不機嫌である今は、何言っても無駄だ。

「てか、紅公。それしまってくださいよ」

不機嫌だからこそ少し怖いのか蠍爆弾は、あたしが握るカルドを指
差す。

不機嫌ならば殺されかねないと思ったのだろう。

仲良しごっこはしないと云ったのだ。それから不機嫌故に大暴れし
たのを目の前で視ていたのだから怯えている。

「遊太はこの先もいつたはず。それでもトラップが多くて引き返し
たのよ？油断できない」

「あー、なるほど。…でもさっきより…トラップは無さそうじゃな
いか？」

蠍爆弾は前方の闇で視えない先をランプで照らそうと手を伸ばす。

それでもいつまでも続く通路の先は暗闇に包まれている。

足を止めてみれば、静寂が不気味に広がった。

音が聴こえない。

メンバーの声も、足音も、トラップが作動する音も、何一つ聴こえ
ない。

「……………妙だな。静かすぎる」

「そうか？」

「…アンタは……………」

ただならぬものを感じて警戒体勢に入るが、隣の蠍爆弾は完全に無
警戒。少しは警戒しやがれ、と言おうとしたが。

「……………?」

「ん?どした?」

蠍爆弾に目を向けたら、妙な物が目に入った。

それは別にピラミッドならば不自然ではない。寧ろピラミッドにあるのは当然なのだ。

ミイラ。

カラカラに干からびた人間の身体。目玉なんてない。顎は外れていた。男か女なんかわからない。

しかしそれは紛れもなく、ミイラだった。

蠍爆弾の横の壁にミイラ。

いや、でも。と思いつく。

先程も目を向けたが、そこにミイラはいなかったはずだ。

冷静に考えて、気付く。

ピラミッドにミイラはセットみたいなものだ。でも、ミイラはこんな風に通路に飾られていただろうか。

博物館とは違う。

見せびらかすために飾られているはずはない。そもそもピラミッドは墓場だ。詳しい構造は知らないが、ミイラはどこかの部屋でまとまって保管されているはず。…テレビで得た情報だから本当はどうかわからない。

訂正しよう。

そこにミイラがいるのは不自然だ。

誰かが墓場から持ってきて置いたとしか考えられない。

一体誰が？

そんな疑問が吹き飛ぶ光景があたしの目に映ることになる。

ギギギ。

干からびた腕が引きちぎれるのかと心配したがその乾燥した身体は案外脆くないらしい。振り上げられた腕。そこには銀色に光る刃が在った。

ミイラが動いた事実には驚くより前に、その刃に反応して、蠍爆弾の肩を掴み突き飛ばす。

あたしは降り下ろされた刃を後ろに飛んで避けた。

ザン！

刃は砂を貫く。

体勢を整えた蠍爆弾の元に飛んで、携帯懐中電灯を点けて敵を確認する。

ミイラ。ミイラだ。

あの細い身体は間違いない。着ぐるみでも特殊メイクでもないだろう。

ミイラが動いている。

そこに立っていて、今蠍爆弾を殺そうとしていた。

「おい……こりゃあ……レネメンの悪戯か？」

「……だったらいいけど」

戦闘体勢になりつつも混乱は隠せない。

レネメンの悪戯にしては容赦なく刃が降り下ろされた。レネメンの手品なんかじゃない。

動くミイラは一匹じゃなかった。

懐中電灯で照らした闇の中。

それぞれ武器を手にしたミイラがそこに立っていた。気付かなかったのが信じられないぐらいの数が亡霊のように佇んでる。

亡霊、といえば亡霊なのか。

有り得ない光景に目を疑う。

まだ夢の中ではないかと意識を疑う。

有り得ないだって？

すぐに自嘲の強がりである笑みを浮かべる。

有り得ないことなんて裏現実に入ってから何度経験した？

現実離れしたそれこそ映画みたいな有り得ないことは何度もこの眼で視た。

電車の中の五十の死体と血の海、掌だけで頭を粉碎する光景、大昔から闇に生きる吸血鬼、今もなお人間を惑わす悪魔。

ミイラが踊ったって、世界は引っくり返ったりしない。

黒の殺戮者と恐れらる吸血鬼の微笑を思い出す。
驚いた顔を見られなくてよかった。
そこで頭に住み着いた悪魔の笑い声が木霊した。

「ククククッ」

吸血鬼が存在するのは悪魔の力によるもの。
悪魔は契約すれば人間になんでも与える。
それで人間が吸血鬼になった。

悪魔。

裏現実者しか知らない秘密の中に、ミイラは動くというのがないならばこれは悪魔の仕業だ。

「…蠍爆弾。ここにある宝は 一体なんだ？」

じり、と体重を踵に乗せる。

「 黒の話じゃあ…悪魔の力が宿った宝石らしい」

ビンゴだった。

「走れ！！」

ダツと、ミイラ達に背を向けて駆け出す。

恐らく、コクウは遊太から聞いてミイラが動くことを知っていた。
それをあたしを驚かせる為に黙っていたのか。

全く、スケールのでかいこと。

こんなところで白瑠さんとコクウの違いが出るとは。

もう少しスケールを小さくしていただきたかった。寧ろサプライズをするな。

落ちた先に動くミイラが宝を嚴重に守っていたから遊太は諦めた。
納得だ。

一人で乗り込んでミイラに囲まれたら逃げたくもなる。

「どっかに上に戻る出口があるはずだ！」

「それってどこだ!？」

「知るか!探せ！」

走っても走っても緩やかなカーブの通路がひたすら続く。出口もメンバーも見付からない。

ビュン!

あたしと蠍爆弾の間に投げられた槍が飛んできた。
振り返る。

ミイラ達が槍を投げる構えをしていた。

まずい!

急ブレーキをして、カルドとパグ・ナウを構え、槍を迎え撃つ。
弾き、叩き落とし、避ける。

槍の雨を無傷に対処でき、また走り出した。
どうする?

この暗闇であの得体の知らない者と戦って勝利できるとは思えない。
やれば出来そうだが、蠍爆弾が持つかはわからない。

あたしは悪魔がいるが、こいつは普通の人間だ。

「おい!足元気を付ける！」

そこでヴァッサーゴが声を上げた。

少し遅く、あたしはカチリと何かを踏みつける。

上にあつたトラップとは違い、直ぐには作動しないタイプ。

あたしは動きをピタリと止めた。

音に気付いて蠍爆弾も足を止めて、あたしの踏みつけた物を見る。

そこにあるのは、地雷。
足を上げた瞬間に爆発するタイプの地雷だ。吸血鬼じゃなければ回避不可能。
爆弾使いの蠍爆弾の表情からして、飛んで離れてもダメージを受ける破壊力だろう。

「行け！」

あたしは蠍爆弾に行くように言う。

流石にヴァッサーゴもこの地雷の爆発からあたしを守れないだろうから、無傷にいられないのは覚悟してミイラと心中するか。

蠍爆弾がそれに巻き込まれないやうに距離をとってもらわなくては。

「女に二度も守ってもらったのに逃げれるか！」

しかし蠍爆弾はこの場を離れない。

「仲間は見捨てねえ！」

そしてあたしの肩を掴む。

あたしの身体を引っ張るのと同時に何か丸い物と蠍型のボムを放った。

ボムが先に爆発する。

そして、カチリ

地雷の爆発。

ドオオン！

耳元でドラム缶が破裂したような爆音が響く。

ピラミッドが爆風で軋む。

しかし、微かな振動を感じただけで、砂の上に倒れたあたし達に爆風はこなかった。

視てみれば、そこには壁が。

唐突に現れた壁が目の前に存在していた。
なんだ？これ。と不透明な壁に手を伸ばしたが、蠍爆弾に止められる。

「触らねえ方がいい。くつつくぞ」

「…これ何？」

「接着剤」

接着剤？

不透明な壁の正体があまりにも意外なもので驚く。

「この玉をボムで爆発させ、粘膜のように壁を張ることで、バリアになる。接着剤つーのは頑丈なんだぜ？」

二、と笑みで蠍爆弾は簡潔に解説した。片手には先程投げた玉と同じものを手にしてる。

接着剤の壁で地雷の爆風を防いだ。

「すごいじゃん。カロライの作品？」

「おれさん考案。カロライ作」

「サンキュ」

笑い返してから蠍爆弾の手を借りて立ち上がる。

そこで一つの気配に気付く。

「樁みつけえー」

壁の向こうに、コクウがいた。不鮮明だが声と黒い服からしてコクウだと判断する。

どうやら今の爆発で壁が崩壊し、そこから出てきたようだ。

「なんでバリア？……ああ、あれか。レネメン」

コクウが首を傾げたが、爆風で吹っ飛んだはずのミイラがまた立ち上がったらしく、レネメンに指示する。

レネメンが何したかはわからないが、バタバタとミイラは倒れたようだ。

「マイキー、穴開けてこつちに来なよ」

コクウの言葉に従い、壁を爆弾で破壊してコクウ達と合流した。そこにはカロライもいた。

「…遊太達は？貴方なら探せるでしょ」

「んー、生憎ミイラの臭いが強烈でわっかんないんだあ。椿達も爆発で気付いたんだよ」

「一本通行で同じところをぐるぐる回るから壁をぶっ壊そうと話してたところだったんだ」

状況を楽しんでるコクウを睨みつつ、レネメンの言葉に自分達も同じところを歩いていたことを知る。

「そうね、壁の向こうにいと判断するべきね。…貴方達のところにもミイラが出たの？」

「お前達のところ程じゃあないから瞬殺しておいた」

カロライが答えるが、カロライが瞬殺したわけじゃないだろう。コクウがあたしの顔を見つめていることに気付くがあたしはしれっとした態度で知らん顔をする。

「まずは合流するべきね。壁を破壊して行けば会えるみたいだから、蠍爆弾」

「あいよ」

勝手に指示してからコクウに目を向ければ、彼はあたしの顔ではなく露出した肌を視ていた。

胸元から腹部まで。吟味するように視ていた。

腹に蹴りをお見舞いしてやる。

「あつれえ？ 椿、ミイラのこと訊かないの？ それともVにもう聞いたのかな」

「……」

ヴァッサーゴは笑うだけで何も言ってこないが、これに悪魔が絡んでるのはわかってる。または悪魔の類い。

呪いが実在するなら、あたしはとうに呪い殺されているのだから、悪魔絡みだと願いたかったり。

万が一、壁の向こうの仲間にあたっても軽傷で済むように小さなダイナマイトで、確実に壁だけを壊せるように仕掛けた。

ドカン！と爆音を聴きながら、あることに気付く。

先程の地雷は、ピラミッドに仕掛けられているのは可笑しい代物。なんであるんだ？

それに死者が出てるにも関わらず、その死体が見当たらない。

どうゆうことだ？

「……」

「……」

「……」

「……コクウ、落ちて？」

「それが命令なら、喜んで落ちるよ」

「止せ、向こうの壁を確認するぞ」

壁に穴は空いたが、通路には繋がらず、代わりに下にぽっかり空いた穴が現れた。

果てしない闇の穴を一同で見つめたが、カロライがコクウの突き落としを阻止して振り返る。

そこに。

大きな短剣を振り上げたミイラが、そこにいて、振り下ろした。反射的にあたしは後ろに飛んだ。

ヒヤリと焦りが走る。

自分が自ら穴に飛び込んだという事実瞬間的に気付いて、咄嗟に壁を掴もうとした。

が、掴んだのはカロライの腕。コクウがミイラの干からびた顔に蹴りを入れ、あたしの腰を掴む。レネメンもあたしを引き上げようと肩を掴んだ。カロライが踏みとどまろうとしたが砂で滑り、あたしと一緒に落ちる。蠍爆弾がカロライを掴み、コクウとレネメンと一緒にあたし達を引き上げようとしたのだが。カロライと同じく、足場が悪く、滑り、穴の中へと落ちる。

本日二回目の落下。

ドガガガ！

「おっ。見つけたあ。皆迷子になってるかと思って心配してたんだぜ」

コクウが下敷きになってくれたおかげで衝撃は比較的軽いものなんです。のだが、舌を噛んでしまった。

真下からきた風が、何故か迎い風が変わる。

前を視てみたら、陽気な声で遊太が笑っていた。

ガタンゴトン。

あたし達は奇跡的に遊太に乗った走行中のトロツコに落ちたみたい

だ。

「黒猫…貴様…」

小さいトロツコの中、窮屈に四人の男が入っている。頭でも打ったのかカロライが頭を擦り、あたしを睨みつける。

真っ先に落ちて三人を道連れにしたあたしはコクウに庇われ、軽傷だという事実にも苛立ってるようだ。

「……舌、噛んら」

口を開けて、血で真っ赤になった舌を見せた。もろ噛んで舌は重傷。遊太のランプであたしの舌は一同にちゃんと視えた。

カロライは沈黙。レネメンと蠍爆弾は苦笑。遊太は「痛そう」と顔を歪ませた。

「見せて。貸してみ」

あたしの下にいるコクウはあたしの肩から顔を出し、あたしの顎を掴み、躊躇なく唇をつける。

口の中の血を舐めとり、舌の血を吸いとった。

そんなコクウとあたしのキスシーンともいえる光景を、遊太も蠍爆弾もレネメンもカロライもしっかりと視てしまう。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

なんとも言えない空気になる。
そんな空気を作り出したコクウはきよとんとわざとらしく笑みで首を傾げた。

「どうかした？ 椿。キスは初めてじゃないだろ。人工呼吸したじゃん」

「人工呼吸？ 椿、溺れたの？」

それを言われ、思い出す。

そういえば人工呼吸されたんだ。必然的に唇を重ねたのだろう。

「ちよつと心臓が止まっただけよ」

「ふうん？ じゃあ黒っちは命の恩人？」

「そうだねえ」

「……………」

命の恩人。それは気に食わない。

膨れっ面をする。

そういえば、ヴァッサーゴの奴は何故早く怪我を治せなかったのだろうか。

危うく死ぬところだった。

あたしが死ねば、確かヴァッサーゴも死ぬのではなかっただろうか？

おい、V。

……………。

無視かよ。

「……………遊太。これ、何処行ってるの？」

「さあ？ ずっと走って一向に着かないけど、まあいいんじゃないか。そのうち止まるっしょ」

闇の中を走り続けるトロッコ。
ずっと乗車している遊太はなんともお気楽に構えていた。

「行き着いた先がまた穴だったらどうする？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「降りましょう」

「降りるへ」

「降りようぜ」

「降りよう」

「降りよっか」

「…どうやって？」

行き先に不安を感じて一同の意見は一致した。しかし、遊太の疑問に誰も答えられない。

軽いスピード違反の速度で走っているトロッコは、どうやらブレーキがないらしい。飛び降りたら怪我する。

ヒューンと風を受けながら、誰かがいい案を出すまで一同は沈黙した。

それが不味かったようで、前方に光が見えてきた。どうやら終点。

ガツツツン！

一か八かで飛び降りようと腰を上げた瞬間に、トロッコが何かに引っ掛かり問答無用の急停止をした。

当たり前のように法則通りにトロッコからあたし達は投げ飛ばされる。

遊太は背中を向けていた為、受け身が取れず背中から着地。カロライも受け身が取れず二人で「うっ！」と短い悲鳴を出す。

あたしは遊太を潰さないように手をつき、勢いを殺すため二回前転して上手く着地をする。

コクウは長い足二本で悠然と着地した。

レネメンもカロライを潰さないように横に転がって着地。蠍爆弾も受け身をとって無事着地する。

「…おい、無事？」

「うぐ……むち打ちい……」

「いつつ……」

「おれさんは無事……」

「大丈夫……だ……」

「俺の心配？嬉しいけどお……樁い、後ろ視てみなよ」

遊太とカロライは倒れたまま。そんな二人の間に立つコクウが、笑みであたしの後ろを指す。レネメンと蠍爆弾が唾然とその方を視ていた。

言われるがままに後ろを振り返ってみる。

何の灯りかはわからないが、この空間　　巨大な部屋は明るい。

おかげでよく視えた。

玉座のような踊り場に続く階段が視える。

そこに行かせまいと立ち塞がる武装したミイラが数多、視えた。

「ああ　　あれか。今回の標的」

あたしはそんなミイラを見据えて、静かに呟く。

その場に不気味な程響いた。

立ち上がり、ミイラと対峙する。

階段の向こうに、宝らしき物が在る。あれが標的。

「要は　　このミイラをぶっ殺してお宝を戴けばいいのよね」

カルドを抜き取り、パグ・ナウの爪を出す。

ニヤリと不適な笑みを向けてもミイラ達は何も感じていないだろう。

「え？つば……き？」

あたしの顔が視えていない彼らは困惑している。あたしを呼ぶのは遊太。

くるり、とカルドを回してからあたしは行動して答えを示した。

身を屈め、足をバネにミイラの中へと飛び込む。

密集していたミイラの一匹に飛び込めばドミノのように倒れた。

倒れなかった身近なミイラにカルドを振り上げて切り裂く。

爪で三体を引き裂いた。

その三体を踏み台にミイラにもう一度突っ込む。

ザザンザザザザザッ！

乾燥した身体を引き裂けばそんな音が鳴り響く。血は吹き出ない。

それでもばたばたと切り裂いたミイラは倒れる。

「……………つまらない」

「え？そうゆう問題！？」

半分を倒してあたしは一息ついて漏らす。

それにツッコミを入れるのは遊太。

別に血を噴き出させるのが楽しいわけではないが、こつも手応えがないとつまらない。萎える。

とりあえず全部をぶっ倒す。

簡単に全部を倒せた。

「……………お前さん、化け物並だな」

ふう、と息をつけば蠍爆弾がそう呟いた。

「あら、ありがとう」

あたしはそれを誉め言葉として受け取る。

「レッドトレインもそうやって殺戮したのか？」

腰を下ろしたまま苦笑を浮かべて蠍爆弾は問う。

レッドトレイン。血塗れ電車。

「椿のデビューだったけ？」

コクウが確認する。

あたしのデビュー。あたしが初めて殺戮した事件。裏現実にも噂が広まったそれは、初め頭蓋破壊屋またの名を白の殺戮者である白瑠さんが犯人だと言われていたが、違つとわかり衝撃が走った。

頭蓋破壊屋に並ぶ存在が現れた、と。

誰かが口にしたせいで後に名付けられた”紅色の黒猫”の名前は有名になり、白の殺戮者と黒の殺戮者と並んで裏現実の有名な殺し屋となった。

「……さあ、よく覚えてない」

それは本音だ。

電車の中で、一方的に、五十もの人間を殺した。数は後程知った。でも殺戮している間の記憶は朧だ。

電車に乗ったことは覚えている。座席に座ったことも。その後が曖昧だ。

確かにあたしは殺していた。カッターを手に首を切り裂いたと思う。

逃げなかった人もいた。現状に理解できていない人が多かった気がする。勿論悲鳴を上げて逃げ惑う人もいただろう。でも夢でも見たかのように、あたしはその時の記憶は朧だ。

「気付いたらその場の人間を殺してたのよね」

他人事のようにあたしは漏らす。

向き合うように立っているコクウは、あたしを真っ直ぐに見つめた。その眼は他の方へと向けられる。

あたしも気付く。

ミイラが立ち上がったことに。

あれ、倒してなかった。

投擲ナイフを取り出し放つが、ミイラは心臓に突き刺さっても踏みとどまる。

嗚呼、そう言えばミイラって内臓を取り除いていたんだっけ。心臓を狙っても無駄。切り裂いても無駄。首を切り落としても起き上がる。

コイツらもしかしたら。

「不死身じゃねえよ。燃やせば朽ちる。身体さえなきや起き上がらねえ」

そこでヴァッサーゴが口を開いた。

燃やせば朽ちる？

吸血鬼と同じじゃないか。

やはり悪魔絡みか。

「死なねえモンなんていねえんだよ」

死なない者はいない？

それはつまりあたしとアンタが一緒に死ぬのは当然って意味かよ、
V。

散々何度も死を防いでたくせに、今更なんなんだよ。

「るせーよ、オレに頼ってんじゃねえ」

あら、いつも銃弾は防いでたくせに何故あの時は防げなかったのか
しら？

「悪いなあ。お前ならあれぐらい自分で対処できると思ったんだ。
オレがお前を過信しすぎたせいだ、ああ悪かった悪かった」

…全然謝ってねえじゃねえか。

ヴァッサーゴはいつも通りに喉でクククと笑う。

「つか、つまんねえなら切り裂くなんて無駄なことすんな」

「は？」

「お前のことは襲わねえよ」

無駄なことと言われ、集中が途切れた。

しかし、ヴァッサーゴの言う通り。

ミイラはあたしなんて見向きもせず横を過ぎていく。

「悪魔オレがいるからだ」

ミイラはコクウ達に向かう。

あたしが。あたしが一度全部を簡単に倒せたのは。

レッドトレインの電車内の人間と同じ。反撃をしなかったからだ。

ミイラはあたしを攻撃の対象にはみていない。

「蠍爆弾！燃やせ！！燃やすんだ！」

「クハハハ！仲間に優しいなあ、椿。仲間を思っならさっさと宝をとるべきだぜ？」

あたしは声を張り上げ言う。

直ぐに爆発が響いた。

「なに？」

あたしは声を出してヴァッサーゴに問う。

「あのミイラは悪魔の力が宿った宝の力で動かしてる。死者を蘇らせる宝なんだよ、アホくせえけど。ミイラは悪魔以外の不法侵入者を殺すよう命令されてる。あの宝を手にして命令を取り消さないとダイナマイト、足りねえぞ？」

ヴァッサーゴは笑いながら答えた。

「ミイラはこれで全部じゃあねーぞ？今までの不法侵入者もミイラにされてんだよ」

先程の疑問が、解決する。

ここにきて死んだ者は、全員ミイラにされたのか。なるほど。

罠を再び仕掛たのはミイラ。

地雷が在ったのも、誰かが持っていたからだ。なるほど、なるほど、なるほど。

ようやく、わかった。

ヴァッサーゴもあたしを驚かせたいんだって、ようやくわかったわ。

「樁。遊太と一緒に宝をゲットして」

コクウが両手でミイラを引き裂いてからあたしに言った。

遊太？あたしは遊太の姿を探したが、ミイラと戦う黒の集団の中に遊太の姿は見当たらない。

「樁、こっちこっち」

遊太の声が後ろから聴こえた。

振り返れば階段を登った遊太がそこに立っていた。吸血鬼さながらの瞬間移動。

「うわっと！」

遊太に気付き、ミイラの一匹がライフルで遊太を撃つ。間髪遊太は弾を避けた。

悠長に立ち尽くしている場合ではないようだ。

階段に向かい駆ける。

ボアアア！

何が起こったのやら、ミイラが燃え上がる。レネメンが持つ糸がミイラに絡み、その糸が燃えてミイラを燃やしていた。

ドツカン！

爆音が天井に近い位置の壁が爆発。そこから火都、ナヤ、アイスピツクが顔を出した。

「お、火都達じゃん。やつほー」

またもや遊太はお気楽に挨拶する。

ロープで降りようとした三人だったが、下の惨状を目にして躊躇した。

しかし、彼らもミイラと戦っていたらしく背後からミイラが襲撃してきて、飛び降りる。

あとからミイラがぼとぼとぼと落ちていった。
シュールな画になんとも言えないあたしと遊太。

黒の集団大集合。

ミイラvs黒の集団。

黒の集団の実力が見れる最高のチャンスだった。

ミイラをクツションに着地した火都は火のついたボウガンでミイラを射抜いていく。

レネメンは彼に何かを投げ渡した。

それを受け取り火都が三方向に放つ。

糸が視えた。

その糸が瞬く間に燃え、貫いたミイラも、糸に触れたミイラも燃え上がる。

コクウとアイスピックはミイラを引き裂く。引き裂いて蠢くミイラの残骸をカロライは何かを投げつけて燃やした。

蠍爆弾は降ってくるミイラの始末で火炎爆弾を放ち、火の海にする。それぞれやれることを協調しながら徹底的に行っていた。

ナヤはそれを観る係り。そして噂を情報を広げる。

心配しなくてもミイラを自分達で排除できるようだ。

階段を駆け上がり、踊り場についた。

遊太は宝に手を伸ばそうとしない。

レディファースト、と言わんばかりにあたしに笑みを向ける。

トロフィーのような形。大きなダイヤモンドが白い光を放つ。

これが悪魔の力が宿った宝なのか。

「これ、手にした瞬間、なんか起こったりするかしら？」

「さあ、わかんね」

遊太は本当に知らないみたいだった。

おい、V。

「ビビってねえでとれよ」

じつとしてても始まらない。

あたしは手を伸ばして。

そして掴んだ。

「……………」

何も怒らなかった。

爆音も止まない。

正直、悪魔の喚き声がくるかと身構えたが何も起こらない。ミイラだつて動き続けているではないか。

おい、V。話が違うじゃないか。

「くたばれつて念じりゃいい。ミイラにな」

くたばれ、か。

なんか嘘くせえ。と思っていたがミイラ達は動きを止めて、ぱたりと次々と倒れていった。

「ミツシヨンクリア」

ミイラの上に立つコクウはにんまりと笑って告げる。

何がミツシヨンクリアだ。

念じればミイラが起き上がってコクウを襲うだろうか。正直その考えを実行に移そうとした。

しかし、ピラミッド全体が揺れて危うく倒れそうになる。

地震？エジソンでか？

グラグラと揺れる震動に、天井から砂が落ちていく。
いや、これは。地震なんかじゃない。

あたしと遊太の前の壁に亀裂が生じる。
嫌な予感。絶対に嫌な予感的中して実現する。

遊太と顔を合わせた。直ぐに階段を飛び降りるように駆け降りた。

ピシッ！ピシピシピシピシ！

コクウ達はその亀裂をただ見上げていた。

「バカ！走りなさい！」

コクウの頭を叩いて一同に怒鳴り声を上げる。トロッコの中にいた
ナヤを引きずり出して背中を押す。
壁は弾けた。

怒涛に押し寄せる砂がくるのを見て、漸く危機に気付いて、駆け出
す。

遅すぎんだよ！どあほ！と怒鳴って暗闇で見えない通路を走った。

懐中電灯で照らし、先を視る。

砂は波のように迫ってきた。

このままじゃあ生き埋めだ。

「レネメン！」

「マジックでどうこうできない！」

言う前に断られる。

「蠍爆弾！天井を崩せ！」

「馬鹿！生き埋めになるだろ！」

「くひゃひゃひゃ！」

「貴様っ笑ってんじゃねえ！！！」

一番余裕なコクウの笑い声に、あたしもカロライもぶちギレする。持久戦なら真つ先にナヤ辺りが砂に吞まれるだろう。その内コクウ以外が吞まれる。だつたら一か八か、天井を崩して砂の波を埋めるべきだ。

「蠍爆弾！」

「わあつた！」

蠍爆弾は真上に、蠍型の爆弾を放り投げた。

どっかああん！

ドカツ！

蹴り飛ばした机がひっくり返り、書類が散乱する。

アメリカのアリゾナ州。黒の集団のオフィス。

「これで。一体何しよって言うのよ？アンデッド軍団でも作るわけ？」

トロフィーの形をした宝をコクウに突き付けて問い詰める。

ピラミッドを無事脱出しエジプトから帰国してからずっと、この宝を持たされていた。

これはあたしが持てとのこと。

黒のオフィスに着いて早々、あたしは問い詰める。寧ろ飛行機の中で問い詰めたかったが、堪えてやった。

「くひゃ、アンデッド？それも悪くないね」

「あたしはてめえらの目的を知らない！報酬もなしに無謀なことをやるほどバカじゃない！これでなににする気だ？コクウ！」

「落ち着けよ、椿。ちゃんと話すから」

コクウは宥めるように言い、あたしの蹴り飛ばした机に腰を下ろした。

「それはただの保険だ」

コクウは答える。

保険？話が読めない。

他のメンバーは待っていたディフォに挨拶をしたり、とぼっちりを受けないようにあたし達から遠ざかって見守る。

「紅色の黒猫にも、我らの目的を話そう。仲間だしね」

演技かかった口調。

不適に細められた瞳は妖しく光る。

白溜さんと違う、不気味で怪しく妖艶な笑み。

その笑みは白い肌で黒い衣服を身に纏った吸血鬼の彼のせいで数段魅惑的にも感じる。

「俺達の目的はある人に喧嘩を売ることだ」

ある人に喧嘩を売り、戦争を引き起こす。

噂であった。

そのある人は、白溜さんだと噂では言われていたが、コクウは違うと否定する。勿論あたしでもない。

コクウは楽しげにその不気味な笑みで答えた。

「番犬と戦争するのが、黒の集団の目的さ」

黒の集団の目的。

番犬が喧嘩の相手。

番犬が戦争の相手。

あたしは戸惑い、頭の中で解読をする。コクウの声をもう一度頭の中で聴いて確認した。

「あの番犬？」

「そう。地上最強の狩人と謳われた番犬、裏現実の番犬」

間違いなくあの番犬。

秀介が憧れる狩人。

地上最強の狩人と謳われる裏現実の番犬。だから番犬。

一時期、その狩人は名を馳せていた。

殺し屋を片っ端から狩ってその頃名を馳せていた殺し屋を一掃させた、地上最強の狩人。

「彼は死んだはず」

白瑠さんが裏現実に入った数年前に、唐突に消えた。生存を信じる秀介には悪いが、白瑠さんが死んだと断言するように番犬は死んだと思う。

「いや、生きてる。だって誰も番犬を殺したという人間が名乗り出てないからね。地上最強だぜ？くく、そんな人間が殺されるわけがない。殺したら誰かしら自慢する。忽然と消えたのは意図的さ。番犬は生きてるよ、多分表にいるんじゃないのかなあ。俺達は彼を見付け出して裏に引きずり戻して息の根を止める」

コクウも、黒の集団も番犬の生存を信じていた。

しかし、秀介みたいに純粹ではない。
コクウには淡々と楽しげに冷酷に告げた。

「地上最強……いや、歴史上最強の狩人を復活させて息の根を止めたら　　面白いだろう?」

黒い殺戮者は本当に楽しげに笑った。
理解する。

この誘い文句で、黒の集団に彼らは入ってきたのだろう。

黒の集団は全員、番犬を打ち負かす目的を持っているのか。
前にナヤが言っていたことを思い出す。

コクウは歴史に面白いものを刻む。

長生きした彼は色んな歴史を刻んできた目立ちたがり屋の吸血鬼。
ひねくれた策略家は、小さな国さえ消し去ったことがある。

番犬との戦争は、彼の遊びにしか過ぎないが。それでも、それを承知で集った彼らをあたしは見回した。

「死んでたら?」

その質問を口にしてハツとする。

あたしの手握られた宝。

保険。

死者を蘇らせる宝。

コクウは笑い声を上げた。愉快そうに。本当に愉快そうに、笑う。

「くひゃひゃひゃ! 椿い…知らないのお?」

秘密、その参。

「裏現実では時々、死者が蘇るんだぜ」

黒の同居者

それが愛なのか、
はつきりしない。

どうして。

いつの間にか、温もりがあるんだ。

目が覚めましたか？椿さん

目を開けば、幸樹さんが微笑んであたしを見下ろしていた。

つーばちゃん大丈夫？

白瑠さんも、あたしの顔を覗き込む。少し心配そうに訊く。
大勢の人間の血を浴びていたのに。

ストレスで倒れちゃっただけですよ。気分は？椿さん

解せなかった。わからなかった。

殺人を犯したのに。大勢の人間の血を浴びたのに。

どうしてあたしは温もりを手に入れているのだろう。

どうしてあたしを心配して見つめてくれる人がいるのだろう。
酷く、それは理解できないことだった。

.....。

ベンチで幸樹さんの膝の上にあたしは寝てた。白瑠さんが顔を覗いて頭を撫でてくれる。

いつも凍えていたのに、温かい。

温かい場所にいる。

温かい人に優しくされている。

喉が痛い。視界が滲む。

あたしは掌で目を隠した。

あたしは知ってる。

温かい場所なんて、長続きしなくて、すぐに消えてなくなる。それでまた凍える。

それを知っているから、温かい場所にいたくない。

だってすぐに凍える。

失望が苦しい。

だから。だから。だから。

嫌なんだよ。

何度も。何度も。何度も。

何度も。何度も。何度も。

なのに、あたしは。

大丈夫.....。

お兄ちゃん。

あたしは起き上がって笑いかけた。

白瑠さんがはにかんで笑い、あたしの左手を掴んで立たせた。

幸樹さんがあたしの右手を握って歩き出す。二人に手を引かれていく。

ズキズキ、と痛い。

胸の奥。ずっと奥。

無くなる恐怖に怯えてる。

あたしはそれを振り払う。

幸樹さんと白瑠さんの間から、藍さんと由亜さんが見えた。

あたしは。

あたしは。

あたしは、冷たい場所に突き落とされてもいいからと、手を伸ばした。

あの人達に手を伸ばした。

温かい場所に手を伸ばした。

必ずくる痛みを 覚悟したフリをして。

あたしは手を伸ばした。

そこでパチリと目を開く。

目の前にはコクウの寝顔があった。

混乱して、顔をしかめて、寝起きの状態で確認する。間違いなくコ

クウの寝顔。

そしてここはコクウの部屋で、コクウのベッドの上だ。

落ち着いて昨夜の記憶を引き出す。

黒の集団の目的を明かされたあと、確かコクウは。

「番犬が死んでたら墓を掘り返してそれで生き返らせるまでさ」

そう、そんなことを言っていた気がする。

そして遊太が祝勝会をしようと言い出し、それに強制参加させられたんだ。

あたしの部屋は滅茶苦茶で、あの日以来黒のオフィスで寝泊まりしているのだから逃げ場がなかった。

無理矢理持たされたシャンパンを一杯飲んでから、コクウのベッドを貸せと言ってコクウの部屋に向かったんだ。

それで夜這いに来た連中を対処できるように枕の下に短剣を忍ばせて寝た。

シャンパン一杯では酔わない。

誰かが来れば反応して起きたはずだ。

なのにコクウがベッドに入ってきたことさえ記憶にない。

何か過ちを犯したのではないだろうか。

「ん…おはよう、椿…。カーテンは開けないで…俺はもう少し寝るから…」

目を開いたコクウは眠気たっぷりの声であたしに寄り添った。

「…いつの間にベッドに入ったのよ…」

「んう？んー…二時間くらい前」「あたし、酔っぱらってないわよね？」

「酔っ払ってなかったけど」

そこでコクウは閉じていた目を開いてあたしの表情を視る。

眠そつに細めた眼であたしが言いたいことを悟って笑みを浮かべた。

「何もないけど？」

「え？」

「俺は椿を起こさないようにベッドに潜り込んだだけ。寄り添って寝てただけだよ」

「……あら……そつ…」

眠気たっぷりな微笑を浮かべて答えるコクウに安堵して肩を竦める。嘘ではないだろう。

「クスクス……なに？何かあった方がよかった？」

コクウは笑いを洩らしてからかうように訊いた。

「酒を飲んで潰れたらベッドで裸になって起きたことがあるから心配になっただけよ」

「それで禁酒してたの？……ああ、白瑠とは酔った勢いでしたんだ？」

「……………」

正直に答えたら何故かそこまでコクウにバレてしまい、黙り込む。否定しても嘘だとわかるだろうから敢えて言い訳はしない。

「ふうん…？」

肯定と受け取ったコクウは意味深にあたしを見つめた。

「駄目だろ、女なんだから自分の身体はちゃんと守らないと」

コクウはまた寄り添って近距離でそう呟く。

紳士的なことを言うが、それをベッドに潜り込んだコイツが言っているのだろうか？彼のベッドだけど。

「噛んだ舌はVに治してもらったかい？」

「……………ええ」

「傷んだら魅力が減る。君は美しい椿の花だ、いつまでも美しくい

てほしい。……ああ、いい香り」

寝言のように言葉を並べて、匂いを嗅ぐコクウは目を閉じる。然り気無くあたしの腰に腕を回す。

「……………」

あたしの熱でも吸収したのか、コクウの身体は冷たさを感じない。毛布の中は暖かくて、また眠りたくなる。温かい。

あたしはそんな眠気に負ける前にコクウの腕を退かしてベッドから這い出る。

毛布を出れば冷えた空気に触れて身震いした。エジプトの猛暑と違い、ここは真冬の気温。

ヴァッサーゴがいなければ体調を崩していただろう。

お前って本当に便利だな。

お前はあたしを何に利用してんだ？

頭の中の悪魔に訊いたが、悪魔は沈黙を返す。

あたしは気にせず下の階のオフィスに降りる。

オフィスには昨夜飲み明かした男達が酒瓶を散らかしたままイビキをかいて眠っていた。

デイフォがいるからカーテンは閉められている。

それでも黒いカーテンは太陽の光を通していているため、デイフォはコートを被って眠っていた。

腰を下ろして、数分黒の集団の寝顔を眺める。

蠍爆弾は机の上で豪快にイビキをかいていて、アイスピックは床に転がって寝ていた。あとの遊太達はそれぞれソファに横たわって眠っている。

ここで携帯電話がないと不便だということを思い出す。

遊太やレネメンの寝顔が写メれない。…悔しい。

日本に戻って松平に武器のメンテナンスをもらうついでに、蓮真君から返してもらおうか。

携帯電話を取り戻すと、彼らとの連絡手段を持つことになるのだが。

「……………」

…藍さん。動きを見せないな。

本当に大人しく帰国して諦めたのか。

目を閉じて泣きじゃくる藍さんを脳裏に思い浮かべる。

ズキズキと錯覚のように小さな痛みを胸の奥で感じた。

なんでまたあの夢を見るのだろうか。

手を伸ばしては届かない泣きたくなる夢。

「……………ハア」

溜め息は白い煙になって空気に溶け込む。

あたしは腰を上げて、バリューの残されたPCを開いた。

カシャカシャとキーボードを押して藍さんと連絡した証拠を探す。

バリューが死に際に削除したのか、その証拠を見付けられなかった。

少し考えて、手の関節を伸ばしもう一度キーボードを叩く。

「なにしてんの？黒猫」

ナヤがいつの間にか後ろに立っていてパソコンを覗いていた。目を擦っている様子から今起きたようだ。

「デマを流してるの？何のために？」

あたしはブラジルに紅色の黒猫が現れたとの嘘の情報を流していた。

「アリの作りよ。黒の集団にあたしがいるって知られたくないから」

「いいじゃん。寧ろ自慢すべきことだろ」

「あたしは嫌々入ったのよ？自慢にはならない」

PCを閉じてあたしは立ち上がり、ナヤを振り返る。

「朝食は何を食べる？」

「え？」

「ついでに作るわ。食べる？」

「…っ、食べる！！」

ナヤが声を上げたことによつて黒の集団数名が飛び起きた。材料を買つて、軽い朝食を人数分作る。コクウは除外。起きたディフォも食べると言うので作る。

「……平凡な料理だね」

「一流シエフじゃないもの」

フレンチトーストを出せばディフォは評価を出す。特別料理が得意わけじゃないのだから当然だ。

「美味い！美味いね！お嬢さん！いいお嫁さんになるさ！」

「無理しなくていいわ、アイスピック。蠍爆弾も、レネメンも」

「いや……せつかく作ってもらつたから……いただく」

「黒猫の朝食は貴重だしな……うん、美味い……」

二日酔いの酷いアイスピックと蠍爆弾とレネメンは無理して食べる。無理して食べられるとこつちが悪いみたいじゃないか。

そんな二日酔い達にコーヒを淹れてやる。

コーヒーの香りを嗅ぐと、朝陽の中、リビングでコーヒーを飲む幸樹さんを思い出す。

「黒猫！ボクも！」

「元気なら自分で淹れなさい」

ナヤの頭を叩いてメイド扱いにならないよう阻止する。

「おかわり」

「おかわり！」

遊太と火都はおかわりをねだったのでそれは作ってやった。

「それで？ビルジャックの時は何を盗んだの？」

自分の分も摂りながら、遊太に訊く。

「あのビルに昔、番犬を雇った人間がいたんだ。あのビルからそのリストを盗んだんだよ」

「番犬は殺し屋を狩る狩人だったから、あんまり雇った人間っていないんだよね。ボクが調べてやっとその人間を見付け出したのさ。」

まあ、狩人は本来殺し屋を狩る者だからね、それを雇ってボディーガードにするようになったんだ。番犬は十前に現れ、約五年暴れてふと消えたのさ。流星の如く。ウルフもその時期に現れたね、あっ、白の殺戮者もその時期に現れたんだっけ」

「黒猫、止めないと終わらないぞ」

遊太が答えるとナヤが自分の持つ情報を雄弁に出していった。

カロライが忠告する。

そんな情報はいららないのよね。

「見付けたの？その番犬を雇った人間」

番犬は殺し屋を一掃した狩人。

目撃者は雇った人間と彼から逃れたウルフくらいだろう。素性はわからない彼をそこから探すことにしたのか。

「いや、リストからバリューがPC使って割り出すはずだったんだけど」

バリューはリストを手に入れた翌日に殺された。あたしのせいだ。

「んで、椿。代わりにやってくんね？」

「生憎そんなスキルはないわ」

気まずい空気に遊太は気楽にそう言う。あたしはさらりと断る。

「だよなあ。やっぱりナヤ？」

「やだよ、そんなつまらないことをアナログでやらせんな」

ナヤはバツサリと断った。

地道にリストの人間を当てるのは苦勞するだろう。

「じゃあやっぱりI・CHIPに頼むつきゃないよなあ」

「……………I・CHIPとまだ連絡とってるの？」

遊太の口から出た名前に反応して訊いた。

「さあ？連絡手段を持ってるからコクウがその気になれば頼めるん

じゃん」

「…そう」

あたしは顔を上げて、天井の向こうのコクウを視る。起きたら訊いてみようか。

「ハツカーの枠が空いているんだ、お前が埋めるかIを入れるかどうかにかしろ」

カロライが言った。

「知らないわ、バリエーの運が悪かっただけでしょ。軽いハツキングとクラッキングしかできないから、そこだけカバーするけど。…

…I・CHIPは無理でしょ」

動揺を隠してあたしはしれっと返す。カロライが睨んでくるが無視をする。

白瑠さん側についている藍さんが黒の集団に入ることはないだろう。

「噂じゃあI・CHIPは黒猫に興味があるらしいよ?」

「色仕掛けなら勧誘出来るんじゃない?」

ナヤとディフォが口を開く。

「Iは黒の集団に絶対入らないわ」

断言する。

もしも、彼が黒の集団に入るようなことが起きれば、カオスだ。

…気になるなあ。

あたしは皿を台所に置いてからスタスタと階段をコクウの部屋に向

かう。

厚いカーテンを開けば、コクウと一緒に寝ていた黒猫が飛び起きた。

「うっ……………開けないでっば……………」

「I・CHIPとは連絡とってる?」

陽射しから逃げて毛布に潜り込むコクウにベッドに飛び込みながら問う。

「…ん……………バリューが死んだって伝えてから音沙汰なしだけど……………」

「……………そう」

音沙汰がない。それはそれで心配だ。

無事に日本に帰ったかさえわからないじゃない。

元々、裏現実でも海底で泳ぐように顔を出さないハッカー。殺し屋と依頼人の仲介人もこなすI。

目立つ噂も届かない彼は、生存を確認できない。

こうなると幸樹さんも生存しているのかどうかも心配してしまう。

白瑠さんが誰かに殺されるなんて有り得ないが、幸樹さんと藍さんはわからない。

心配になってきた。

もやもやした気持ちを抱えつつ、ベッドに横たわる。

すっきりできない、気持ち悪い。

「どうしたの? 椿」

コクウが起き上がり、あたしの顔を見下ろす。

心配なんて。

あたしがする資格なんてないのに。

漠然としたものが不安も呑み込む。

「……寒い……」

あたしは呟く。

コクウは笑う。あたしが毛布の上に横たわっていることに、笑った。あたしの背後に手を置いたかと思えば、毛布をあたしの下から引き抜いて、毛布をあたしにかける。

コクウも毛布の中に潜り込んであたしに腕を回した。

「これであつたかかくなるだろ」

毛布の中、目を閉じながら微笑んで言うコクウを、あたしは見つめる。

「……まだ寒いわ……」

そう呟いた。

コクウはあたしの身体を引き寄せて抱き締める。

「寒がりなら暖かい国にいけばいいのに。…あれ？フレンチトーストでも食べた？コーヒの匂い。お腹空いたなあ」

「今下で皆が食べてるわ」

「ほんとおだ」

耳でもすましたのか、確認したコクウだったがベッドから出ようとはしない。

あたしを抱き締めたまま動かなかった。

あたしもコクウを振りほどこうとはしない。

「クス……椿が戻ってこないから俺と何かしてるって皆が話してる」

下の階の会話を盗み聞きしてコクウは小さく吹き出す。

「椿がここに寝泊まりしてから皆噂してるんだ、俺と椿がデキてるって」

目を閉じたまま微笑む吸血鬼は、有名な絵画の中の美しい青年みたいに綺麗だ。

美しい吸血鬼に見とれつつも、黒の集団内の噂に顔をしかめる。

「激論してるよ…ああ、デイフォオが黙らせてこっちに耳を立てた」「なにもしてないわよ、デイフォオ」

あたしはデイフォオに聴こえるように声を出す。

コクウはクスクスと可笑しそうに笑った。デイフォオが何か言ったのだろうか。

「おやすみ、椿」とコクウはあたしの鼻にキスをして抱き締める。

また眠るらしい。

あたしは振り払わずただそこにいた。

ちょうどいい暖かさに包まれて、いつしかうとうとと眠りに落ちた。

囁き声にあたしは浅い眠りから目を覚ます。

「腕の中で無防備に眠ってるのになにもしないとか、男じゃない」

「そおゆうの、趣味じゃないんだ」

「アンタって古風で奥手ね」

「デイフォオが見境なさすぎるだけだろ」

「気がある男だけさ」

「狙った男だろ」

「狙った女が腕の中にいるのになにもしないのはタマなしだ」

「だからあ、そうゆうのは違うって。強姦じゃん」

「相手を感じれば強姦にならない」

「ロマンチックじゃないよ、それ」

「…アンタってロマンチストだったかしら？とにかく時にはワイルドになるのも手よ、褒めるだけじゃない、寧ろ今ワイルドになるべきだ」

「んー……やだ」

コクウとディフォの囁き声。それはあまりにも小さく、スピーディで聞き取りづらい会話だった。

目を開いて確認する。

コクウは目の前にいた。抱き締められたままだから当然近い。

「あ、おはよう。椿」

あたしに微笑みを向けるコクウ。瞬きをして瞼を開き、ディフォを探した。

ディフォはベッドの脇に腕を組んで立っていた。

「なにこそこそ喋ってんの？」

「椿を起こさないようにしてたんだよ」

「黒猫、異性と添い寝したのに手を出さない男ってどう思う？」

「…？紳士的でいいんじゃないの？」

起き上がればディフォに唐突に質問されて首を傾げつつ答える。

そうすれば不快そうに顔をしかめたディフォが、あたしの腕を掴んでベッドから引きずり出した。

吸血鬼の力に腕に痛みが走る。

「痛い！」

「こつちこい」

そのままディオオはあたしを下の階に連れていく。下の階には、アイスピックしかいなかった。

「紅茶はいるかい？お嬢さん」

二日酔いが治ったのか、紅茶を淹れようとしていたアイスピックが声をかける。

「二つ」とディオオは勝手に注文して、あたしをソファに放り投げた。

「いってえ……なんだよ、ディオオ」

「好きな男は？いるの？」

「…は？」

あたしの隣に腰をかけてディオオは妙な質問をしてくる。

「初キスはいつ？初エッチは？相手はどんな男？」

「待て。オネエキャラでもない貴方とガールズトークするつもりはないわ」

「しょうがないわね、この口調ならいいんですよ。ほら、あたしに話なさい」

質問攻めをするディオオにストップをかけるが、真顔でオネエ口調になる彼がツボに入り吹き出しそうになる。表情を変えないからなおウケた。

心を開いてしまい、ゲイとガールズトーク開始。

「今のところ恋愛する気ないのよね、そんな気分じゃない。だから好きなタイプと問われても思い付かないわ」

「性欲の方はどうなのよ」

「全然問題ないわ。したいとも思わないし」

「それって不健康よ。不感症？女としてどうよ、人間も吸血鬼も性欲ないと終わりよ。絶命よ」

「そこまで言う…？確かに不健康なのかもね」

「そうよ、結婚まで童貞処女を守る輩は無駄な我慢してるだけじゃない。我慢は身体によくないわ。生きてる間四六時中やってるべきなのよ」

「貴方は性欲の塊か。直球のスケベじゃない。変な性癖がないだけましか…。吸血鬼だから性欲が強いだけ？」

「さあ……どうかしら……人間と同じくらいじゃない？なにそれ、吸血鬼にどんなイメージを持つてるの？吸血鬼の映画好きでしょ」

「わかる？映画好きよ、吸血鬼の。ラトアさんも好きで、ラトアさんと二人で映画デートしたことあるわ」

「あら、妬げること言うわね。何気好きな吸血鬼がいるのよね、吸血鬼の映画。ほとんどは自虐にみてるんだけど。コクウも好きなのよ、吸血鬼の映画。…あたしも好きね、吸血鬼映画。エロティックあるから」

「ドエロ吸血鬼か、貴方は」

「ラトアね……会いたくなかったわ」

「ラトアさんが好きなの？」

「いい男でしょ」

「そうね、ラトアさんはいい男だわ。理想の吸血鬼でもある、紳士的だしね」

「何より美味しそう」

「…貴方の思考はそこにしか行き着かないの？」

「性欲は恥じゃない!!」

相手がドエロな為、会話は純情ではなかったりする。しかし同性じゃないと話さない会話だ。

寛いでソファの上で話す。

なんだかんだであたしは楽しんでる。

「恥……とは言わないけど、控えなさいよ。抑えなさいよ」

「アンタこそ適度に解放なさいよ。極端じゃない、ほどよくエロくなりなさい」

「いや、エロくなれって言うかフツー？」

「話によればアンタ、コケティシユな振る舞いをするんでしょ？」

「なにそれ？」

「自覚がないところが可愛いのさ。私はこのままのお嬢さんが一番だと思うね」

「アンタは御呼びじゃない。デザート用意して」

「チョコのシユークリームがいいわ」

「はい、かしこまりました。お嬢様方」

会話をずっと聞いていたアイスピックにデザートを頼む。要望通りシルクハットを被って買いに行った。

「男と寝たことはあるんでしょ？」

「酔った勢いだけど」

「それを思い出して欲情しないわけ？相手が下手すぎた？」

「……そうじゃないけど……。するならやっぱり愛し合う相手じゃないと」

「罪の意識を感じる？そんなの気のせいよ。快樂を得ちゃダメ？そんなことない、セックスは犯罪じゃないでしょうが。殺しに罪を感じるっ。」

「…さあ、よくわからない」
「罪の意識を感じたら殺し屋なんてやってられないでしょ」
「そうね」
「相手はポセイドン？」
「違うわ、彼は親友だってば」
「男と女の間には友情は成り立たない」
「男と男はどうなのよ…。互いにそう思ってるならいいでしょ」
「本当に互いに親友だって思ってるわけ？」

ペラペラと話して問われたことに少し沈黙をした。親友だと思っけど、思ってくれているだろうけど、違う想いも秀介は抱いている。それがなければ、心地いい親友同士なんだけどね。
「思ってるわ」とだけ答える。

「あつちは気があるんでしょ」
「そうね。フツてるけど」
「一度も寝てないの？」
「寝てないわね、じやなきや親友じゃないでしょ。親友の域を越えてる」
「セックスフレンド」
「…いい加減にしてくれる？」

デイフォはアイスピックの淹れた紅茶を啜りながら話題を戻す。

「相手は誰？」
「話したくないわ」
「気持ちよかった？ イツた？」
「そこまで洗いざらい話さなきゃならないの？」

流石に白瑠さんとの過ちを話せない。

そもそもなんでこんな話をしたんだっけ？

「異性との添い寝は抵抗ないみたいね」

「手出しされなきゃ、まあ抵抗ないわね。…なれちゃったのよ。元仲間とよく気付いたら添い寝してたから」

抵抗ないというか。添い寝というか、勝手にベッドに潜り込まれたことがただあっただけ。

「暫くこのオフィスに寝泊まりするんでしょう？黒が紳士になったみたいだからベッドで寝たら？添い寝して」

「ソファよりベッドよね。添い寝は嫌よ」

「コクウが嫌い？」

「嫌いとかの問題じゃないでしょ」

「そうじゃなくって、恋愛対象としてよ」

コクウが恋愛対象としてどうなのか。

そんなことを問われてあたしは顔をしかめる。囁き声の二人の会話を思い出して少し考えた。

「除外だわ」

はつきりと言う。

「吸血鬼だから？」

「吸血鬼なら恋愛対象に入るわ。あたし、吸血鬼好きだもの。特に美形はね」

「コクウがタイプじゃないとか？」

「そうね……時折腹立たしいけどいい男だと評価するわ。そんなんじゃないくて、彼が黒の殺戮者だからだめなのよ」

正直に、聞き耳を立てているかもしれないコクウにも聴こえるように、はつきりと告げた。

「白の殺戮者と対立している存在だからこそ、恋愛対象外」

微笑んで言う。

「白の殺戮者がいなかったらコクウに恋をしていたかもしれない。ほら、コクウはいい男だし？吸血鬼だし？ストライクゾーンには入っているけど」

あたしの中の白瑠さんが、あまりにも大きすぎる。

別に彼が好きだとかそうじゃないけれど、あたしにとって白瑠さんは誰よりも特別なんだ。

影響力が強い。それだけじゃない。

他人だとは思えない人。

何処か似通ったところがある人。

「じゃあ白が死んだら？」

「今更彼が死のうとも…変わらないわ。会う順番が違ってたら変わってたかもしれないけど、悪魔に頼んだって彼の存在を抹消することとは出来ないでしょ？」

「……」

「それに………白の殺戮者と会わなかったらコクウにも会わなかったと思う。白の殺戮者がいなければあたしは、裏現実にはいない」

あたしを裏現実しじやなに誘った人。

首のチャーカーに手を触れて、あの出逢いを思い出す。血塗れの電車の中で、笑い声を響かせた白。

まるでアリスを迷わせるチェシヤ猫のような笑みを浮かべたあの人生きたいかどうかを、問われたのは初めてだったっけ？
あたしを誘った人。それだけでも大きな存在。

「彼を怒らせるような真似はしたくない。……まあ、黒の集団に入った時点で裏切り行為なんだけど……せめて彼らの耳には届かないでほしいわね」

そこでアイスピックがシュークリームを持って戻ってきた。

「ありがとうございます」

「……!?!」

「…なんですか?」

シュークリームを受けとり、二つに分けて食べようとしたらアイスピックがギョツとして首を傾げる。

「……敬語……使ったさ……」

「……それがなにか?」

「違和感だらけさ!」

ついついだしてしまった敬語にアイスピックは気持ち悪そうに身を引いた。寧ろビクビクしている。

数ヶ月敬語で話していたから、あたしは違和感ないのだけれど。彼らとは始めからタメ口だったからな。

「アイスピック。紅茶おかわり」

「…お嬢さん…私の名前を覚えているかい?」

「……シエームズ?」

「惜しい!」

「ボンド」

「ジエームスさ！」

いいじゃん、アイスピックで。

「出逢って三ヶ月経つ、同じ集団に属しているのだし、ここは名前
で呼びあおう」

「三ヶ月前に会ったっけ？」

「え？覚えてない？ガトリングの畏から一緒に生還したじゃないか」

「ああ、あの時？」

三ヶ月前。十二月だった。

ガトリングの畏にハマって殺し屋達が死にかけたあの日。

ヴァッサーゴがいたからあたしは生存したが、アイスピック達は負
傷。あたしが救急車を呼んで、それで一命をとりとめたらしい。

一緒に生還したというより、あたしが救ったようなもの。

黒の集団の一員であるレネメンがその中にいたことで、アイスピック
は黒の集団に入ることになったらしい。

「あれは運命の出逢いだったさ。肩を撃たれたとき、真っ先に駆け
寄ったお嬢さんは私の目には天使に見えた」

「駆け寄ってない。たまたまそこにいただけ」

「私を介抱した手には優しさが」

「あの時は喋られちゃ困るから口を押さえただけ。手当てしたのは
十字侍だし」

「私達を助けるべく急いで救急車を呼んでくれた！」

「急いではいなかった」

淡々とアイスピックの証言を訂正させる。

レネメンから伝言があると聞いていたし、息があつたから救急車を

呼んだまで。

「なんせよ、私やレネメン達は君に救われたさ。君に命を与えられたと言つても過言ではない」

「大袈裟、つうかウザいわ」

「レネメンはアンタの物？」

「え？貰つていいなら貰うけど」

「え？レネメンだけかい？私は？私は？お嬢さん！」

「レネメンに気があるの？」

「気があるっていうか……気が許せる相手っていうか。いい印象持ってるだけ」

アイスピックを茅の外にしてまたガールズトークを始める。

今度は黒の集団の男達について。

遊太とレネメンが好評。個人的にディフォは蠍爆弾が好みらしい。

—（身体が）

火都は会話が続かないのでディフォは不評。カロライについては恋愛対象として見てないそうだ。

アイスピックはありらしい。

アイスピックはディフォから距離を取った。

「極端な娘ね」

ディフォに何度もそう言われた。

「とりあえず、面食いだつてことはわかったわ」

「貴方がエロ吸血鬼だつてことはよくわかったわ」

ソファの上で話し込んで三時間。

もう太陽が沈んだ時間帯に、訪問者がきた。

ナヤの後に続いてオフィスに入った男は、見覚えがある。彼はあたしの姿を確認するなり目を丸めた。

「紅色の黒猫じゃねーか！」

「あら、狼人間さん」

まるで久しく会う友人を見つけたかのように嬉しそうに狼人間ウルフマンはあたしを呼んだ。初めて会ったときと随分と違う。

まあ、あたしは命の恩人なのだから、小娘扱いはしないだろう。

「生還おめでとう」

「お前のおかげでな」

ははっ！と豪快に笑うウルフマン。

あたしは頬杖をついて考えた。

「どうして狼人間さんがオフィスに？」

「黒の集団への協力だ」

「協力？」

「本当は黒の集団に勧誘されたんだが、オレあー匹狼がいいんでな。断ったがオレが昔殺した野郎について知りたいって言うんで」

ああ、そうゆうこと。

ということとは番犬関連か？

あたしはナヤに視線を送って説明を求めた。

「ウルフマンが殺したウルフだよ。番犬から唯一逃げおおせたウルフだ。前に話したよな？番犬から逃げおおせたことを誰かに自慢したはずだから、その話を回収しろって黒からの命令。番犬の容姿を

少しでも集めないと」

ナヤはペロツと答えた。

ふうん。ウルフは死んだけど周りに話してたって可能性はあるわね。

「ウルフには仲間がいたらしいから、ウルフマンと彼の棲みかを探ってたんだ。でもお手上げ。掃除屋に綺麗に一掃されて収穫ない、って黒に云いにきたけど……まだ起きてないってことは今日は機嫌が悪いの?」

疲れたらしくナヤはアイスピックの隣に倒れるようにソファに座り、コクウの部屋に繋がるドアに目を向ける。

陽が落ちれば顔を出す吸血鬼。

コクウの場合、この時間帯に顔を出さなければその夜は出てこない
と判断される。

時折部屋にこもると、誰とも話さなくなるのだ。

「その内来るんじゃない? さっきまでは普通だったわ」

さっきと言っても四時間くらい前だけね。

「ねえ、ナヤ。仕事タダで紹介して」

「……うおーい黒猫。ボクが誰だか知っててそう言ってるの?」

「かの有名なチクリ屋さんでしょ」

「そんな大胆さが大好き! いいよ、タダで紹介してあげる。殺しだ
る? 一人? 複数? 高額?」

「手短ので構わないわ。殺しができて収入が入れば」

「じゃあ俺と一緒に複数の仕事をしようか」

ナヤに仕事紹介を頼んだら、あっさりと引き受けてくれた。疲れが

吹っ飛んだように身を乗り出す。

そこであたしの背後から声がして振り返れば、コクウが立っていた。いつの間にか……。

「お腹、空いたんだ」

あたしを見下ろしてコクウは微笑む。

今日は不機嫌ではないようだ。

お腹空いた、ではなく喉が渴いたの間違いだろ。

「じゃあ今すぐ出来る仕事にするかい？」

唐突の出現に動揺を見せたがナヤは笑って、あたしではなくコクウに訊いた。

「ちょっと。貴方とやるなんて嫌よ」

「どうして？ 紅色の黒猫の名前は伏せて俺の名前を出した方が君には都合がいいだろう」

「……………」

確かに、先程デマを流したばかりだ。またアメリカで仕事をすれば居づらくなる。

黒の集団の近くにいと知ったら、白瑠さんが動く可能性があるし、紅色の黒猫の名を出さないで仕事をした方が安全なのかもしれない。白瑠さん達が名付けた名前を、コクウの名前で隠すのは些か納得できないが。

しょうがない。

一緒に仕事をしよう。

殺戮衝動が沸いているのでさっさと人を殺そう。

「デイフォは？食事するなら一緒にすれば？」

「アンタ達が帰ってくる前に済ませたからパス」

「そう。じゃあ着替えるから、話を済ませたら」

「うん」

ついでにデイフォも誘ったが断られた。

あたしが退いたソファに座り、コクウはウルフマンとナヤの報告を聞く。

コクウの部屋に行き、数少ない荷物から服を出して着替える。

「ラトアとも仕事したことあるの？」

いつの間にかベッドにデイフォが腰掛けていた。上半身裸になった状態でナイフを構えようか迷ったが、相手は女に興味がないので同性扱いにしようと背中だけ向ける。

「あるわ。仕事じゃなくて吸血鬼の食事に付き合ったの」

ラトアさんとハウン君を思い浮かべて背中の子フォに答えておく。

「コクウの食事は初めてでしょ」

「……食事になったことがカウントされなければね」

吸血鬼に血を吸われたのは、初めてだ。ていうかコクウだけだ。あたしに噛みついた吸血鬼は、ハウン君は未遂だったけど。

「驚いて死なないようにね」

「驚く？」

「慣れてないと唾然とするから」

「……………そう」

イマイチわからないが頷いておく。
吸血鬼が人間の首に噛み付いて血を啜る光景を見慣れていれば啞然
とはならないと思うんだけど。

「返り血を浴びるアンタなら、平気かもね」

それを聞いて思い出す。

頭蓋破壊屋　　白の殺戮者は脳ミソをぶちまける。

黒の殺戮者は身体中の血をぶちまける。

奇行な殺害をする二人の殺戮者。

コクウの殺戮はそう言えば、初めてみることになる。

白瑠さんの頭蓋骨破壊並みに不可解で強烈な殺害をするのだから。
ちよつと不安になる。

デニムを脱いだら、ノックなしにアイスピックがドアを開いた。

一拍遅れてナイフを投げたがドアを閉めてアイスピックは逃げ出す。

「私はラッキーだあー」

そんな弾んだ声に顔がひきつる。

あのシルクハットの隠れエロジジめ。

「コクウの食事は異常だから」

「それは吸血鬼からみても異常ってこと？」

「そうだ」

「ふうん」

「人間から見たら吸血鬼の食事は異常だろ？」

「まあ、否定したら嘘になるわ。でも」

赤いコートに腕を通してあたしは自嘲の笑みを加えて答えた。

「あたしも食事してるようなものよ」

白い部屋が、黒に染まっていく。

「椿。着いたよ」

肩を揺らされて起こされた。

地下鉄で移動していて仕事場に向かって、今到着したようだ。寝惚けたままコクウに続いて電車から降りた。

「ふああ…」

「クス、可愛い」

「…つざい」

電車が風を生み出し去っていくホームに立ち尽くして欠伸を漏らせば、眠気が覚めていないあたしを隣に立つコクウが笑う。

「椿、なんか夢でも見てた？」

「…寝言でも口にしたの？」

「いや。でも…魔されてたみたいだった」

コクウに言われて数十秒前に自分が何の夢を見ていたかを思い出す。よく見る夢。

眩いくらい真っ白の部屋が、足元から黒に染まるそんな夢。幾度も幾度も見る。

最初に見たのはいつだったっけ？

記憶を漁り、思い出してみる。

公衆電話で泣きじゃくったあの日を思い出した。あの野郎にボコられた日。そう言えば篠塚さんが撃たれた日でもあるのか。どちらにせよ、いい夢ではないんだろう。

最初は、その夢に篠塚さんがいた。

初めての殺戮から病院で目を覚ました時みたいに、篠塚さんがベッドのそばにいた。あたしの首には包帯まで巻かれていて、夢の中で動揺してしまっただけ。

この一ヶ月、ずっと見てきた夢。

慣れてしまったのか、特に気にもせずつけっぱなしのテレビを観るかのように、見続けてきた。

「魔されてるように見えたの？」

「いつもは穏やかに眠ってるから、少し強張った表情に見えたよ」

「……いつも？」

「いつもだよ？」

「…いつも？」

「いつも」

「いつも？」

「君の寝顔」

妙な言葉に首を傾げてオウムのようなやり取りをしていれば、コクウは胸元から一枚の写真を取り出した。

真冬だというのに外出時にも黒いシルクのワイシャツと黒い革パンのコクウ。

彼の手には、あたしの寝顔が写る写真。

以前に撮られたものだとして理解してその写真を奪い取るつもりだったが、コクウはさっと軽々避けた。

「なっ……！返しなさい！」

「変なことを言うね、椿。これは俺のだけだ」

「盗撮だ！」

「撮られてることに気付かないくらいふかあい眠りに落ちたこの寝顔。天使みたいだ。最も、天使なんてみたことないけれど」

「ストーリーカーか！処分しなさい！」

なんとか奪い取ろう手を伸ばすが、悲しき身長さによりコクウは余裕であたしを弄ぶ。

「そう言えば、椿はこれを何かと間違えて目の色変えて奪い取ったよね。何の写真だと思ったの？」

「っ……」

手を伸ばした状態で停まる。

それは胸の裏ポケットの写真。

”家族のような写真”。

死にかけてから、あたしは見ていない。

死の直前で呼んだあの人達の顔を見るのが、なんだか。

なんだか。なんだか。なんだか。

どうにかなっ……てしまいそうで怖いんだ。

ばす。

そんな軽い音を立てて、あたしはコクウに抱き着く。

なすすべなく、ただすがり付いただけなのだが。

「……………」

コクウはこの行為をあたしの作戦と受け取ったらしく、寝顔写真を持つ手を上げたまま。

あたしを振り払うこともせず、立ち尽くす。

「……椿……。こつゆつのおつて、意図的にしてるの？無意識にしてるの？」

「……………」

何のことだろうとあたしは彼を見上げてみる。

「……………」

コクウは少しの間沈黙をした。

彼がそうゆう沈黙をするのは大抵、妙な考えをしている時だ。やがてコクウはにんまりと笑みを浮かべた。

「いいよ？別に抱き付いても。いつでも受け止める。ほら、俺と椿は親友同士だし。でも、他の男は駄目だぜ。押し倒されちまう」

「……………」

わけわからん。

あたしはコクウの胸を両手で押し飛ばした。コクウは押された方に二三歩下がり、ホームから出る。

もう少して線路に落ちるところだったが、あたしが腕を掴んで引き戻す。

コクウがきょとんとしてる隙に、写真を奪い取り階段を上がる。しかし一瞬で写真はあたしの手から消えた。

「まじで線路に突き落とすわよ」

「別にいいけど？」

「この変態！ストーカー！変質者！」

「それは傷付くなあ……」

駅で叫べば響く響く。
本当に傷付いたらしく、何やらまた考えるように黙り込んだコクウは再び笑みを向けた。

「返してほしい？」

「……条件突きつけるきでしょ」

「あつたりい」

楽しそうに笑うコクウは唇で写真を持って、その条件を言う。

「椿が毎晩添い寝するなら返す。そうすれば毎晩、君の寝顔が見れるだろ？」

魅惑的な微笑。

普段だったら美形の吸血鬼のゲームみたいな甘い台詞に悶絶するところだが、生憎今はそんな場合ではない。

「……まあ……別にいいけど」

「ほんと？」

「添い寝だけでしょ。なにもしないなら」

ソファよりはベッドだ。

コクウがなにもしないなら添い寝くらい。寝顔を見られるのは少々腹立たしいが、写真を持ち歩かれるよりはましだ。

……ん？あたしが妥協しなきゃいけないのは何故だ？

コクウは満足したのかあたしの出した手に写真を置いた。あたしはそれを丸めて、駅のゴミ箱へと放り込む。

「そのペンダント、綺麗だね」

「！」

コクウに言われ、気付く。暴れている間に服からペンダントが出てしまったようだ。

椿の花をモチーフにしたダイヤのペンダント。

「椿の花だね」

服の中に戻せば、コクウは口を開いて喋る。

「好きなんだ？」

「…プレゼントよ」

「好きなんだろ？」

「…好きな花の一つよ」

話すのがめんどくさいがしつこいので答えておく。

コクウは意味深に頷いて隣を歩いた。

「男からのプレゼント？」

「……仕事に集中しなさい、コクウ」

続いて腹立たしくなり、あたしは睨み付ける。

「集中してるよ？椿こそ」

「アンタうつとおしい」

「……」

本当に嫌がっていることが伝わったらしく、コクウは黙り込んだ。黙り込まれると何かを企んでいるのではないかと思うし、何かを喋っただけでも鬱陶しいと思う。

仕事には不向きな相棒。

やっぱりコクウと仕事をするんじゃないなかつた。

スラム街のような風貌の街に聳えるビル。

夜空に包まれたそのビルの灯りは、最上階よりやや下の階だけ着いている。

そこに仕事の標的がいるそつだ。

相手は複数。武器は最低限持っているとなヤの些細な情報から得ている。

「あ、もつしもおし」

いざ中へ入ろうとすれば、コクウが携帯電話を開いて誰かと話していた。

「黒の殺戮者だけど」

常日頃、二つ名を名乗るコクウ。

二つ名で名乗ることにあたしも慣れてきたが、コクウは二つ名でしか名乗らない。よつて”コクウ”という名は全くと言えるほど知られてない。

別にそんなこと気にするものではないのだが、仲間である黒の集団までもが彼を”黒”と呼ぶ様子を見ると違和感を持つ。

何故本名で呼ばせないのか、そう訊こうと思ったが、コクウが電話越しの相手に言った言葉に衝撃を受けて忘れた。

「今から殺しにいくぜ」

ピ。と殺人予告電話を切るコクウ。

「……なにしてんの？」

「さあ、仕事しようぜ。樁」

「ちょ！アンタ！今ターゲットにチクったでしょ！？」

「そうだよお。だからなに？」

「っ…！」

いろんなものが込み上げた。

頬がひきつる。コクウを先に始末しなかったが、武装して警戒するターゲットを思い浮かべると一人ではしんどいと思う。

ここは堪えて、ターゲットを殺してからコクウをぶっ殺そう。

嗚呼、やっぱりコクウと仕事をするんじゃないかった。

エレベーターの中でナイフの配置を微調整しながら、コクウからそつばを向く。

コクウは気にしていないのか、手摺に腰をかけて鼻唄でメロディを奏でる。

不機嫌なあたしとご機嫌なコクウ。

「この曲知ってる？日本人の曲なんだ」

エレベーターが建物の半分に届いた頃、コクウが心地悪い沈黙を破った。

「知らない」

「まあ、マイナーだから当然だけど。遊太から教えてもらったんだ、日本に行った時にネットでちょっと流行ってた曲。いい歌だよ、オススメ」

「あっそ」

「ネットに動画を配信してるだけで顔を出さない正体不明の娘なんだって。日本に戻ったら一緒に探してみない？」

さりげない口調だったが、その内容があたしの怒りを煽るものだった。横目で睨み上げる。

コクウはにつこりと上機嫌そうに笑っていた。

今日のコクウは挑発的だ。

その理由は多分、デイフォとの会話。

それについてあたしが悪いわけではないので謝るつもりも、屈するつもりもない。

挑発的に乗ったら負けだ。

「……」

「シンガーソングライターみたいだよ？ 噂じゃあ埼玉にいらしい。椿は関東出身だっけ？ でもレネメンに電話したのは確か京都だったよな」

沈黙すれば、コクウはペラペラ喋った。こちらが黙れば一方的に喋る奴なんだ。

ヴァッサーゴと同じ。

「無駄足だったなあ。白達と衝突したときは東京だったから、住みかは東京かな？ ー、思い出すね。火都の獲物を横取りしたらいきなり来て、いつも通り取り合いになってたら……」 紅色の黒猫は俺のものだ”って自慢したんだよね。くひゃひゃ、ちよつとびっくりだったけどおかげで探す手間が省けたと思ったら……後日待ち伏せして襲撃してきたんだ。いつも通り喧嘩してたけど痺れ切らした白の相棒が話し合いをしようって言い出して、” 椿が俺の仲間になることはない。だから無駄なことをするな”って、そんなことを言われたんだけど……どおしても椿に会って見たかったんだよねえ。隠されると尚更、会いたくなっちゃって」

奇しくもそれは初めて吸血鬼の食事に付き合っていた日だ。

あたしに黙って白瑠さん達がコクウと衝突してた日。

あたしを諦めさせようとした行為が逆効果を生み出していたようだ。

あたしを守ろうと奮闘していた白瑠さんと幸樹さんを思い浮かべる。嗚呼、藍さんも隠れていたのかな。

「白瑠があれほど怒ったのは初めてだったから　　どんな娘かなあ……って、興味がそそられた」

前半、まるで独り言のように呟かれたから思わず顔を向けたが、コクウは前を見据えて笑っていた。

エレベーターのドアが開き、会話は中断される。

あたしの怒りを煽ろうと、白瑠さん達の話を出したただだから続きはもうないだろう。

片手に投擲ナイフを構えて、騒がしい会話が聴こえる扉の前に立つ。

「……………」

どうしてこうなったんだろう。

答えは簡単、黒の殺戮者と仕事をしたからだ。

あたしは返り血を浴びたまま立ち尽くす。

部屋は返り血で染め上げられている。

それはあたしの殺戮現場と大して変わらないだろうが、部屋を血塗れにした血はほとんど標的のものではない。

そんな可笑しな点についてあたしは思考する。

真っ赤な黒づくめの吸血鬼が、標的の血液をがぶ飲みしているのを見つめながら。

あたしの足元に転がった死体は首筋からドクドクと血を流す。今回あたしが殺したのはこの三体。

その内二体はもうすでにコクウに血を持っていかれていた。

ターゲットのいる扉の前で構えれば、コクウは自分が最初に入る

と言い出して扉を開き、ライフル銃で撃たれた。そのコクウの血を後ろにいたあたしが被ることになった。

あたしが被った血は、コクウのものだ。

吸血鬼を返り討ちにしようとターゲット達は銃を乱射した。しかし、惜しくも首が胴体から離れる前にコクウの身体は元通りになり、ターゲット達は自分達の甘さに悲鳴をあげることとなる。

コクウは哄笑して、一人目を喰らった。

その間にあたしは一人目を切り裂いた。

弾丸の雨を避けてまた切りつけようとしたが、散弾銃が向けられ、回避しなくてはならない状況になってしまう。

簡単に回避ができたはずだった。

しかし、視界を遮るように現れたコクウの背中に、気をとられてしまい。

本日二度目のコクウの血を浴びるはめとなった。

吸血鬼の血を浴びて、あたしは銃口を向けられているにも関わらずそこでフリーズ。

穴だらけの背中には直ぐに塞がり、コクウの哄笑が再び響いた。

楽しそうな哄笑がターゲット達を駆り立て、引き金を引かせる。

連続に鳴り響く銃声。

あたしは数日前に心臓を撃たれたことを思い出していた。悠長に突っ立っても、弾丸は当たらない。

何故ならコクウが全て自分の身体で受け止めていたからだ。

体内の弾丸を吐き出してからあたしの切り裂いた男の血を飲み干して、また哄笑してターゲット達の放つ弾丸を受け止めるコクウ。

コクウの血は、飛び散り続けた。

血を補充しながらコクウは、血を撒き散らしていく。

一人が大振りナイフでコクウの首を跳ねようとしたが、頸動脈を傷付けるだけでコクウに掴まり餌食になる。その出血は辺りに吹き零れた。

コクウは攻撃をわざと食らいながら、捕食する獲物をじわじわと追

い詰めていった。

様々な恐怖に耐えられなくなり、この部屋から逃げ出そうとした二人をあたしはパグ・ナウでサクツと殺す。

連絡をもらって駆けつけたであろう標的の味方も、コクウは哄笑し遊びながら血を奪い取り殺していった。

そしてただいま最後の一人を食事中。

以前、蓮真君から黒の殺戮者の殺し方を聞いていた。

白の殺戮者は脳味噌をぶちまけるなら、黒の殺戮者は身体中の血液をぶちまける。

その時は、この直前まで。

あたしはターゲットの身体中の血液をぶちまけると思い込んでいた。あながち間違つてはいないだろう。殆どがターゲットの血を補給してぶちまけたコクウの血なのだから。

銃で吸血鬼を倒そうと甘い考えたをしていた今回のターゲットと同じ、あたしは甘かった。

あの白瑠さんと対になって呼ばれる存在が、たかが標的の身体中の血をばらまくだけで”殺戮者”と呼ばれるわけがない。

片手で、人間の頭蓋骨を木っ端微塵に吹き飛ばす、拳げ句には笑いながら人間解体をするあの白瑠さんと。

人間の身体中の血をただばらまく吸血鬼は、対になんてならない。自分の身体に、穴があげさせながら、哄笑して殺す吸血鬼。自分の血で血塗れにする異常者は、彼しかないだろう。

裏現実の中でトップを争う至極の異常者。

白の殺戮者と黒の殺戮者。

対になる二つ名。

反対のようで似ている存在。

顔にべったりついた血を拭いながら、あたしは言葉を探した。そして見付けた言葉をそのまま吐き出す。声を出すのが酷く久しく感じた。

「コクウ。命令聞いて」

「ん、なあに？」

食事を終えて、口元を拭うコクウが振り返る。

「今後、あたしの許可なしに自分の身体を傷付けるな。命令よ。破つたらあたしは黒の集団から抜けるわ」

コクウの顔から一瞬だけ笑みが消えたが、にっこりと再び笑みは貼り付けられた。

「どうして？俺の心配をしてるのかな」

「今日の貴方、不機嫌ね」

間を入れず言えば、コクウは笑みのまま一瞬だけ固まる。

「椿、勘違いしてる。これは自己犠牲の自傷行為でもなんでもない。吸血鬼は血さえ貰えれば傷は治る。これは俺の好きな殺し方。どう足掻いても怪物に勝てなくて青ざめ恐怖にガタガタ震える人間を殺すのが好きなんだ。それを奪うっていうのはちよつとズルくない？どおしてもそんな命令をするなら、聞くしかないけど。言っておくけど俺は椿みたいに自虐じゃない」

薄い笑みを浮かべたままコクウは訊いてもいないことをペラペラと話した。弁解する言い訳のようだ。

「変なことを言うわね、コクウ」

あたしの声は血塗れの暗い部屋に凜と響いた。

「あたしは、あたし以外の奴に身体を傷付けるなって命令してるだけよ。カロライの武器の試し切りもこれからはあたしが引き受けたいし、これからはあたしだけが傷付けてやるって言ってるの」

髪が血で固まるのを気にしながら淡々と云う。

コクウに目を向ければ、笑みを失っていた。

「不機嫌ならあたしが気が向いた時に刻み込んでやるからそのあとターゲットを食べなさいよ」

「……………」

コクウは黙ってあたしを見つめる。

やがて、悲しそうな笑みを浮かべた。

切なそうな眼差し、弱々しい笑み。

黒を纏う彼は闇に溶けて消えてしまいそうだった。

「君はどうして…………俺の中に踏み込むんだ？」

呟かれた言葉にあたしはわからず、コクウを見つめた。

「どうして見透かしちゃうのかな。どうして中に入ってくるのかな。どうしてなんだい？」

見透かしてるつもりはない。中にズカズカ入ったつもりもない。

「どうして俺がああ自己犠牲を引き摺ってるってわかったの？誰も知らないのに…………吸血鬼だって気付いてないのに。どうして唐突に現れた君は手に取るようにわかるんだ？」

萎れた花のように顔を俯くコクウ。

儂い黒の殺戮者。

紡がれる台詞はあたしに向けられる。

仲間の為に何年も何年も、身体をいじられ調べられた吸血鬼。傷に残らずともその痛みは記憶に刻まれているのだらう。

それが彼のトラウマ。

「……そう思っただけ」

「……ふふ…君は…流石、白瑠が惚れた女だ。はは…」

苦笑に近い悲しげな笑みを洩らしてコクウは顔を上げる。

そんな情けない顔であたしを見つめた。

「白瑠は面白い人間だ。愉快で愉快で、凄く面白い人間。そんなアイツが大嫌いな俺から隠す大事な娘。…まさかこんなにも魅力的だとは思わなかった」

今度は自嘲して笑う。

「白瑠達を守るのもわかる」

死体が倒れたがあたしもコクウも見ない。

「悔しいなあ…俺の方が長生きしてるのに、白瑠が先に会うなんて。悔しい」

そつとコクウは瞼を閉じた。

コクウがエレベーターで話したのは、あたしを怒らせる為じゃなかったと気付く。

口を開きかけたが、直ぐに唇を閉じた。

それについては、触れたくない。

そのことは、永遠に聞きたくもない。

「……椿は……意地悪だなあ……」

長くも感じる沈黙の後、コクウは泣いてしまいそんな笑みをあたしに向けて独り言のように呟いた。
泣いたのかもしれない。コクウは顔を伏せてしまい、あたしは視えなくなった。

血溜まりをパシャパシャと踏みつけてコクウはあたしに背を向けて硝子張りの窓に向かう。

「今日は帰らない。部屋は好きに使っていい」

それだけを言い残し、硝子を突き破り、コクウは飛び降りていった。
ヒュウン、と風がそこから入り、血の香りをかき混ぜる。

「レネメン。車ある？迎えに来てほしいんだけど」

戻ろうにも血塗れでは地下鉄に乗ることもできない。歩くと朝が来てしまう為、電話番号を知るレネメンに公衆電話からかけた。

丁度彼の表の仕事場から近かったのでレネメンは迎えに来てくれた。

「座席、汚しちゃうかも」

「……構わない、乗れ」

血塗れのあたしを車の中から見たレネメンは怪訝な顔をしたが乗ることを許す。

コートを脱いでレネメンの車に乗り込む。

「これ、コクウの返り血だから」

「え？あつ、ああ……」

「貴方もぶっかけられたことあるの？」

「服についたことは……あるけど」

レネメンもコクウの食事を目の当たりにしたらしいが、あたしみたいに全身に被るようなことはないらしい。むしろくしゃしつっ血を拭う。

「ほら」

レネメンは掌を向けた。

クルリと引っくり返せばハンカチが出てきた。

マジックで出され、あたしは微笑む。レネメンも微笑み返す。

少し気が楽になった。

「ところで黒は？」

「……さあ、どこかに行っちゃったわ」

「何を企んでるか、わからないな。アイツは」

「……そうね」

レネメンの言葉に頷き返す。

血液で固まりそうな髪を気にしながら、思い出す。

庇われ、コクウの血を浴びた時。

なんとも言えない不快さを感じた。

多分、目の前で庇われて死なれたら、そんな気分を味わうのだろう。そんなことをぼんやり思って、あたしは車の揺れに身を委ねて瞼を閉じた。

「今日は表の仕事？」

「ああ」

「明日も？」

「明日もシヨールがある」

「観に行っても構わない？」

「是非来てくれ」

翌朝。本当にコクウは帰って来なかった。

リーダー不在の黒の集団は、各々の自分の本職をしていてオフィスは静まり返っている。

オフィスに泊まっていったレネメンとあたししかいない為、何処と無く気まずい空気。

「朝御飯、いる？」

「あ、ああ…頼む」

朝食を作ってる間もなんとも言えない沈黙が流れる。

レネメンはコクウが帰らないと聞いてから居心地悪そうにしていた。出勤時間まで時間があるので、オフィスで時間を潰している最中。

「レネメンは着替えなくていいの？」

「衣装は別だから平気だ」

向き合いながら座って朝食。

流石に沈黙は嫌で話題を出す。

「ガトリングの件。病院に運ばれた時のことを教えてくれる？」
「ああ…。オレが目を覚めたのは五日後だ。もう少して手遅れだったらしいが、無事命をとりとめた。感謝してる。黒が見舞いに来たから、アンタに会ったことを伝えた。アンタも無事じゃないだろうからまだニューヨークにいるはずだって黒はカロライと探したって聞いたな」

白瑠さんが篠塚さんと話していた時にコクウ達が乱入したと聞いていた。

あたしは無事だったんだけど…。

「蠍爆弾も加わって、やっと頭蓋破壊屋を見付けてたが…白昼堂々レストランで撃たれたらしいな」

「撃つたみたいよ」

「アンタも車で逃亡しながら撃つたんだろ？」

「車のタイヤをね」

しれつと返せば、レネメンはくつくつ笑った。

オールバックが崩れたブラウンの髪は黒い眼帯を隠す。右目は優しく細められていた。

いい男には、違いないのだろう。そんなことを思った。

「それで？病室でコクウはアイスピック達をスカウトしたの？」

「ああ、アンタも入れる予定って言ったらあっさりジエームスが入った。ウルフマンと十字侍は断ったな、黒は執着しなかったから必要以上に勧誘はしなかったぞ」

「……………。なんで黒の集団に入ったの？レネメンは」

「オレ？…………面白そうだったから」

どうやら必要以上に勧誘されたのはあたしだけらしい。

色々訊きたくなつたが、とりあえずレネメンが黒の集団に入った理由を訊いてみた。

コーヒ―を啜つたレネメンはそうあっさり軽く答える。

…遊太と同じ理由。

「カロライとは前々から仕事してる仲だったからな。信頼もできたし、黒の殺戮者が度々でかいことをやるって聞いてたし……何より、興味があつた。番犬にな」

「興味？」

「オレも五年前に裏に入ったんだ。有名になつたのはカロライに会つてからだつたけど。その頃、番犬の話で持ちきりだったのをよく覚えている。どんどん番犬に狩られる殺し屋が出てきて、当時は正直オレは生き残る自信がなかつた。オレは…見てみたい。それだけだ」

純粹な好奇心。

それだけのようだ。

自分で番犬を殺し、歴史に名を残す。そんな野望を微塵も抱いてはいない。

ただ単に、自分が裏現実に入った頃に、誰よりも印象に残つた番犬を一目みただけ。

「レネメンはどうして殺し屋に？」

「オレは物心ついた頃からギャングでな。その時左目を失くして、懲りてやめたはいいが…好きだった手品じゃあ食っていけなくて、裏現実足突つ込んだマフィアに雇われたのがきっかけ。時折手品で人を殺したくなるんだ、だから副業に殺し屋をやつてる」

「ふうん…。殺人衝動？」

「まあ、そんなとこだ。椿は電車で殺戮がきつかけだろ？」

「…………いえ、正しくは”殺戮をした電車内に頭蓋破壊屋がいた”の
がきっかけね」

「……………は？」

何だか昨日から喋りすぎな気もするが、レネメンだからとあたしは
正直に話す。

これはナヤだつて知らないことだろう。

「ナヤには内緒よ？たまたま殺戮した電車内に頭蓋破壊屋がいて、
あたしは気に入られて彼に裏現実に連れてこられたの」

そりゃまたえらい凄い奴に誘われたな。そう言いたげだったがたま
げて言葉を出せないレネメン。

「まあ、どちらにせよ…表じゃあ生きられなかっただろうから、好
都合だったわ。人を殺さないと裏表関係なしに殺戮しちゃう、殺戮
中毒みたいなもんだから」

「…はあ……………なんか、アンタ……………次元が違うな」

ぼんやりと始まりの日を思い浮かべていれば、レネメンは笑いを洩
らした。

「デビューが派手なだけあって、凄いな、アンタ。流石は頭蓋破壊
屋に並ぶ存在の紅色の黒猫だ」

可笑しそうにレネメンは笑う。

笑えるくらいあたしのデビューの裏側が可笑しかったのだろうか。

「表に産まれたのが、間違いいみたいに アンタは裏こそがア
ンタの世界なんだろうな」

それは多分、レネメンの純粹な本音だったろう。
表に産まれたのが、間違いみたい。
ウマレタノガ、マチガイミタイ。

「そうね…あたしも、産まれたのが、間違いだと思うわ」
あたしは微笑みを返す。

レネメンのマジックショー。現在、アメリカではそこそこマジシャンとして売れている。
ショーはほぼ満員。

一日で三回。一回目は客として観ていたが、二回目は裏方を手伝った。
レネメンの衣装は背広。ヴィジュアル系のように多少アクセサリーとアレンジがある。

彼見たさに来た女性客が半数のようだ。
眼帯でオールバックの黒背広のイケメンマジシャン。
その手品の内容も命懸けで迫力あるものばかりが多かった。
裏方の人間からレネメンのことについて訊いてみれば、好感の持っているいい仕事仲間だと思われる。
裏方の人間の中には誰一人、裏現実者がいない為、レネメンが人殺しマジシャンとは知る者は少ない。

「よ！椿！」
「遊太：それにディフォじゃない」

二回目のショーが終われば、裏方に遊太とディフォが現れた。

「退屈だと思つてな」

どうやらレネメンが呼んだらしい。しかし呼んだのは遊太だけらしく、デイフォオを見て苦い顔をする。

「次のショーまで時間があるだろ？行くぞ。遊太は黒猫でも口説いて」

「えっ、ちょー！」

「は？ちよつと…？」

「……」

デイフォオは軽くあたしを睨み付けてからレネメンの腕を引いて、あたし達を残して外に行つてしまふ。

呆気にとられてしまい、レネメンのSOSに応えられなかった。

黒眼帯の背広マジシャンがゲイなエロ吸血鬼に拐われた。

「なんでデイフォオを連れてきたの？」

「いや……椿がレネメンといつて聞いたら…獲物を狩るような眼で行くつて言い出してよ…」

「……ふうん」

レネメンをあたしに取られまいと遊太を代わりに差し出した模様。別にモノにするつもりはないのにな、どっちも。

「どうする？レネメンを助けにゲイなエロ吸血鬼に立ち向かう？」

「え？なんとかなるっしょ。いつものことだしな。……腹減った、飯でもどう？オレが奢るからさ」

いつものことらしい。

ニカッ、と遊太が誘うのであたしは微笑み返して頷いた。

…ごめんね？レネメン。

遊太と暇潰しに映画を観て、オフィスに戻ってきたがそれでもコクウは帰ってはいなかった。

一匹だけ留守番をする黒猫があたしの足にすがり付いて甘えた声を出す。

「お腹が空いた？ほら」

餌を与えて、ソファに腰掛ける。

猫しかいないオフィスの静寂を耳にしたただぼんやりとした。

「この夢の意味を、考えたことはあるか？」

気付けばそこは、白い空間に変わっていた。

ソファは白のベッドとすり替えられており、あたしが横たわった白いシートには黒いブーツがどっかりと乗せられている。ベッドの横にパイプ椅子を置いて座る男の脚だ。

それが頭の近くに置かれているため、疎ましく思い起き上がる。

「人間どもが解釈して作った夢分析によりやあ、部屋は心や感情を示す。分かりやすく言うなら、現在のご機嫌とやらだな」

男は相手の反応なんて御構い無しに話す。

「さて、お前の場合、夢の中の部屋は病室だ。窓もドアもない、それはまあそれは大したて関係無いだろう。夢分析したいなら印象に残ったもんをしっかり覚えることだ。何がなにして誰がいて何をしたかどんなイメージを持ったか……お前の場合は白から黒に変わる

つてことだ」

切り目を吊り上げた笑みで更に細めて、男はあたしを見つめる。人をおちよくる笑み。

「まずは色から分析しようぜ。白からだ、白な、白。白は、人間がイメージする通り…清纯や清潔…クク、無垢な魂な。次は黒だ、黒。黒は人間がイメージする通り、悪い意味が多い…力や秘密に暗黒、または不安や死の象徴。クククツ…：簡潔に解釈すんらお前の気分はピユアだったが不安に蝕まれたってなるが。…クククツ！違うな、お前をよく知ってるオレ様が解釈するなら、色はお前の連想するものを示し　それは」

「ここは部屋じゃねえぞ、V」

男の言葉を遮り、ベッドの上の彼の足を蹴りつて落とす。

ここは部屋ではなく、空間。

真っ白な、果てしない空間である。

壁なんてない、ベッドに椅子しかない。

勿論、現実ではないため、男の首を切ろうにもナイフがない。夢でもないため、望んでもナイフは出てこない。

いつの間にか眠りに落ちてあたしは、頭の中の居候悪魔に脳内に招待された。

あたしの脳内でも、居候悪魔・ヴァッサーゴに改装の権利がある。

この空間は目の前の男、つまりはヴァッサーゴのものだ。あたしの頭の中なのに。

「お喋りしたいならお前が出てこい、勝手に他人の頭の中に客を招くな」

「あーん？大家さんは客に入るのか？」

「さっさとあたしを起こせ」

「寝てる間に黒野郎が帰ってきちまうかもしねえもんなあ？」

クツクツクツクツと笑うヴァッサーゴを睨み付ける。ここにナイフがあるうと、切りつけてもヴァッサーゴは死なない。

なんせここは彼の支配する世界なのだから。

その為にあたしをこちらに引き込んでこうやって話しているのだから。

「あーもういいよ、勝手に喋ってやがれ」

「オレが教えてる。あの時、手を掴んで良かったのか否か」

ヴァッサーゴを無視してベッドに横たわる。頭の中でも寝れるだろうか？

試そうと目を閉じれば、白い空間によく映えた黒い衣服を身に纏うヴァッサーゴが上に覆い被さるように目の前に現れた。

うんざりして目を回すが、一体何を口にしてあたしを怒らせるのか、他にすることもないので聞いてやることにする。

「帰って、その眼で確かめればわかる」

あたしの二つの眼を指差して、ヴァッサーゴは言った。

つまらない。あたしはまた目を回す。つまらない、つまらない。

「お前が理解できない、V。何考えてて何を企んで何がしたいのかわかりやしない。お前は何を望む？」

あたしを白瑠さん達の元に帰れないようなことを背中を押してさせたのはヴァッサーゴだ。黒の集団に入るよう言ったこともある。何がしたいのかさっぱりだ。

肌の柔らかさを確認するように指先がワンピースの中で踊る。

「ここはあたしの頭の中。アンタが支配しようが夢と変わらない。アンタがあたしを殺そうが、犯そうが、起きれば関係ない」

「殺すだつて？物騒なこと言っくんじゃねえよ」

ヴァッサーゴが喉で笑い、それが耳元にふりかかり擦る。同時に服の中の指先が。

「あつ……」

「クククツ……ここで首を絞めて殺せば、お前の意志が消えて、身体はオレのモノになるんだぜ？椿」

不覚にも声を漏らしてしまった。

ヴァッサーゴが楽しそうに耳元で甘く囁く。

「んなめんどくさいことをオレがするわけないだろ？」

「ん……っ……」

「お前に寄生するのが楽しいんだからよお」

「……ん……」

「悪い言葉ばっか使つと……お仕置きするぜ？」

耳に歯が立てられる。

「夢とは全く違う、前にも言っただろう。椿。しよーがねえな……お仕置きして覚えさせてやるよ」

あたしの顔を覗くヴァッサーゴの笑みには、悪意がこもっていた。

「白と黒、白の殺戮者と黒の殺戮者。お前の心は黒の殺戮者で染め

「られてる!!」
「っ!!」

遮る暇を与えず、ヴァッサーゴが吐き捨てた。
あたしは腕を振り上げたが。
白い空間は消え失せて、黒のオフィスが視界に映る。

「クソッ!言いたいこと言いやがって!」

コーヒーテーブルを蹴り飛ばしてヴァッサーゴへの怒りを発散させる。それだけではおさまらず、ギリツと歯を噛み締めた。

不意に顔を上げる。

コクウの部屋に気配がする。吸血鬼の気配だ。
あたしは軋む階段を上がって、部屋に入った。
ドアを開けるなり、花の香りが鼻を擽った。

「……?」

部屋に、コクウの姿はない。

しかし、代わりに妙なものが部屋に在った。

視覚に捉えたそれが疑わしくって何度も瞬きしたが、それは確かに在る。

紅色の椿の花。

それが部屋中に置いてあった。コクウの部屋が椿花の香りで充満している。

奇妙な光景に首を傾げつつ、一輪の椿花を手にした。今が時期の花でも、この辺にはない。
くしゃりと握り締めれば、赤い血が滴るように花びらがヒラリと落ちる。

「気に入った？」

唐突に耳元で声を発しられて、肩を震わせる。振り返れば、微笑むコクウがすぐ後ろに立っていた。数歩離れば、靴下の足で花を踏みつけてしまう。

「は？」

意図がわからず、警戒して見る。

コクウは花を踏まずにあたしに歩み寄った。

「椿の花。美しいだろう？」

「……は？」

何歩か下がるがコクウは歩み寄るのを止めない。退路を確保しようとして後ろを確認すれば、その隙についてコクウに腕を掴まれ引き寄せられた。

「本当に魅力的で美しい……」

あたしを抱き締めたコクウは髪を手に取り、口付けを落とす。椿花を言っているのかあたしを言っているのか、わからない。

あたしはコクウを押し退けて離れた。

何か可笑的い。

不機嫌を隠した笑みではないのはわかる。妙な笑みを浮かべている。

コクウは微笑む。

穏やかな笑みで。

あたしを見つめて。

「椿　　好きだ」

そう告げた。

「俺は椿に魅了されて、椿に心を奪われて、どうしようもなく椿が好きだ」

口を開こうとしたが、言葉が見付からずただ開いたり閉じたりするだけになる。叫んでも止めようとした。そうしなくてはならなかったのに、言葉が出ない。

「君が愛しいんだ、椿」

それは聴きたくない。

それは触れたくない。

「長い間生きてきたけど、初めて云う言葉を云わせてもらうよ。椿

あい」

白い刃のナイフが光を放つ。

あたしは飛び込み、コクウを押し倒して首にナイフを押し付けた。

ベッドに倒れたコクウ。弾みで椿花は舞い、ポタポタと落ちていく。それが更にあたしを不快にさせる。

「何のつもりだ」

あたしは低い声を出して睨み下ろす。

「何って…変なことを言うね、椿。俺は椿に告白してるだけなんだけど」

「そんなことを訊いてるんじゃない!」

ナイフを強く押し付けて、コクウの髪を引っ張る。

コクウは笑みを浮かべたままあたしを見上げた。

永遠に聴きたくなかった。

永遠に触れたくなかった。

それに気付いて、あのビルから消えたくせに。

何故口にした？何故云った？

コクウがしつこく勧誘する理由に、その感情が在ったことはわかっていた。

二人の男に愛していると云われたんだ。流石に気付く。鈍感でも、わかった。

コクウがディフォの助言であたしにアプローチしてたのが決定打。

あたしに触れる手が眼差しが言葉が感情が　愛しさでいっぱいだ。

認めたくなくてもその感情を抱いているってことはわかった。

あたしに向けられていると、嫌でも気付いたんだ。

だからこそ聴きたくなかった。云われたくなかった。その感情に触れたくなかった。

なのに、なのに、なのに！

「俺が帰ってこない間、一体何を考えてた？」

コクウは右手を伸ばし、あたしの頬に触れて静かに訊いた。

「もう少し焦らしてた方がが効果的だったけど、俺の方が堪えきれないから一日にしたよ」

ナイフなんてないみたい、嬉しそうにコクウは笑みを浮かべた。

「俺に会いたかっただろ？椿」

その言葉に、隠しきれない動揺が駆け巡る。
花を愛でるように、親指で頬を撫でてコクウは続けて言葉を紡ぐ。

「考えたんだ。どうしてわざわざあんなことを俺に言ったのか。この傷が白瑠につけられた傷で、白瑠が裏現実に誘った奴で、白瑠がいるから俺は除外だって。そんなことわざわざ言ったのは何故か、考えた。俺に諦めさせようとしたんだ、そうだろ？俺の気持ちなんてスルーできたはずなのに、一体どうしてそうしたんだろって考えた。んで、わかった」

穏やかな笑みを絶えず、コクウは告げた。

「俺がこれ以上近付けないようにしたかったんだろ？椿」

コクウの両手が、壊れやすいガラス細工を持つようにあたしの頬を包む。

暴かれた事実を、口にして。

「俺が好きなんだろ？椿」

その事実がどうしようもなく嬉しくて堪らない表情で、コクウはその事実を突き付ける。

あたしは。

白い光を放つナイフを振り上げ、勢いよく振り下ろした。

ズボツ。

ナイフはコクウの横に深々と突き刺さる。

「違っつー！！」

「俺から離れられないくらい、俺が好きなんだろ？椿。だから近付

けないようにしたかった。それでも、白濁っていう存在がいるから……否定したくなるんだろ？」

「ちがつ」

「俺が好きだという事実は、変わらないぜ」

聴きたくない。

あたしはコクウの腕を振り払おうとしたが、優しく包むくせにそれは出来ない。必死にもがいた。
聴きたくない。

「椿」

聴きたくない。

「愛してる」

聴きたくない言葉を、起き上がったコクウは告げてあたしの耳に浸透させていく。

毒のように蝕むその言葉を、見つめて云った。

理解できない言葉、認められない言葉。

アイシテル。

アイシテル。

アイシテル。

何度も云われ、何度も締め付けられた、呪文。

「……………あたしはっ……………愛してない……………」

コクウに惹かれている。

その事実も認めたくはない。

それは幻だ。そう言い聞かせてきた。

コクウが今まであたしにしてくれたことが走馬灯のように脳裏に浮かぶ。
身体を張ってあたしを落下から助けた。可笑しな気遣いの数々。用意されていた朝食。背負われて運ばれた。看病。人工呼吸。添い寝。温もり。
顔を逸らしたくても、固定されてコクウと向き合わされている。

「愛そうとしてないだけだろ？」

「……違う…愛してない。愛じゃない。貴方を好き、かもしれないけれど…愛じゃないのよ」

そもそも愛がわからない。

自分が愛する、というものがわからないんだ。

コクウを愛してない。

それだけは云えた。

「椿、俺のことを好きなんだろ？離れたくないくらい」

コクウは首を緩やかに振って問う。

「なら俺のこと、愛せる。愛だよ。そんなに怖がらなくても、いいんだぜ？椿。俺を愛しても」

優しく微笑んでそう告げる。

「嘘をつく方が、苦しいだろ？俺のそばにいるならさ」

「っ」

「認めていいだぜ？」

優しく、髪を掻き上げられた。

浸透するその声に、揺らぐ心。

「俺はここにいる」

黒い吸血鬼は云う。

「そばにいるよ」

あたしに告げる。

「椿が愛しくて堪らない。愛してる」

愛していると云う。

「だから椿も、俺を愛して？」

愛を求める。

「愛し合おう、椿」

吸血鬼は妖艶に微笑んで顔を近付けた。

「他の奴らなんて気にせず、俺だけを考えて

俺を愛して？」

椿の花の香りが鼻を擽る。

甘い口付けをしながらそれを吸い込んだ。

これが愛なのかわからないまま。

戸惑いの愛日和

目を覚ませば、赤い花びらまみれのベッド。コクウに抱き締められたまま横たわっている。

起き上がるうとしたが、コクウの腕がしっかり抱き締めていて抜け出せない。

「おはよ、椿。もう起きるの？もう少し寝ない？」

「起きるのよ、放して」

「まだ放したくない」

コクウはあたしにキスをして、更に強く抱き締める。

「怒るわよ」

「怒ったら何するの？恋人の身体を切り刻む？サディストな彼女が出来たことを喜ぶべきかなあ」

いたって上機嫌なコクウの口から出た単語を耳にして顔をしかめた。

「椿は俺の恋人だ」

納得できないあたしに認めさせようとコクウは説得するように言う。

「愛し合ってる恋人。…まあ、やってないけど…それは椿が望むと
きにするよ。今は…これだけ…」

また顔を近付けたかと思えば、深い深い口付けをあたしにしてきた。深く、ゆっくりと、まるで刻み込むように、キスをする。

唇を離せば、妖艶に笑った。

「それとも、椿は今すぐしたい？」

からかうコクウを押し退けて、椿の花を蹴散らして下の階へと降りる。

ドアを背中中で閉めて、一息吐く。

まだ身体は許してない。

それがせめての救いなのだが、気持ちが悪、気持ちが悪、気持ちが悪、い。

どうしようもないくらい、喜^{、、、、、、、、、、}んでいる自分が信じられない。

「……助けて」

助けを求めるのは嫌だが、あたしはヴァッサーゴを呼んだ。呼んだところで余計混乱することを言われるだけなのに。

「何から助けてほしいんだ？」

ビクリと震え上がる。

目の前にディフォが立っていた。

「っハイ！ディフォ、レネメンはモノにした？」

「モノにされてない……」

慌てて笑みを貼り付ければ、レネメン本人から否定された。レネメンもディフォもいつ来たんだ？

ディフォがいることを考えれば、夜明け前に来たのだろう。

「……コクウ、帰ってるんだろ？」

あたしの態度に鋭い目を向けてコクウについて訊いた。

「え？ええ……帰ってきて寝てるけど」

「退いて」

「え……？」

相談していたんだ、コクウはディオフォに恋人になったと話すに違いない。

あたしはドアから退かなかった。

「退けっば」

「嫌。寝てるっば」

「殺したんじゃないの？」

「殺してないわよ……」

あらぬ疑いをかけられてる。

「どおしたの？」

「っ」

急に背中ドアが消えて危うく倒れかけたが背後に立ったコクウに抱き留められ耳に唇をつけて囁かれる。

「なんだ、生きてたんだ」

「そりゃあ生きてるさ、今死んだら地縛霊になる」

ディオフォにコクウは上機嫌に答えた。

腹に巻き付く腕は蛇のように抱き締めてくる。

恋人になったと言い出す前にコクウにアッパーを喰らわせて離れた。

ソファに置いたコートを羽織って出口に向かえば「何処に行くの？」とコクウに呼び止められる。

「何処だっていいでしょ」

いつものように不機嫌に睨みつけて吐き捨てられなかった。失敗した表情を見て、レネメンとディフォが首を傾げる。

「いつてらっしやい、椿」

コクウだけがクスクスと笑っていた。

「クククツ！！クハハハハハハ！！ブハ！クハハハハハハ！！ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

黒のオフィスを離れるなり、悪魔の大笑いが頭の中でガンガン鳴り響く。相手にするだけ疲れるし今は相手をする元気がない為、指輪を嵌めて黙らせる。

どうしようもなく、狂わされていた。完全にコクウのペースに飲み込まれてしまっている。

何をバカなことをしてしまったんだろう。そもそもどうしてこんな気持ちになってしまっているんだ。

膝を抱える。

事実は変わらない。

あたしはコクウに惹かれていて、コクウはあたしを愛していて、恋

人同士になった。

その事実があたしを悩ませる。

嬉しそうに微笑みかけるコクウの顔は忘却して、冷静に原因を探す。何故こうなってしまったのか。

何を誤って更に厄介なことになってしまったのだろうか。

黒の集団に属した上に、コクウと付き合ったなんて知られたら…

ぞくり、と悪寒が背中を撫でる。

集団に属しただけならば、まだ許されただろう。

「……………」

いや、許される許されないの問題ではないのかもしれない。

あの人があたしに関心さえも、示さない可能性がある。

もう忘れ去られているかもしれない。

付き合うなんて、あたしは一体何を考えているんだ。

確かにコクウのことが好きなのかもしれないが、愛してはいない。

そもそも愛がわからないんだ。

愛せやしないとと思う。

愛を向けられてなんとなくわかる気がするが、それを自分が抱くと
は到底思えない。

こんな混乱の時こそ、由亜さんの笑顔が思い浮かぶ。彼女の場合、
大したアドバイスはくれえないだろうが、それでも話すだけで気が楽
になり冷静になれるはずだ。もう、いないけど。

「……………」

もう一人、思い浮かべるのは秀介だ。一番傷付くであろう人。

頭痛が起こっても可笑しくない。

やはりこれは間違っている。

今から言っただろうか。

今朝の様子からしてそれは難しそうだ。あたしがいくら言っても調子を狂わされるだけだろう。

嗚呼、どうしよう。

あたしはまた彼を、傷付けてしまうのか。

どうしようもないくらいに……。

どうして、こんなあたしなんかの為に、彼は傷付いてしまうのだ。

ああ、もう、ややこしい。

「おい。オレの仕事場で、暗いオーラ出して居座ってんじゃねえ」

あの日から、滅茶苦茶だ。

血塗れの電車から、狂ってる。

狂ってるのに、どうしてなんだ。

なんで愛されるんだろう。

どうして愛に触れるんだろう。

全くもって、狂っている。

あたしの人生、イカれている。

それを幸せだと感じるあたしもイカれている。

コクウに抱き締められキスをされて嬉しそうに微笑みを向けられて、

嬉しさを感じているあたしはよっぽどイカれているんだ。

付き合わないと言い放ち、遠くに逃げる事が出来ない。

あたしはコクウを愛せる？

答えは、できない。

何故なら、あたしは。

きつとコクウを利用をしている。

最悪なのはそう。

白瑠さんの、代わりにしているということ。白瑠さん達の穴を埋める為に彼を利用しているんだ。

コクウは代用品。

だからこそ、愛せない。

だからこそその罪悪感だ。
だからこそ、だめだと思っている。
だめだと思っているのに。
それでもやっぱり。
遠くに逃げる為に、腰を上げられない。
悪魔の囁きがあったあの日は、飛び出したのに……。悪魔の囁きさえ
ないと駄目なのか。
きつと、ムカつくことしか、言わないんだろうな。唆すことを言わ
ない。
全く、あたしはどうしたらいいんだ。

「おい！黒猫！出てけ！」
「……………」

シビレを切らしたカロライが怒鳴り、漸くあたしは顔を上げる。
特に行く場所がなかったあたしはカロライの仕事場の隅で足を抱え
ていた。

あたしが作り出すどんよりした空気に耐えきれなくなったのだろう。

「仕事の邪魔だ！なにもしないなら余所行け！」
「……………」
「…なんだ」
「……………」

じつとカロライを見上げたあと、あたしは腰をあげてカロライの向
かい側に座る。

「今度は何を作ってるの？」
「…………」。仕掛けトンファーだ」
「ふうん」

武器職人のカロライが今手掛けているのは仕掛けトンファー。
その仕掛けをカロライから聞く。

「あとのくらい完成するの？」

「だいたい一時間でできる」

「じゃああたしが試しに使ってみていい？」

「……」

完成した武器を試しに使わせてと頼んだら、まだここに居座るのかとカロライに怪訝そうに見られた。しかし、潔く諦めたらしく出ていけとは言わない。

毒針や鎖。刃物も飛び出す。

デザインも流石で、欲しいと思えるトンファーだ。

「ねえ、それ頂戴」

「やらん、依頼者のだ」

「それは残念だわ」

……欲しいな。

あたしは刃物専門だけど、そのトンファーは欲しい。カロライの作品はどれも傑作だから欲しくもなる。

「なら、刃物の武器作ってくれない？」

「そのうちな」

さらりと流したかと思えば「どんなのが希望なんだ？」と訊いてきた。作ってくれるのか。密かに笑い、作ってもらおう武器を考えてみる。

「たまにはナイフ以外の武器にしてみたらどうだ？」
「んー……そうねえ」

話していけば、時間はあっという間に経ち、トンファーは完成した。それを試しに振り回して使用。

「流石ね」

うん、と頷きたくなる。トンファーはほぼ素人のあたしにも、使いやすいさがわかる。この仕掛けも面白いし、あたしの好み。ますます欲しくなってきた。

でも依頼人の物なのよね、残念。

一通り仕掛けを確認し終わり、机の上に置く。

「ミスもなし。完成だ」

「そうね。貴方は凄腕の武器職人だわ」

「誉めても何も出ないぞ」

カロライはツンとしてそっぽを向いた。
それを見てクスクス笑う。

「……なんだ、すっかり元気になったじゃないか」

そう言われて、先程まで沈んでいた自分を思い出す。その内容まで思い出して憂鬱な気分が舞い戻る。

「……………」

「……………黙ってないで話せ。話さないなら帰れ」

沈黙して顔を曇らせたあたしにそれなりに気遣ってカロライは言う。

そんな気遣いが嬉しくて、あたしは微笑む。

カラン、と訪問者を知らせる鈴が鳴る。

振り返ればそこには青年が立っていた。

「来たか、丁度出来たぞ」

「おー！約束通りか、やっぱり武器ならお前に頼むのが一番だな、カロライ」

軽い挨拶をしてその言葉を交わし、カロライは青年にトンファーを渡す。

あ、彼が依頼人。あのトンファーの主か。

「やあ」

あたしに目を向けて青年が声をかけてきた。

「…ハーン」

あたしも短く返す。

向けられる笑みは、安っぽい。

吟味するかのようにあたしを見るその目に不快感を覚える。

「美しい方だ、カロライの恋人か？」

「よせ、違う」

「ははっ。じゃあ、またな」

冗談を言いながら、青年は報酬を払い、トンファーの確認もしないで帰っていった。カロライの腕を信用してる常連客のようだ。

「何て名前の殺し屋？」

「殺し屋じゃなくて、狩人だ」
「え」

階段を上がっていく足音が消えた頃、あたしが何気なく訊いてみればカロライはさらりと言った。

今の、狩人だったのか。

不快なあの子、てっきり殺し屋かと思った。血のおいもしていたんだ。

最初から、殺し屋だと思い込んでいた。

殺し屋専門の武器職人もいるそうだが、カロライは殺し屋にも狩人にも武器を作り売る武器職人だ。驚くことではない。

しかし、狩人がくるなら予め言ってくれ。カロライは全く意地悪だ。あたしが殺し屋の紅色の黒猫だと知られたら、狩人は狩るだろう。

…まあ気付かれなかったのだからいいか。

「名前は？」

「青鯨」

「アオザメ？」

「あるいはスクアーロ。狩人だが、血に貪欲な野郎だ」

「へえ」

どつりで。狩人より殺し屋の方が合うのではないだろうか。

ふと、気付く一つの気配。

「つうばきっ」

ふうつと息と共に甘く名前を囁かれ、耳に吹き掛けられた。他でもない、コクウだ。

「ぎゃっ…」

身体を震え上がらせ、咄嗟に離れようとした。しかし焦りすぎて自分の自慢の赤いコートを踏みつけてぶっ倒れる。

「……………」

「あちゃー、椿ったらドジっ娘だなあ」

カロライは沈黙、こうさせた本人は悪気もなくそんな声を洩らす。……………くそ。

起き上がろうと手をつくとき、その手の隣に誰かの手が置かれた。日焼けしていない白い肌。

コクウの手と理解した瞬間に腹に衝撃がきて、忽ち身体は起き上がっていた。

腹にはコクウの腕。コクウに起こされたのだ。

コクウの脚の上に座っている状態。

「会いたかったよお、ハニー」

「…ハニー言うなっ！」

コクウは髪に顔を擦り付けて、匂いを吸い込んだ。

さっき会ったばかりかだろうが。数時間前に。

抜け出そうとコクウの腕を退けようとしたが、毎度のようにびくともしない。

そんなあたし達を見て、カロライは一人溜め息を溢した。

「椿、椿。遊太と映画に行ったんだってえ？俺のいない間に。ずるういなあ」

「はあ？」

「俺と、映画観に行こう」

「はああ？」

「行く、よね？」

「っ……」

「行かないと俺……何かしちゃうなあ」

「っ！」

足掻きつつコクウの話を聞く。首を傾げて、何言っただよと冷たい目を向けていれば、コクウの手が服の中に侵入してきた。

「ラトアと遊太とは行けて……俺とは行けないのか？」

氷のように冷たい手。

そして冷ややかな声。

振り返らなくてもわかる。

笑ってない。怒ってるぞ、こいつ。

脅迫に近いお誘いをあたしは断れなかった。

「で？何観るのよ？」

「んー。あ、これ、これこれ」

昼間から吸血鬼とデート。

映画に着いてから、何を観るのか問えば上映の予定表をコクウは指差した。

それは、吸血鬼映画。

ラトアさんと観た、あの吸血鬼と人間の少女の純愛物語だ。

もう続編が出たのか。あ、ここは日本より早く上映されるんだった。

「……あたしはこれ観たい」

「これがいいよ」

「あたしはホラーが観たい！」

「俺はラブストーリーが観たいな」

「あたしはこの原作を読んだから、これを観るのっ」

「俺は原作を読んでないけど、いいじゃん。人間と吸血鬼のラブストーリーだ、俺達にぴったりの映画だろ？」

それだから嫌なんだよ。

それに今回はヒロイン達が結婚してハネムーンに行くシーンがあるはずだ。そんなモノを、コクウと観るなんて恥ずかしくて気まずいじゃないか。

必死に足掻いたが、吸血鬼映画好きの吸血鬼に手を引かれてあたしは映画館に入ってしまった。

吸血鬼と恋することを夢見て観ていたこの映画を、吸血鬼の恋人と観ている事実は至極恥ずかしかった。

まあ、映画の中のカップルとあたしとコクウは似ても似つかない。

純真で清らかなカップルと、真っ赤に染まったカップル。

ヒロインは相変わらず真っ直ぐで純粋。純愛映画なのだから当然か。そんなヒロインが羨ましくて、少し憎らしかった。

あたしには、手にはいらぬ。

純愛なんてものは。

無我夢中に誰かを愛するなんてことは、出来ないんだ。

身体を張り、命を差し出してでも、愛する人を守るなんて。

「……」

否。あれは違う。

あれは違う。あれは、ただの復讐だ。

不意に浮かんだそれを、あたしは忘却する。

あまり楽しめずに映画鑑賞は終わり、コクウと食事を摂ってからコクウの部屋に戻った。

「面白かったね？」

「…あつそ」

「椿は面白くなかった？」

「楽しめなかったって言ったじゃない。…ていうか、放してくれないかしら？」

すっかり辺りは暗くなっていて、部屋も薄暗い。そんな部屋の中でコクウはあたしを羽交い締めにしてベッドに座っている。さっきからずっとこうだ。

「クスクス…俺は楽しかったのあ。あの映画、ホント面白い。あのヒロインも椿に似てるし、相手の吸血鬼も俺に似てて、まるで俺達の映画みたいだよな」

どこがだ。

「似てるどころか、真逆じゃない。あの吸血鬼は人間の血を吸わないし、ヒロインはあたしと違って純粹でしょーが」

「んーや」

反論すればすぐ後ろのコクウは首を振った。

「純粹で頑固で魅惑的で魅了するところ、あのヒロインとそっくりだ」

そうコクウはクスクス笑って答える。全くこの男は。呆れる。

「相手の方と貴方はどこが似てるって言うの？」

「苦悩を抱えて生きてるところと、恋人にメロメロなところ」
呆れてなにも言えない。

ふと、壁際のオルガンに目をやる。

「ああ、あとピアノが弾けるところじゃないかしら？」

「ん、あーそうだねえ」

「いたっ！」

いきなり首筋を噛まれ、あたしはコクウの顔を押し退ける。
牙を刺したわけじゃなく、肌を挟んだだけで血は出ていない。

「クスクスクスス…」

コクウは笑う。

「思い出したんだ」

「は？」

見上げて睨み付ける。

「前に訊いただろ？白瑠と椿が似ているかどうか」

いつだったか。コクウにした質問。

あれは確か、体調が優れずコクウに看病されてた時だったか。

コクウは。

似ていない。

そう答えたはずだ。

「白溜と椿が似てるどころ。ほら、俺が君の血を飲んで初めてオプイスにきた時だ。君は直ぐ様、俺を睨み付けた」

あたしの髪を掻き上げて、顔を見つめるコクウは目を細めて微笑む。

「その目が、そっくりだった」

そっくり。

似ている。

「俺と白溜の出会い知ってる？」

「！」

黒と白の出会い。それは聞いたことない。

コクウはあたしの反応で知らないと解釈して、話し始めた。

「殺戮を始めて、アイツが有名になった頃だな。獲物が被って、その場に居合わせた。噂通り頭蓋骨が散らばった死体だらけ、人間が殺つたにしては奇怪で愉快的な殺戮現場だったよ」

昔を思い出して、楽しげにコクウは言う。

「そこで、初対決？」

「いや、違う。白は死にかけてた」

「えっ」

「新人で、がむしゃら、いや、自暴自棄だったんだろ。無茶に突っ込んで、撃たれても切られても破壊しに行ってたんだ。脳味噌の海に血塗れで倒れてたぜ」

そうか。

何もあの人も最初から、怪物級ではない。あの人だって人間。経験を積んで、あの人は恐れられる怪物となったんだ。

「椿と同じ、手当てしてあげたんだ。面白そうだったしね」

そして目覚めた時、あたしと同じ目をして睨み付けたのか。

「自暴自棄」

あたしの髪が、コクウの指先に絡む。

「そっくりだ」

にっこりと、微笑む。

睨み付けた目だけじゃない。自暴自棄になっていたことも似ていると言いたいのか。

あの白瑠さんが、自暴自棄。

「あの頃はまだニヤニヤ笑ってなかったからなあ、世界の全てを恨むような目してた」

笑わない白瑠さん。

それは想像したくないな。

あの人が笑わない時は、怖い。

本当に怒っている時だ。

笑顔で怒っている時より、怖い。

「……………」

でも。

あの人とあたしの共通点は、それじゃない。何処だろう。

あたしはあの人を見て、似ていると思った。それは何処だろう。殺戮中毒？

それだけか？

もつと他になかっただろうか。

ぽすん。

押し倒されて、視界が変わった。

「ねえ、椿」

黒い猫のように笑う吸血鬼が見下ろす。

「俺と君の共通点はなんだと思う？」

「……貴方、似てないって言ったじゃない」

「好き合ってるどころ」

フレンチキスをあたしの唇に落とすコクウ。

「……………」

「ねえ、椿。明日は何デートに行く？」

吸血鬼の恋人はにっこりと笑う。愛しげに目を細めて、あたしを見つめて。

別れることを考えていたあたしは。

それを告げることもなく、口を塞がれる。

朝目覚めれば、コクウはそばにいる。

抱き締めてくる温もりは、手放せなくて。だけど戸惑ってしまっ

て。

その温もりが愛なのか？

「召し上げれ」

「……」

バジルパスタが目の前に置かれた。バジルパスタは嫌いじゃない。むしろ好きだ。イタリアに滞在してた際に、本場のイタリアンを食べた。

まあ、”彼女”がご馳走してくれたからなんだけど。

問題は量だ。多すぎる。大盛りだ。

「コクウ……貴方、あたしを大食いか何かと勘違いしてない？」

「今まで抜いた分を食べた方がいいかと思つて」

「身体を壊すわよ。冬眠前の熊か、あたしは」

「くひゃ、椿は食べないと身体を壊すよ。あ、Vがいるから大丈夫か。あーん」

向かいに座るコクウはフォークでパスタを巻き付け、あたしの口元に運ぶ。あたしは冷めた目で彼を見たが、口を開いてそれを食べた。料理の腕前は本場のイタリアンシェフにも劣らない。秀才だな、コクウは。

あたしが食べたのを見て、満足そうにコクウは笑った。

こいつは幸せに笑うわね。

そこに黒い猫がテーブルに飛び乗った。パスタをねだりにきたようだ。

「そうだ、コイツの名前をつけよう」

猫には猫の餌を与えて、頭を撫でるコクウはそんなことを言い出し

た。
そういえば名前がなかったな。

「その子雌？」

「雌」

「んー」

「好きな言葉とか」

「んー…」

モグモグと食べながら考えてみる。コクウは考える気がないのか、あたしの言葉を待っていた。人懐こい追い掛けてくる黒い猫。度胸がある面白い奴。真冬の街で会った。

「真冬でいいんじゃない？」

「マフユ？」

「そう真冬」

「マフユ」

適当に出せばコクウはすぐに決定してその猫をマフユと呼んだ。猫は喜んだように鳴いた。

「ところで、コクウ。次は何するの？番犬の件」

なんだかんだで半分食べれてる。もういいかな、とくるくるパスタをフォークに巻き付けながら訊いてみた。

「情報を掻き集めてから行動。生存を確認して見付けるか誘き出すかにどっちかになるだろうね。死亡を確認したらあの宝で蘇らせるまでだ」

「…………ふうん」

頬杖をついて、フォークに絡んだパスタをほどく。そうすればコク
ウは口を開いてねだった。

あたしはその口にフォークを突っ込んでやる。

「そんなに番犬はすごいのか？」

「ん？」

「噂でしか知らないから。貴方が戦争相手に選ぶくらいなんだから、
相当強いって確信があるんじゃない？」

「あるさ。弱くてももう俺達の標的」

俺達の標的。

あくまで黒の集団の標的なのか。

「椿は興味ないのか？番犬に」

「それはあるわ。期待はずれじゃないことを願うわ」

「期待を裏切らないさ」

きつと楽しい。

そうコクウは言った。

「今日は何デートする？椿」

頬杖ついて、あたしはただコクウを見つめる。

バターンッ！

扉が乱暴に開かれ、眠たい身体を起こす。重たい瞼を開いてみ

れば、ディフォがそこに立っていた。

「どうかしたの？ディフォうつ！？」

起き上がり用件を聞こうとしたが、それは許されなかった。コクウの腕によってベッドに沈められる。

「……………」

コクウは眠っているのか、何も発しない。それを見て、ディフォは沈黙。

しばしの沈黙のあと、ディフォはくるりと世を向けて部屋を出ていった。

「……………何今の、テレパシーでもしたの？」

「してないよお。おやすみ」

あたしに抱き付いてコクウはそれだけを言う。
何かあったのか？

眠いため、あたしは考えることを放棄して目を閉じた。

「……………なにこれ」

パチリと目を開く。

見てみれば、遊太がそこに立っていた。

「あ、椿。はよー。朝飯食わね？」

笑顔を作るって気さくに誘う遊太。そのよそよそしさはコクウがあたしに抱き付いて眠っている光景を見たせいだろう。

…重い。

「おはよ」と挨拶を返して起き上がれば、ばふんつとベッドに沈められた。

「……ちよつとコクウ。なによ」

目を閉じたままだが、コクウは起きている。もう一度起き上がったが、コクウの腕があたしの身体をまたベッドに沈めた。

「コクウ…なに!？」

「今日は一日中ここにいよう?」

「はあ!？」

「…あ、じゃあオレは用があるんで……」

「ちよつと!遊太!助けなさいよ!」

頭がくらくらしして、起こればワケわからないことを言われた。なんだ、引きこもれって意味か。

遊太が一人で逃げようとしたから呼び止めれば、「無理無理」と言いたげな顔で首を振る。

コクウを指差して首を振る。

なんとなく、言いたいことがわかった。あたしは睨み付けるのを止めて一息つく。遊太は静かに出ていった。

デイフォオが来ても一言も返さず、遊太にも見向きしなかったコクウはただいま不機嫌なのか。

にこにこして余裕綽々のコクウが不機嫌だと、誰とも会わないし喋らないらしい。

このあたしは例外らしいが。
コクウの黒い髪を摘まんだり、撫でたりしてみた。
そうすればコクウの無表情だった顔は、柔らかくなり口元が緩む。
コクウは猫のように頬擦りをしてあたしにすり寄る。
髪からシャンプーの香りがする。なんの匂いか表現できないのは、
吸血鬼の肌から発する香り。
それを嗅いでまた、眠りに落ちる。

「おはよー、つうばき」

次に目を覚ましたとき、コクウは真上にいた。
何故かあたしの頭を膝に置いて笑顔で見下ろしている。不機嫌は直
ったようだ。

そんなことより、カーテンの向こう側が真っ暗なことが気になる。
何時間寝たんだ、あたしは。

「不機嫌になる前に知らせてくれないかしら？ディフォ達が迷惑し
てるわよ」

「ねえ、椿。夜の散歩デートしにいこう」
「……………」

高層ビルの屋上。

冷たい風が吹き荒れ、髪を掻き上げる。空は暗闇に包まれて、小さ
な穴はきらめいていた。

コクウはあたしの掌を握って御機嫌に歩いている。
あたしはただ手を引かれるがままについていく。

「貴方の機嫌は寝ればなおるものなの？」

「んう？椿次第だよ」

コクウは振り返って上機嫌な笑みを向ける。風で少し聞き取りにくい。

下に目を向ければ、淡い光を放つ地上。

座るよう促されて、腰を掛ける。

地上につかない足を眺めていれば、コクウは口を開く。

「今日は玄孫の誕生日なんだ」

「やしゃご？なにそれ、アンタに孫の孫がいるの？」

目を見開いて、コクウの顔を見る。彼は相変わらず微笑んでいた。

「俺の弟の玄孫さ。俺の弟は人間だからね。その玄孫が面白いんだ、俺と顔がそっくりでさあ俺に間違えられ、たあまあに狩人とかに襲われるんだぜ」

「……………笑い事なの？」

コクウに血の繋がった子孫がいると理解した。

人間のままの弟がいたのか。

吸血鬼は子供を作れないが、人間なら。

それにしても可哀想な玄孫だ。

顔がそっくりで襲われるなんて。ましてやそれが黒の殺戮者と間違えられるなんて、史上最悪ではないか。その彼は人間なのだから。

「彼も殺し屋なの？」

「いや、裏現実者じゃない。襲われたトラウマで裏現実を毛嫌いしてるよ。まあ、中間フラフラしてるかな？俺の弟は自分の子供に語り継いでたから”俺の兄貴は吸血鬼”だって。俺が吸血鬼と知ってるから、表社会では生きてないよ。今は裏社会で生きてるかな。裏

現実を知ってるのに表現実で生きるなんて苦痛だよな」

「……………貴方、なに孫の人生を狂わせてるのよ」

可哀想すぎる。

コクウの子孫で顔がそっくりで襲われ、表現実で生きづらくなっただなんて。

すると、コクウは目を丸めた。

変な反応に首を傾げたが、コクウはニツコリと笑う。

「俺だって弟の玄孫を裏に巻き込む気なかつたんだぜ？三年前に狩人に追い込まれてたから助けたんだ、そこで初めて会った。アイツが生まれながらに運が悪かつただけでさあ、俺は悪くないよ？むしろ救世主だぜ？それとも俺に存在するなつて言うの？酷いなあ恋人同士なのに」

「存在するなつてまでは言わないわよ…被害妄想するな。運が良いのか、悪いのか……………元凶の貴方に助けられるなんてね」

「それは偶然じゃないぜ。俺に似てる子孫が狙われるかもしれないから俺、日本に待機して見張ってたから」

「は？」

風でよく、聞こえなかった。

日本に？待機してた？

「貴方の子孫、日本にいるの？」

「そうそう。弟の孫に日本の方が安全だから移り住めってアドバイスしたから、今は日本にいるぜ」

「……………貴方、ずっと、弟の子孫を見てきたの？」

「そうだよ」

「弟達が老いて死んでいくのを、見てたの？ずっと」

コクウは少し、悲しげに微笑んだ。

「弟の死に目には会えなかったよ、身体をいじくり回されてたからね」

「！」

「弟の子供に聞いたんだ。弟はずっと、俺を待ってたんだってさ。老いで死ぬその時も、俺のことを言っていたらしい。」俺の子供達をよろしく頼む”ってさ」

この吸血鬼は。

ずっと見てきたのか。

自分の身内が、老いて死んでいくのを。ずっと。長い間。

黒の殺戮者と恐れられる吸血鬼が、そんなことをしていたのか。

一体どんな気分なのだろうか。

自分の血の繋がった子孫が、自分を置いて、老いて死んで逝くのを見るのは。

人間であるあたしが、その気持ちを知ることにはできない。

コイツは。

この吸血鬼はなんなんだろう。

どうしてこんなにも自虐的な生き方をしているんだ。

「弟の頼みだから、ずっと見守ってるの？」

「それもあるけど、面白いだろ？自分の子孫を見れるなんて、俺ぐらいだぜ」

コイツは笑う。

可笑しそうに楽しそうに面白そうに。

「…あたしは面白くないけど。血の繋がりなんて嫌いよ。面白くもなんともないわ」

「そうかな。俺のそっくりは面白いぜ、今度会ってやってよ。恋人だつて紹介して玄孫にまで語り継いでもらいたからさ。真つ赤に染まる絶世の美少女がいたことをね」

「……………」

そんなことを言われて、ふと変なことを考えてしまった。

それを問うかどうかを迷っていればコクウが膝に頭を置いて横たわる。

愛しげにあたしを見上げたその笑みを見下ろして、問うことにした。

「あたしが死んだら、貴方はどうするの？」

なんともバカらしい質問。

別に自分が老いて死ぬなんて思つてない。ましてや老いるまでこのコクウと付き合っているとも思わない。

ならこの質問をするなんて無駄だ。

あーあ、やつちやった。

「あの映画の中の吸血鬼と同じだ。君より長く生きるつもりはないよ。きつと君がいなくなった世界なんて、全て何もかもなんの価値もなくなる」

コクウはあたしの頬に手を当てて、そう答えた。

なんの迷いもなく、真つ直ぐにあたしを見つめて言う。

「出来るなら、君が死ぬ前に俺を殺してくれるといいな。吸血鬼つて自殺するの苦労するんだよね」

「……………殺すのだつて苦労するでしょ」

「そつだな、焼死で心中しないとね」

コクウは笑って起き上がって顔を近付ける。

「まあ」

鼻であたしの顔を遮る髪を退けて。

「椿のことは、死なせないけどな」

額に口付けをして言った。

「殺させないし、自殺もさせないぜ？」

「……………あっそ」

あたしは目を逸らして俯く。

馬鹿馬鹿しくて呆れるのに、それでもあたしは嬉しくて恥ずかしくて。

顔が赤くなる。

そんなあたしなんてお見通しでコクウは「本当に可愛いな」と顎を掴み、目を合わせさせた。

「愛してる、椿」

温かい場所にまたあたしは居る。

「なんだよ、黒猫」

「なにが？カロライ」

「用もねえのにオレの仕事場にくんじゃねえって言ってんだ！」

カロライの仕事場に居座っていれば怒鳴られた。

「いいじゃない、邪魔してないんだから。貴方の作品みてるど退屈しないんだもの」

「そうだよーそうだよー、黒猫の言う通り」

「邪魔してないじゃんー、むしろ褒め称えてる！」

「邪魔してんだよ！特に貴様だ！ナヤ！」

ビシツと指を　　ではなく、手入れをしていた刀でナヤを指すカロライ。

ナヤはバツと青ざめて両手を上げた。

カロライの作品を鑑賞しながら、ナヤのうんちくなどを聞いてきたのだ。遊太と一緒に。

「この暇人どもが！仕事しろ！」

「気が向いたらね」

「気分仕事すんじゃねえ！！」

「黒猫は自由だねー、流石だ。そんな黒猫大好き！」

「貴様は狼を追う仕事あんだろっがっ！」

「うわお！？刀振るな！て、手詰まりでっ」

「リフレッシュにここに来たわけだよ、カロライ君」

「ここに来るな！全員出てけっ！！！！！」

カロライがぶちギレている為、あたし達はカロライの店を出た。

「ちょっと煩すぎちゃったわね、ナヤが」

「僕だけのせい！？」

「椿い、次は何する？」

仕事する気にもなれず、だからと言って四六時中コクウとべたつくのも甘ったる過ぎて嫌になり、暇潰しに出ている最中。

遊太も暇で、行き詰まり愚痴に来たナヤもいたので、一緒に引き連れてきた。

「何するって言われてもねえ……」

頭の後ろに腕を組んで考えてみる。

特に面白いこともない。

なにかないだろうか。

「……ウルフの調査でもしましょうか」

「ええー」

苦いものでも食べたような顔で、ナヤが激しく嫌がった。

他に思い付かなかったのだ。

「やだやだあーあ！他のことしよしよ！黒猫お」

「あーわかつたわ、わかつたから。なら他の案を出しなさいよ」

「黒猫がなんかしよう！それを流す」

「却下」

「ぎゃふんっ」

仕事する気はない。

一蹴されてナヤは落ち込んだ。

すると、遊太の腕が肩に回されて引き寄せられた。

「それにしても、最近元気だよな！椿」

「え？」

「最近優しいもん！おおらかで和む！気品な猫にゃん！」

「意味がわからないわ、ナヤ」

「黒つちもご機嫌だしなあ」

ナヤも腕を組んで引っ付いてくる。遊太はニヤニヤと笑って顔を覗いてきた。

うっ…。

付き合ってること、言ってはいないが、もう態度でバレバレか。

「どこまでいったの？椿ちゃん」

「え？もう勿論いくまでいったんでしょ、猫ちゃん」

「貴方達、刻むわよ」

からかう二人に言えば、笑って離れた。

コクウと付き合い始めてから一週間は経っただろう。黒のメンバーと幾分か気軽に接している。

壁を作って浅く付き合うつもりだったのに、コクウのせいで予定を狂わされた。

「

」！

何か感じて後ろを振り返る。

そこに予想外でコクウが立っていてギョツとした。

「つうばあきつ」

「うっ」

がばっと、抱きつかれる。

「椿って敏感だよな、はは。恋人の気配は時に」

「なっ…ちが」

遊太が爽やかに笑って言うから否定しようとした。今はコクウの気配に気付いたわけじゃない。

視線だ。

突き刺さる視線を感じたから振り返った。

だが、抱きつかれながら気配を探してみたが、もう近くにいない。

…気のせい、か？

「黒っち、何か面白いことねえ？暇潰しにさ」

「面白いこと？レネメンのショーをぶち壊すのは？」

「却下」

「だな」

あたしの頭に顎を乗せるから振り落として一蹴する。遊太も苦笑した。

「あっ！ゼウスを拝もう！そうしよう！」

何かを閃いたナヤが突然声を上げる。

その名で過るのは一人の刑事。

しのずかけんたろう
篠塚健太楼。記憶を失った狩人。

秀介の相棒。ポセイドンの相棒だからゼウス。雷鳴のように銃声を轟かせるからゼウス。

彼のことを、指してるのだろう。

神話のゼウスを拝むなんて、この人達が言うわけがない。

「ゼウスはポセイドンと日本に居るんじゃないの？」

「いや、ここにいるぜ。先日ポセイドンと仕事したって情報を入手したんだ」

「じゃあ…。」

秀介、戻ってきたのか。アメリカに。

「それで今日はサンセット通りで仕事を」

「却下」

「うえええええっ！！！！？」

信じられないとばかりにナヤは声を上げた。…五月蠅い。

「うおおいつ！なんで！？なんで！？なんで！？ゼウスだよ！ゼウス！神コンビを拝もうよおおおっ！」

「俺もきゃーかあ。ポセイドンもいるじゃーん、椿に馴れ馴れしいから近付けたくない」

「椿と黒っちの敵でもある狩人だしな、暇潰しにしてはリスク高いからパスだな。悪いな、ナヤ。ゼウスは興味あっけど」

「うおおーいつ！！！！」

スタスタとナヤを置いてあたし達三人は先を歩く。

秀介は、あたしのいないアパートにもう足を踏み入れたかな。

弾丸で穴だらけのあの部屋を見て、きつと心配している。
神出鬼没な彼のことだから、その内目の前に現れるだろう。
かぶつ。

耳を噛まれる。言うまでもなく先程からくつついて離れないコクウが噛みついた。

「他の男のこと考えてるだろ？」

「……だったらなによ」

「…外出禁止にする。」

「貴方にそんな権限ないわよ」

「あははっ、椿は束縛嫌いそうだもんなっ」

あたしとコクウの会話を聞いて遊太が笑い出す。

外出禁止なんて冗談じゃない。過保護な兄達を思い出してしまった。
あの時は、なんだかんだ嫌だったけども、結局は言うことを聞いていたっけ。

それは、あの家が居心地よかったからか

。

「椿っ！！！」

大声で呼ばれてハッとす。

「なに？」

いつの間にか、目の前にコクウが立っていて両肩を掴んでいる。横から遊太が顔を出す。

「なにポケットとしてんだ？何度も呼んだんだぜ？」

「え…？」

「椿：大丈夫？」

「え……」

周りを見回せば、かなり歩いたことに気付く。

ここまで歩いたことも呼ばれていたことさえも、記憶にない。

あれ？

意識が飛んでた？

心配そうに顔を覗いたコクウは、遊太と顔を合わせる。
ふわりと、身体が浮いた。

「ちょ！？」

「帰るんだよ。椿が疲れてるみたいだからね」

「はあ！？疲れてないわよっ下ろしなさい！」

「精神的に疲れてるんだ、多分。家でちゃんと休めよー」

コクウがあたしを抱えて、オフィスの方へ歩き出す。遊太は手を振ってあたし達を見送った。

「コクウ！下ろしなさい！」

「やだ。またポケットとして怪我されたくないから。お姫様抱っこされて考え事してていいぜ？」

「怪我しないわよっ」

「まあ、楽しみにしてて」

暴れたが急にコクウが妖艶に笑ったため、停まる。コクウは耳元で囁いた。

「考え事ができないコト、するからさ」

クスクス、楽しそうに笑う。

え…。
完全停止するあたしだった。

抱えられて戻ってきたオフィスには、ソファァーで蠍爆弾が仮眠をしていた。

「おー、お二人さん、おかえり」
「ただいまあ」

ああ…。足掻くことなく大人しく連れてこられてしまった、あたし。何故だか、動く気がしなかった。

別にコクウの悪戯を楽しみに待っていたわけじゃない決して、決してだ。

コクウはあたしをテーブル前の椅子に下ろして、向かいに腰を下ろした。

笑みを浮かべて黙ってあたしを見つめている。あたしはただ見つめ返した。

怒ってはいないようだ。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

何分続いたかわからない沈黙のあと、あたしはテーブルに腕を置いて顔をそこに埋めた。

「彼には言わないで…。あたしから話すわ」

小さく、それでもコクウには聴こえる声で、あたしは云う。
コクウがどんな反応するのか見たくなくて、顔を上げない。

「君は、優しいね」

コクウは柔らかい声で、あたしに告げた。
顔をあげて見れば、コクウは穏やかに微笑んでいた。

「その方がいいだろう、俺から聞くよりも何倍もな。彼は椿の親友だしね」

くしゃくしゃと、あたしの頭を撫でて、頬に両手を当てるコクウ。

「甘いものでも食べよう。待ってて」

ちゅ、と額にキスをして、コクウは立ち上がり、あたしの紅いコートを脱がせて掛けてから、甘い物を買いに掛けた。

「……………」

別に…そこまで。

気を遣わなくてもいいのに…。
乱された髪を片手で直す。

「はいん。ならおれさんは、ピアと騒げるように酒でも買ってくるか。紅公、ビール以外ならいけんだろ？ちゃんと飲めよ」

盗み聞きして、なんとなく把握した蠍爆弾が起き上がって、そう言

い出した。

貴方が飲みたいだけでしょ、そう言う前に蠍爆弾も出掛けていく。
あほか。

そうあたしは笑いを漏らす。

その笑みは浮かべたまま、ぼんやりとする。
何かを考えていた気がしなくもない。ただ記憶には、残らなかった。
気付いたら、夕日で赤く染まっていたカーテンは黒に塗り替えられていて、空気ががらりと変わっていた。

「
!？」

この感じ。

蠢く気配、突き刺さる視線、集中する殺気。

手練れの殺し屋の襲撃を意味する。

それも 異常だ。

異常の人数。五人以上どころではない、三十人以上だ！

黒のオフィスが囲まれている。

狙いはあたしか。

いや違う。

狙いは、黒の集団だつ!!!

名前を馳せることが出来る、絶好の獲物。個人は無理でも、大人数で襲撃をすれば倒せると踏んだんだ。

いつかポセイドンを襲った殺し屋達みたいに。

あんな殺し屋とは比べられない手練れの殺し屋が、結託してきたか。

「紅公！」

蠍爆弾の声。彼も気付いたようだ。

パリーン、硝子が割られ、殺し屋が突撃してきた。

そこで、あたしは自分の異変に気付く。

「おい！紅公つ！！」

爆弾で足止めをする蠍爆弾に肩を掴まれても、あたしは動かなかつた。蹲ったまま動かない。違う。動けないんだ。

意識はあるのに。動かせない。

まるで回線がいかれてしまったかのように。動けない。

否、そもそも。

身体を動かす指令さえも、していないのかもしれない。

あたしは、なにを、してるんだ？

その疑問にさえ、疑問を持つ。

あれ。

なんだ。

これ。

わからない。

強引に蠍爆弾に立たされた。

あたしがまともに覚えているのは。

そこまでだった。

紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い
紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア 紅ア
い い い い い い い い い い

ガタン。

ガタン、ゴトン。

ガタン、ゴトン。

電車が揺れる音。振動が甦る。

ガタン。

ガタン、ゴトン。

ガタン、ゴトン。

あの血塗れの電車の中。

ガタン。

ガタン、ゴトン。

ガタン、ゴトン。

あたしが初め、人を殺した時だ。

あの時と、同じだ。

同じなんだ。

殺している時の記憶なんて曖昧で、気付いたら、大量の死体と血の海。いつ手にしたかも覚えていない凶器を右手に、立ち尽くしていた。

あの時は、何も感じていなかった。

戸惑いもしなかった。

ただ冷静に自分が殺つたと理解して、これからどうするべきなのかぼんやりと思考していた。

それから。

そうしたら。

あの時は。

笑い声が聴こえたんだ。

あの人が。

あの人が笑いかけたんだ。

「
…」

「だけど、顔をあげて、視た先にはあの人じゃなくてコクウが立っ
ていてあたしを見つめていた。
その表情はまるで。」

悲しむようにで激情を秘めているようで。

あたしじゃないダレかを睨んでいるようにも、見えた。

少し離れているだけなのに、彼が遠くに感じる。ずっと。傍にいた
彼が、寄り添って抱き締めていた彼が。

あたしとコクウの視線が初めてぶつかれば、コクウはにっこりと笑
みを浮かべる。

「くひゃひゃひゃ。椿い、真っ赤だあ」

そう言っつて死体を踏みつけて、歩み寄ったコクウはあたしが握る硝
子を取り外す。

「ごめん。遅れて」

それから、謝ってあたしの髪を整えた。

笑みを貼り付けることを忘れて何処かを見つめるコクウを見上げな
がら、口を開く。

「あたしが……一人で殺ったの？」

「……そうだよ」

「……みんなは……無事？」

「各自送られた刺客を返り討ちにしたから無事だぜ」

コクウから記憶を飛ばしたの？なんて問いかけはなかった。あたし
の様子を見て、感付いている。

「髪が痛むなあ。早く洗おうか」とコクウはあたしをひよいと軽
々持ち上げた。

抱えられて、生存者に気付く。

黒のメンバーだ。

デイフォとレネメンにナヤ、遊太を目視できた。他は見当たらない。黙ってこちらを見ている。

遠巻きに見ている。

「……ごめん……」

「ん？」

「ごめんなさい」

「なにが？ 椿」

「貴方の仲間を傷付けて……ごめんなさい」

四人は、怪我をしていた。

見たところ軽傷のようだが、刃物による怪我だとわかる。

あたしがやったのだと、理解した。

「…覚えてるの？」

「…覚えてない」

肯定か。

記憶にはないが、あの遊太が駆け寄りないうしナヤが騒がなかったのは、多分それだけ異常だったんだ。

硝子で傷付いた右手以外は無傷なあたしは圧倒して殺戮していたはず。ミイラを切り裂いていたのと同じ。

それだけなら、遠巻きにしない。

あたしは、彼らにも刃を向けて、切りつけたんだ。

その場にいた全員を殺す。

その為に、振るったんだ。

ただ、殺戮をするだけ。

「さそりは…」

「……アイスピックと一緒に闇医者に手当てされてるよ」

つまり、二人は重傷なのか。

蠍爆弾は、一緒にいたんだ。

不意討ちにあたしが切りつけたら、致命傷を負いかねない。

それでも、あたしは、取り乱すことなんてなかった。

人殺しをした事実を認めるように、納得して受け入れている。

言い訳も謝罪の言葉もでない。

罪悪感はないんだ。

あの時と同じ。

「忘れてたの」

あたしは、言う。

「人を殺し続けていかなくちゃ、こっとなるって」

殺戮衝動の爆発。

それがこれだ。

あたしは殺戮中毒の殺人鬼。

揺るがない事実。

例え、愛に抱き締められても、血塗れなんだ。

ガタン、ゴトン。

電車の揺れる音。

ガタン、ゴトン。

眠ってしまいたくなる揺れ。

「つうばあきい」

ぼんやりしたあたしの意識を戻すのは、目の前にいるコクウ。ベッドに俯せてているあたしと同じようにいる。

「皆、怒ってないよ」

「……そう」

「降りないの？」

「……」

大量殺戮の翌日。

あまり眠れず、ベッドにずっと寝転がっていたあたしは、まだメンバーに会ってない。

コクウに手を引かれて、あたしはオフィスに降りていった。

そこには全員が揃っていた。

蠍爆弾は左腕を包帯で固定して肩から下げて、ソファに座っている。その他の者は見たただけでは何処を怪我したのかわからない。

「ごめんなさい」

「謝るんだったら」

酒飲めや」

俯いて心のこもっていない謝罪をすれば、蠍爆弾は右手でボトルをあたしに投げ付けた。

反射的に受け取ったあたしはきよとんとする。

「さあさあ！座るさ！おつまみも選り取りみどりさ」

「早く飲もうぜ！」

「待たせるなよ」

「襲撃を返り討ちにしたって新たに武勇伝が出来たお祝いだあ！」
アイスピックも遊太もディフォもナヤも手に酒を持ち、笑いかけてきた。

振り返ってコクウを見上げると、彼もにつこりと笑う。
背中を押されて、少しだけ強引に火都の隣に座らされる。

「かんぱあい」

火都はあたしの持つボトルに缶ビールを軽く当てた。
そのボトルを取り、コップに注ぐのはレネメン。

「飲まないとは言わせねーぞ？紅公」

「酔い潰れるまで許さないからな」

「さあ、どんどん飲むさ」

「祝杯だあ！」

「……………」

ぼかーん、と彼らの顔を見る。

やがてあたしは、吹き出して笑う。

「ええ、乾杯」

「いやあーあ、あれは凄かったね！レッドトレインもあんな感じだ

つたのかな！黒猫！ボクは感激で昇天しそうだ！君はボクの期待に応えてくれた！君はものすごいよ、頭蓋破壊屋に並ぶどころじゃない！史上最強の殺戮者にもなり得る！他の武器には目もくれず、無駄な動きなんてなく、まるで闇を駆け巡る猫のように軽やかに、ザツクザツクと切り裂く光景は見惚れた！殺戮者の中の殺戮者だ！何人だっけ？そうだ、37人だ！あの数の、しかもそこその腕の殺し屋を一人で！もう君に合う言葉が見付からなくて悔しいよ、黒猫！！全ての誉め言葉を言っても足りないくらいだ！解語之花！迦陵がりゆ頻伽うひんが！謹厳実直！鷄群けいぐん一鶴いっかく！才色兼備！出藍しゅつらん之誉のほまれ！純情可憐！純真無垢！新進気鋭！大胆不敵！沈魚落雁！泥中之蓮！八面玲瓏はちめんれいろう！八面六臂！不言実行！

「とりあえず適当な四字熟語言ってない？ナヤ。半分わからないんだけど」

「くひゃ、黙らせて」

「んんんん！」

アルコールが入るなりペラペラと雄弁に語り出したナヤを呆然と見上げていたが、いい加減やめさせた。彼がこうやって話すのはいつものことだ。

「だが、本当に驚いたな。おれさんまで切りつけて、アイスピックにまで、な？」

「いやはやあ、私は光栄さ！」

「ごめんなさいね。殺し忘れて、禁断症状が出たのよ。切りつけた記憶、ないわ」

「凍てつくような冷たい瞳に見つめられて、ぞ・く・ぞ・くしたさ」

蠍爆弾もその話題に触れば、恍惚な表情を浮かべるアイスピック。

…気持ち悪いな。

一同はアイスピックに引いた。

賑やかで騒がしく、笑いの絶えない飲み会だった。

あたしは彼らとの飲み会と似ていると思いつつ、酒を飲んでいく。

「黒猫！勝負だ！」

「は？」

「やれないとは言わせないぜー！テキーラ持ってこい！」

もう出来上がっている蠍爆弾が言い出した。横からディフォがテキーラを出す。

「飲み比べだ！」

「なんで飲み比べしなきゃならないのよ……」

「くひゃひゃ、いいね？負けた方はディフォのチューで」

「よしや！勝て！黒猫！アンタが負けてもしてやらん！」

「……………」

酔っ払い相手にテキーラで飲み比べ。

怪我をさせた負い目があるため、あたしは致し方なくやった。

がやがやと外野は騒ぎ立てて盛り上げる。

くだらないことで爆笑して、ある者は歌い出して、ある者は踊り出して、ある者は卒倒した。

あたしが目を覚ましたのは、翌朝。或いは昼。眠さと怠さの両方で身体が重い。

誰かの胸の上にいる。

顔を見て確かめなくても、コクウだとわかった。

腕を回して、ギョツと抱き締めれば、頭を撫でられる。

頬をすりよせ、また目を閉じた。

頭上でコクウがくすくす笑う。

「まだ酔ってるの？椿」
「んう…」

そういえば、禁酒した理由を忘れていた。過ちを犯さないためだ。まあ、コクウがそばにいるなら誰かと何かする前に助けてくれるだろう。コクウもそれなりに嫉妬するし。彼自身、酔った勢いで行為に及ぶことは好かないらしいし。安心して飲めるわけだ。それにしても。心地いいな。

「コクウ…」

「ん？」

「…すき…」

寝言のように小さく、あたしは言う。

不意打ちは成功したのか、コクウが驚いた反応をした。と思う。

「もう一度言って」

「…」

「椿…」

両手であたしの顔を包み、向かい合わせたコクウが静かに微笑んで求める。もう一度言えと。

あたしが口を開く前に、軽く唇を重ねた。

「……好き」

「…俺もだよ、椿」

コクウはまた唇を重ねて、あたしを抱き寄せる。コクウの片方の手があたしの髪をすり抜け、背中を撫で、腰を尻を足を撫でて、そして。

「ゴホン！」

そこでピタリと止まる。

咳が聴こえた方を見れば、カロライ。テーブルの椅子に腰掛けていた。

「いちやつくなら他所でやれ！」

カロライの他にも、レネメンとナヤがそこにはいて、三人分のコーヒーが置かれているところを見ると先程から起きていて一部始終を見て聞いていたらしい。

あたしは酔い潰れて、コクウはそのままソファであたしと寝ていたようだ。

これは恥ずかしい。

「おはよう。あたしにももらえるかしら」

「あ、ああ……」

「え、続きは!？」

「しないわよ」

顔を覆っておいて指の隙間から盗み見ていたナヤに一蹴する。

「それで、仕事は決めたか？」

「え？」

「また切りつけられちゃたまらん。暴れだす前に摂取しとけ」

撮取？一瞬首を傾げる。
あたしが殺戮衝動で暴走しないように、殺人をやっとけという意味だと直ぐに理解した。

「撮取って…薬中みたいに言わないでちょうだい」

「似たようなもんでしょ」

…似たようなものだが。

「ボクが紹介する！だから黒との交際を報道させ」

「ない。」

「ぐあっ」

また一蹴するとナヤは悲鳴を上げて倒れる。

「前は二週間と三日は耐えたのに……ああ、あれは矢都に怪我させられてたからか」

「ん…？」

以前負傷を負わしてきた火都の弟の矢都の名前を出せば、会話を聞いて目を覚ましていた火都が起き上がった。

そこで思い出すのは、白瑠さん。

矢都の対決の日。

可笑しかった白瑠さん。

可笑しくて、可笑しくて、可笑しかった。

初めて血塗れの白瑠さんを視たんだ。

いつもの笑みなんてなく、睨み付けていたっけ。

それが可笑しすぎて、可笑しすぎて、怖かった。

笑顔の仮面を剥ぎ取ったみたいだったから

。

不意にあたしは、コクウに目をやる。
彼はきよとん、と首を傾げた。
あたしは口を開きかけて閉じる。
言わない方がいいと思ったからだ。

「三日に一度は殺るようにするわ」

あたしはコーヒーを嚙って言う。

今まで毎日のように殺していたから、その分早く暴走してしまったのだらう。

前はベッドの上で怪我を治すために二週間以上殺しをしてなかった。大体一週間以上空けることは避けるか。

「じゃあ今夜、仕事しようか。一緒に」

コクウが笑いかけるが、あたしは反応を示さずにコーヒーを飲む。
どちらでも構わないけれど。

「死体は処理終えたの？」

「ああ、頼んでおいたさ。半分は貴様が払えよ」

「金欠なんだけど……」

「俺が出すよ。くひゃひゃ」

「それにしても多いわね、三十人が襲ってくるなんて。敵でもいるの？」

「くひゃ、敵はそこらじゅうにいる。皆殺しにしたからわからないけど、大方金より名誉狙いの殺し屋が集まったんだあ」

「でしょーね」

ひゃー、そんな話になるとは思わなかったな。ん。でもねえ

あの人はチエシヤ猫の尻尾みたいに揺れてにんやり笑った。

そうかもしれない

白瑠さんはそう答えた。

つばちゃんと俺は似た者同士だ

似たような存在だよねえんひゃっ。本当にそんな感じだ

冷たくもなく、貼り付けたような上っ面な笑みでもない。

全然違うけどお、おんなじ。手が真つ赤な殺戮者だ。そーゆー存在だよねえ、俺とつばちゃんは

何故か嬉しそうに、彼は笑ってそう答えた。

あたしが頭蓋破壊屋に並ぶ存在だと噂が流れている事実を知って訊いた答え。

”存在が似てる”。

「つうばああきい」

呼び掛けられて顔を上げれば、笑みを浮かべてあたしを見下ろすコクウ。

白瑠さんと対になる存在。

「さつき言いかけたことを教えて」

ベッドの上で武器の整備をしていたあたしの隣に腰掛けて、コクウは問う。

あたしは少し迷ってから、はぐらかすのも面倒なので口にした。

「白瑠さん、あの人はいつから笑いながら殺戮し始めたの？」

「ん？白？んーう」

首を捻り記憶を探り出すように右上に視線を向けるコクウ。

彼は確かに、白瑠さんは初めは笑いながら殺してなかったと言った。多分、矢都を殺す時のあの表情で、昔は殺戮してたんだろう。

では、いつから？

いつから、笑みを貼り付けて殺すようになったんだろうか。

「手当てしてやった俺を睨みつけて、殺してきてえ。んで暫くちよつかいだしてた時はまだ笑って殺戮してなかったなあ……ああ！思い出した思い出した」

ぽんっ、とコクウは手を叩いた。

ちよっかいだしてたのか…コクウは。

「話してたらいきなり笑い出してえ、殺しに来たんだった」

にこっ、と軽く言い退けた。

「話してたら？」と怪訝に顔をしかめて首を傾げる。

「んーう、なんだったかなあむう…」

仰け反って思い出そうとしていれば、コクウはやっと思い出したら

しくばあつと笑みを浮かべた。

「何をそんなに苛々してるんだい？ 一步境界線を踏み越えた君は、もう二度と境界線の向こう側には引き返せないっていうのに。踏み込む前の自分なんかには、戻れやしないよ。いくら殺ったって罪悪感なんてわからない。殺したいだけ殺す。無情にあつさり死んだ人間なんてまるで壊れた玩具としか思わないだろ？ 俺達殺戮者にとつたら周りの奴等なんて脆く壊す為の玩具だけ。はつきり言ってやるよ、親切に教えてやるよ、小僧。それが俺達の“正常”。他人に言わせれば“異常者”だとしても俺達はもう、人を殺さずにはいられない。殺さなくちゃ生きていけない。解るだろ？ 自分が変わったと。解つてんだろ？ もう戻れないってさ。何したって、殺戮者である事実には消せないぜ”」

楽しみに笑いながら、コクウは白瑠さんに言ったであろう言葉を口にする。

あたしは、ぽかんとした。

「そうそう、そんな表情して白は黙って聴いてたんだ。ちょっとしてから狂ったように笑い出してえ飛び掛かってきた！」

可笑しそうに笑い声を漏らすコクウ。

あたしは言葉を失い、暫く黙っていた。

やがて気になったのかコクウは笑いを止めて首を傾げる。

「それ」

あたしはなんとか声を出す。

「似たようなこと……あたし……言われた」

白瑠さんに。

そう言えば、今度はコクウがキョトンとした。

「白瑠さんに言われて…あたしは納得した…。自分が殺戮者で殺戮中毒で　　もう戻れないって、理解したの」

「……………」

コクウは、何も言わない。

彼に言われたあの言葉で、あたしは理解した。納得してた。

あれは自分のニュースを初めて見た直後だったな。

ああ、そうか。

その言葉は、白瑠さんにとっても、現実を受け入れるきっかけになつてたんだ。

コクウにそう云われて、白瑠さんは吹っ切れたのか受け入れて、笑つて殺しにかかった。

その時、彼がなにを思ってたかまではわからないけど。

多分、そうなんだろうな。

事実を突き付けられて、ぶちキレたかもしれない。嫌がらせのように、彼はあたしにそう告げたかもしれない。

あたしがキレなかったから、あんなつまらなそうな顔をしてたのかも。

きつと問い掛けても、あの人の真意なんてわからないだろうけど。

「……………ふうん」

コクウは、至極つまらなそうな顔でそっぽを向いた。あの時の、白瑠さんみたいに。

あたしの勝手な憶測だけど、あの人は　　コクウがあつての白瑠さんなのかも。

誰かが言ってくれなきゃ、多分

あの人はがむしゃらなまま

自殺行為で息絶えていたはずだ。

白あつての黒。

黒あつての白。

「……………」

コクウに意識を戻せば、表情は不機嫌に染まってどこかを見据えていた。

「…コクウ？」

呼び掛けてみれば、コクウはあたしに顔を向けて、にこっ、と笑みを浮かべる。

「なあに？もう一回好きだって云ってくれるの？」

「……違うけど」

整備を続けて手を動かす。

直ぐにふと思考し、手を止める。

「……傍にいてくれて、ありがとう。コクウ」

「！」

「…多分。貴方がいたからこそ、一週間以上、平然と居られた」

まあ、殺しを止めていたのはコクウが理由でもあるが。

それも呟いたが、コクウが押し倒してきた。

「ちょ、ナイフが」

「ふふ…素直で可愛いなあ。俺、我慢、出来なくなっちゃっぜ」

「はあ…?」

近距離で囁かれるが、コクウはなにもしない。

有言実行で、コクウはあたしが許すまで手を出さないそうだ。

…ふむ。

「その身体」

「ん？」

「あたしの許可なしに傷付けないでよね」

「……うん」

「撃たれても刺されても焼かれても、だめだから」

「……うん」

コクウはあたしの横に、身を置いてクスリと静かに笑う。

「君の仰せの通りに」

最低三日に仕事に行き、殺しをやる。コクウとナヤからもらった

仕事をやったり、レネメンと仕事したりした。

特に問題なく、淡々と片付けることが出来て、これが日常になりつつあると思っていたある日。

コクウに舞い込んだ仕事をしていた。

依頼内容は皆殺しなのに、隙をつかれてターゲット達が数人逃げ出してしまい、あたしとコクウは手分けして探すことに。

「おい、V。どこ行った？」

「自分で探せ」

「ケチ悪魔」

悪魔を頼ることも出来ず、自分で探す。吸血鬼と違いニオイで追うこともできないあたしは、人気のない路地を駆け抜ける。

そう言えば、ヴァッサーゴと話すのは久しぶりだな…。

そんなことより、ターゲットの始末だ。

とりあえず顔は覚えているから、人間の気配を頼りに探しだして…。走ったままスピードを落とさずに路地を曲がった、その時だ。

びゅんっ。

青い閃光が視えた。

咄嗟に後ろに飛び、それを避ける。

舌打ちが聞こえた。

体勢を整える前に、また青い閃光が顔を掠める。

あたしは後退りしながらそれを避けて、脚を振り上げた。

相手は避けるために、距離を取る。

「……………貴方」

「やあ、紅色の黒猫」

そこに立っていたのは、青鮫。

カロライの店にいたあの狩人。

青いトンファーを手にして、嫌な愛想笑いを浮かべてそこに立っていた。

……。あたしが殺し屋だと知っている。殺し屋を狩るために来たよ
うだ。

バグ・ナウの爪を伸ばす。

「カロライのところに赤いコートの美女がいたから、もしかしたらー
って尾行したら案の定。紅色の黒猫だった。オレのことは聞いたか
い？」

にこ、と上っ面な笑みで問うコイツに不快感を抱く。尾行、ね。な
んで教えてくれなかったのよ、ヴァッサーゴ。

「一人になったから、名をあげに来たのかしら？」

「そこまで野心家じゃないさ。血塗れの殺戮者の腕前を知りたくて
な、くく、まあ……一石二鳥だな」

くるり、と青いトンファーが回る。

何にせよ、彼は狩人。

そしてこいつは血を欲する狩人だ。

殺し合いは避けられない。

まあ、来るのならば殺すけれど。

青鮫から動いた。

楔が飛び出て振られる。それを仰け反り避けるあたし。毒が仕込ま
れている、触れたらアウトだな。

あたしはヴァッサーゴがいるから平気なんだが。

「ヴァッサーゴがついてるからあたしは大丈夫 か？クククッ」

「うぜっ」

口を開いたヴァッサーゴに言葉を洩らせば、自分に言われたと勘違いした青鯨が「ああ!？」と叩き潰すように振るってきた。
ふむ。

実力はあるな。

カロライの常連に低級はいないっか。

距離を取って短剣を取り出す。

「ねえ、知ってるかしら？」

「あ？」

「その武器、仕掛け。全部知ってる」

「なに!？」

動揺が走ったのを見て、コンクリートを蹴り飛ばして二つの剣を振る。青鯨はトンファーで受け止めたが衝動で後退る。

あたしは勢いを殺さずに続けて切りかかった。

ガキンツ。

二つの短剣を二つのトンファーで受け止められた。

にやり。鯨が笑う。

ズンツ。

トンファーから刃が飛び出して、頬を掠める。熱いものが伝うのがわかる。

それを視て、青鯨は嬉しそうに笑みをつり上げた。

だがその笑みはすぐに崩れる。苦痛に歪む。

「…くっ」

受け止められたら刃が出てくるのは簡単に予測できる。仕掛けは全て知ってるのだから。

「これも、カロライ作なの。彼は本当にいい仕事をするわよね」

青鯨が離れても上げた足。ブーツの底には刃が飛び出している。短剣で叩けば、刃は引っ込んだ。腹に一突き。青鯨は腹を押さえている。

「…はつ。知らないのか？このトンファアの刃には猛毒が」
「さて、鯨さん？」

短剣をしまい、カルドを片手に持つ。

「自分の血で真っ赤に染まった経験はあるかしら？」

冷たく微笑んでやる。

青鯨は笑みを浮かべつつあたしを睨み付けた。そしてまた衝突。

カキン、キキン。

カルドとパグ・ナウで攻める。

腹の傷で簡単に押せた。

ヴァッサーゴがいなければ押されていたのは毒が回ったあたしだ。フェアじゃない。当然だ。

「動くなっ！！」

そこに響いた声に、あたしも青鯨も動きを止める。

「……………」

目を向けた先には、銃口を向ける篠塚さん。

「お前は…ゼウス！」

ポセイドンの相棒、ゼウスこと篠塚さん。

狩人同士、面識があるようだ。

そんなことはどうでもいい。

あたしと青鯨は篠塚さんから目を放して向き合い、刃を振るう。

「二人とも止まれ！」

篠塚さんの制止する声も聴かず、己の武器を叩き込む。

同じ狩人だから自分を撃たないと判断して青鯨はあたしに集中する。

あたしも撃たないと思っっているし撃たれたところで死なないから青鯨を殺すことに専念した。

カッソキンッ。

疲れが出て一つのトンファーが青鯨の手から弾いていく。あたしはにやりと笑い、それを瞬時にパグ・ナウを引っ込めた左手で掴んだ。顔面にヒット。

そこで怯まず体勢を整えて反撃してきたのは評価するが、終わりだ。がら空きの左腕を掴み、捻りあげて擦じ伏せる。

そしてカルドを振り上げた。

ガウンッ。

雷のような銃声が轟く。

またあたし達は動きを止める。

「やめるんだ！樁！」

火薬のにおい。目を向けた先に篠塚さん。

あたしは。篠塚さんを見つめたまま、カルドを降り下ろした。

「っ樁！……！」

どしゃつと青鯨の身体が落ちて、篠塚さんが怒鳴るように声を上げたが直ぐに青鯨に駆け寄り生存を確認する。首をスパッと切ったんだ。即死。

死亡を確認したらしく、篠塚さんはやるせない表情をする。

あたしは気にとめずに、もう一つのトンファアを拾う。死人にはもう必要ないだろ。貰うわ。

「じゃあ、急いでのので。失礼します」

あたしはコクウと合流しようとして篠塚さんに背を向ける。どうせコクウは標的達を既に始末しただろう。もしかしたらあたしの血の二オイを嗅ぎ付けて来てしまおう。それは避けねば、ゼウスと黒の殺戮者を会わせてはならない。

「そんなくらの流血じゃあ気付かないぜ。鯨の血で届かないだろうしな…つうか、椿。う・し・ろ」

今日はお喋りな悪魔。

後ろと言われて振り返ってみた。

ガシャン。

篠塚さんが意外に近い。右手が掴まれていて、その手首に手錠。

…… デ ジ ャ ヲ 。

「……篠塚さん…?」

「来るんだ!」

「!?!、いや…えっ…ちょ………意味がわかりません!」

「これ以上殺しをさせられない!」

「ハイ!?!」

前回同様、篠塚さんは自分の左手首に嵌めてあたしは繋がれ引かれ

ていく。強制連行。

「な、なんですか、いきなりっ。その話は解決したんじゃないんですか!？」

最後に会ったあの時、納得して諦めてくれたとばかり思っていた。

本当に……そこにいて……大丈夫なんだな？

はい、大丈夫です。

……そうか……

下手な笑みを向けて頷いたあの時の篠塚さんを思い出す。
ぐりんっ、といきなり篠塚さんは振り返った。

「白瑠さんの元を去ったんだろ」

「!」

ビクリと繋がれた腕が震える。

きつく問い詰めるように眉間にシワを寄せ鋭く見下ろす篠塚さん。

「居場所だと……彼らの元が居場所だと言うから………無理矢理そこから連れ出すのはやめたんだ……俺も秀介も」

「……秀介君に……訊いたんですか……」

「……先週……日本で白瑠さんに会って、聞いたんだ」

「!」

その名前に、肩を震わせた。

あの人……ちゃんと生きてるんだ。

そりゃ当然だ。あの方は死なない。

ギユツと、繋がれた手が握り締められる。

あたしは言った。

あたしはこのままで居たいと。
あそこはあたたかい場所だと。
だからどうか奪わないでと…。

「俺が止める！！お前の中毒を治す！俺が治るまで側にいて君を助ける！」

その言葉は、前に手錠をつけられた時にも似たようなことを云われた。

「篠塚さんっ…」

どうしようもなく、苦しくなる。

篠塚さんはあたしの手を引いてまた歩く。

「助けは…要らないってば…」

あたしは弱々しく大きな背中と言う。

「大丈夫なんです…」

前みたいには。

あの時みたいには。

言えなかった。

大丈夫だって笑って言えなかった。

ガシャン。

仮住まいであろうアパートの一室の二段ベッドの柵に、あたしは両手を手錠に繋がれた。

「あの、篠塚さん篠塚さん。これ誘拐です少女監禁です」

「あれ、秀介…どこいったんだ」

「スルー!?!」

いつから貴方はそんな子になったんだ!酷いわ!

「捜してくる、樁はここで待っていてくれ」

「え、この体勢で?ちょ、やめて、なんの罰ですか、ちょっ!篠塚さあああん!」

カムバック篠塚さん!

二段ベッドに向き合うように両手を拘束され立ち尽くすあたしは寢室に置き去りにされた。

柵は鉄パイプ。木製ならサクッと切れたのに…くそ。

こんな体勢で秀介に会ったら何されるか…。

そもそも彼に会わず顔がない。

絶対あたしは顔に出て、すぐにコクウとの仲がバレてしまうだろう。

だめだ。

秀介に会えない。

今すぐ会えない。

せめて心の準備をしてからだ。

そうと決めたら逃げる。

だが、逃げられない。

カチャンカチャン、銀色の手錠と鉄パイプがぶつかり合う音だけが響く。

「いいじゃねえか、心機一転で刑事といればいーじゃん？楽しいかもよ」

悪魔はケタケタ笑い、あたしを苛つかせる。こいついつか首を跳ねてやる…。

「助けてもらえよ」

「助けは要らない」

あたしは一蹴する。

「禁断衝動にビクビクするのはやめて、治してみるのもいんじゃないの？」

ビクビク？

「仲間が傷付くのは怖いんだろ？なら人殺しを禁止してみたらあ？」
禁酒してみたら？そんな軽いノリでヴァッサーゴは言う。全く不快だ。

カチャンカチャン！とあたしは手錠を引っ張る。鉄パイプはびくともしない。ベッドが軋むだけ。

「軋む音を出して誘ってんのか？」

「ああっ！！黙んなさいっ欲求不満悪魔！」

カんに障りあたしは声を上げる。それは彼を喜ばすことでしかない。あたしの苛立ちは最高だった。

パグ・ナウでザクリといってみるか。壊れたらカロライに怒られる

だろうな。

鎖を目掛けてパグ・ナウの刃を出せば、切れるかもしれない。

うっし。

やろっ。

そう決断した瞬間だった。

太股に両手が置かれ、するりと腰の方へと撫でるように触られる。

大胆な痴漢行為にあたしは右足を後ろに振り上げた。安易に受け止められて、あたしはよろけて柵に掴まる。

「とつてもそそられるプレイだね？ 椿。俺を誘ってるのかな…？ん？」

「コクウ！…ちょ、触るなっ、こらっ」

内股に手を入れて際どいところを撫で回すのはコクウ。後ろから抱き締めながら楽しそうに笑いを漏らす。

「両手を手錠で縛られてる恋人が無防備にしてるなんて…嗚呼、興奮するなあ…クスクス」

「いいから外しなさい！ 何しに来たのよっ」

「そりゃあ、手錠拘束プレイしに」

なんとかプレイを口にしたのはヴァッサーゴだったが、あたしは首筋に唇を這わせていたコクウに頭突きを食らわせた。

「痛いなあ、ゼウスに連行された黒猫ちゃんを助けに来たのにい」

口を尖らせながらもコクウは鎖を握り潰してから、銀色の輪を引きちぎり解放してくれた。

「ほらっ、行くわよ」

「お礼はあ？」

「後にして！」

「じゃあお礼はベッドの上で」

「ありがとう！」

あたしは直ぐ様コクウの手を引いて窓からその場を離れようとした。コクウとゼウスの対峙なんてごめんだ。

何より、秀介に会うのが嫌だった。

コクウとゼウスではなく、コクウとポセイダンの衝突になるか。

「ポセイドンに会わないのかい？」

コクウが問う。

「椿から言わなくちゃいけないだろ」

「……………今は、言えない」

「…そうか」

あたしが言えば、コクウは頷きあたしの腰に手を回して地を蹴り飛んだ。

吸血鬼に抱えられてあたしは夜空を眺めた。

静かだった。あたしもコクウも、悪魔さえも沈黙。何も喋らなかつた。

ばふんっ。

乱暴にあたしはベッドの上に落とされた。いつの間にかコクウの部屋。

「コク…ウ？」

覆い被さるようにコクウはあたしの上に乗る。妖しげな笑みを浮かべながら。

「ねえ……」

色つばく囁き、迫ってくる。

ねえ……じゃねえよ！

あたしは後退りしたがベッドの上では逃げ場がない。

そこでバタバタ、階段を駆け上がる音が聴こえてきて、救世主

ではなく最悪な知らせを届けに来たチクリ屋がドアをぶち壊す勢いで入ってきた。

「っはっあっ……！うおいつ大変っ……だっ……！」

「落ち着きなさいよ、ナヤ」

息を切らしたナヤを宥めつつ、コクウを離そうとブーツで押し退けていればそれをあたしの耳にいれた。

「黒猫が……紅色の黒猫がっ……黒の集団の一員だって情報がっ……流れてるっ！」

闇色の晩餐会

そこは美しく。
危険な晩餐会。

「どうゆうことなの！その情報は流さないって約束でしょっ！！」

黒のオフィスにあたしの怒鳴り声が響く。

「ボクは流していない！流していないよっ！約束は守ってるよ！多分この前襲撃した奴らが漏らしたんだ！こうなるならボクが流したかったよっ！！」

「だまらっしゃい！」

「ひいっ！」

自分は無罪だと声を上げるナヤに投擲ナイフを叩き落とせば、悲鳴を上げて離れた。

ギロリ、机の上に座るコクウに目を向ける。

「しょうがないだろ、もう流れちゃったもんを揉み消せないさ」

「コクウー！」

呑気に笑うコクウにあたしは怒り任せに怒鳴り声を上げた。

「キーキーと声を上げるな。遅かれ早かれバレることだろ、お前が黒の集団に属してる事実は」

そこで口を開いたのはカロライだ。
確かにその通りだ。あたしは怒りがおさまらなくて椅子を蹴り飛ばす。

「別にいいだろ、たかが属していることが周りに知られたただけだろう。なにか支障があるのか？」

「…っ」

大有りだ。

篠塚さんに秀介に、知られるのは不味い。
幸樹さんに白瑠さんに…知られるのは。

「そうだけ、椿。黒猫は黒の集団に属してて、黒の殺戮者と付き合ってるって、裏現実で暫く噂されるだけじゃん」

「え」

遊太にさらりと言われた言葉がすぐには理解できずに停止する。

「うおおおっボクがチクリたかったああ」と嘆くナヤの声は聴こえない。

両手で頭を抱えて絶句する。

「ん？どうした、紅公。金持ちの令嬢が付き合っちゃいけねー男と付き合ってるとお父様にバレちまった時の顔みたいだな」

酒を買い込んで帰ってきた蠍爆弾があたしを笑った。数秒絶句したままだったが、投擲ナイフを彼に放つ。

「い、いきなりなんだっ？」

「はっはっはー、おもしろっ」

嗚呼、なんてことだ。

秀介の耳にもその情報が入るだろう。それなら今さっき秀介に会ってあたしから伝えるべきだった。知ったら彼はどうするだろうか？

眞実を確かめにここに乗り込んでくるだろうか。

白瑠さんはどうするだ？

これであたしの居場所は確実にバレた。コクウと付き合っている情報も彼らの元に届くだろう。

そうしたら、あの人達はどうするだろう？

「椿」

後ろから名前を呼ばれる。

落ち着かせるように静かに、背後からコクウが呼んだ。

「今日は疲れただろ？寝よう」

「……………」

手を引かれて、コクウの部屋に戻された。

その日、全然眠れなかった。

日本にいる松平兎無さんに連絡をとって、確かめれば日本でもそれは流れていた。

既に彼らにも届いているだろう。

あたしは三日間、コクウの部屋の隅に膝を抱えた。

何も食わず、何も飲まず、誰とも口を聞かずに。

彼らにも、その情報が届いているはずなのに。

彼らが動いている情報はあたしに届かない。
頭蓋破壊屋も白の殺戮者の目撃情報もない。
秀介は乗り込んでも来ない。
それが意味するのは、無関心。
見捨てられた、見放された、忘れ去られた。

「っ……っ」

覚悟していたことだったのに。分かりきってたことなのに。

白くん達は捜すのやめちゃったし。

忘れ去られてしまったことが、悲しくて辛い。苦しい。

白瑠さんはコクウと居ることを付き合っていることにも怒りも関心も示さない。

あたしの存在なんて無視。

捜しに来て。

迎えに来て。

見付けて。

そんな身勝手な願いを抱いていた。

本当に身勝手なことを思っつて、逃げ回りながら待っていたんだ。

悲しくても、虚しくても、これがあたしが選んだ結果だと諦める。

諦めきれずこうやってくよくよしてる。

あともう少し。割り切るから。誰も近付くな。誰とも話したくない。もう少し。独りにして。

それがあたしが最後に口にした言葉。

怒鳴って言ったのか弱々しく言ったのかさえ覚えていない。

秀介はどうしているんだろう。もう呆れてしまったのかな。それがいい。それでいい。彼の為にも。

あたしなんか忘れて欲しい。

椿さん、おかえりなさい。

幸樹さんの声。

お嬢おかえり！！

藍さんの声。

つーちゃんおかありい。

白瑠さんの声。

おかえり。

もう言わない言葉。

込み上がる感情。忘れなくちゃ。

忘れないと、押し潰される。

痛い。苦しい。嫌だ。悲しい。

忘れるんだ。

この感情を、思い出も無くしてしまえ。

タツ。

音がした。気配を感じた。

反射的に、ナイフを振るう。

獣の悲鳴に目を丸める。

暗がりの部屋。月光で見えたのは、マフユ。倒れた黒猫。血を流す

黒猫のマフユ。

切り裂いたのはあたし。

深く切り裂いた。マフユは虫の息。

震えた手で、傷口を触る。押さえて止血しても助からないのは一目

瞭然。

「ごめんなさい……っ」

か細い声が漏れる。

小さな心臓の鼓動が伝わる。弱く今にも消えてしまいそうな呼吸。

生暖かい血。

命が、消えていく。

青白い手が、視界に入り床に置いた血に濡れたナイフを手にする。そのナイフで自分の掌を切りつけたのは、コクウだった。

血に濡れた手で、マフユに触れる。

マフユが大きく空気を吸ったのか、膨れ上がった。

目を閉じていたのに目を開き、起き上がって「みゃあ」と鳴く。

「…傷が……」

「ほら、洗ってあげよう」

マフユの体に傷はなくなっていた。ただ生暖かい血があるだけ。傷を治した。コクウの血で、治した。

「ハウン君と…同じ…能力？」

「………驚いたな。ハウンを知ってるんだ…能力も知ってる……」

あたしの言葉にマフユを抱えてコクウは目を丸める。

ハウン。白銀の吸血鬼。最小年の姿の吸血鬼。

コクウは少し思考するように沈黙したがやがてあたしの手を握って洗うように言う。

マフユの身体と手を洗って血を洗い流す。

「ジエスタを知ってるならハウンも知ってても可笑しくないよな…。でも能力まで知ってるのは本当にびっくりだ。能力は明かさないのが暗黙の掟だったのにな」

「…ハウン君があたしの怪我を治してくれたの。口も聞いてくれたから、気を許してくれてるんじゃないかしら……」

「ふうん……。椿は吸血鬼に好かれやすいみたいだな…あ、違うな。人外にも好かれやすい、かな」

ベッドの上でマフユの身体を拭きながら話す。コクウはあたしの顔を覗き込む。冗談めいた言葉。吸血鬼以外の人外にも好かれている？ ヴァッサーゴに住まわれていることを指しているのだろうか。

「俺とハウンはね、親が一緒なんだ」

コクウは語りだす。

「親というか、俺とハウンを吸血鬼にした奴が共通なんだ。第二世の吸血鬼から能力を引き継ぐことがある、って話は聞いたかな？」

「ええ…聞いたわ」

ラトアさんから聞いた。

コクウが身を売り、生き残った吸血鬼を救ったことも、その時間いたんだ。

「ジエスタがハウンの親代わりだってことも聞いたかい？」

「ええ。ジエスタはハウン君を大事な息子だって言ってたわ」

「へえ、ジエスタがそんなことを…。ほんとはね、俺がハウンの親代わりになるはずだったんだ」

マフユの耳を摘まむように撫でながら、コクウは微笑んで言った。

「貴方が？」

「そう、俺が。でも放棄したんだ。俺も吸血鬼に成ったばかりで余裕なかったんだよねえ、しかも悪魔と戦争中。そうでなくても、俺が誰かの面倒なんて無理だもん」

「……………」

そう言われれば、そうかも。

コクウが本当に子供であったハウン君の面倒なんて見れなかっただろ。

見ていたらハウン君はどうなっていただろうか……。恐ろしい。

「あれ？なんか失礼な想像してない？」

「……いえ、別に」

あたしはマフユの尻尾を引っ張るように撫でる。

「それで貴方は彼と仲が良いの？悪いの？」

「え？俺は誰とも仲良しだけ」

……。

コクウの自己犠牲の話聞いていた時のハウン君の顔を思い出す。
あの様子では仲が良いとは言えないだろう。

「ジェスタから聞いたの？俺のこと。ん、でもアイツが言うわけないな……ハウンも」

「……ラトアさんから。ラトアさんから聞いたの」

「ああ、ラトア」

恋人同士だからか、あたしは白状する。そうすれば古い友人を思い浮かべたコクウは微笑んだ。

「じゃあお姫様だっこした吸血鬼ってラトア？妬いちゃうなあ」

全然嫉妬が感じられなかった。

コクウはあたしの頬に手を当てて顔を近付ける。そっと唇を重ねた。

「作るから食事摂って。明日は仕事にいこう」

「……………ええ」

明日で最後の殺しから一週間だ。

溜め息を溢す。コクウの手を借りてベッドから立ち上がり、オフィスへ降りる。

そこにはディフォしかいなかった。

「おはよう、黒猫」

「おはよう、ディフォ」

目を合わせずに挨拶。

あたしはテーブルについて、コクウはキッチンに立つ。ディフォはテーブルで雑誌を読んでいた。

「そうだ、コクウ。今週の金曜日は晩餐会だよ。今年も行かないだろうけど」

「ああ、行く」

ディフォがさらりと言えば、コクウはさらりと頷いた。予想外の返答に怪訝そうにディフォはコクウを振り返り睨み付ける。

「行くのか？お前、九回もパスしただろ」

「行くよ、だめかい？」

「……」

呆れてディフォは睨むのをやめて雑誌に目を戻す。かと思えばあたしに目を向けた。

「…なるほどね、黒猫を連れていく気か」

「？」

やれやれと首を振って一人納得。

あたしは首を傾げる。

「なんの話？」

「晩餐会の話は聞いてないんだ」

手早く料理を作るコクウがあたしを振り返った。

「吸血鬼の晩餐会だよ。年に一度行っただ。まあ互いの生存確認のための晩餐会さ」

「吸血鬼が皆集まるの？」

「全員は毎年来ない。中には一度も来ない吸血鬼もいるしね」

「それ、あたしも行っても構わないの？」

「要は生存確認だからあ、いいんだよ。パートナーに人間を連れてきてもね」

「パーティーに一人で行くなんて惨めだろ」

毎年開かれる吸血鬼が集うパーティー。

生存確認、か。仲間意識が高いからな。

んー興味こそられる。

パーティーはパートナーを連れていくのが常識。

あたしはコクウのパートナーとして連れていかれるということか。

人間の恋人をとつかえひつかえ。とラトアさんが言っていた言葉を思い出す。ラトアさんも参加してるのか。

じゃあラトアさんに会うかもしれない。

悩んでいれば、目の前に料理が置かれた。

「いいだろう？もう俺達の中は裏現実中に知られてるんだ。吸血鬼達に紹介しても構わないだろ」

コクウは目の前に座り、にっこり微笑んでいう。

ウキウキしたように身を乗り出す。
それは別に構わない。
構わないが、あたしは返事をせずに食事を摂った。

「ねえ、本気？」

「なにが？」

「パーティーよ」

仕事という名の殺人摂取をしてからあたしは切り出した。

「ああ……。椿、俺とパーティーに行ってくれ」

「だあかあああ、あたしを連れていくつまり悪魔を吸血鬼が集うパーティーに招くことになるのよ。本気なの？」

何を勘違いしたのか改めて膝をついて誘うコクウを蹴り、あたしははつきり言ってる。

コクウはいつもの笑みを浮かべながら、首を傾げた。

「ヴァッサーゴは別に吸血鬼に復讐しようだなんて考えてないんだろ？」

「らしいけど。バレたらあたし、殺されるんでしょ？」

「バレないよお、ヴァッサーゴさえ黙ってればね。ヴァッサーゴは怖くていけないって言ってるの？」

「クククツ…んなわけあるかファック。黙ってついてってやるよ。」

蛭野郎のパーティーとやらにな

今まで沈黙していたヴァッサーゴが口を開いて言う。
コクウはニコニコして立ち上がった。

「決まりだね」

「……嫌な予感がするんだけど」

「銀の指輪つけてれば大丈夫さ」

「……」

それでもやっぱり、何故か不安だった。嫌な予感が、してしまっ
溜め息が落ちた。

「なんで貴方は九年顔を出さなかったの？」

「気が向かなかつたんだ」

「……あつそ」

「くひゃひゃ、拗ねないですよ。ジエスタにハウンを頼まれたけど、
きっぱり断つたんだ。それでハウんと顔をあわせるの気まずくてさ

あ

「………九年も？」

「最近はくは白と遊んでたから」

相当ハウン君との仲が悪いようだ。

ハウン君も来てくれるだろうか。

ジエスタに振り回されているなら多分来ないだろう。会いたかった。

ジエスタが来るなら、ヴァッサーゴを引き剥がせるのにな……。まあ
いいか。

「クククッ」

ヴァッサーゴは不気味に笑う。

「……ねえ、ここまでしなくてもいいでしょ。舞台に立つ女優じゃないんだし」

「女って自覚がなさすぎだ。パーティーの時くらいめかしこめ！」
「んっ！」

金曜日。

吸血鬼の晩餐会、当日。

あたしは嫌がったが無理矢理ディフォが化粧をしてくる。吸血鬼の怪力でがっちり固定されやられていく。
いてーよ。

「そんながつつりメイクしないでいいよ。椿はそのままでも十分綺麗だもん」

「そう言うと思ってナチュラルメイクだよ」

「……コクウ、なにそれ」

頬をがしりと掴まれて唇を塗られていくあたしの視界に入ったのは、赤いドレスを抱えたコクウ。

コクウは高級感あるシルクの黒いYシャツとスーツを着ていた。普段通りであり変わらない。

コクウの格好より抱えたドレスが気になった。ディフォが着ないなら間違いなくあたしが着なくてはならないドレスだろう。

「黒、髪をいじったら？」

「椿に着せてからやるよ」

「じゃあオレは先に行く」

「うん、あとで」

「黒猫、勝手に落とすなよ」

「……」

あたしから手を離して、デイフォはコクウの髪を指摘する。やっと解放されてほつとしていたら、釘を刺された。くっ……。デイフォは先にパーティー会場へと向かった。

「さあ、椿。脱いで」

コクウは赤いドレスを広げて満面な笑みを向け、あたしに言う。着替えさせるからと。

「着てやるから出てけ」と追い出して、とりあえず赤いドレスを着た。

「……コクウ」

「着たあ？……嗚呼」

呼べばすぐにコクウは部屋に戻ってきた。あたしを見るなり声を漏らす。

「……これ、着て行かなきゃだめ？」

「……」

コクウは答えずにあたしの後ろに立った。あたしが髪をまとめて押さえて背中を晒しているからだろう。彼はファスナーをゆっくり閉めながら、腰を撫でる。

露になった肩に唇を這わす。

「すごく美しいよ……椿。なんて俺は幸せな男なんだろう……誰をも虜

にする魅惑な君を独り占めできるなんて」

「鬱陶しいわ……」

首筋にキスを落としながら訳のわからないことを言うコクウを鬱陶しいと言いなながら引き剥がそうとしないあたし。

「脱がすの勿体ないなあ……でも早く脱がしたい、クスッ」

「……いい加減にきなさい」

キスを止めないコクウの額を叩く。ドレス、脱がせる気満々だ。

あたしが着たのは肩が大胆に露出されたドレス。鮮やかな赤。

ウエストまでフィットしていて、腰にはリボン。少し気品あるボリユームのストリットの深いスカート。

鏡に映るあたしは奇妙に見えた。

黒髪。妖しく光る赤い瞳。真っ赤なドレス。

「椿……」

コクウはあたしの顎を掴み、唇を重ねた。深い口付け。それを味わえば、スカートを捲りコクウが手を忍ばせてきた。

あたしは嘔みつき、やめさせる。

コクウはただ笑った。

コクウのエスコートでパーティー会場へ。

洋館で行われる為か、時代錯誤してしまうのはあたしだけだろう。

映画で観たような一昔の貴族達がパーティーをしているような光景。例えるならオペラ座の怪人とか。

蠟燭の光で洋館は妖しげに建っている。吸血鬼にピッタリだ。

羽織っていた黒のコートを脱いで、コクウの腕に手を置いて会場へと入る。

吸血鬼の気配がする。コクウでもディフォでもない吸血鬼の気配がたくさん。吸血鬼は少ないと聞いたが一体どのくらいなのだろうか。それも暗黙の掟で口外してはならないのだろう。

着飾ったパーティー参加者に目を向けると、人間が多かった。

パートナーかウェイターで雇われた人間だろう。

あたし達は注目された。正確に言えば、コクウが注目されているのだろう。

二階に繋がる階段で赤ワインを啜りながらパートナーの女を抱き寄せる吸血鬼であろう男が見下す。

魅惑な瞳。見惚れる容姿。間違いなく吸血鬼だ。

「椿が美しすぎて皆釘付けだね」

「貴方を見てるのよ」

コクウに呆れて肩を落とす。

「本当に椿を見てるのに」と隣でまだぼやく。

「遅い」

「あら、ディフォ……………と蠍爆弾」

声をかけて来たのはディフォ。彼に腕を引かれているのは、苦い顔の蠍爆弾だった。ディフォのパートナーは蠍爆弾。あたしとコクウは吹いた。

「違っつ強引にだなっ」

慌てふためいて蠍爆弾は言い訳する。

「モノにした」

「ちげえ！」

「クスクス…」

可笑しくて笑う。

デイフォを機に、吸血鬼達は動き出す。

「久しいな…」

「やあ、スヴェン」

コクウに近付き、挨拶をする。

遠巻きに見ていたが機会を見付けて来たのか。

「それにしても、紅公。綺麗じゃねーか」

近付いた金髪の吸血鬼を見ていたが、蠍爆弾に呼ばれて振り返る。

赤いドレスに赤いロング手袋。手袋は銀色の指輪を隠すためでもある。赤い瞳の上、銀色の指輪を嵌めているとなると怪しまれるからだとか。

首にはいつものチョーカーではなく、コクウにつけられた黒のチョーカー。ダイアの宝石が埋まる十字架のチョーカーだ。髪はウェーブをつけておろしている。

「お連れのお嬢さんは誰だ？噂の彼女かい？」

「ああ、紹介するよ」

背を向けていたら腕を引かれ、コクウに抱き寄せられた。

「俺の愛する女」ト

そうコクウはスヴェンという吸血鬼に紹介する。愛する人、か。今度は間違いなくあたしは注目された。吸血鬼達の好奇の目が突き刺さる。

「彼女が、噂の紅色の黒猫か」

「やあ、マーチス」

茶髪で白い背広の男が声をかけてきた。コクウは相変わらぬ笑みを浮かべて挨拶する。

噂の、か。吸血鬼達にも届いていたのか。コクウの情報ならば同然かもな。

コクウの紹介を聞いて蠍爆弾はヒューヒューとひやかしてディフォと何処かに行ってしまった。探してこよう。

あたしはコクウから離れてパーティー会場を歩いた。

「ああ、彼女は恥ずかしがり屋なんだ。ところでマーチス、ヴァンストは来ているかい？見当たらないけど」

「当然来ている。二階だ」

「ふうん、そつか。降りたら挨拶しとおこつ」

コクウも放っておいてくれた。

豪華な暖炉にシャンデリア。

一応テーブルには料理が並べられている。

若者達のパーティーとは違い、バカうるさいBGMではなく、ピアノ演奏。グラランドピアノを引いている白いドレスの女性は人間だ。酒を勧めるウェイターも人間。

吸血鬼は人間に紛れてあたしを時々見つめる。

あたしはそれを不愉快に思いつつも、暖かな炎を燃え上がらせる暖炉をポケットと見つめた。

想像とちよつと違ったな。

きらびやかで妖艶な感じは同じだが、何か期待外れ。吸血鬼にさえ遠巻きに見られるなんてね。
今まで会った吸血鬼とは仲良くなれたが、全員とは仲良くなれそうにもないみたいだ。

「…椿…」

懐かしい声で呼ばれた。

暖炉から視線を外して、前を向けばそこには。

「……ラトアさん」

初めて会った吸血鬼がそこにいた。

驚いた顔であたしのことを見て、言葉を探すように視線を動かし、やがて暗い顔をして俯く。

「久しいな……椿」

やっと口を開いて言ったのはそれだった。

「…お久しぶりです、ラトアさん」

懐かしさと申し訳なさを感じてあたしも視線を落とす。

「……美しい、似合っているな」

「…ありがとうございます」

ドレス姿を誉めてくれた。

気まずい沈黙が訪れる。

何を話そう。考えてなかった。

話題を探してあたしは立ち尽くす。

「少し話そう」

ラトアさんはそう言って、右手を差し出した。

バルコニーに出て、そこで話すことにした。

「捜したんだぞ…あれからずっと捜していた」

ラトアさんから切り出す。

夜の風が頬を撫でて、少し喉が痛くなった。

「あの時は、すみませんでした。貴方を切りつけて刺して…」

「それはもういい」

ラトアさんは首を横に振るう。

「…帰らないのか？」

あたしは沈黙を返す。

ラトアさんは目を閉じる。

「帰ってやれ。お前の帰りを待っている」

それはどうか。

顔にかかる髪を耳にかけてあたしは夜空を見上げる。冷たい風だ。

「……コクウといるのは本当らしいな」

ラトアさんは会場に目を向けてコクウの名を口にす。このパーティーに参加していることが噂の肯定になっていた。

「コクウは知っているのか、ソイツのこと」

そしてあたしの目を真っ直ぐに見る。この目に敵意を注ぐような鋭い視線。あたしは頷く。

「ジエスタに会いましたか？」

「いや、会っていない。ジエスタも捜したんだが、見付からなくてな……。ここに来る可能性があるから来たが……。いないようだ」

そうか。ジエスタは来ないか。ならハウン君も来ないな。

「あたしも捜したんですよ。見付からなくて」

「……あの時、敵にならないと言ったが事実か？」

「はい。事実です。あたしは貴殿方の敵にはならないし、コイツもならないと言っていましたよ。コクウもそれを信じてあたしを晩餐会に連れてきましたし……。コイツ一匹じゃあ晩餐会にいる吸血鬼には勝てないでしょ？」

「一匹ならばジエスタがいなくても殺せるが……」

「あたしごと殺すしかないんですよ。知ってます」

口をこもらせたラトアさんの代わりにあたしははつきり言う。

ジエスタが言っていた。

殺すしかない。だから封じた。

封じたがヴァッサーゴは半年も経たないうちに出てきてしまったことを話した。

今は指輪で黙らせていることも話して、手袋を脱いで指輪を見せる。

「ジエスタを見付けるしかないか」

「そうですね」

あとはヴァッサーゴが自らあたしの中から出る。って方法は無理そうだ。ヴァッサーゴはしつこく居座っている。出ていこうとはしない。

「身体は大丈夫なのか？」

「はい。寧ろ絶好調ですよ、怪我は治されるんで」

「…無茶をしてそうだな…」

「そんな心配でいっぱいな顔をしないでくださいよ…」

貴方まで過保護にならないでくださいよ…。

「……………ラトアさん、藍さんはどうしてますか？」

「お前を探し回っていたな…最後に会ったのは一月前だが」

「…そうですね」

藍さんはどうしてるんだろう。

あの藍さんが、なにもしないは意外だ。白瑠さんや幸樹さんに見捨てられたけど、藍さんはまだ…。

いや、あたしが直接酷い言葉を言い放ったから、諦めただろう。少し俯く。

「…つらああ！ラトア！！」

そこで響いた声。女性の声だった。

見てみれば青のボリウムあるドレスを着たブロンドの美女が仁王

立ちしてラトアを睨み付ける。

「パートナーを放っておいて他の女を口説いてるんじゃないわよっ
！」

文句を言われたラトアさんは、呆れたように見上げる。

「この私を誘ったのはアンタよ！」

「お前がパートナーになると名乗り出たんだろ……」

「アンタが探してたから親切に名乗り出てあげたんじゃない」

どうやらパーティーに連れていたラトアさんのパートナーらしい。

あたしは驚いて見上げる。

彼女は吸血鬼だ。魅惑の瞳と牙がその証拠。

吸血鬼は男だけかと思っていたのに、驚きだ。

それだけじゃない。

腰を下ろしていたあたしは立ち上がり、彼女の前に立つ。

「あの……もしかして貴女は……」

「ん？貴女はコクウの連れじゃない」

「はい、紅色の黒猫です。…貴女はミランラ・ヴァンダセント？」

「ええ、そうよ」

あたしは興奮した。

「あのミランラ？ミランラが吸血鬼！？」

はしゃいでラトアさんを振り返る。ラトアさんはポカーンとしたが
頷く。

ミランラ・ヴァンダセント。

女優だ。あたしの好きな吸血鬼映画で主演をやっていた、大好きな女優。

「あたし、ファンなんですっ」

「あら、貴女……見た目より若い笑顔ね」

「貴女の主演の映画、全部好きです！実物も素敵ですねっ、綺麗です！」

「当然よ」

ボブヘアの髪を払い除け、ミランラは鼻を高くする。

「ミランラはたった一人の吸血鬼だ。一世紀前にも女優をやっていたな、またやり始めてる。吸血鬼が吸血鬼を演じる自虐行為に皆笑っている」

「中でも吸血鬼映画が好きです！あたし、好きなんです。吸血鬼も吸血鬼映画も」

「あら、この指輪素敵。でも安物ね」

「あっ、それは……」

ラトアさんがなにか言っているが聞き流してミランラさんと握手する。そうすればミランラさんはあたしのつけた指輪に興味を湧いたのかあたしの指から外した。手袋を嵌め忘れていた。女優がつけるような指輪と訳が違う。働いていない学生のプレゼントなのだから。

ミランラさんは自分の指に嵌めて眺めた。早く返してもらおうと手を伸ばすが、ミランラさんは避けてしまう。

「笑えているなら、大丈夫か……」

ラトアさんが独り言を漏らしたから振り返る。ラトアさんは微笑んでいた。

「やあ、ミランラにラトア」

「コクウ……」

「あー、コクウ。久しぶり」

そこにコクウが入る。

「相変わらずだね、ミランラ。美しいね、椿ほどではないけど」

ミランラさんの手を取りそこに口付けを落としてスルリと指輪を取り返す。

「ラトア、俺の恋人をこんなところに連れ出すなよお。ほら、冷える。おいで」

それからあたしの手を引いて暖炉へと連れていく。ヴァッサーゴがいるから寒さはあまり苦ではないんだが。てか指輪を……。まあいいか、どうせヴァッサーゴは黙ってる。

「ミランラのファンだったんだ。知ってたら俺が紹介したのになあ」
「……………」

だからなに？とあたしは首を傾げた。

コクウはにっこり笑って「食べ物持ってくるよ、ケーキでいい？」
と一言告げて食べ物を取りに行ってしまう。
なんなんだ。

「しばき」

暖炉の前でまた立ち尽くしていれば、名前を呼ばれた。すごく懐かしい声。

振り返って探す。視線を落とした先にいた。白銀の少年。

「ハウン君！」

「つばき」

あたしは思わずしゃがんで抱き締めた。ハウン君はもう一度呼んであたしを抱き締め返す。

「久しぶり！会いたかったのよ」

「おれも、あいたかった。つばき、きれい」

「ありがとう」

ハウン君は微笑んだ。あたしも微笑み返してハウン君の頭を撫でる。

「こりや驚いた。ハウンが喋ってる」

あたしのすぐ後ろでコクウが声をかけた。途端にハウン君はむすっと口を尖らせてコクウを睨み付ける。無口で無表情のハウンが、こんな顔をするのは初めて見た。

「ほら椿。お前がいるならジェスタも来てるのかい？」

「あ、そうだ。ジェスタは？」

あたしにケーキを渡してコクウは問う。あたしもハツとしてハウン君に訊いたが、沈黙を返された。

そうだった、この子はよく黙り込むんだ。

ん、でもジエスタが来てる可能性は高い。
あたしは周りを見回した。

「私をお探しかな？」

「！」

あたしが手にした皿からケーキを摘まみとって一口で食べてしまったジエスタが背後に現れる。
前と変わらない草臥れた格好。

「やあ、お嬢チャン。久しぶりだね。やっぱり絶世の美少女だ、一緒にお墓で眠らないかい？」

「ジエスタ…！」

疲れたように笑いかける彼を睨み付ける。

「そんな赤い目で睨まないでくれよ、こわいなあ。……ん？赤い目？赤い目だつて？」

やれやれと首を振るとジエスタは目を丸めた。悪魔を封じた本人だからこの赤い目を見て気付いたようだ。

「ジエスタ、外で話しましょう」

「いや、ここでいい」

ジエスタに囁いて言ったが、聞き入れずに彼はあたしに手を伸ばした。

「そのきたねえ手を引っ込みやがれよ、草臥れじじい」

その会場に、その声が響き、ジエスタは手を止める。あたしも、身体を強張らせた。息を止める。突き刺さる視線。空気が変わる。

零度以下に下がった水が凍り始めたような空気。数多の捕食者があたしを見据える、見張る、睨み付ける。

「お前っ…」

あたしは声の主に怒りを向ける。自分の中にある悪魔に。

悪魔が吸血鬼達に囲まれたこの場所で沈黙を破った。

「クククッ」

そして笑う。

「ヴァッ」

名前を呼んで怒鳴ろうとしたら口を押さえ込まれた。黒い煙。ヴァッサーゴの手だ。

獣の鳴き声が洋館で轟く。

数人の吸血鬼があたしに向かって飛び掛かった。

だが瞬時にあたしの目の前にコクウとハウン、ジエスタにラトアが現れて立ち塞がる。

それを見て、飛び掛かろうとした吸血鬼は動きを止めた。全てはたった一瞬だった。

「悪魔だっ」

「契約者だ」

「殺せつ！」

周りから口々と言われる言葉。反論しようとしたが、ヴァッサーゴに押さえられて喋れない。

なんのつもりだ、ヴァッサーゴ！

「殺させないよ？俺の女に触ったら、許さないぞ」

コクウは微笑みつつ冷たい笑みで言い放つ。

「落ち着け、たかが一匹の悪魔だろ」

「たかが一匹でも脅威だ！始末しろ！」

ラトアさんに一匹の吸血鬼が吠える。

「ジエスタ！」とラトアさんはジエスタを急かす。急かされて嫌々そうにあたしを振り返るジエスタはまた手を伸ばしたが、またヴァッサーゴが動いた。

吸血鬼達が一斉に耳を塞いだ。

耐えきれず、ジエスタやコクウ達はあたしから一步、二歩離れた。ヴァッサーゴが攻撃したらしい。

「クククツ！寄ってたかつて無様だねえ、吸血野郎共。そんなにオレが怖いのか、ああ？」

黒い煙がぶわつとあたしの周りに現れて困う。煙だったヴァッサーゴの手が、人間の手に変わる。

「ククツ…クククツ！初めまして、ビビリ共。てめえらの天敵の悪魔だぜ？クククツ！」

人の姿を現して、喉で笑うヴァッサーゴ。
二十代前半の男の姿。あたしを後ろから抱き締める形のまま口を塞いでいる。

「揃いも揃って腰抜けが…ククツ」

挑発はいつものことだが、やけに笑っているな。

「あー、人間の姿の悪魔を見るのは久しぶりだなあ…。とりあえずそのお嬢ちゃんを返してもらえるか？」

「すつこんでろよ、草臥れじじい。エクソシストの力も相当草臥れてんぜ」

「…やれやれ」

ジエスタがあたしを引き渡すように言うが、一蹴された。流石に頭にきたのか苦笑を浮かべる。

「俺の女にあんまりベタベタしないでくれる？ヴァ」

「てめえは黙ってる、黒野郎。椿が殺されたくなきゃな」

「……」

コクウも口を開いたがヴァッサーゴが黙らせる。おい、誰もこの悪魔をなんとかできねーのか。

吸血鬼達はあたしごと悪魔を殺したいが、コクウ達が守っていて動けない。

コクウ達はあたしを悪魔から助けたいが、ヴァッサーゴがピッタリ貼り付いているため無理だ。ジエスタが近付くことを拒否している。

「まあまあ、穩便に済ませようじゃねえか」

あたしに寄り掛かってヴァッサーゴは呼び掛けた。人間の姿になると重いんだよ、畜生。寄り掛かるな。

お前が出てこなきゃ穏便に済んでたっつーの。

「オレはてめえらなんかに興味ねえんだよ。関心持たれても困るぜ、気色悪い。オレはこの女に取り付いて遊んでんだよ、ビクビクしくていんだぜ」

「やーね、自意識過剰。こっちはアンタを消し去りたいだけよ」

ヴァッサーゴを睨み付けて吐き捨てたのはミランラさん。

「人質なんて流石悪魔ね。無理もないわ、吸血鬼に囲まれてちゃ足がガクガク震えるのかしら」

おお、流石です。ミランラさん！

「四流女優は舞台にたって踊ってる」

「なんですって!?!」

「んいっ!」

べっとヴァッサーゴは吐き捨てた。声をあげるミランラに続いてあたしも声をあげる。コイツ! いい気になりやがって!

「やめろ!」

「ラトア!」

ミランラさんが飛び掛かろうとしたがラトアさんが止めた。

「アンタ達! さっさと始末しなさいよ! ジェスタ! アンタは悪魔退治屋でしょうが! なんとかなさい!」

「ミランラお嬢様は相変わらずだねえ…。私は嫌われてるみたいなんだよ、どうもね」

「全員でかかればいいでしょうが！」

「それは俺が許さないって言ってるだろ。彼女に触れてみる、俺が殺す」

暴れるミランラさんをラトアさんが押さえ込むが、ミランラさんは怒鳴り続ける。

もう一度言ったコクウの顔に笑みはなかった。

それにミランラさんは押し黙る。ミランラさんだけではなく他の吸血鬼も怯んだ。

「貴様が何を抜かす。コクウよ」

空気がまた変わる。

更に凍てついていく。

階段をゆっくりと降りてくる吸血鬼がその空気を作り出していた。

「やあ…久しぶり。ヴァンスト」

コクウはにこつと笑みを向ける。

白髪の長い髪の男は金色の目をコクウではなくあたしに向けた。

「こんな小娘の為に、何を躊躇しているジェスタ」

「事情があるんだ…このお嬢ちゃんごと殺すと私の身が危険なんですね」

ヴァンストという名の男の声で、その場は静まり返る。吸血鬼達の中に上下関係なんてないとはかり思っていたが、このヴァンストという吸血鬼はリーダー的立ち位置らしい。

「ここは私に任せてくれると有り難いんだが」
「戯け。晚餐会に乗り込んできた悪魔をこのまま逃すのは我々にとつて危険。これは貴様の失態だぞ、コクウ。それとも裏切り行為か？」

あたしはコクウを見て、それからヴァンストに目を向けた。

「おやおや、仲間割れあ？まつ、勝手にやってるよ」

「始末しろ。全員でかかれ」

「断る。手を出すって言うならさ、俺から始末したら？」

「……けっ、困ったねえ。分からず屋ばかり。単細胞だらけ。呆れるなあ、椿？」

ヴァンストとコクウが対立する。

吸血鬼達は動けないでいた。

コクウを殺すなんてこと、できないだろう。彼は命の恩人である。自分の身体を売って仲間を守った彼に、そんなことはできないのだから。

現況であるヴァッサーゴは遠巻きに喧嘩を見た野次馬の如く他人事のように漏らす。

そんなヴァッサーゴの手をトントンと叩く。

「あ？」とヴァッサーゴはあたしの口から手を外した。

ガンッ！

あたしは頭突きを食らわせる。生身だったヴァッサーゴは顔を押しさえた。

「いてっ、なにしやが、！？」

スカートの中に忍ばせたカルドを抜き取ってあたしはヴァッサーゴ

の首目掛けて振り上げる。気付いたヴァッサーゴは身を引いて避けた。

「待て、椿つてめっ」

一撃を避けられた瞬間、ピタリと右手を止めて振り落とす。それも間一髪避けるヴァッサーゴ。

生身の今、ヴァッサーゴを殺せる。

首を狙って追い詰めれば、ヴァッサーゴは壁に背中をぶつけた。容赦なくあたしはカルドを放つ。

しかしヴァッサーゴはギリギリのところで受け止めた。

「やめろ！てめっ、何しやがるっ」

「次出てきたら殺してやるって言っただろ」

「何度言えばわかる！オレを殺したらお前も死ぬ！」

「確かめてやんよっ」

「確かめたら死ぬっつってんだろ！」

全体重かけてカルドを押しすがヴァッサーゴが押し退ける為、動かない。首撥ねられないじゃないか。

「首撥ねたらてめえの首も飛ぶっ！」

「悪魔の言葉なんか信じるかよ。この状況はてめえのせいだ、責任持って死ぬ」

「お前も死ぬって言ってんだろっが！おい、黒野郎！イカれた恋人が自殺しようとしてんぞっ」

冷たく吐き捨てれば、ヴァッサーゴはコクウに助けを求めた。

悪魔の宿り主がいきなり悪魔を切りつけた為、吸血鬼達はポカーンとしている。

あたしが振り返ったことで油断したヴァッサーゴは力を緩めた。あたしはすぐにカルドを振り上げた。今度こそ悪魔の首を刈れた、はずだった。が瞬時に煙に戻った。為カルドは壁に突き刺さる。

「ちっ」

「恩知らずのクソアマ…！」

目の前に浮かぶ煙を振り払って、あたしはヴァンストと向き合う。

「この通り、悪魔に憑かれてるわ。だけど貴方達の脅威にはならない、敵ではない。この悪魔は貴殿方に復讐なんて考えていないわ。だから放っておいて。ジエスタに任せるので」

ヴァッサーゴの代弁をしてあたしは威風堂々と言い退ける。

何を思ったのか、あたしのスカートの中に手を入れてきたのでヒールでヴァッサーゴを踏みつけた。

それをチャンスだと捉えたのかジエスタが動く。しかし直ぐ様ヴァッサーゴが吠えた。途端に吸血鬼達は耳を押さえる。

「小娘…」

静寂を生み、凍らせる声をヴァンストは発した。

「我々は見張っているぞ」

チカチカとシャンデリアの灯りが点滅してやがて消える。部屋は数個の蝋燭の灯りと、吸血鬼の瞳が妖しげに光り、暗い部屋に不気味に浮かぶ。

やがて金色の瞳が消えてなくなる。

闇に目が慣れて周りを見渡せばコクウ達以外、いなくなっていた。

パーティーはおしまいか。

こんなことが起きてパーティーが続けられるはずないだろう。

あたしは溜め息を溢して踏みつけたヴァッサーゴの背中に腰掛ける。

「なんで喋った。黙るって言ったじゃない」

「黙ってついてってやるとは言ったが、パーティー中も黙るとは言
つてねーよ」

「このくそ悪魔……なんの意図で吸血鬼達の前に姿を現した」

「てめえに気を遣って黙らなくて済むじゃねーか。いい機会だろ？
てめえに骨抜きにされた吸血鬼の英雄が守る限り、吸血鬼に襲われ
ることはねえからなあ」

苛々と問い詰めればヴァッサーゴはケタケタ笑い、コクウに目を向
けた。

「ふうん。沈黙の悪魔って二つ名は捨てるってわけね……。あたしを
人質にコクウを盾にねえ……………殺すっ」

「くひゃひゃひゃ、落ち着こうよ。椿」

カルドを壁から引き抜き、今度こそ首を切り落とそうとしたがコク
ウに手首を掴まれて止められる。

「コクウ……コイツのせいで貴方は微妙な立場に立たされたのよ」

「俺の心配してくれてるんだ？嬉しい」

「……あたしも吸血鬼達に嫌われた上に狙われてるんだけど」

コクウは微笑んであたしの髪を撫でた。あたしはむすつとする。

するりと黒い煙があたしの身体にまとわりついて首に絡み付く腕が
現れた。ヴァッサーゴだ。後ろから抱き締めるようにまた人の姿を
した。

「黒野郎のポジションが高くなかったのは計算外だったなあ」

「ポジション？なあんのことかな。別に上下関係なんてないよ、ヴァンストはリーダー的ポジションなだけ。大半はヴァンストに従ってるのさ」

「へえー」

ジエスタはともかくコクウが目の前にいても、ヴァッサーゴは威嚇しない。つまりジエスタはヴァッサーゴに不都合な存在。コイツを引き剥がせるのはジエスタだけか。

「聴こえてんぞ、椿」

心の声を聞き取ったヴァッサーゴにパクリと耳を噛まれた。

ぶちギレてアッパーを喰らわす。間入れず回し蹴りを喰らわした。その際に自分のスカートを踏みつけてしまい、よろければコクウに受け止められる。

「今だ！」

ラトアさんの声が響く。

あたしとヴァッサーゴが離れた。チャンスだ。

ジエスタがあたしに向かって飛び、手を伸ばした。

ドガツ。ぶわりと黒い煙が舞い戻り、ジエスタの腹に蹴りが入れられた。蹴り飛ばされたジエスタはラトアさんとぶつかる。ラトアさんは受け止めてなんとか踏みとどまった。

ハウン君が睨み付けて身構える。

がしりと悪魔の手があたしの頭に乗せられた。

ヴァッサーゴはコクウに耳打ちする。

それはコクウに抱き締められたあたしにも聴こえた。

オレを引き剥がしてみる……椿が死ぬぞ。

脅しにも聴こえたそれ。

あたしを人質にしているのだ。

脅しでしかないだろう。

スツ、とコクウはハウン君に手の平を向けて制止の合図を送る。

「ジエスタもラトアもさ、コイツは敵じゃないって言ってるだろ？
落ち着きなよ」

そうにこやかに笑った。

まだ抱き締められているあたしはコクウの顔を見上げる。それから
ヴァッサーゴを睨み付けた。

赤い切り目の真っ黒な悪魔はクククツと笑って空中で回転して消え
なくなる。

話は済んだと言わんばかりにヴァッサーゴはあたしの中に戻った。

「……」

コクウはあたしをそっと抱き締める。まるで何かに怖がる子供をあ
やすようだった。

「暖炉の前へ、また身体が冷たくなっているよ」

小さな火が残った暖炉へと背中を押される。帰らないのか。

暖炉の前に立ち尽くしていれば、手を掴まれた。見ればハウン君。

自分の羽織をあたしにかけようと手を伸ばしていた。優しいな。

あたしはハウン君がかけやすいようにしゃがんだ。羽織をあたしの
肩にかけたハウン君は力を入れてあたしをその場に座らせた。すこ

い力だった…。びっくり。

ハウン君はあたしの背後から目の前に移り、ドレスの上に横たわってあたしの膝に頭を乗せた。

可愛いな。あたしは微笑んで髪を撫でる。

「本当になついでるねえ」

あたしに近づこうとしないジェスタが漏らす。

ラトアさんは暖炉に薪を投げ込んで火を大きくして腰を下ろした。

「これからどうする？」

「悪魔も吸血鬼も和解しそうにもないですよね…」

わかりあえないと言った感じだった。

吸血鬼だらけの中で悪魔が一匹だけ紛れ込んでいたのにあの警戒ぶり。

人間の殺し屋とは桁が違う。人間を食べる捕食者達の殺気は凄かった。華麗に着飾った美しい者達が一転して牙を剥き出す。綺麗な薔薇には棘がある。

「お前はなんでそう…こうなるんだ」

お手上げだと言わんばかりに額を押さえるラトアさん。懐かしくて笑みを漏らす。

「何故でしょうね。アンラッキーばかり。裏現実に入って半年で悪魔と吸血鬼にちょっかい出されるなんてね、これ以上どんな最悪が待ってるのかしら」

あたしもやれやれと肩を竦める。

ラトアさんは懐かしそうに微笑んだ。

「えーい」

そんなラトアさんの顔に蹴りを決めるコクウ。

「何をする…コクウ！」

「俺の恋人に色目使ってたからつい」
「使っていない！」

…ラトアさんと白瑠さんのやりとりを思い出した。

「ラトアの顔になにしてるんだ、コクウ」

「あ、デIFOオいたんだ」
「くつつくなっ」

デIFOオがひよっこり現れてラトアさんにピタリとつく。そう言えばデIFOオはラトアさんが好きなんだっけ。

ラトアさんにその気はないらしく突き放そうとしていた。デIFOオがいるならとあたしは探す。デIFOオから解放されてホッとしている蠍爆弾を見付けた。

「ナヤにチクつては駄目よ、蠍爆弾」

「んなことしたら吸血鬼達にバラバラにされちまうんだろ…」

雇われていた人間達もそこからいなくなっていた。人間がその場から消える能力なんて持っていない。吸血鬼達が連れ去ったのだろう。悪魔を野放しにしていると知られては種族の存亡の危機だ。生き残る為ならば雇った人間を安易に殺せるだろう。

紅色の黒猫は悪魔憑き。なんて噂は流されることはない。

「おまえさんが凄いのはその悪魔のおかげかい？」

「この悪魔は3ヶ月前かしら、遭遇してそのエセ神父に退治してもらおうとしたんだけど」

「エセ神父なんて酷いなあお嬢ちゃん」

「退治できなくて、だからって殺すことも出来なくて、封じることになったの」

「封印は半年持つと踏んでいたのだがねえ……なんで解けちゃったんだい？」

「あたしが訊きたいわよ、貴方に文句を言おうと探し回っていたのよ」

「それは光栄だね、こんな美女に追い掛けられてたなんて……痛いなあ、コクウ」

「くひゃひゃひゃ」

事情を知らない者の為に説明する。よく考えたらコクウにさえ詳細を話してなかったと気付く。

「1ヶ月も持たなかったのよ」

「そりゃあシヨックだね……。十年のブランクのせいかね」

「ざけんじゃないわよ」

「ジヨークさ、お嬢ちゃん」

ギッと睨み付ける。

ジエスタは乾いた笑いを漏らして頬を掻く。

「まっ、ここはお嬢ちゃんの愛情を信じて大人しく引くとしよう。どうか白の小僧には告げ口しないでくれよ。考えておくから」

ヴァッサーゴを刺激しないようにとゆっくりと近付いてハウン君の

襟を掴み上げた。
帰ってしまうようだ。

「あ、ハウン君。これ」

あたしは立ち上がり羽織を返そうとしたら、ジェスタに上げられたままハウン君はチュツとあたしの額に口付けを落とす。
おませな息子に苦笑を漏らしつつジェスタはハウン君を連れて去った。

ああ、もう…可愛いなあハウン君は。

「うわっ」

「くひゃひゃひゃ…妬いちゃうなあ」

背後から羽交い締めにされて肩を震わせる。

「はあ？」

「俺の女なのに、他の男が触りすぎ…」
「触んな」

耳に吐息を吹き掛けて囁いてくるコクウの手を剥がして押し退ける。
そうすれば、コクウは強行手段に出た。
あたしを抱えあげて、スタスタ歩き出す。

「ちょ、コクウ、なにするのよっ」

「椿を独り占め」

「はあ!？」

ラトアさんと別れの挨拶も許してもらえず、拉致られる。
五分で暴れるのは無駄な体力消耗と判断してあたしは大人しく運ば

れた。

冷たい風が吹く夜。静寂な世界。

「貴方は本当に大丈夫？」

「クスクス…そおんなに俺のことが好きなんだあ？」

建物から建物へと飛び回っていたコクウは嬉しそうに笑いながら踊るようにステップを踏む。

一つのビルの屋上に降り立てば、あたしを降ろして手に取り、踊り出す。

「パーティーで椿と踊りたかったのにVのせいでぶち壊した」

「ダンスパーティーじゃないでしょあれは」

「くひゃひゃ…本当ムードぶち壊しだなあ」

コクウのリードでくると回されると赤いスカートが舞う。最後のはなんだか憎たらしそうに聴こえた。

引っ掛かりコクウの顔を見れば、ぐいっつと引かれて抱き締められ深い口付けをされる。

あたしは拒まず受け入れた。

「椿…」甘い口付けをしながら吐息混じりにあたしの名を呼ぶコクウ。

「今夜は、愛してもいいかい？」

目を覚ませば、ベッドの上。

椿の花の花びらが散乱したベッドの下にはキャンドルと赤いドレス

がある。昨夜、コクウの部屋に帰ってみればムード作りの為にキャンドルに火がつけられ、ベッドの上は花びらが撒かれていた。一体いつ用意していたのやら。

コクウはとことん、用意周到のロマンチストらしい。起き上がったみれば、自分がコクウの黒いYシャツを着ていることに気付く。いつ着せられたんだろう。

「おはよう、椿」

隣にいないと思ったらコクウは朝食を持って戻ってきた。手にしているのはフレンチトースト。

「おはよ…コクウ」

幸せ一杯の笑みを浮かべて朝食を摂るあたしを見つめるコクウ。

「愛してる」

そう言ってあたしの髪を撫でるコクウに、あたしもだなんてやっぱり言えなくて、甘い味を口の中で転がした。

コクウはあたしが言葉を返さなくても満足そうに笑う。愛しそうにあたしを見つめた。

ア、イ、シ、テ、ル。

コクウの部屋の屋根の上で声に出さず練習してみた。

言えないな…。

「簡単だろうが。まずはあ、次にい、次はし、次はて、次はるって発すりゃいい」

「嫌いだよ、本当に喋るようになったわね」

「ククツ、いつでも喋ってやるよ」

「今まではよく黙ってたからまだよかつたけど、これから喋り倒したらあたしノイローゼになるわ」

「オレが治してやるよ、今まで通りな」

ノイローゼも治せるのならストレスを解消してくれ。

あたしは頼杖をつけて景色をぼんやりと眺めた。

「ねえ、貴方は本当にその気はないんでしょ？」

「てめえの身体に興味がないわけでもないぜ」

「吸血鬼殲滅についてよ」

「何度も言わせんなってーの。吸血鬼と遊ぶ趣味はねえよ」

「だからってあたしで遊ぶってのは意味がわからないんだけど」

もう一度確認で訊いてみたが返答は変わらない。

吸血鬼に敵意がないのはいいが、あたしを代わりに標的にされているのは嫌だ。

「あたしを人質にするなんて情けないわよ」

「脅しじゃねーよ、これは優しい優しいオレからの素敵な提案さ。

オレがついてりゃお前は死なない。黒野郎はお前を死なせたくない。いい提案だろ？」

「脅しよ、それ」

真剣に問い詰めてもはぐらかされるだけだからあまり追及せず背

伸びをする。

少し強い風が吹き荒れるが乱れた髪は気にしない。

探しに来たのか寄ってきたマフユが隣に腰掛けて尻尾を気ままに揺らす。

平穏な一時に浸っていた。

スタンツ。

珍しく音を立てて、コクウが隣に降り立つ。

挨拶する暇もなく、コクウはあたしの手を握って膝をついた。また大袈裟な告白かお誘いかと思った。でもコクウの顔には笑みはなく、よくわからない表情であたしを真っ直ぐ見つめる。

「落ち着いて聞いてくれ…椿」

ゆっくりとコクウは躊躇しつつもあたしにそれを知らせた。あたしに関係する重要なこと。

「君の家族が殺された」

家族。その単語で脳裏に浮かんだのは、クリスマスイヴに撮った写真。真。

でもコクウが指しているのは血の繋がった者の方だとすぐ理解した。

「……そう」

別にショックはない。あたしは血の繋がった家族に愛情も執着心もない。自分の手で殺そうとも考えていた。今まで殺してきた人間と同じ、特別何かの感情が爆発することもない。単に色々驚いた。

あの人達が誰かに殺されたこと。それをコクウが知っていてあたしに告げていること。

コクウは続けた。迷いを見せて、あたしに告げる。

「全員頭を粉碎されて脳ミソをぶち撒けられた」

その殺し方で過る殺人犯はたった一人だ。

「殺したのは
白瑠かもしれない」

声が、出せなかった。

再愛の抱擁

懐かしい空気。懐かしい風。懐かしい空。懐かしい風景。

懐かしいその家。

もう何も解らなくて。

もう何も判らなくて。

真意が知りたくて。

あたしは確かめに来た。

久しいその家を見上げる。

2ヶ月ぶりだ。

「そうなの。あたしは貴方と違って血の繋がった家族は嫌いだから
なんとも思わないわ」

やっと声を出せて、あたしはコクウから目を逸らしてマフユを撫
でる。

困惑していた。

「何故貴方がそんな情報を知ってるの？紅色の黒猫の家族が殺され
たって情報が流れるわけないわよね」

いくら噂的的の紅色あたしの黒猫の家族だからって、表の人間だぞ。白の

殺戮者に殺されたからって裏現実の情報として流れるわけない。

「君の家族を知りたくてね、ナヤに調べさせたんだ。勿論ナヤはチクらないよ。先週らしい…表の警察も頭蓋破壊屋が犯人だと思ってる。椿の家族、全員が殺された」

詮索されたことに少しムツとなったがそんなことより、この困惑をどうにかしたい。

「あたしの血の繋がった身内を頭蓋破壊屋がたまたま殺しただけでしょ。なにをそんな深刻そうな顔してるのよ」

「…椿」

「気にしないわ」

あたしは腰をあげて屋根を滑り落ちて黒の部屋に戻り、オフィスへと降りる。

オフィスには火都がいた。

「火都」

「ん…？」

「あたし、嫌いな家族が殺されたんだけどなににも感じない。貴方も何も感じなかったの？矢都が殺された時」

火都の弟・矢都も白瑠さんに殺された。机にだらけたように頬杖をしていた火都は少し考えてから答える。

「矢都が嫌いだったわけじゃない…仕事上のあいぼ…って認識だったし…いつ、誰かに殺されるかわからない世界だから」

ぼんやりやる気のない口調。

割り切れている、のか。

「そう……」

復讐をした結果を知っているからなのか、嫌いだっただけなのか、何も感じないのはどちらが原因なのだろう。

そんなことより、この困惑をなんとかしよう。

何故、白瑠さんは殺した？

あたしの家族を殺せと依頼がくるはずはない。白瑠さんは未だに仕事を再開させていないようだし。

怒りや憎しみならば矛先が違う。白瑠さんはあたしが家族嫌いなことを知っている。家族を殺したところであたしは傷付かない。そもそもコクウが調べさせなければ家族が殺された事実を知らずにいただろう。

あたしとコクウに怒っているのならば飛行機に乗り込んでこのオフイスを見付け出して直接殺しに来るはず。

何故、白瑠さんはあたしの家族を殺したんだ？

動機がわからない。動機がわからないから混乱してしまう。

白瑠さんの気まぐれ？あり得なくもない。いや、あり得ない。あの人はそんなことしない。

いや、どうだろう。憎しみを抱いているのなら、殺るか？いや、だから、憎しみを抱いているのなら直接あたしに来る。あたしの家族を殺したところであたしは痛くも痒くもないのを知っているはず。ぐるぐると混乱して気持ち悪くなる。

はっきりしてくれ。あたしには無関心なのか？怒っているのか？どっちなんだ？苛々する。

全然眠れない。夜中で日付が変わった時間でも混乱が眠気を粉碎する。

だめだ。

あたしは隣にいるコクウを起こさないようにベッドから降りた。

ベッドの下に置いたあたしの荷物を音を立てずに注意して取り出し、パスポートと金だけを取る。オフィスに降りて、そこで着替えて赤いコートを着た。そしてコクウにはなにも言わずに、アメリカを発った。

そして今に至る。

懐かしい二階建ての一軒家。表札には笹野と名が書かれている。駐車スペースにはシルバーのクラウンとバイク。いつも新車のように綺麗だったクラウンは、タイヤには泥がついていてガラスは汚れていた。バイクは埃を被っている。…変だな、そう思いつつドアの前に立つ。

合鍵はこの家の部屋に置いてきた。例え持っけていても鍵を使って入るような真似はしないだろう。もうこの住人ではないのだから。

クラウンとバイクがあるのなら　二人とも居る。

まさかこんな再会になるなんて…。

正直、白瑠さんが殺しに来ることを覚悟していたのに、あたしがこの家に再び入ることになるなんて夢にも思わなかった。

あたしは深呼吸する。

悪魔は何も言わない。

呼び鈴に手を伸ばして、押す。

住人に訪問者を報せる音が響く。

誰もいなさそうな笹野さんの家は不気味に静寂を返す。

あれ、誰もいないのか？

あたしはクラウンとバイクに目をやりドアを見つめる。誰も出てこない。ドアに近づく足音も気配もしない。

…変だな。あたしはまた思う。

あたしは立ち尽くしてどうするか考えた。

いないならば、藍さんの車で何処かに行ったのだろうか。

直接白瑠さんに訊いて真意を知りたかったのに、これでは二日かけて飛んできた意味がない。

先に家族を殺された事実を確認しにいこうか。ガセかもしれない。最後の足掻きでドアノブを掴んだ。すると、開いた。あれ、鍵を閉めてない。

あたしは開いて玄関を覗いた。

中に足を踏み入れたら、その異様に気付く。

廊下に少し埃が募っていた。掃除していない？忙しければ掃除をしていたのに。

玄関で暫く立ち尽くして、あたしは踏み入ろうとしたが土足ではないけないと思い出して、ブーツを脱ぐ。

変だ。三度目。

別の家を感じる。暗い雰囲気。数ヶ月、誰も住んでいないみたいだ。二ソで廊下を歩いていく。自分のだった部屋を通り過ぎて、あたしはリビングに向かう。白い息が出る。暖房がついてないみたい。

警戒して右手にカルドを握る。

リビングは。

カーテンが半分閉められていて、暗かった。

キッチンには光が差しているが、ソファは陰になっている。

よく並んで座って談話していたソファに一人、居た。

死んだように眠っている。

「……………白瑠さん……」

あたしは彼の名を呼んだ。

それでも白瑠さんは反応せず、眠ったまま。

脱色した髪はボサボサで、白のYシャツもくしゃくしゃ。黒のブーツを履いたまま、そのソファに横たわっている。

一回呼んだだけじゃ起きないのは白瑠さんらしい。

あたしはカルドをしまい、白瑠さんに近付く。

「白瑠さん」

もう一度呼んだがピクリともしない。

静かに呼吸してるのはわかった。ちゃんと生きてる。当然だ。

「あの、白瑠さん」

揺らして起こそうと手を伸ばしたが、戸惑ってあたしは触れることをやめた。ただ呼んで、起こす。

起きてあたしを見た彼がどんな反応をするのか、予想もせずに。

「白瑠さん、起きてください」

あたしは呼ぶ。

こんな風に白瑠さんの寝顔をまた見るなんて。

「ねえ、白瑠さん」

滲み出る涙が落とさないように瞼を閉じて、呼ぶ。

「っ白瑠さん」

目を開けたら、白瑠さんも瞳を開いていた。ぼんやりと、あたしを見上げる。

まだ覚醒しきれていないみたい。

細めた瞳が閉じられそうだったが、開いてあたしを見つめる。

やがて白瑠さんはあたしを認識したのか、唇を吊り上げて笑みを浮かべた。

「つうーちゃん」

手を伸ばして、あたしを呼ぶ。

前みたいに、笑って、懐かしい声で。

伸ばした両手はあたしの顔

て首に回される。

を横切っ

白瑠さんは起き上がってあたしを抱き締めた。

え？

引き寄せられたあたしは白瑠さんの膝の上に乗るはめとなる。

「つうーちゃん、だーあ」

眠気たつぷりの声を出して頬擦りしてくる。くすぐりたい。

「つばあちゃん」

ギュツと痛いくらいに抱き締められる。痛い痛い。

あたしの髪の中で大きく吸い込んで白瑠さんは息を吐く。

「椿い」

きゅっ、とまた更に締め付けられる。すりすり猫のように頬擦

りしてあたしの首筋を撫った。

「もう…どこにもお」

名前以外に白瑠さんがやっその他の言葉を発する。

「いかないで」

あたしの肩に頬を乗せて、白瑠さんは静かになった。彼の呼吸を聴きながら、今の状況を整理する。あたしは混乱を解消しようとしてここに戻ってきたのに、余計に混乱した。ここまできて、白瑠さんが、そんなこと言っなんて。一体どうゆうことなんだ？

「あの…」

説明をしてもらおうとしたら、バツと勢いよく剥がされる。両手で肩を掴まれ、押し退けられた。目を丸めた白瑠さんがパチクリと瞬きする。ばちん、と頬に白瑠さんの両手が当てられた。痛い…。両手で押さえ付けられて、凝視される。

「……………椿？」

確認するように、問われた。まるで疑っているみたいだ。

「…はい…？」

どうしたんだ、いきなり。

これ以上あたしを混乱させないでくれ、どれだけあたしを混乱させるんだ。

「椿なの？」

「…はい」

「夢じゃないの？」

夢？この人夢だと思ってあたしを抱き締めたのか？

頬に指が食い込むくらい掴んでいるくせに、夢だと思っているのか。痛いくらい抱き締めたくせに。すりよってきたくせに。匂いを吸い込んだくせに。

寝惚けてたの？

白瑠さんは。

白瑠さんは泣きそうな顔をした。眉毛を下げて眉間にシワを寄せて、あたしの頬を触れる手を震わせる。

「夢じゃっわ!？」

「椿！椿！椿椿！！椿椿椿椿椿つ椿つ！！」

またあたしを抱き締めた。先程よりも強く強く抱き締めて、強くあたしの名前を何度も呼んだ。

「ああ、椿」

「…白瑠さん」

「椿い」

「痛いです」

「椿い」

何度もあたしを呼ぶ。

嬉しそうに、楽しそうに、懐かしそうに。

ホツとしたみたいに息をつく。

「椿の髪、椿の匂い、椿の首、椿の肩、椿の温もり、椿の鼓動。椿だあ」

あたしの髪に指を通して、匂いを吸い込んで、首と肩に鼻をすり付けて、胸に耳を当てた。

そしてまた抱き締めてくる。

あれ、どうしてだろう。

どうして、白瑠さんは。

どうして白瑠さんは、変わっていないの？

変わってない。

向けられてるのは、怒りでも憎しみでもない。

カタン。

音がして白瑠さんに抱き締められたまま振り返る。

買い物にでも行っていたのか、買い物袋を抱えてそこには幸樹さんが立っていた。

あたしを見て、目を丸めている。

「椿さん……」

「幸樹さん……えつと」

白瑠さんが解放してくれなくて、まともに振り返ることができない。ちゃんと挨拶できないじゃないか。

「椿さんっ」

買い物袋を落として幸樹さんは駆け寄ってあたしを抱き締める。白瑠さんより痛い抱擁だった。

「あの、痛いです」

「本物の椿さんですよ？夢じゃないですよ？」

「あの…二人して夢夢、言わないでください…。これは現実ですけど」

「うひゃ、椿だあ椿い椿い」

「現実なんですね」

「……痛いってば」

二人はきつく抱き締めてくる。
何度言えばわかるんだ。痛いってば。

「椿、おかえりい」

「おかえりなさい、椿さん」

あたしは絶句した。

少し呼吸が乱れたが悟られないように必死に自分に落ち着かせようと
する。

何も返せなくて、あたしは口を固く閉じた。

「おかえりなさい」

「おかえり」

何かを口にしたら、抑えているものを全て出てしまいそうだから堪
える。

「おかえり」

懐かしい声。

懐かしい温もり。

何も、変わっていない。

向けられたのは、怒りでも憎しみでもなく。

あたしをあたたくく包み込む無償の愛だった。

必死に嗚咽を飲み込んで、涙を堪えて、声を絞り出す。

「
ただいま」

落ち着いてきたあたしは漸く切り出す。

「白瑠さん、臭いです」

「……………」

「…白瑠はもう数日体を洗っていませんでしたね」

正直言つて我慢していたが、白瑠さんの体臭がやばい。数日もかよ。

「一緒にお風呂入ろう」

「嫌です」

「早く入ってきなさい、白瑠」

「ええーつうちゃんから離れたくないい」

「臭いから離れてください」

「ぶう…まだ居るよね？つうちゃん」

「……………はい」

口を尖らせた白瑠さんは離れた。

まだ居るよね？

その問いにあたしは少し戸惑ったが頷く。そうすれば白瑠さんにはつこり笑つて、Yシャツを脱ぎ捨てて風呂場に向かった。

幸樹さんの片腕はまだあたしに回されたまま。

振り返り、幸樹さんの顔を見上げる。

幸樹さんは微笑んであたしを見つめ返した。

「掃除、しましよう」
「…そうですね」

あたしの頭を撫でて幸樹さんは立ち上がる。

コートを脱いでから掃除機を持って、あたしは廊下に向かう。あたしのだった部屋の前に止まって、好奇心でドアを開く。

部屋は綺麗に片付いていた。

武器を詰めていた空のトランクはベッドの横に並べられて置かれていて、開きっぱなしだったはずの棚の引き出しは閉まってある。

あとは、あたしが出ていった時と同じだった。カーテンも、棚の上のアクセサリーも、何一つ変わっていない。廊下と違って埃は募っていない、まるでここだけ掃除してみたみたいだ。だけどベッドは誰かが使ったみたいに乱れている。

「つうちゃんっ」
「きゃっ」

後ろから抱き締められて震え上がる。忍び寄る気配に気付いていたから抱き締められるとわかっていたが、白瑠さんがずぶ濡れだとは思いもしなかった。

「…白瑠さん。濡れた犬みたいな臭いです」
「……………」
「椿さんは白瑠を掃除してください」

あたしから掃除機を奪って幸樹さんは言った。…仕方ないな。

あたしはぱあと笑顔を輝かせた白瑠さんの手を引いて風呂場に行く。腰にバスタオルを巻いてもらって白瑠さんの髪を洗う。ちゃんと頭皮も念入りに洗った。…マフユの身体を洗うみたいに。

「んひゃひゃひゃ、身体も洗ってえ」

「それくらい自分でやってくださいよ、洗い流しますよ」

シャンプーを洗い流せば、白瑠さんの髪が長くなっていることに気付く。くしゃくしゃだったから気付かなかったが、随分延びてる。

「髪、伸びましたね」

「んーつうちゃん切って」

ああ、そう言えば白瑠さんも美容室に行かないんだっけ。切ってあげようか。

「いつもは誰に切ってもらうんですか？」

「んうとね、自分で切ったりいいあとてっちゃんに切ってもらったりい」

てっちゃん？知らないな。

後ろの髪を整えつつ切っていく。すると白瑠さんが振り返った。うお、危ないじゃないか。

「つうちゃんも伸びたね、切る？」

「いえ、あたしはいいです」

「そっか」

あたしをじっと見上げた白瑠さんに切ってやると言われたが首を振る。白瑠さんは前を向いたが、また振り返った。

「綺麗だね、その赤い目も髪も。似合ってる」

にっこり、それだけを言っただけまた前を向く。

あたしは黙って髪を切った。

「おや、長いと思ったたら散髪ですか。椿さん、それが終えたらこちらを手伝ってください」

顔を出した幸樹さんに頼まれたので、後片付けは白瑠さんに任せて夕飯の用意を手伝う。

作っている間、白瑠さんはソファアの背凭れに座ってあたし達を見つつ、あたしのコートの中の武器をいじっていた。

あたしが外したパグ・ナウも興味津々に見ていたが、やがてソファーに全て投げ込んでキッチンに来てあたしにべつとりくつつく。

「白瑠、邪魔ですよ」と幸樹さんが苦情を言うが白瑠さんは聞き流した。

ふと、気付く。

あれ、あたし、なにしてんだろう。

「……………」

目的を忘れてあたしは掃除したり髪を切ったり料理手伝ったり。あたしはなにしてんだろう。流されたのかな。

「ほら、椿さん。座ってください」

「あ、はい」

背中を押されてダイニングテーブルにつく。目の前にはあたしの好きなハヤシライス。

右隣には白瑠さん、向かいには幸樹さん。

「いったただっきまあす」

「いただきます」

「……いただきます」

あれ、やっぱり流されている？

あたしは目的を果たすタイミングを完全に見失っていた。

ハヤシライス美味しい…。

幸樹さんの料理、本当に美味しいな。

「美味しいです」

「ありがとうございます。食事はちゃんと摂っていますか？」

「はい」

「ファーストフードではなくて？」

「レストランだったり手料理だったり…ちゃんと食べてますよ」

最初の1ヶ月はまともに食べていなかったこととしよつちゅうお酒を飲んでいることは伏せておこう。食事を摂らなくても大丈夫だけど、それもまだ話さないでおくか。

「無事で何よりです」

「……」

あたしは返す言葉がなくて俯きつつハヤシライスを食べる。

そうだ、あたしは、謝らなくちゃ。

謝るべき？あたしが悪いならあたしが謝るべきだろう。

「そうだっ」

既に二杯食べ終えた白瑠さんはスプーンを加えたまま立ち上がり、自分の部屋に向かった。

すぐに戻ってきた白瑠さんの手にしたのは、白い刃のナイフ。

テーブルに置かれたそれを見て、心底驚いた。

「あそこに、行ったんですか？」

椿花が描かれたそれは、白瑠さんからプレゼントにもらった白のナイフ。

間違いなく、あの場所に忘れてきたナイフだ。あの鼠の死体のそば。

「うん。俺が着いた時には、椿はいなかったけど」

あたしの隣でしゃがむ白瑠さんは頷いて答えた。

「迎えに来て…くれたんですか？」

「うん。遅れちゃったけど」

「……………」

あの日を思い出す。あの日は、凄く痛かった。殴られて蹴られて刺されて、叫んだ。

悲鳴のように叫んだ。

助けを求めるように叫んだ。

何度も白瑠さんの名前を呼んだ。

喉が痛くて呼吸が出来なかった。胸が痛くて痛くて痛くて仕方なかった。

いつもなら、死にかけた時に駆け付けてくれた白瑠さんが助けに来てなくて。冷たいコンクリートの上で泣いていた。泣き喚いていた。

もうあの家には帰って来れないと思え

そう言ってたから、来ないとばかり思っていた。

「助けに…きて…くれたんですか？」

喉の奥が熱くなって、勝手に涙がポロリと落ちて、あたしは慌てて

拭う。

「遅れて、ごめん」

白瑠さんはあたしの髪を撫でた。

嗚咽を堪えて、涙を止めようと堪える。

謝るのはあたしの方なのに。

どうして、白瑠さんが謝るの？

「ごめん、椿」

違う。

謝るのはあたしなんだ。

「君が居てほしい時に、居てやれなくてごめん。痛かっただろ？辛かっただろ？苦しかっただろ？
独りにしてごめん」

肩が震え上がる。

ごめんだなんて、そんな。

あたしが悪いのに、なんで。

優しい言葉をかけるの？

「ごめん…独りにするんじゃないかった。部屋に閉じ込めるんじゃないかった。側にいるべきだった。椿は由亜っちが大好きだもんね、愛してたんだよな。どうしても許せなかったんだよな」

「…っ」

「私も自分のことだけで、椿さんの気持ちに気付きませんでした。すみません。由亜が大事だったんですよ。貴女は仲間想いで、傷付ける者は許せなかった、優しい人です」

二人の口から出された名前にあたしはビクツと震える。違う。違うよ。あたしはただ、あたしはただ怒り任せに突っ走って殺しにいったんだ。あたしに喧嘩を売ったあの鼠を殺しに行った。ただそれだけ。

「捜しましたよ。あっちこっち、貴女の噂がするところに飛び回って見つけようと思いました。きっとボロボロに心を痛めて自暴自棄になつてると思つて…すぐに見付けて帰ってきてくださいと頼むつもりでした」

「椿ちゃんが俺達の迎えを待つてるんだって…そう思つて捜したんだけど…。徹底的に避けるし、逃げるし、隠れるからさ…。一人になりたいのになつて」

「今は一人になりたい、そうゆう意味なのかと思つて私達は捜すのを止めました。藍乃介は反対しましたが…椿さんが自分から帰ってくるのを待つべきだと思つたんです。この家でちゃんと、おかえりなさい、と言うべきだとね」

「ごめんね…」もうあの家には帰つて来れないと思え”なんて言うて。ごめん、椿」

嗚呼、そうゆうことだつたんだ。

あたしの思つてることも考えてることもお見通しだつたんだ。あたしがボロボロだつても、迎えにきてほしいと思つていたことも、そして一人にしてほしかったことも。

藍さんの言う通り探すのは止めた。けどちゃんと、帰ってくるのを待つてくれていたんだ。

ずっと。

信じて。

待つてくれていた。

「帰ってきてくれて、ありがとうございます。椿」

涙が止まらなくて顔を上げられない。みっともなく嗚咽が溢れてしまふ。

「ごめん なさい …。ごめんなさいっごめんなさいっ」

泣きじゃくって謝る。

女々しくて情けないけどこれが精一杯で他の言葉が出なかった。謝るしか出来なかった。

「もういいんだよ、椿」

かけられる優しいから涙が止まってくれない。喉が熱い。あたしは泣いた。

涙が止まるまで時間がかかった。

手で拭ったがきつと酷い顔になっているだろう。

するとずっと目の前にしゃがんでいた白瑠さんが顔を隠す両手を掴んで退けた。

「それでね、つーちゃん」

両手首を掴んであたしを見つめて目を細めて笑う白瑠さんが顔を近づける。顔面が悲惨なことになっているあたしは思わず仰け反った。

「中にいるオトモダチをしょーかい、してくれらう？」

「えっ？」

「つばちゃんの中にいる、悪魔を紹介してよ」

白瑠さんはあたしの赤い目を覗き込む。仰け反ったあたしは後ろに倒れて、椅子に頭をぶつけ横たわる。

「つばちゃんの怪我を治したりしてるのはあかあんしゃするけどお、うひゃひゃひゃひゃっ、悪魔を殺すのは初めてだあなあ」

「白瑠さ」

ぶわああ、黒い煙があたしの頭上に現れて形を成していく。
このバカっ！

「　　なんで知ってたんだ？」

ビュ。椅子に横たわっているあたしには見えなかったが多分幸樹さんがナイフを投げた。が煙に刺さるわけもなく、壁に突き刺さる。次は白瑠さんが動いた。

右手を煙の中へと突っ込んだ。
当然、ただ貫通するだけだ。

「無駄ですよ、煙の状態じゃあ攻撃は効きません」

「ん、そおなあんだあ」

攻撃が効かないことを別に気にしていないかのように白瑠さんにはつこり笑う。あたしの上に馬乗りになっていることを忘れていないだろうか？

「なんで悪魔があたしの中にいるってわかったんです？」

「ラトアから聞いていましたから」

「あー、あのスマシ野郎か。磔にされたあとにチクったのか」

起き上がって訊けば、幸樹さんが答えてくれた。

「いえ、貴方の存在を知らせてくれたのは五日前です。ラトアが訪

ねてきて椿さんに会ったことを話に來ました」

「ラトアさん、來たんですか」

「ジェスタがチクらないでくれと頼んだのを聞いていなかったのかな、ラトアさんは。」

「クククツ…初めまして、てめえらの愛する椿を一人にしなかった悪魔だ。このシスコン共」

喉の奥で笑い、ヴァッサーゴは相変わらずの口調で二人に挨拶した。

「ああそれはありがとお」

「唆したのは貴方だろ？違いますか？」

白瑠さんは悪魔相手にもにこおと笑いかけて、幸樹さんは鋭く問い詰める。

「白瑠が折った椿さんの腕を治して復讐するように唆した」

「折ってごめんね！椿！」

「幸樹さんの言う通りです。白瑠さんは話の腰を折ろうとしないでください、気にしてませんから」

「契約内容はなんですか？」

幸樹さんがあたしとヴァッサーゴに厳しく追及してくる。

「あーあ、るせーなあ。どいつもこいつも。契約契約…ケツ。心配しなくたってなあ、てめえの恋人の復讐のために契約なんかしてねえよ」

「てめえは黙ってる」

蓮真君からもらった指輪を嵌めれば煙は消えて不快な笑い声も聴こえなくなつた。

「銀の指輪を嵌めれば黙ります。契約はしていません。ラトアさんから全て聞いたならコイツは敵にならないって聞きましたよね？コイツはあたしに住み着いて遊んでるだけらしいですけど…今のところ身体の怪我が治されても身体を乗っ取られてはいませんから。この前は心臓を撃たれましたが、ほら治ってます」

一息ついてあたしは幸樹さんに話す。とりあえず落ち着いてもらうために、ヴァッサーゴが余計なことを言ったから。

「心臓を撃たれた？」と幸樹さんの気が移る。あ、これも余計なことか…。

「ねえ、つうちちゃん。煙の状態とか言ったけど他の状態にもなるの
お？」

「はい、人の姿にもなります。殺すならその時がいいですよ、効くらしいです」

「へええ。ちよつと人の姿を見せてよ、殺さないからさあ。アクマ君」

白瑠さんがつついて頼むからあたしは怪訝に思いつつ、指輪を外した。

忽ち黒い煙が現れて、隣に赤い目の男が登場する。

あたしの食べ掛けのハヤシライスをスプーンで勝手に食べた。

「うん、まあまあだな。人殺しの医者を作つたにしちゃ」

幸樹さんの眉間にシワが寄る。

ニヤリ、ヴァッサーゴが幸樹さんに挑発の笑みを向けたその顔にあ

たしは裏拳を決めた。

「ぶっ！何しやがるっ！このくそアマ！」

「居候のくせに生意気なのよ！」

「誰のおかげで長生きしてっと思っただ！」

「頼んでねえよっ！」

ガンッとヴァッサーゴの首を掴んで、キッチンの壁に叩き付ける。悪魔と少女の取っ組み合い。

それを止めたのは、白瑠さん。

あたしの右手の人差し指を立てたかと思えば指輪を嵌めた。

ヴァッサーゴは瞬時に煙になり消えてなくなる。

「ふうん、そつかあそつかあ」

うんうん、と頷いて白瑠さんはあたしが座っていた椅子に座った。

「大丈夫だ」と言う。

…今の取っ組み合いの何処を見て、納得したのだろうか。

幸樹さんの顔を見れば、幸樹さんも怪訝にしかめていたがやがて諦めて息をつく。

「あの…藍さんは？」

「電話したんですけどね…忙しいみたいです」

「そうですか…」

藍さんは来ないのか。

早く会って、酷いことを言ったのを謝りたいのに。許してくれるだろうか。

「ああ、そうだ…あたし、確かめたいことがあって……か、帰って

きたんです」

残りのハヤシライスを食べてあたしは本題を切り出す。帰ってきた、なんて気はなくて言いずらかった。

あたしは白瑠さんに向き直る。

きよとん、と白瑠さんは首を傾げた。

「あたしの血の繋がった身内を殺しましたか？」

「殺してないよ」

さらり、とあたしの質問に白瑠さんは問いれず答える。

「…白瑠さんは殺ってないんですか？」

「うん。殺ってないよ。俺は1ヶ月殺しやってないもん」

コクリと頷いて白瑠さんは言う。

「ニュースでやっていましたね、レッドトレインの唯一の生存者で未だに遺体の見付からない被害者の家族が惨殺されたと」

幸樹さんが会話に加わる。

日本ではニュースに出たのか。

「なんで俺がやったと？」

「コクウが…」

あたしはその名前を口にしてすぐに口を閉じた。

白瑠さんが目を丸める。

あたしのほか。コクウの名前や話はタブーだって忘れていた。

「コクウ？」

「…あの、黒の殺戮者が…あたしの身内が頭を粉碎されて殺されたって情報を掴んで、それで彼が白瑠さんだと……」

ああ…、と幸樹さんは声を漏らす。

「頭を粉碎して殺害されたという情報が正しかったのならば恐らく模倣犯でしょう」

「模倣犯…ああそうか、その可能性が全然でなかった」

それを聞いてあたしは自分に呆れて額を押さえた。

コクウが白瑠さんと言うから、白瑠さんが殺ったと思い込んでしまった。頭を粉碎されただけで。死体もみていないのに。…見ないけど。

白瑠さんには熱狂的なファンがいて、そいつが模倣犯になったりする。あまりにも恐ろしすぎる頭蓋破壊屋のファン。

一人、会ったことがあるがあれは本当に気色悪かった。

「ごめんなさい…。あたしてつきり、白瑠さんに嫌われて…怒ってるのかと……思い込んでしまいました、ごめんなさい」

「やっだなあー。嫌いにならないよお？だって俺はあ椿を愛してるもん」

俯いたあたしの顔を覗いて、白瑠さんは云う。
愛してる。

どうしてこうも、簡単に、云ってくれるのだろうか。

「私も愛していますよ、もう私には貴女しかいませんから」

「お、重いです…幸樹さん…ずしりときました…」

「おや？くすくす」

本当にその台詞には重みがあった。怖いっす。

「それで、そのコクウとはどうなのですか？付き合っているんですよ？」

直球の質問にギクリとする。

噂はしつかり、届いていたか。

そっだよな。

だって白瑠さんはさっき”まだ居る？”と訊いた。あたしがコクウの元に戻ると知っているんだ。

「もう寝たんですか？」

「……………」

交際を肯定する前に問われて頷くのに躊躇した。うん、怒らないぞ。怒らないわ。

あたしは頬を赤らめつつも頷いた。

「だよな、椿からアイツの二オイがしたもん」

隣で白瑠さんがポツリ呟いた。

顔を上げて白瑠さんの顔色を伺う。怒っている様子は微塵も感じなかった。

あれ…意外…。

「出会いはどこで？告白はどちらから？初キスはいつです？」

「質問攻めはやめてくださいっ！」

「ここは兄として事細かに知るべきかと…」

「実の兄でもそこまで知らないですよ！」

「でも出会いと告白くらい訊いても構わないでしょうっ？」
「……………」

うっ…。

冗談はさておき、と幸樹さんにはこやかに真剣に訊いてきた。

「…アメリカで仕事…いえ、仕事 completed した直後に…彼に見付かって捕まったんです。それが出会いです」

あたしは観念して答える。

「それで勧誘されました、チームに。彼に言われるまで勧誘する為に追われてたなんて知りもしませんでした」

じとり、と問い詰めるように睨み付ける。幸樹さんは涼しい顔で紅茶を啜った。あたしは標的を変えて白瑠さんを睨む。

「だって会わせたくなかったもんっ！！！」

白瑠さんは大きな声を張り上げた。あたしは吃驚して肩を震え上げらせ、身を引く。

「白瑠…」

「……………」

幸樹さんに促されたように白瑠さんは謝罪してテーブルに顎をのせてプクーと頬を膨らませた。

「それで貴女は入ることにした」

「いえ、断って逃げました。だけど先手を打たれてパスポート、奪

われちやったんですよ…その時金欠で…逃げるに逃げられなくて。コクウはしつこく勧誘してきましてね…んー、ああそつだ。黒の集団が死者を出さずにビルジャックしたのは聞きましたか？」

「ええ、黒の集団が初めてまとまって動いてやらかした事件ですよ。白昼堂々と死者を出さずにビルジャック、裏現実者がジャックしておいて死者を一人も出さずに成功させたのは歴史に残るでしょう」

「その時、あたしもいたんです。見学して面白かったら入ってくれと言われたんで、一部始終を見ました」

「そつだつたんですか」

「正直面白かったので、入ることにしたんです。チームに」

チームに不利な情報は出さないように考えながら幸樹さんに話していく。白瑠さんは聞いているのかいないのかわからない。

「なるほど。私達がいつまでも迎えに来ないから怒って反発心で黒の集団に入ったわけじゃないんですね」

……。

実はそれも動機に入っているような…ないような……。これは黙っておこう。

ていうか、白瑠さんの前で黒の集団の話をしていいのか？

前は追い掛けられているから徹底的に逃げる為の策を練るために話し合っていたが、今はその必要はないのだし寧ろ今こそ白瑠さんの怒りが爆発してしまうのではないかとひやひやしてしまう。

あたしの目配せに気付いた幸樹さんは、わかってくれたのか話題を変えた。

「仕事は順調ですか？」

「はい。白瑠さんと幸樹さんは？…あ、白瑠さんは殺っていないん

でしたっけ」

「私も仕事はしていませんでした」

「フーちゃんはちゃんと殺らないと誰かまわらず殺っちゃうもんねえ」

「あ、ついこの間1週間くらい殺り忘れてしまつて暴走しました。」

ほら、黒の集団が大量の刺客を返り討ちにした件はご存知ですか？」

「ええ、聞きました」

「あたしと蠍爆弾、コクウに差し向けられた37人だっけな…それをあたし一人で殺りました。割れたガラスの破片で。その際あたしは記憶がなくて、味方まで切りつけてました」

…あれ。

結局コクウ関連の話になつてしまった。せつかく幸樹さんが逸らしてくれたのに。

「悪魔の仕業ではないんですか？」

「いえ、指輪を嵌めていたのでそれはないかと。…それに確かに同じだったんです。あたしが初めて大量殺戮をした時と、酷似してたんです」

「レットトレインと酷似ですか」

「禁断症状だねえ、なんで1週間も我慢してたの？」

「我慢してたんじゃないかってめんどくさくつてサボつてたんですよ」

「めんどくさくつて？」と白瑠さんは目を少し見開いて聞き返した。

「はい」

「殺したくならなかった？」

「はい」

「…ふうん」

頬杖をついて白瑠さんはあたしを見つめる。意味深な彼に首を傾げ

たら、顔にかかる髪を指先で退かされてそつと撫でられた。人差し指で頬をぷにぷにと上げると上げるように触る白瑠さん。…なにがしたい。こつゆう意図のわからない行動、白瑠さんらしいな。

何も変わっていなくて、懐かしくて、まるで何事もなかったみたいに戻れて、嬉しく思う。

あの時、もう少し泣きじゃくっていれば、白瑠さんが来るまでそこにいれば、彼らに苦労や心配をかけることもあたしがあんな痛い目をみることもなかったんだろう。

「あたしってトラブルメーカーですよね…」

迷惑ばかりかけてしまっている。

この家に転がり込んでから、ずっと。

「手にかかる愛しい妹です」

「そんな椿も愛してる」

「愛してます」

あたしも、愛してます。

なんて言えなくて、頬を赤らめて俯くしか出来なかった。

「あのう…必要ないですよ」

「いいから脱いでください」

笹野ドクターが診察をされると言い出した為、あたしは致し方なく上着を脱いだ。

「おや、キスマークが」
「っ!？」

脱いだセーターのせいで髪がバチバチと鳴って乱れたから治していればソファアで向かい合うように座る幸樹さんが指を指す。咄嗟にセーターで隠した。

「……嘘ですよ。ほら、診せてください」
「……!？」

カマをかけられた。

これでコクウと何処まで進んだかバレた。くっ…その為の診察か。聴診器を使って幸樹さんは診察を始めた。

その様子を白瑠さんは背凭れに顎を乗せて凝視。ブラジャー一枚のあたしの胸を見ていたから、セーターを投げ付ける。

「じつとしてください」

「…はい」

「……どこを撃たれたんですか？」

「傷も治されました、あとは残りません。鼠に刺された傷も心臓を撃たれた傷も悪魔が治した怪我は残ってません」

「どこを刺されたんです？」

あ…くそ…。

また余計なことを言っちゃまった。
ペラペラと喋ってしまう。

あたしは自分のお腹に手を当てる。

「…突きですか？」

「……………」

あたしは口を閉じたまま視線を落とす。「傷痕、ありませんね」と幸樹さんは確認であたしの腹を触る。

「血痕があまりにも多かったので…貴女も怪我していることはわかってました。何をされたのか、話してください。一刺しではないのでしょうか？」

幸樹さんはあたしを真っ直ぐに見つめて静かにだけど強く言う。

「…数えていません。何度か刺されて扱われました」

ぎり、と背凭れを白瑠さんは握り潰した。顔は見えなかったが、怒ってる。言ったところで彼らが行き場のない怒りを感じるだけ。

「すみません」

「謝らないでください」

幸樹さんは白瑠さんの頭をコツンと叩いて首を振った。

「健康ですね、よかったです」と幸樹さんは頭を撫でる。

診察終わり。

セーターを着ようとすれば、白瑠さんがあたしに服を差し出した。

あ、あたしが使っていた寝巻きだ。

臭いからとシャワーに入るよう言われたので、シャワーを浴びてから寝巻きに着替えた。

あたしの部屋のベッドで、雑魚寝。

これまた懐かしい。

右隣には白瑠さん。左隣には幸樹さん。あたしのベッドで三人は窮屈。なんて毎回のこと。

「夢みたいですね」

幸樹さんが呟く。

「貴女がいなかった時間が酷く長く感じます」

「…幸樹さん」

「何度も貴女の夢を見ました。その度に…起きる度に貴女が本当に帰ってきたのではないかと、家を探し回りました」

だから…。

だから夢か現実かを確認したんだ。

白瑠さんも夢だと思ってあたしを抱き締めた。夢だとわかりつつ。どうせ覚めてしまうと知りつつ抱き締めた。

あたしは腹に腕を回している白瑠さんの顔を見してみる。目を閉じていた。

「本物の貴女が隣にいる……ぐっすり眠れそうです」

「……………あたしもです」

安心感とあたたかさに眠気がくる。まとも眠っていなかったからでもあるかも。

本当に懐かしい。このベッドの感触に匂い。この温もり。

この温もりが安心感を与える。

あたしの愛する温もりだ。

あたしは気付かれないように幸樹さんと白瑠さんの裾を握り締めた。

目が覚めたら、幸樹さんや白瑠さんがベッドにいなかった。家を探したが、どこにもいなくて。クラウンとバイクもなくて、駐車スペースは空だった。

テーブルには朝食と書き置き。

”表の仕事があるので朝食は二人で食べてください。白瑠に送ってもらってくださいね、見送れなくてすみません。幸樹”
幸樹さんの字。

その下にはあとから書き加えたのか、白瑠さんの字が書いてあった。

”俺も出掛けてくるーごめんね？カギはちゃんとかけてね”

それを見てから、あたしは椅子に腰を落として朝食を摂る。

それから白瑠さんが使って置きっぱなしのペンで書き置きの裏にあたしもメッセージを書く。

”いってきます 椿より”

ただそれだけ。

それからPSと書き加える。

”藍さん、ごめんなさい”

藍さんに直接会って謝りたいが、もう住みかを変えただろう。探し出す暇はない。時間かかるし。

コクウが心配するからアメリカに戻らなきゃ。

蓮真君に会いにいつて無事だと伝えたいがそれも次回にしよう。

あたしはしっかりと鍵を閉めてその家を後にした。タクシーを捕まえて空港に向かう。

長いフライトになる、溜め息をつく。
こっん。

吸血鬼の気配に気付いて顔をあげる。

その先には コクウ。

ここ、とコクウはあたしに微笑みを向ける。

「おかえり、椿」

「…コクウ」

なんで？あたしはポカーンとコクウを見上げた。

「長いフライトになるだろうから、一緒に帰ろうと思って」

「…：…こうなるように差し向けたの？白瑠さんが犯人だってあたしに吹き込んで」

「白瑠が犯人じゃなかったの？そうなんだ」

「…行きましょう」

コクウはどっちでもよさそうに頷く。別に嘘を吹き込んだわけじゃないようだ。

あたしは肩を落としてコクウの手を握る。指を絡めて、キュツと握った。

「うおおああああー…。あ、黒猫おかえり、葬式はもう終わったの？」

「…葬式にはでなかったけど」

「え！？何しに日本戻ったの！？」

黒のオフィスに戻れば、ナヤが机の上にへばりついていた。ナヤは身内の葬式に出たと勘違いしたらしい。

「え？日本に戻ったのか？椿。おれも誘ってくれよー、蓮には会った？」

「そんな暇なかったの」

「ざんねーん」

遊太もそこにいて残念そうに頭の後ろに腕を組んだ。

「まだウルフの件、進展ないの？」

「なああああああゝあゝいゝ」

ウルフが漏らした番犬の情報は何一つ見付からないようだ。

情報のスペシャリストがここまで手こずるなら他の手で番犬の情報をかき集めるべきではないか？

あー他に手掛かりがないんだった。

「このままじゃあ計画倒れよ？」

「えー？大丈夫だよあ」

「はあ…ナヤ、明日はあたしも手伝っわ」

お気楽だ、コイツ。

あたしは溜め息をついてナヤに言う。

「嬉しいけどボクは休むよ…ガクッ」

「……………お大事に」

「お大事にい、ナヤ」

もう頑張れないらしくナヤは大袈裟に俯せた。本当に何も掴めないみたいだな。

こんなので打倒番犬は成功するのだろうか？

てかコクウは成功させる気があるのか？

「俺は仲間を信じてるんだ。優秀なんだぜ？大丈夫さ」

問えばコクウはそう言い退けた。

まあ腕は確かだ。伊達に名を馳せていない実力ある者達ばかり。信じているのか。

何度も歴史に残すようなことを仕出かした彼にとつたら、きっと楽勝なのだろう。

仲間はコクウを信じてついてきている。

…なんとかなるか。

翌朝。

ドアをノックする音が聴こえて目を開く。黒のメンバーに礼儀正しくノックする者なんていたっけ？

あたしは身体を起こして、ベッドから這うように降りた。寝惚けていて足取りはフラフラ。

「…あれ、幸樹さん…」

ドアを開けたら、予想外にもそこには幸樹さんが立っていた。

あまりにも意外過ぎて眠気が吹っ飛ぶ。あれ、ここアメリカのコクウの部屋だよな？とあたしは振り返った。ベッドにコクウがいる。

うん、ここアメリカだ。

「……わかっていても、少々……」

「どうかしたんですか…？」

一人でぼやいて幸樹さんはあたしを見下ろす。あたしは目を擦りながら用件を訊く。

わざわざここに来たなんて、よっぽどの用なのだろう。

そこで自分がコクウのYシャツ一枚だという事実気付く。おや。

「少しだけ時間をください、話したいことがあります」

「話したいこと？」

「椿さんをお借りしますね、黒の殺戮者」

「わっ」

幸樹さんは茶色のコートを脱いであたしにかける。そしてあたしを抱えあげた。

着替える暇もないのか。

抱えられてコクウに目を向ければ、コクウは起き上がっていた。だけど呼び止めることはしない。

了承を得たと捉えた幸樹さんはあたしを抱えてその場を後にした。向かったのは近くのレストラン。

「なんです？話つて。凄く重要ですか？」

幸樹さんのコートをしっかり着て防寒。

早速本題に入る。急いでるみたいだし。

「はい、簡潔に言いますね。椿さん、兄妹になりました」

紅茶を頼み終えた幸樹さんはあたしを真剣に見つめて、本当に簡潔に云った。

「…え？」

当然それだけでは理解できなくてあたしは瞬きをする。

「どうゆう意味ですか？」

「戸籍を作りましょう。笹野椿として、私の妹として、戸籍を作る

んです」

戸籍。妹。苗字。

あたしはポカーンとした。

「あの、えつと、何故？」

「嫌ですか？」

「いや……ではない、ですよ？ただ、なんでまた？あたしは戸籍上死亡してますし、それになんの意味が？」

戸籍上は山本椿は死亡している。戸籍はないものだと割りきっていた。今後もなくとも裏現実で生きていられるのだから、必要ないのに。

「……由亜さんと話していたんですよ。逃亡中の藍乃介さえも偽の戸籍を持っているので、椿さんにも用意しないかとね」

「由亜……さんと……？」

由亜さんの名前が出て、あたしは息を飲む。その名前を口に出した本人は眉間を寄せて切なそうに微笑んだ。

「椿さんは家族ですからね。彼女の提案に私も賛成で、あとは貴女に話すだけでした」

その前に死んだ。

「これは由亜の願いでもあるんです」

由亜さんの願い。

「表でも家族になりたかったんでしよう。両親にもいつか私達を紹介したかったと言ってましたからね。最後に会った日も…椿さんと自由に海外旅行する為には必要だと言ってました」

光に照らされて笑う由亜さん。

いつもそつだ。由亜さんは眩しかった。

あたしを照らしてくれたんだ。

由亜さんはあたしを光の中に入れようといつも手を握ってくれていた。

「椿さん」

幸樹さんはあたしの手を握って、もう一度云う。

「私と家族に…兄妹になってください」

ぼろ、と涙が落ちる。

涙脆すぎて嫌だな…全く。

「勿論です。妹にしてください、お兄ちゃん」

あたしは精一杯笑って答えた。

悪魔遊々

「やあ！奇遇だね、お茶しない？」

幸樹さん見送った後、あたしは宣言通り情報収集に出掛けた。

ウルフの昔住んでいたアパート近くで、声をかけられて振り返ればいつぞやの灰色頭の男。

赤い目。真正正銘の悪魔の契約者。

ああ、しまった。

ジエスタにこいつのことをチクリ忘れていた。こいつを売れば吸血鬼達に受け入れてもらえるかしら。

「そうだ、そこでお茶しよう。そうしよう」

「ちよつと」

「まーまー、悪魔同士話し合いたいことがあるみたいだからさ」

「え？」

冷めた目を向けていたが、灰色の男は強引にあたしの腕を引いた。妙なことを言うものだから、怪しむ。

おい…ヴァツサーゴ？

あたしは中にいるヴァツサーゴを呼ぶ。返答はない。

そう言えばこの男にはもう二度と会うなど言っていたな。なんなんだ？

「いや、君とお茶が出来て嬉しいな」

「……………」

ニコニコ、向かいに座る灰色の男は笑みであたしを見つめる。

「悪魔同士の話って言われてもね、あたし興味ないわ。もういいかしら？」

「せっかちなだね」

「用事があるのよ」

「お茶する時間くらいあるだろう？」

男は薄く笑う。その薄笑いが赤い目を妖しく魅せた。

「殺し屋だっけ？」

「貴方もでしょ」

「また雰囲気変わったね」

「雰囲気？」

「最初はかわいー感じ、二回目は刺々しい感じ、今回は………ちょー愛しい感じ？」

「……………」

あたしを覗きこんで述べる。

妙な印象を持たれたな。

「もう行くわ」とあたしは席を立ったが、目の前に小さな少女が立ち塞がっていて通れない。

真っ白な少女。

長髪も肌もコートも真っ白で、瞳が赤。まるで白うさぎを連想させる容姿の少女は、あたしに感情の込められていない赤い瞳を向けた。ズキツ、と撃たれたように頭に痛みが走りあたしは倒れる。

忽ち、あたしの頭上にヴァッサーゴが現れた。そして威嚇する。

「だから、悪魔同士話すことがあるんだからお茶しよう」

男は笑った。

おい、ヴァッサーゴ。どうゆうことだ。

あたしは起き上がってヴァッサーゴを呼ぶ。

ヴァッサーゴはテーブルから降りて少女の姿の悪魔と向き合った。

睨み合いの末、悪魔達は離れて別の席に向かってしまう。

「へえー、かわいい娘ちゃんはイケメン好きか」

「アンタはロリコンか」

「あーごめん、サミジーナが頭痛を起こしちゃって。あの娘は短気なんだ」

ヴァッサーゴを気にしつつあたしたは目の前の男を睨み付ける。

サミジーナ。それが悪魔の名前か。

おい、ヴァッサーゴ？聴こえてるか？吸血鬼を敵に回すようなことすんなよ。

あたしは一応念じてみた。

多分聴こえているだろう。

「悪魔について知識はある？」

「…？」

「悪魔は万能の知恵を持っている。それから個々で特別な能力を持っているんだよ。サミジーナは死者を甦らせる、オレも甦らせてもらったんだ。君のヴァッサーゴは過去と未来がわかる、そうだろう？」

初耳だ。あたしは少しだけしかめて男を凝視する。

悪魔の能力？

吸血鬼を上回る力だけではなく、吸血鬼と同じくここに能力があるのか。

サミジーナは死者を甦らせる。

この男は一度死んだのか？
ヴァッサーゴは過去と未来がわかるだと？初耳だ。

「ヴァッサーゴのその力が必要なんだ。手を貸してくれないかな？
かわいい娘ちゃん」

ヴァッサーゴの過去と未来を見る能力が欲しい。何の為に？
悪魔の契約者の目的は、吸血鬼の殲滅しか思い浮かばない。

「断る」

「断るつつつてんだろ！」

ほぼ同時に、離れたテーブルにいるヴァッサーゴが声を上げた。

「そつか、残念だな、楽しいのに」

「楽しい？」

「吸血鬼と戦争だなんて、これ以上ない相手だとは思わない？」

楽しげに男は薄く笑いかける。

吸血鬼との戦争。それを楽しむつもりなのか。

「ここはオレが持つよ。じゃあまた会おう、かわいい娘ちゃん」

お金を置いて、男は立ち上がり、ヴァッサーゴ達の方へ向かう。
少女を抱え、いなくなった。

「ちいつ」

一瞬にしてヴァッサーゴは隣に移動してきて盛大な舌打ちをする。

「彼ら何を企んでるの？」

「……………」

「吸血鬼と戦争だってわかるけど、なにかヤバそうじゃない？」

ヴァッサーゴは不機嫌にしかめたまま何も言わない。

これは早くジエスタに伝えた方が良さそうだ。吸血鬼達の信用を得る絶好のチャンス。

「貴方、過去も未来も見れるの？」

「……………」

思い当たる節がいくつもある。

ヴァッサーゴはあたしに住み着く前の情報をいくつか握っていた。

それはてつきりあたしの頭の中にいるから、記憶を見たとはかり思ったが。

思えば彼は篠塚さんに”お前を知っているぞ”とかなんとか言っていたらしいし、彼の過去を知っているのか。

「おい、椿」

「なによ？」

「警察、乗り込むぞ」

「は？」

「警察に潜入しようぜ」

ニヤリ、笑ってくるヴァッサーゴに口をポカーンとする。

「何を言い出すのよ？ウルフのことを調べに来たのに…っていうか、質問に答えなさいよ」

「だあかあらあ」

クククツ、と機嫌が直ったのか喉の奥で笑ってヴァッサーゴは言った。

「犬ツコロを調べに行くんだよ」

犬。狼。番犬。

ヴァッサーゴが言う犬ツコロがどれを差していたのかわからないが、番犬に繋がるならとあたしは暇潰し感覚でヴァッサーゴの提案に乗ることにした。

一度コクウの部屋に戻って必要なものを取りに行ったら、コクウはいなかったので書き置きを残す。
ニューヨークにいつてくる、と。

「あら、レネメン」

「黒猫」

「暇ならニューヨークまで送ってくれない？」

「仕事か？いいぜ」

オフィスに降りればレネメンが丁度出掛けようとしたので捕まえた。
レネメンもニューヨーク方面に行くそうだ。

「仕事じゃなくて、犬探しよ」

「番犬か？手掛かりが？」

「さあね、わからないわ。とりあえず調べてくる、ナヤもお手上げみたいだしね」

車の中であたしはレネメンに話して笑う。運転しながらレネメンも笑った。

「ナヤの仕事を手伝うのか、熱心だな」

「進展がないんだもの、苛ついて殺戮を始めちゃうわ。ナヤをショーに招待したら？」

「ははは、そうする」

談笑しながらなので退屈せずに済んだ。

「ナヤ以外に仕事はないの？」

「今んとこないな。黒が何か企んでいるだろう」

「でしょーね」

なんてつつたつて、策略家だもの。彼は。

きつと何か策略を練って、機会を伺っているのだろう。

「そう言えば、遊太が日本に戻ったぞ。家族に会うとかで」

「そうなの？…ふーん」

あたしの帰国に便乗して、蓮真に会いにいったのか。弟大好きっ子だなあ…。

行くなら行くで行ってほしかった。

謝罪と携帯電話…。

あ、蓮真君ならきつとあたしの携帯電話を遊太に渡してくれるだろう。遊太もあたしが無事だと話すだろうし。ならいつか。

レネメンに送ってもらい、ニューヨークへ到着。

レネメンからオスメの店を聞いて、スーツを購入した。それを着て、ショートヘアのウィッグを被る。

「胸元は開けた方がいいぞ」

「必要ない。…で、どうすんのよ？警察署なんてきて」

ニューヨークの警察署前。

警察嫌いのこのあたしを警察署に連れてくるなんて、なに考えてんだか。

「資料室に行け」

「……………これ、本当に番犬に関することよね？吸血鬼を滅ぼすためじゃないわよね？」

「ちげーよ。誘いは最初っから断ってた。これからだってあのロリコン悪魔の手伝いなんかする気ねえよ」

「……………」

過去も未来も、みえる悪魔。ヴァッサーゴ。

「アンタ、戦争に参加してなかったのよね？それは何故？負けるって知ってたから…？」

あたしは問い掛ける。

吸血鬼と悪魔の戦争に参加しなかったとヴァッサーゴは何度も言っていた。理由は知らない。

ヴァッサーゴは少し沈黙してから、笑い出す。

「オレが見えるもんは、目の前に在るものだ。過去や未来…………野郎やアマヤその場所で見える」

ただそれだけさ。

そうヴァッサーゴは笑いを含みながら言う。

「未来つてゆーのは、選択次第で変わって行くんだよ。負けるって知っても、勝ちに持っていったさ。選択次第で未来は決まるんだよ」
選択、次第。

「悪魔どもは自分の能力が他の奴等より優れてる思い込み野郎ばっかだ、戦争時はオレの能力なんてすがんなかったぜ。戦争つっより、吸血鬼狩りだったからな」

ケタケタと、ヴァツサーゴは嘲笑う。

確かに、吸血鬼は追い込まれていた。だからコクウが身を売って人間に協力を求めたのだ。

そのことを予知して阻止すれば、勝利したのは悪魔で吸血鬼は滅んでいたかもしれない。

そんなヴァツサーゴの能力を他の悪魔が欲しがっている。本格的に動いていると言うか？

吸血鬼の殲滅。

「何故勝たせなかったの？悪魔を」

「興味ねーんだよ、どうだっていい。つか、さっさと入れよ。サツの溜まり場にはいんのがそんなに怖いのか？」

警察嫌いなだけだ。

大量殺人鬼が警察署に入りまあす。

あたしは答えを聞くのを止めて階段を上がってニューヨークの警察署の中へと入った。

初めてアメリカの警察署に入ったがあまりキョロキョロせず堂々と歩く。

どうやら溶け込んでいるらしい。

胸元のポケットにはID。そのIDに記された肩書きはSP。

名前は適当にキヤット・ブラックと記されているが、正式に発行されたものだ。

「Cat・Blackとあ、なかなかいいんじゃないか」とヴァツサーゴはケタケタと笑う。

雇い主が「キヤット！キヤット！」と偉く名前を気に入ってたっけ…。

「キヤット」

「！？」

その名で呼ばれ肩を叩かれた。思わず肩を震わせて振り返る。そこには顎髭の二枚目の男。

「まさかこんなところで会うとはな、キヤット」

「……エリック」

正直名前を忘れていたが胸のIDでなんとか彼の名前を思い出せた。

「なにやってんだ？本業に戻ったんじゃないのか？」

「野暮用だね。貴方こそ何故ここに？」

「私も野暮用さ」

ニツ、とエリックはそう返す。

「アンタが消えてボスは残念がってたぜ？」

ボス。彼の雇い主。

あたしのかつての雇い主。

…まあ、半場強引に雇われたのだけどね。

アメリカの有望視され次期大統領と噂されているミリーシャ・ビ

アンキが雇い主。

異例の若さの上に女性だ。

国民に圧倒的に指示されてはいるが、現大統領含め他の政治家はもう反発。その故に命を狙われていた彼女は、イタリアでマフィアを殲滅したあたしの噂を聞き、なんと殺し屋を護衛につけると言い出した。そしてあたしはギリシャで捕まり、半場強引に雇われたのだ。その時のID。

あたしは彼女が暫く国を転々すると聞いて、転々しながら稼げるならと引き受けた。

「あのオバサン、えらくお前を気に入ってたよなあ」とヴァッサーゴが記憶を振り返ってきている最中に割り込んだ。

確かに、気に入られていた。

何度も殺し屋を辞めて自分専属SPになれと言われたっけ。

ミリーシャは苦手だ。

「キヤット。お前は、なにを悲しんでる？」

酒に付き合えと無理矢理酒の入ったコップを持たされた際、言われた。彼女はもう既に出来上がっていたが、真意に迫る目をして問い掛けてきた。

「いつも冷めたような眼で誰かを探すように他所に目を向けている。時々、虚ろで憂いていて儂げだ…」

多忙のくせに、よく人を視ている。観察力、見抜く力、大統領に必要だな。とは軽口言えるほどその頃のあたしは余裕なかった。

「まるで殺しをして何かから逃げているみたいだ。お前は一体何から逃げたい？何を忘れたいんだ？ん？おねーさんに言っごらん」

にいこーと酔っ払いは迫ってきた。

「何を強がってるのよ、キャット。お前
い」

ボロボロじゃな

あの人は苦手だ。

抜かりはないし、人をよく視ているし、リーダーシップも十分ある。大統領に相応しいだろう。それは認める。ただ、苦手なのよね。

気に入ってくれるクライアントはどいつもこいつも一癖あって苦手だ。

「ミリーシャさんには殺りがある刺客がくるからなかなかいい仕事だったわ」

「専属SPになりやいいじゃないか。殺しが出来なくなるだろうが」「殺しが出来ないのはちよっとね」

隣にエリックがいるおかげで更に溶け込めた。うむ、問題なく済みそう。

ミリーシャの刺客は軍で鍛えられた者ばかりで本当に気が緩めなかったな…。

「冗談抜きで、ボスは雇いがってるぜ。真剣に考えてくれないか？」

あたしの腕を掴み、エリックは歩みを止めさせて言う。

「キャットの腕前なら優秀なSPになれる。ボスも気にいってるし、収入も弾むだろう。…戻ってこないか？」

「……………」

あたしは少し考えて、左右に目をやりすれ違つ警官達が盗み聞きしていないかを確認してから答える。

「あたしは殺し屋よ。自分を守る者が欲しいのならば、狩人を雇つてと伝えておいて」

いい仕事に違いないだろう。

だがあたしは殺しをしなくてはならない中毒者。ホリック。

「ああ…そうね。オススメはゼウスとポセイドンよ。彼らは腕が立つわ」

「……そうかい、ちゃんと伝えとくよ」

狩人を口にしてあたしは思い出した二人のことを勧めた。エリックは仕方なさそうに笑う。

「あ、そうだ。ボスから伝言」

「ん？」

「黒の殺戮者との結婚式には呼べよだつてさ」

「…っ」

ミリーシャからの伝言を聴いて顔をひきつらせる。

エリックは笑つて、背を向け手を振って行ってしまった。

…あの人、苦手だ。

てか、何処。資料室は。

「そこ左」

うい。

あたしは左に曲がり、資料室に辿り着いた。問題はSPのあたしが

無事に資料室から出れるかどうか。

それで？

何を探すのよ？ヴァッサーゴ。

「五年前の未解決事件」

五年前。

ウルフと番犬が消えた頃か。そして白瑠さんとコクウが会った頃でもある。

あたしは段ボールが詰まれた棚でいつぱいの資料室の奥に入った。五年前の日付が記された段ボールを探す。多いなあ…。

「見付けた、そこだ」

「え？」

あたしは首を傾げる。なんでわかるんだ？

曲がってみれば確かに、五年前のファイルが在った。

「五年前の、全ての未解決事件を調べるの？」

「見せてやるよ」

ぶわああ。

黒い煙があたしを囲う。黒い悪魔の両手があたしの目を塞がった。

塞がれたのに、目の前の景色が映る。

ファイルが詰め込まれた箱を、一人の男が棚に押し込んでいた。そばにはもう一人いる。二人とも警官の制服を着ていた。

「しかし、なんだろうな？犯罪者や一般人が殺されていく犯人不明の事件。全く犯人の手かがりが掴めないなんて」

声が聴こえてくる。

「犯人はプロの殺し屋か？ 国家が機密に育てたやつだったりして」

一人は面白がって笑った。

「
くだらねえ」

箱を片付けたもう一人は、冷たく吐き捨てる。

その目付きも、冷たく感じれた。

知っている人物なのに、まるで別人に映る。

彼と目が合う。

実際は合ってなんかない。

彼にはあたしが見えていない。

これはヴァッサーゴが見せている過去だ。

目が合っても、やっぱり別人に見えてしまう。

目の前の景色は、跡形もなく消えていった。

現在に戻る。

「今の……篠塚さん？」

あたしは今見た彼の名を口にしてヴァッサーゴに確認した。答えを聞かなくてもわかっているから、放心状態。

「……五年前の、篠塚さん……」

あたしは前に篠塚さんが言っていた言葉を思い出す。

……恥ずかしい話、過去の俺は真面目な警官ではなかったらしい。

欠勤ばかりでろくに愛想もない奴だったと同僚に散々からかわれた。

そんな俺が刑事に昇進。人間は変わるんだ、椿

あれは。

記憶を失う前の、篠塚さんだ。

記憶を失うところも違うのか？

ああも違うのか？

あの篠塚さんが、あんな目をしているなんて。

熱心に殺人犯を追い、正義を貫く優しい刑事のあの人が。

あんな冷たい目をして、興味なさげに吐き捨てるなんて。

記憶がないだけで、どうしてそんなに違うのだろう。

「人格ってゆうのは、周りの人間と育てる親の影響や住む場所と生活で作り上げていく。記憶をリセットすりゃあほぼ人格もリセットされる」

思考を聴いてヴァッサーゴが答える。

「五年前はまじでまともな警官じゃなかったのさ。よく欠勤するし たっぱのクビ寸前のダメ警官だった」

あたしの足元にある影が伸びて、箱に手の形の影が現れた。ヴァッサーゴの手だ。

可笑しそうに、可笑しそうに、可笑しそうに、ケタケタケタと笑う。

「あのダメ警官がしまった事件のファイルはな、全部”番犬”が殺ったもんさ」

「…番犬が殺ったの？」

「たった一部違うがな」

「……………この事件を元に、番犬を追うの？」

ヴァッサーゴの力で。

それならばウルフを追わなくても済む。遠回りしようとしたが短縮

できる。

ねえ、何故急に手伝う気になったの？

あたしはヴァッサーゴに訊いた。

あたしに能力がバレたから？

「んだよ、手伝わなきゃよかったか？別にいいんだぜ？お前のカレシが困り果てればいいさ」

ヴァッサーゴの憎まれ口にあたしは追及するのをやめる。
追及しても無駄だろうな。

「オツケー。どれの事件で追う？」

「五年前の事件で一番新しいのだ」

あたしは箱を棚から下ろして、その新しい事件の資料を取り出す。
この殺人現場に行けば、ヴァッサーゴの力で番犬の外見がわかる。
それから過去の彼を追う。そうすれば生存しているかどうかもわかるだろうから。

資料を暗記してから元に戻し、あたしは警察署を後にした。

これで一步前進。

ナヤは大喜びすると思うが、悪魔の話は出来ないからコクウにだけに話して、それから調べよう。

このまま帰ると帰る途中で殺戮を始めそうだから、ついでに仕事をしておくか。白瑠さんと来た際に仕事をくれそうな人を教えてもらったから適当に訪ねてもらおう。

「お前そろそろどっかり構えて、舞い込む仕事だけしたらどうだ？かの有名な、紅色の黒猫だぜ？」

おちよくるようにヴァッサーゴはお喋りを始めた。

「仕事は選ぶ？殺せりや誰だっでいいだろうが。知名度あり、腕もまあまああり」

「あのさ…何が言いたいの？あたしが自分で仕事を探すことに文句あるの？やけに煩いわね、吸血鬼に存在を知らしめたから」
「単に椿とお喋りをしてるだけさ」

あらそう。

あたしは気にせず、ヴァッサーゴの話聞いて適当に返す。

妙に引つ掛かるが、近場の依頼人の元に向かう。

建物の前に来て、気付く。

血のおいがる。

建物の中からする。誰かに殺されたのか？

血のおい。それから…これは何のおいだろうか？

あたしは階段を上がって中に入った。

ん、吸血鬼の気配。

ああ、そうだ。このおいは、絵具。

血の香りが充満した部屋は、吸血鬼の食後　血を吸われて死

んだ人間が転がっていた。

その死体に囲まれて、一人男が椅子に腰かけている。

手にはパレット。もう片方には筆。絵を描いている。

あたしは歩み寄って彼に近づく。

「何を描いているんです？」

「君さ」

静かに声をかければ、穏やかな声が返ってきた。

ブロンドの長い髪を黒っぽいリボンで一つに束ねた男の吸血鬼。覗

いてみれば確かにあたしが描かれていた。

紅いドレスのあたし。

あの晩餐会のあたしだった。

「血を混ぜると君にぴったり紅になるんだ。嗚呼、すまないね。レディの前で食い散らかしたままで」

「…いえ、御構い無く。もう見慣れました」

男の口元は血が滴っていたが、あたしは気に留めず、絵を眺める。紅い瞳と紅いドレスの少女。

背景は黒い霧に包まれたように真っ黒。少女は妖しげに佇む。彼の目には、こう映ったのか。

「晩餐会でお会いしましたか？」

「ああ、僕もいた。離れていたから君には見えなかったのかな？僕はアイルス」

「あたしは悪魔憑きの黒猫です」

アイルスという名の吸血鬼は、手を止めずに笑う。

「君は面白いね。コクウはこうゆう娘さんが好みなんだね」

「そうらしいです」

ふと思い出す、あれヴァッサーゴがまた黙ってる。…まあいいか。どうやらこの吸血鬼はあたしを嫌ってはいないようだ。

「何故あたしの絵を描いているんですか？」

「絵を描くとね、また会えるんだ。だから僕はまた会いたい人の絵を描く」

「ふうん。あたしに何故会いたいと思ったんですか？」

「魅力的だからかな」

グチグチと赤い絵の具と血が混ざりあい、紅いドレスを染める。それを眺めながら、穏やかな声を発する吸血鬼に耳を傾けた。

「コクウが悪魔が憑いていても愛してると言っただけで守る娘だし、あのヴァンストが殺さずに引き下がったからかな」

「それって珍しいこと？」

「悪魔は見つけ次第始末してきたんだ。どの吸血鬼だってそうするさ。君が堂々と言い退けるから聞き入れたんだ」

「あたしのこと信じてくれたの？」

「少しね。じやなきやヴァンストが引き下がったりしないよ」

ふうん。

「僕らにとつて、たった一匹でも悪魔は脅威なんだ。僕らは生存しようと思死だから。晩餐会の無礼はどうか許してほしい」

「いえ、あれはこちらが悪かったんです。悪魔がいるのに晩餐会に邪魔してしまっただけだから。お気になさらずに」

好印象の吸血鬼だ。

「君は礼儀正しいんだね」と初めてあたしに顔を向けてアイルスはわらいかけた。

ふと、余所に目を向ける。

「コクウは一緒じゃないのかい？」

「はい」

「それはまずいなあ……」

ぼやきながらも、また絵と向き直るアイルス。あたしも気付いて周りに目を向ける。

「どつしたのか…」

殺気と共に蠢く気配。複数だ。

「どつする？ミス黒猫。僕も自分の身が可愛い、迂闊に君の味方はいできないんだ」

ピシッ。

亀裂の音。次の瞬間、天井が崩壊した。

あたしは直ぐに建物から出る。

そこに待ち構えていた吸血鬼が、腕を振った。受け止めたのが間違い。

吸血鬼の怪力を忘れていた。人間と比較してはならない。

文字通りあたしは殴り飛ばされ、崩壊した建物の中に叩き込まれた。

「ちっ…」

あたしは起き上がり、体勢を整える。

「お前、吸血鬼を誘き出すためにくっちゃべってたのかよ？」

ヴァッサーゴに訊く。ヴァッサーゴは肯定するように笑った。

半崩壊した建物に、吸血鬼達は降り立つ。困うような四つの影。

アイルスは隣の建物の屋上で絵を描き続けている。

「誰に聞いたかはわからないけど、その娘に手を出すとコクウが怒るよ」

アイルスは描きながら、吸血鬼の一人に言った。

古びた軍服を来た若い男が、あたしを一点に睨み付ける。…コイツ

は絶対に見たことないな。話からして晩餐会にはいなかったのだらう。

他の吸血鬼も軍のような服を着ているが、やはり古い。まるで戦場から来たかのようなようだ。

「お引き取り願いますようか。あたしは貴方達とやりあう気はありません」

あたしは立ち上がり、敵意がないことを示すために両手を見せる。スツ、と男があたしに掌を向けた。

「逃げた方がいいよ、ミス黒猫」

アイルスの言葉とほぼ同時。

何かがあたしに向かってきた。

風を切り、風が。

反応が遅れた。

が。

あたしに突っ込んでそれから避けた。あたしのいた場所は挟られている。

「…コクウ」

あたしを抱き締めて避けたのは、コクウだった。

「やあ、久しぶりだね。百年ぶりだっけ？クラウド」

「……失せる」

挨拶もせずクラウドと呼ばれた吸血鬼が掌を向けて、また鎌鼬を放つ。

コクウはあたしを抱えたまま余裕に避けた。

「てっきりお前は死んだとばかり思っていたなあ」

バン。鎌鼬が瓦礫を削る。

「あ、ミランラが五十年前くらいに会ったと言ってたなあ」

軽やかなステップでコクウは避けた。

「ねえ、コクウ」

「なんだい？ 椿」

「あたしを安全なところに下ろして、古い友人の相手したら？」

「俺の傍以外に安全なところなんてないだろ？ マイハニー」

「彼らを追い払えばましたと思うわよ」

猫なで声で呼べば、微笑んでコクウは答える。いや、降ろせば

…。

この状況をなんとかしろ。

「！」

二体の吸血鬼がコクウを挟んだ。コクウは一方の攻撃をかわし、もう一方を蹴り飛ばした。

だがそれは罠。

目の前にまた鎌鼬が迫っていた。

今度は避ける余裕なんてなかったコクウは、あたしを守るために背中を受け止める。

鎌鼬が背中を切り裂く。内蔵まで届いたのか、コクウが血を吐いた。大ダメージのようで、コクウは膝をつく。

「コクウ…！」

彼の肩を握り締め、あたしは立ち上がり吸血鬼を睨み付ける。

「ざけんなっ！！コクウを傷付けるなっ！」

怒鳴り声を上げれば、ヴァッサーゴが表に出て、吸血鬼達に攻撃をした。

吸血鬼達は怯み、距離を置く。

「アンタらは同族を殺すのか！？てめえらはどれだけコイツの身体を傷付けるんだ！」

「……椿……」

怒り任せに叫ぶ。

徐々に回復をしているコクウがあたしを見上げる。

傍観したアイルスが、口を開く。

「引くべきだ、クラウド」

「……」

クラウドはアイルスを睨み付ける。彼の部下であろう吸血鬼は後退りしていく。

明らかに戦意喪失。

舌打ちをして背中を向けたクラウドは消えていった。他の吸血鬼も消え、ヴァッサーゴはあたしの隣に立つ。

「クククツ…アイツには要注意だなあ」

「お前な……」

ギロリ、とあたしはヴァツサーゴを睨み付けていたが、頬に手を当てコクウと顔を向かい合わせられた。

「椿だったら、俺のために怒ってくれるなんて…嬉しいう？」

「勘違いするんじゃないわよ。約束を忘れたわけ？あたし以外に傷つけられるなつていったらだろーが」

「う…ちよつと、やだな…ハニー。君を守るためだったんだ」
「ああ？あんだつて？」

「…ごめん、ハニー。俺の身体を好きにしているのは君だけだよ」
恍惚の顔で顔を近づけたコクウの頬と髪をわし掴みにして吐き捨てる。

「一言いいかな、また口調が悪くなってるんだけど…いたたたつ」
コクウがなにか言っている気がするが、髪の毛を引っ張って思考した。

庇われるのは本当に、気分が悪い。

死にくい吸血鬼でも、膝をついて吐血をして、酷かった。

「んなマゾ彼氏なんて捨てちまえよ」

「おい、V。やめてくれるか？椿を追い込むのはさ。俺と別れるように言うのもやめてくれ」

「なに？悪魔と吸血鬼と人間の三角関係？」

「まさかっ！アイルス、絵は描けた？」

「それ椿？」

「そう、君のハニーさ。まだ描けてない」

「描けたら見せてちょうだい」

「ああ、喜んで」

「俺も、アイルス」

首に絡み付くヴァッサーゴと血塗れのコクウを引き剥がしてアイリスと話す。彼の醸し出す穏やかな雰囲気随分落ち着いてきた。

「あのクラウドって奴、能力持ち？」

「そうそう。晩餐会には一度も顔を出してない、気難しい奴さ」

一度も顔を出していない吸血鬼。

悪魔は見つけ次第始末してきたんだ

僕らにとって、たった一匹でも悪魔は脅威なんだ。僕らは生存しようと思死だから

アイリスの言葉を思い出す。

こうなるのは当然。

滅り続ける存在の吸血鬼は生き延びるしかない。容易く吸血鬼を葬る悪魔は天敵。

天敵を排除して生き延びる。

吸血鬼の手段。

「大昔の軍服からしてアイツあ、戦争を引きずってるんだな」

あたしの肩に頬杖をついてヴァッサーゴは嘲笑う。

「では、僕は帰るよ」とヴァッサーゴの言葉なんて聴こえないフリをしてアイリスは先に去った。

「さて、俺達も帰ろう」

コクウは微笑んで言う。

「なんでまたニューヨークに来たの？椿」

「番犬について調べてたの」

「そおなんだ、収穫はあったの？」

「ええ」

「ほんと？」

手を繋いで帰り道を歩く。

話せばコクウは食い付いてあたしの顔を覗いた。あたしはしれっとしてそっぽを向く。

「ねえ、椿。教えてよ」

コクウはあたしの肩に腕を回して、耳元で囁く。あたしはあえて反応しない。

「ねえ、椿」

あたしはそっぽを向く。

「椿い」

コクウは聞き出そうと必死にあたしの気を引こうとする。

「何すれば教えてくれるの？椿」

「んー？」

「なにくだらねえやり取りしてんだ」

「……………」

「…V、邪魔もしないでくれないか？」

ヴァッサーゴとコクウの仲がなんだか険悪になってきているような気がする。

気のせいかしら？

「てゆうか、コクウ。車は？」

「え？飛んできた」

こっから歩いて帰ると言うのか。

「もうだめだよ、椿。俺から離れちゃ。君はVのせいで吸血鬼に狙われてるんだから」

コクウはあたしの頭を撫でる。

「わかったわ。とりあえず、車で帰りましょう」

三日後。コクウの部屋のベッドで目を覚ませば、隣にコクウはいなかった。

これは…なんだろう？

「コクウの部屋から出るなってことかしら」
「知るかよ」

自分から離れるなど言っておきながら、あたしを置いて外出してしまっただけ。

気にしても疲れるだけだからあたしはベッドから降りてシャワーを浴びる。

着替えて、朝食を摂るためにオフィスへ。

予想通り、朝食は用意されていた。

あたしはマフコを呼んで、まずは餌を与える。

カチヤ。

あたしの頭に銃口が突き付けられた。

あたしの背後に立つ気配の主はよく知っている。

あたしは振り返る。

愛用している黒のリボルバーを突き付ける彼は、殺気を放ち憎むようにあたしを睨み付けた。

でも

那拓遊太は悲し

そうな苦痛の表情だった。

悪魔遊々（後書き）

いつもは活動報告の方に書かせていただいてますが、久々に後書きを書きます。

白瑠さん達とも再会でできて満足ですっ。

夏休みだから結構楽しく執筆しております。夏休みのうちに進めれるとこまで進めたいと思います。

今回出てきた吸血鬼達は人間達と全く関わらない悪魔を深く恨む者達です。椿ちゃんをこれからも襲う。かも。

今回は遊太が銃を向けて終わりましたが、これから帰国をして蓮真君捜しです。

そして白瑠さんまた登場。

白瑠さんと行動して、そしてコクウと正面衝突になるでしょう。

次は『頭蓋破壊屋復活』

裏現実シリーズを覗いていただき、ありがとうございます。皆様。

これからも暇潰しに覗いてください。よろしく願いいたします

頭蓋破壊屋復活

ガウン。

引き金が引かれる前に反応してリボルバーを弾く。遊太はまたあたしに銃口を向けようとしたが蹴り飛ばしてリボルバーを遠くに飛ばす。

「くっ！」

ナイフを取り出して遊太は振り上げた。あたしは手首を掴んで止める。

そのまま押し退け、机に押し倒す。

「いきなりなんなのよ！」

「っ！うああっ！！！」

押し飛ばされ、またナイフが振られる。

二歩、三歩、下がり遊太のリボルバーを拾い、ナイフを撃ち抜く。

「っー！」

それでも遊太は向かってきた。

タックルを喰らい、ガシヤンと資料の山や椅子が落ちていく。

あたしはキレて、遊太の頭に頭突きを喰らわせ溝に膝を打ち込む。

もう一度押し倒し、今度は逃がさないように馬乗りになる。

「一体どうしたの！？遊太っ」

「っ……！！！」

あたしは怒鳴って、それから首を振る。

あたしの否定を真実だと受け取ったのか、遊太は濡れた顔で呆然としたがやがて目から涙を溢れだす。

ポロポロ、あたしのかけた水か涙かわからない雫が落ちていく。声を殺して、泣く遊太からあたしは退いた。

遊太は両腕で顔を隠して泣き続ける。

「……蓮真君は……」

あたしは口を開く。

冷たい床に座ったまま。

「死んだの…？」

彼のことを思い浮かべつつ、問う。

遊太は泣くのをやめて、起き上がる。涙を拭くように、濡れた顔を袖で拭いた。

「わからない……二週間前から行方不明なんだ……」

「行方不明？」

行方不明だけで、なんであたしが殺したみたいに……。

「ほんの一部だけ……こんな噂が流れてるんだ……」

遊太はあたしを犯人だと思い込んだ訳を話した。

「”那拓家の隠された末っ子は紅色の黒猫に殺された”」

なぜ。

あたしは困惑して、声を発することができない。
何故だ？

表向きでは遊太が未っ子で、蓮真君の存在は知られていない。
彼の存在がバレた？
バレた。

では何故、あたしの名前が出た？

何故、あたしに罪を被せるような噂が流れているんだ？
可笑的い。

あたしの家族を白溜さんに殺られたって情報も。

これはまるで。

なにか仕組みられているような。

挑発されているような。

「…………喧嘩、売られてる？」

「え……？」

「誰かに……喧嘩、売られてるのかもしれない……いや、仲違いさせようとしてるのかしら……わからない」

なんとかかまとめようとあたしは額を押さえる。

「この前は頭蓋破壊屋と殺しあうように仕向けられたのかも、家族を殺されたのはそのため。今度は蓮真君を……」

「……………」

遊太も理解しようとしたが困惑して髪を掻き上げた。

「だ、誰なんだっ？」

「わからないっ」

「誰が蓮真を殺したんだっ!？」

「蓮真君の死体は見付かったの!？」

頭を抱えた遊太の肩を掴んであたしは問う。遊太は青ざめた顔で首を横に振った。

「殺されたって噂だけが言ってるんでしょ…まだ死んだって決まってるない、そうでしょう?」

「っ、椿…」

遊太に言いつつも、あたしは自分自身の乱れる鼓動を落ち着かせようと必死だった。

「それに裏現実では死人が生き返る。日本に帰るわよ」

那拓蓮真を見付け出すために。

あたしは遊太のポケットから携帯電話を抜き取り、電話をかける。

「キヤットです。貴女のジェット機、貸していただきたいんです。とても急用なので」

至急日本に行きたかったあたしがとった手段は、彼女に力を借りるじつ。

次期大統領と噂される政治家、ミリーシャ・ビアンキ。

向き合うように用意された座席に座った彼女は、にやにやして足を

組んだ。

きらびやかなブロンドヘアは前髪だけを垂らして、後ろにまとめがある。オーダーメイドのスーツをきっちり着ていても、そのモデルのような素敵な身体のラインがわかる。スカートで露になった素足は足フェチでなくても見とれるだろう。

「また会えるとは、嬉しいわ。キャット」

「あたしもです。今回は我儘に付き合っていたいただき、感謝しております」

あたしは座ったまま軽く頭を下げる。

隣に座る遊太は居心地悪そうに挙動不審。

「つ、つっぱき…？なんで次期大統領と知り合いなの？」

「まだ次期大統領と決まったわけではないわ。キャット、この坊やが恋人の黒の殺戮者かい？」

「いえ、違います。彼は那拓遊太。仲間です」

「あの那拓ファミリーの末っ子か」

遊太はこっさり訊いたつもりだろうが彼女に届いていた。本人から返答がきてビクリと震え上がる。

あたしは淡々と答えた。

遊太みたいな反応は彼女が喜び、からかいがエスカレートしていくから冷静にならなくてはならない。

那拓という名を聞いて興味が沸いたのかミリーシャは身を乗り出した。

末っ子。

ミリーシャも遊太が末っ子だと思っているのか。それが通常なのだ。

「那拓の危険人物を是非とも雇いたい。話を通してもらえるかな？」
「え、あぁっ… 那拓爽乃はあまり海外に行かないものですから… 少し難しいと思います」

緊張しつつも遊太はミリーシャに気さくな笑みで言葉を返す。

「雇いたいと思う者はなかなか難しいものだなあ…。キャットも専属に欲しいと言ったら、唐突に消えてしまっただけに残念だった」
「エリックにも言いましたが、あたしは殺し屋です。守る側の狩人とは違いますから。それにポセイドンとゼウスをオススメしましたよね」

「殺し屋から狩人に転職すればいいじゃない。エリックから聞いたが、噂の神コンビとコンタクトが取れなくてね。どうせ時間がある、勧める理由を話してもらえるかしら？」

彼女と喋る羽目になるのは覚悟の上だ。

「神コンビと獲物を取り合って苦戦でもしたのかい？」
「ポセイドンとゼウスは知り合いなんです、ちよつとした。殺し屋と狩人对立したのは一度くらいで、あとはポセイドンと共同戦張りしましたし」

「ポセイドンは黒猫にゾツコンなんだ」

これから秀介達のお勧めポイントを話そうとしたのに、横から遊太が余計なことを言った。

あたしは Spanien と頭を叩く。

「なんだ？ なんだそれは？」

目を輝かせてミリーシャは身を乗り出した。

あたしは溜め息をついて額を押さえる。秀介があたしに想いを寄せている事実が伝染するように流れている。
まあ、今現在どうかは知らないが。

「ポセイドンは親しい友人なんです、相手も気があります、だけど知つての通りあたしには恋人がいます。今それについて話す気分ではありませんのでポセイドンご本人に訊いてください」

ペラペラと雄弁に刺々しく吐いてからまたあたしは溜め息を吐く。

「そうか。アポをとることにしよう」

ミリーシャはニヤニヤと笑い返した。

「それで今回の見返りなにかしら？キャット」
「見返り……」

こうゆうのはよく考えて答えないと「なんでもいい」だと不味いことになる。

「一度だけ。呼ばれれば駆け付けましょう。貴女がピンチの時、敵を蹴散らします」

そう提案してみた。

今でもあたしは大統領専属のSPになるつもりはない。ミリーシャもわかってるはずだ。

ミリーシャはにっこり笑い頷いた。
交渉成立。

彼女が仕事を始めれば、会話は途切れて沈黙する。

暗い窓から雲を見下ろす。それからあたしは隣にいる遊太に目を向

けた。

怒り狂うように向かってきて、そして泣いた遊太を思い出す。火都が見せなかったその面。

弟を愛しているからこそ、怒り憎み悲しみ泣いた。弟想いの兄。

今だって、気が気じゃないはずだ。今すぐにも日本に降り立ち、生きているかもしれない弟を救いたいだろう。生きていてくれ。そう祈っているに違いない。

これがあたしに向けられた挑発ならばあたしのせいだ。

蓮真君を、捜さなくちゃ。

でも一体誰の仕業だ？

あたしの家族を頭蓋破壊屋が殺ったように見せ掛けた犯人は、一体何者だ？

思い当たる節がない。

頭蓋破壊屋と殺しあうように仕向けられたのは何故？

それと蓮真君。何故、蓮真君が？

那拓の末っ子だということは知られていないのに”那拓家の末っ子は紅色の黒猫に殺された”と噂が流れた。

表向きは遊太が末っ子。仲間を殺したなんて嘘は粉碎されるだろう。犯人は蓮真君が那拓だと知っている。

那拓は危険人物と呼ばれるほど危険な狩人、爽乃がいるにも関わらず蓮真君に手を出した。

那拓一家も敵に回した犯人は何を考えているのだろうか。

蓮真君を狙ったということは、あたしとの関係も知っているのかも。しれない。

むしろあたしと関わっていたからこそ、彼は那拓蓮真だとバレたのかも。しれないのだ。

一体誰だ…？

白瑠さん達は蓮真君と会っていたことを知っているが、那拓だとは今でも知らない。彼が那拓であたしと関わりがあると知る者は。

だめだ、思い浮かばない。

蓮真君はあたし以外に那拓だと教えていないはずだ。

知られることを何より嫌がっていた。あたしも他言していない。

山本椿が紅色の黒猫だと知っている。

更に那拓蓮真を知っている。

誰だ？

一体誰なんだ？

思ったよりも随分と早い帰国。

蓮真君を無事見付けたら、また幸樹さんの家に戻ろう。白瑠さんにも会って、藍さんにも会おうか。

「探すって…どうするんだ？何も手掛かりがないんだぜ、椿」

ミリーシャと別れて、とりあえず那拓家に向かって歩く。

「本当に何も手掛かりがないの？」

「あつたら、探してるさ！」

「…」

「…ごめん」

「いえ…いいわ。那拓家に、話に行こう。原因は…あたしなのかも
しれないんだから」

「！………わかった。おれも…親父達と会つか」

那拓家の人間に話す。

危険人物の狩人がいるのに、殺し屋であるあたしが行くのは危険だが、一刻も早く蓮真君を見付け出さなければならぬ。

説明して情報を集めて見付けないといけない時だ。人手は多い方がいい。

遊太は気が重そうに頭を掻く。

遊太は家出をしている身分だ。

そうノコノコと顔を出せないのだろう。だが弟の命がかかっている。腹を決めて家に戻らなくてはならない。

「オレに頼まないのか？」

ヴァッサーゴが口を開いた。

ヴァッサーゴの能力なら、すぐに見つけ出せるはずだ。

力を貸してくれるの？

てつきり興味がなければ手伝ってくれないと諦めて宛にできなかったから驚きだ。

「あの小僧に死相はなかった。だから死んでねーよ。焦んなくてもくたばらんさ」

ヴァッサーゴはそう言う。

だが、未来は選択次第で変わるものなんだろう？

「小僧の未来に死はなかった。これは確かだ。自殺って選択をしない限りな」

そうゆうものなのか？

「そうゆうもんなんだよ」とヴァッサーゴ。

那拓家の前に来た。

相変わらずのご立派な門。

名家の家だけに重々しい空気を醸し出している。

何度か出入りしていたが、蓮真君の両親には会っていない。ここでは二人の兄に会ったな。

「……へえーえ、こりゃあ面白い犯人だ」

ポツリとヴァッサーゴが呟いた。
え？

「小僧は生きてる。生きて監禁でもされてるんだらうよ」

ヴァッサーゴ、お前なにか見たのか？

「ほら、さっさと偽彼氏の両親に挨拶してこいよ」
「椿？」

ヴァッサーゴにはぐらかされ、遊太に呼ばれる。
蓮真君は生きている。その言葉は信じておこつ。
あたしは深呼吸した。

「やべ、爽乃達に付き合ってるって嘘ついてたんだつた」
「え」

嘘の撤回と説明をしなくてはならない。あのすぐ切りつける爽乃を宥めながら、那拓家にちゃんと説明できるだらうか。
空気を吸って、あたしは溜め息を吐いた。

離れの道場しか入ったことがなかったあたしは招かれて部屋に通された。畳が敷き詰められた広い部屋。

そこに那拓一家があたしと遊太と向き合うように座る。
空気は重苦しい。

「初めまして、あたしは紅色の黒猫です。何度か離れの道場にお邪魔させていただいてました」

あたしが口火を切れば、思った通り爽乃が刀を抜いて降り下ろしてきた。時代錯誤の格好。海外にいればサムライサムライと持て囃さ

れそうだ。

あたしはカルドで受け止める。

眼鏡の奥にある目があたしを睨む。

「やめろっ！兄貴！」と遊太が声をあげる。

「話を聞いてください。蓮真君の命がかかっている！」

「！」

冷静にしかし強く、あたしは爽乃に言う。

「お止めなさい、爽乃」

落ち着きある声が響く。

「母上……」

「刀をしまえ。続きを聞こう」

「父上……」

蓮真君達の母、那拓遙。なたくはるか着物を来て、ストレートの黒髪を垂らした

大和撫子と表現してもいい、日本の和美人だ。

蓮真君と遊太、それと神奈は母親似か。

その隣に座り、威厳ある男は那拓竜。なたくりゅう爽乃は父親似か。

しづしづ父の命で刀をしまい、父の隣に戻る爽乃を確認してからあたしもカルドをしまう。

「まず、お詫びを申し上げます。爽乃さんと神奈さんには、蓮真君とお付き合っていると言っていると嘘を行ってしまいました」

「やっぱりねー。殺し屋だと思ってた、恋人も嘘だったんだあ」

頭を下げれば、神奈が口を開く。

あたしは気に留めずに続けた。

「蓮真君とは友人として今まで会ってました。時には殺し屋に狙われて巻き込んでしまったこともありましたが……そして、今回も恐らくあたしのせいで彼は巻き込まれたかもしれません」

「……どうゆうことですか？」

「二週間前に、あたしの家族は殺されそれは頭蓋破壊屋が殺ったとガセネタが回ってきたんです。あくまで推測ですが……あたしと頭蓋破壊屋を殺しあうように仕向けたのでしよう、何者かが」

「二週間前というと、蓮真が行方不明になった頃……！」

「……なるほど」と那拓遙は呟く。

那拓家も、あたしの言いたいことを悟り理解した様子だ。

「貴女の家族を殺害した犯人と、蓮真を拐った犯人が同一というわけですか。……貴女が蓮真を助けにいかずこちらに来たということは、その犯人は存じ上げていないのですね？」

流石は裏現実の名家の嫁。

那拓家の嫁はそれなりに教育を受けるとか言ってたな。

「残念ながら、その通りです。ですが、犯人はあたしの素性と那拓蓮真を知っている者でしょう。今のところはそれだけです……しかし、あたしの素性を知る者は少ないです。蓮真君と関わりを持っていることを知る者もなお少ない……あたしはそれらを当たってみます。なので、あなた方は那拓蓮真を知る者を当たってください」

「何故貴様に命令されなければならぬ！元凶は貴様だろう！！」

刀に手をやり、今にも斬りかかりたいという顔の爽乃が怒鳴る。

「はい、あたしは黒猫。不本意ながらも大切な友人に不幸を与えてしまいました…」

あたしは静かに返して、真っ直ぐに爽乃を射抜くように見た。

「が。大切な仲間の弟であり、大切な友人の彼は必ず見付け出します。彼が生きている可能性は高い、だからこそ、あなた方に手を貸していただきたい。あたしの失態で、彼を死なせたたくはありません。どうかお願いします」

声をあげるように深々と頭を下げた。

死なせたたくない。

蓮真君を死なせたたくない。

遊太を泣かせたくないし、何度も心を救ってくれた蓮真君には生きてほしいし、あたしのせいでまた誰かが死ぬなんて。絶対に、絶対に嫌だ。

「万が一手遅れだった場合、お主の首は我々那拓家が戴く。爽乃、神奈、使用人達からあたれ」

「はい、父上」

「わたくし達は親族を当たって参ります」

了解を得た。

あたしはもう一度、那拓家の当主に頭を下げる。

手分けして、犯人を見付け出し、一刻も早く蓮真君を救い出さなければ。

隣にいる遊太に目を向ける。

「おれは黒猫と行動します」

遊太が立ち上がれば、両親も立ち上がり部屋を後にした。ぎろり、爽乃があたしを睨み付ける。

「文句なら蓮真君を見つけてからにしてください。…そうだ、蓮真君の部屋に行っても構いませんか？」

爽乃は使用人の元へ行き、神奈が蓮真君の部屋に案内してくれた。前に来たときと全くと言っていいほど変わっていない。壁にかけられた学生服。木製のダンス。匂いも変わってない。あたしは机のそばに置いてある鞆を探った。

「なに探してんだ？椿」

「椿って名前は本名なんだ？」

「笹野椿、本名よ。…あたしのケイタイを探してるの、この前に置いてきちゃって。神奈、知らない？」

「あれ？呼び捨て？まあ可愛いから許すよ。確かに君が血塗れで訪ねてきた日に、ケイタイだけ置き去りにされてたのは覚えてるよ。どこにあるかまではわからないけど。泥棒ならわかるんじゃない？」

蓮真君の部屋を漁るあたしを見つつ、神奈は小馬鹿にしたように遊太に振る。

「んー、蓮ならわかりやすいとこにしまっはす」

遊太は聞き流すように笑ってダンスの中を探し始めた。

「必要なの？椿」

「…んー、まあなくても支障はないけど…」

「お兄ちゃまがくれたケイタイなら小僧が持つてるはずだぜ」

ヴァッサーゴが口を開いて告げる。

蓮真君があたしのケイタイを持って消えたのか？

いつも持ち歩いていたバットケースも部屋の隅に置かれているのに、あたしのケイタイを持っていた？

「蓮と付き合っていないなら、おれとどうかな？椿」

いつの間にか真横にしゃがんだ神奈が色仕掛けで微笑む。

「椿は黒の殺戮者と付き合ってるんだぜ、兄貴」

「あ、そうだったな。…じゃあ物足りなくなったら」

にこ、つと遊太に言われても懲りない神奈。本当にこの家でどう育てられたらそうなるのだろうか。信じられん。

「行きましよう、遊太」

「あ、おう」

「おれも椿と行動したいな」

「やめた方がいいわ」

蓮真君の部屋を出て、廊下を歩きながらあたしは神奈を振り返る。

「貴方に似た笑みの持ち主なんで、どっちかわからず殺しちゃうかも」

静まり返った社長室。

高い高層ビルの最上階にあるその部屋には車が行き交う音すら届かない。

無人だったが、やがて一人の男が入る。

この部屋の高価なソファに座る社長だ。

彼が座った瞬間にあたしは現れて首にナイフを突き付けた。

「！」

「お久し振りです。多無橋さん」

「…やあ、黒猫ちゃん」

ム力つくあたしの最初のお得意様。

多無橋：名前は忘れた。

無茶苦茶な人で最低卑劣腹黒野郎。ヴァッサーゴをあたしに回した人。

ヴァッサーゴを回されてから連絡を断っていたが、あたしが山本椿で紅色の黒猫だと知っている者でなおかつ恨みを持っていそうな彼から調べに来たのだ。

「また会えて嬉しいよ、黒猫ちゃん。Iにも見放されて君と連絡が取れなくて寂しかったんだ：今日はどうしたんだい？まさか私を殺す依頼でもきたのかな、なら倍を払うよ」

「単刀直入に言います。貴方、あたしの家族を殺しましたか？」

ぺちぺちと顎にナイフをつけてあたしは答えを急かす。

冷や汗を垂らしつつもあのム力つく笑みを浮かべて多無橋さんは部屋を物色している遊太を目で追う。

「あれは頭蓋破壊屋が殺つたと噂に聞いたが、違つのかい？」

嘘をついているようには見えなかった。

「ヴァッサーゴに訊いてみれば「はずれー」と返答が返ってくる。違つか。」

あたしはナイフを下ろす。

「いえ。お邪魔しました」

「あれ、もういいのか？」

「ええ、次行きましょう」

「おやおや、冷たいね。せつかくの再会なんだ、少しお話をしよう
黒猫ちゃん。仕事の依頼も」

「お断りします」

ペチャクチャ話す多無橋さんにきっぱり言い、あたしは部屋を後にした。秘書さんに軽く挨拶し、悠々とエレベーターで降りる。

「なんであの社長さんから来たん？椿」

「あたしの素性を知ってるし最後に会った時、腹刺したから」

まじかあ、と遊太は苦笑する。

「あの様子じゃあ、関係ないみたいだな…」

多無橋さんから頼まれたヴァッサーゴが潜んでいた指輪の件で蓮真君に手を借りていた。それで関係がバレて狙われた、と推測していたが違つみたいだ。一番犯人ぽかったのだが…。

「次は誰？」

「売れない殺し屋のとこ」

「ふうん」

頭の後ろで腕を組んだ遊太に目をやる。

「…余裕みたいね」

「へ？ああ、椿が生きてるって言ったからおれも生きてるって思えてきてさ。蓮は生きてるって信じてるから」

銃を向けた時とは大違い。

いつもの遊太らしく、気さくに笑った。

よかった。あたしもホッとして微笑みを返す。

「てかさ、黒に置き手紙もなしに来ちゃっていいのかわ？」

「いいのよ。コクウだって出掛けてたし、問題ないわ」

「ならいいけど。で？どこいくん？」

「マンガ喫茶よ」

マンガ喫茶巡り開始。

思ったより時間はかからず、一時間で標的を見付けたが、追跡がバシたらしく標的は逃げ出した。

捕まえようと遊太と昼下がりの街を駆けるが、これでは埒が明かない。

あたしは遊太に追い続けるように目配せし、先回り行った。

「なんで逃げるんです？多度倉さん」

路地裏でやっと遊太と挟み込めて追い込めた。

「べ、紅色の黒猫！！？」

「どうも、偽者の件ではお世話になりました」

あたしはにこやかに笑みを向けてからカルドを手にして歩み寄る。紅色の黒猫の偽者を探す際に手を借りていた売れない殺し屋。そしてその時も蓮真君はあたしと居た。第二の容疑者だ。

「ちょっとお訊きしたいんですよ」

「な、なななんだっ」

青ざめて後退りする多度倉さん。この様子では、あたしに喧嘩売ろうって発想すら出ないだろう。うむ…無駄足だったみたいね。

「那拓蓮真、知りませんか？知ってるなら早く答えてください、殺しますよ」

「ししし知らないっ知らない！！」

うふふと笑いながらカルドを近付ければぶんぶんつと首をぶつ飛ばす勢いで首を振った。うん、違うな。

あたしは視線で遊太に伝える。

彼は肩を落とした。

「もう一つ。あたしのこと、誰かに話しましたか？」

「はっ話してないっ誰にも！話すもんか！俺だって命が欲しいっ！

！」

物凄い形相で必死に声を張り上げた多度倉さん。失礼な。見たら死ぬ死ぬ的な都市伝説の怪物じゃあるまいし。それはあたしじゃなくて頭蓋破壊屋だ。

「……！」

ぞろぞろと集まる気配に気付いてあたしは構える。遊太も銃を取り出す。

「紅色の黒猫に、那拓遊太だな」

「なんかよーう？おっさんら」

話し掛けてきたのは多度倉さんを捜していた際に聞き込みをした者達だ。勿論、裏現実者。

「お相手する時間も惜しいんです。名前を馳せたいなら他の人を狙ってください、例えば頭蓋破壊屋とか」

あたしはカルドをしまう。

戦う気はない。

どうせ黒の集団に属したあたしらを殺して名を上げたいのだろう。

「臆すんな、すぐ終わらせてやる。ガキども」

これで退いてはくれない。

「あれ？おれら甘く見られてない？椿」

「……」

数人の殺し屋は武器を取り出して歩み寄ってきた。あたしは左手を上げて、彼らの後ろを指差す。

「頭蓋破壊屋さんがいますよ、そこに」

そう言う。

男達は笑った。

「そんな手に引つ掛かるわけねえだろーが！」

「いや、引つ掛かじやないですよ。後る後る」

あたしは言い続けた。

「生きてるかもわかんねー奴を脅しに使っても無駄だぞっ小娘！」

「頭蓋破壊屋は死んだのさ！」

「ええー俺え生きてるけどおお」

頭蓋破壊屋を嘲笑う声を遮るようにその呑気な声が発せられる。

あたしの指差した先を、男達は振り返った。

振り返ったところで彼らはわからないだろう。

そこに立っていたのは、本物の頭蓋破壊屋だとは知らない。

知るよしもない。

にこりと笑みを浮かべた白い青年に、その頭を粉碎されるまで、あ
るいは知ることもないのだろう。

一人の頭蓋骨の破片が、壁を真っ赤に染めた。べちゃべちゃと脳
味噌が落ちる。もう片方の壁も真っ赤に染められた。

ばたり。頭の失くした身体が崩れ落ちる。

「んひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ」

僅かに漏れた恐怖に震えた悲鳴は殺戮の道化師の声によって掻き消
された。

「うひゃひゃっ、んひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃあっ！」

一ヶ月以上のブランクなんてまるでないみたいに、圧倒的に殺戮する。相変わらず頭を粉碎するその手は汚れない。脱色した白い髪も、白いYシャツも、色白の手も。返り血一滴も浴びずに人の頭を粉碎させて、頭蓋骨をぶちまけた。あつという間に片付いてしまう。彼らは抵抗もできずに、脳味噌の混じった血の海になった。

悠然とそこに立つ裏現実で最も恐れられている怪物。頭蓋破壊屋。吸血鬼の黒の殺戮者と対になる存在、白の殺戮者は笑いかける。見慣れたあたしも戦慄を覚えた。

「うつひゃっひゃあ」

頭蓋破壊屋の

完全復活だ。

「つーちゃああんっ！日本に帰ってきてたんだあ、おかえりえ」
「ただいま、白瑠さん。なんでまたこんなところに？」

白瑠さんは両手を広げて、死体を踏みつけあたしを歓迎する。抱きついてくる前に訊いてみた。

「紅色の黒猫がいるって騒いでたから来たんだあ。椿こそお仕事？」
「いえ、違います。人捜し中でした…」

あたしは後ろを振り返ってみる。
多度倉さんは腰を抜かして今にも気絶してしまいそうなほど青ざめていた。遊太も笑みを貼り付けているが引きつっている。

遊太は多度倉さんを立たせて、白瑠さんに頭を下げてからここから離れた。

あたし達も昼下がりの街中で死体のそばにいては騒ぎになってしま
う。掃除屋に連絡いれておこう。

「今のつてえ、那拓う…ゆー…」

「那拓遊太です」

「ああ、そうそう。怪盗くん。…とお、たどつちに何してたの？」

「情報収集です。あたしの家族を殺した犯人と……偽者の件で会っ
た学生服の彼覚えてます？彼は那拓蓮真、那拓家の秘蔵っ子でして、
あたしのせいで行方不明なんです。犯人は同一人物だと思って捜し
てるんです」

もう隠さなくてもいいだろう。

あたしは簡潔に話した。白瑠さんなら煩い反応もしないし、藍さん
みたいに余計な心配もしないだろう。

案の定「そおなんだあ」と気の抜ける返事が返ってきた。

「あの、殺し屋業は復帰ですか？」

「うんっ。椿も頑張ってるからねえ。また仕事しよあ」

にっこり、楽しげに白瑠さんは笑いかけてくる。

「…はい」

あたしは微笑んで返す。

「あ、藍さんとは会いましたか？」

「藍くうん？会ってないよあ。幸樹くんと会いに行ったらさあいな
かったんだよねえ……藍くんに謝ってたけど、なんかあったの？」

藍さんの名を出せば思い出して白瑠さんは書き置きのことを訊いた。

「…アメリカで会ったんです。多分、白瑠さん達があたしを捜さないと言ったあとかな…」

あたしは歩みを止めて、白瑠さんの袖を握る。

「酷いこと、言っちゃったんです……。藍さんを……。傷付けたと…
思います…」
「椿…」

俯いて、あの藍さんの顔を思い出す。
酷く傷付けた。

もう、終わりです。もう終わりなんですよ。家族ごっこは終わり。あたしは駄目なんですよ、戻ったとこでまた壊す。もう、構わないでください、忘れてください。もう、嫌なんです。さよなら、なんですよ

本当に酷いことを言ってしまった。

どうしてっ…さよならなんて……。酷いことを言っただっ…！
ずっと…ずっと…！探してきたのにな…。帰ってきてほしいのにな…！！

引き裂かれた気分だった。ボロボロと泣きながら辛そうに紡いだ藍さんの声。

何度も帰ってきてと言った彼を冷たくも突き放して拒絶してしまっ
た。

押しただけで簡単に倒れてしまった最後に見た藍さんの顔は今でも
脳裏に浮かぶだけで胸が痛い喉が痛い。

あたしに拒絶されて、海に溺れたみたいに苦しそうで悲しそうで、
そして絶望していたみたいだった。

「藍くんならコスプレ一つすれば許してくれるよっ」

ポンポンつと頭を白瑠さんは撫でるように叩く。白瑠さんはいつもの笑み。明るい声音。

「そうですね…。でもコスプレしません」

「ええー、制服コスプレえ」

「しませんから」

また肩を並べて歩き出す。

会話が途切れて少し気まずい沈黙が流れる。

何か話すこと、ないかな。

あたしは記憶を探って考えた。

白瑠さんが怒らないコクウ以外の話題。

「コクウにはコスプレ見せたの？」

「え」

呆気に取られる。

白瑠さんからタブーに触れてきた。

「コスプレして襲われたりしたの？それとも他の楽しいことをしたの？過激そうだよね、吸血鬼の行為って」

「あの。白瑠さん。その話はやめませんか。本当は知りたくないでしょ？」

「……………うん、だよ。うん。やめようか。うん」

あたしは話題を粉碎する。これは嫌だ。至極嫌。沈黙より気まずすぎる。

白瑠さんも認めて頷く。

また沈黙。

「うんっ！やっぱり知りたいたい！椿がアイツに何回犯されたとか！どう攻められるとか！どう愛撫されるとか！どんな喘ぎ声をだすと」「やめてくださいってば！もうっ！」

ぐるりと振り返って白瑠さんはズバスバと言ってきた。あたしは真っ赤になって耳を塞ぐ。

「もうっ……可愛いなあ椿はほんとっ……でもアイツが赤面させてると思うとムカつく」

そんなあたしの頬を優しく両手で包み恍惚な表情ではしゃいだかと思えば、今度は憎たらしそうに怖い顔をした。

白瑠さん絶賛暴走中。

「ああの、白瑠さん？」

「幸樹に言われたから堪えたけど、でも……やっぱり……ムカつくんだっ！！！」

ドガッ。

あたしの後ろにあった壁に、クレーターが出来る。あたしは身体を強張らせて息を止めた。

ひ、ひやあ……。

こんな間近に粉碎攻撃を受けたことはなかった。かすってもいないが怖い。怖い技だ。頭粉碎されたらヴァッサーゴだって治せないだろうな……。

「……じめん」

ぼすん、とあたしの肩に白瑠さんの頭が置かれる。今度は落ち込ん

だ。
それからキュッと抱き締めてきた。

「臭いが染み付いてるのもムカつくしさあ……この唇奪ってると思うと……君の声で……っ」

「白瑠さん……」

「……。よし、話題変えよう」

押し退けようとすれば、白瑠さんはすんなり離れて仕切り直す。
……やっぱり変だな、白瑠さん。

「調子はどう？黒の集団としての方」

テクテクと先を歩き出す白瑠さんのあとをあたしも歩いていく。

「黒の集団としては、不調です。弟君を見付けられたら集団として目的を達成しないと」

「目的い？」

「はい。コクウの目的は打倒番犬らしいです」

口にして思い出す。白瑠さんは番犬は死んだと断言した。死人を探すコクウを嘲笑うだろう。

番犬の剣。白瑠さんから貰ったと話し忘れてた。白瑠さんに訊いてみよう。情報が入るかもしれない。

訊こうとした。

だけど訊けなかった。

「アイツ、番犬を狙ってるの？」

振り返った白瑠さんは、目を丸めている。

「それはまずいなあ…」

「え？」

「それはまずいよねえ」

あたしは首を傾げた。

自分の顎を指でいじり、白瑠さんは意味深に呟く。なんだ？

「うん、まずいよお。椿にとっても」

「…なんなんですか、はつきり言わないと怒りますよ」

「怒った椿ちゃんは可愛い」とにこつとからかうからあたしは脛を蹴り飛ばした。ダメーじなし。

「番犬はあ、しいーのちゃんだよお。しいーのちゃんが番犬なんだ」

は………？

気儘悪魔と心臓

ドクン、ドクン、ドクン。

自分自身の鼓動を感じる。

ドクン、ドクン、ドクン。

自分自身の鼓動が聴こえる。

ドクン、ドクン。

止めてもらえない鼓動。

ドクン、ドクン。

生きている証の鼓動。

ドクン、ドクン。

生きている。

ドクン。

理解することを頭が拒否してぐちゃぐちゃと混乱する。

「つーちゃあん？だじよぶ？」

「……しーのちゃんって……」

「篠塚刑事くん。」

「……篠塚さんが」

「番犬」

俯いて確認をすれば、心配そうに顔を覗く白瑠さんはさりと答え
ていく。

篠塚さんが。篠塚さんが。

篠塚さんが番犬？

あの番犬？

コクウが捜す番犬？

歴史上最強の狩人？

その番犬が、篠塚さん？

「っ」

「なんで早く言わなかったんですかっ！！！！」

顔を近付けた白瑠さんの顎にあたしはアッパーを喰らわせた。

「んひゃ…暴力的だね…SMプレイでもしてたのかな」

「いい加減にしてくださいっ白瑠さん！ このバカ悪魔！！

出てこいっお前知ってただろっ！！」

顎を擦りつつも怒ってない白瑠さん。あたしじゃなきゃ殺されてい
ただろうが気にしない。

あたしはヴァッサーゴを呼んだ。

「クククッ。んだよ、面白くねーな。白野郎が暴露しなきゃもつと
たのし、ぐー!?」

黒い煙と共に実体で現れたヴァッサーゴが言い終わる前に、首を掴
んで壁に叩き付けた。

「篠塚さんを見たときから知ってたのね！初めから知ってた！知っ

てて教えなかった！篠塚さんだと！てんめえ！」

「へっ、調べりやすくなることだった。つか気付けよ。ボケ刑事が記憶をなくしたのは五年前、犬っころが消えたのも五年前、白野郎がボケ刑事を助けた、犬っころの剣を白野郎は持っていた。辻褄が合うだろ」

「ヴァッサーゴ…!!」

へらへらとするヴァッサーゴにあたしは怒鳴り散らす。

ヴァッサーゴは篠塚さんを人目見た時から知っていたんだ。篠塚さんがなくした記憶。過去の彼。番犬だったことを知っていた。

”お前を知っている”

番犬だと知っているという意味だったんだ。

過去の映像でみた別人に見えた篠塚さん。あれが番犬だった。

「番犬が誰だか知っててコクウの手伝いを勧めたの！？てんめえはっ」

「なにを怒ってやがんだよ？大事な偽善刑事が恋人に殺されるのがそんなに怖いのよ。頼めばいいだろ、お前にメロメロさ、標的を犬っころから白野郎にかえるもしれない」

「ざっ、けんじゃなっ！」

コイツは本当にあたしで楽しんでやがる。遊んでやがる。ふざけんな。

怒りが込み上げたせいか、胸に詰まるものを感じて言葉に詰まる。

「っ、っ」

「椿？」

「おい、椿。オレに怒鳴ってないで早く小僧を捜したらどうなんだ？」

詰まったものを取り除こうと胸を叩く。そうすればヴァッサーゴの首を掴んだ手が外された。

あたしはキツと彼を睨み付ける。

しかしヴァッサーゴが黒い煙になって消え失せた。

「蓮真はどこなのよっ!!」

叫んであたしは地面を踏みつける。

「生きてる。自分の頭で考える。簡単に推理できんだろ。ほら思い出せ、小僧とやった探偵ごっこをな」

頭の中でヴァッサーゴが言った。ムカつく!あたしは頭を抱えて呻いた。

「大丈夫?椿」

「大丈夫じゃないっ!この悪魔ムカつくっ!」

「まあまあ、椿。落ち着いて。えと、指輪をつけて、ゆっくり考えよう」

またあたしを心配そうに覗いた白瑠さんは微笑んであたしを宥める。そうね。そうよね。ええ。

あたしは指輪を嵌めて深呼吸する。

「篠塚さんに会わなきゃ」

「どうして?」

「コクウが狙ってる!」

「そうだけど、まだしーのちゃんには届いてないでしょ?」

「だめっ、コクウはアメリカにいて篠塚さんも秀介とアメリカにいるんですっ!この前は鉢合わせしそうにもなった!だめですっ篠

塚さんを隠さなきゃ！」

白瑠さんの手を掴んであたしは握り締める。篠塚さんが番犬だと知ってるのはあたしと白瑠さんだけ。だけど安心できない。コクウが篠塚さんを殺すなんて。

「……わかった。じゃあしいーのちゃんところに行こうか」

「……はいっ！」

白瑠さんは優しくそう言ってくれた。

だがはいじゃあ行きましよう、とは行けない。蓮真君。彼も命の危機に晒されている。あたしのせいで。

「容疑者リストをたどつちに渡してえやってもらえばあ？もしかしたらさあ、学生服君は人質で椿を誘き出す餌なんじゃん？餌なら生かされると思うよお」

「……………」

「ねっ、いい」

あたしの手を握り、遊太達を追い掛ける。

「あたし」

戸惑いながら口を開く。

「嫌なんです。蓮真君が、あたしのせいで、死ぬかもしれない……」

白瑠さんは足を止めて振り返る。

「由亜さんのように」

誰かの大切な人を殺しておきながら、こんなことを矛盾を言うのは可笑しいとはわかつている。ただどあたしは。数少ない大切な人を死なせたくない。守りたいんだ。

「大丈夫だ、椿。死なないよ」

あたしの髪を撫でて白瑠さんは言う。

「死んだらそれは殺した奴のせいだよ。椿のせいじゃない」と冗談のように言っただけであたしを笑わせようとした。

「嬉しいな、椿がそおゆうこと。言うようになってくれ。前はあ恥ずかしくて口にしてなかったよねえ」

歩き出してあたしを見ずに白瑠さんは嬉しそうに呟く。そうだった…。あたしは今までの自分を振り返る。よく、わからないな。

「本当にごめんなさい、遊太」

「いいよ、椿。俺達で探してみるから」

ファミレスで待っていた遊太にどうしてもアメリカに戻らなくてはならなくなったと話した。勿論、番犬のことは話さない。白瑠さんは笑顔で多度倉さんを脅迫している。

「蓮真は椿の大切な友達の前に、おれの大切な弟だ。でーじょうぶ、行つてこい」

「遊太…」

にかつ、と笑みで遊太は背中を押す。

「ごめん、行つてくる。これ、クラッチャーの連絡先。何かあったらここに」

「クラッチャーのかあ…おう」

容疑者リストと白瑠さんのケー番を渡せば遊太は苦笑した。

「クラッチャー曰く、蓮真君はあたしを誘き出す人質にしてるかもつて…だから犯人からあたしに要求があつたらすぐに教えて」

「クラッチャーが言うなら間違いないかもな。ああ、すぐ連絡する」
「…なるべく早く戻るわ」

気さくに笑つて遊太はあたしを笑わせる。心配かけまいと。

あたしはまだ迷いつつも、ファミレスを後にした。

早く篠塚さんに会おう。
会わなくちゃ。

白瑠さんのコネでジェット機を使ってアメリカに飛んだ。

篠塚さんがまだあのアパートにいる可能性は低いから、連絡をとつてみたが繋がらない。

「まあーまあー、つうーちゃんっ！そんな焦んなくてもおアイツに

は見付からないって」

「あたしは蓮真君の件でも焦ってるんですよ。彼は二週間以上行方不明なのに…やっぱり捜してからにするべきだったかな」

悠長にポテトチップスを頬張っている白瑠さんはあたしの気持ちなんて微塵もわかってない。頭を抱える。

「つばちゃんはあ二ヶ月家出してたよお」

「彼は家出はありません… ああ、一体誰が犯人なの？鼠は確かに殺したのに…」

「うん、鼠はずったずったのおぐっちゃぐちゃにしたから、ちゃんと死んだよお」

「…あとあたしを恨むような奴なんて…」

「恨んでるとは限らないよお？」

バリバリと食べながら白瑠さんは言う。

「椿と遊びたいだけかもしれないよお」

「遊びたい？」

「恨みだけの犯行とは限らないってことっ」

ぱんっ、と袋を畳んで笑った。

…これ以上混乱させないでほしい。

ただでさえ篠塚さんが番犬だっていう衝撃の事実を知って大いに混乱してるんだ。

「…何故、篠塚さんに話さなかったんですか？記憶を取り戻そうと狩人に戻った彼に、何故教えなかったんです？」

やきもきしてもジェット機はアメリカに着かない。あたしは番犬

の件を訊いてみた。

「話したじゃあん、前のしーのちゃんは自殺しようとしてたんだ」

あ、そうか…。

「んでえ、自殺は成功。自分を殺した。前のしーのちゃんである番犬はあ死いんだあ」

ぺろ、と自分の指を舐める白瑠さんの眼は、冷たくも見えた。

自殺。自分殺し。

確かに篠塚さんは死んだ。

以前の記憶とともに人格だけではなく、番犬という狩人の自分まで消し去った。

だから白瑠さんは秀介に断言したのだ。
番犬は死んだ。

「…白瑠さん、前に言いましたよね。番犬に殺されたかったって」

あたしは真っ直ぐ白瑠さんを見つめる。

「篠塚さんを助けた理由は、殺してもらったため？」

篠塚さんは飛び降り自殺だったと白瑠さんから聞いた。ビルから落下。
下。

「言つたる？諦めたってさ。こっちが殺されるの諦めたのに目の前で自殺してるんだあ、助けてやりたくなくなるだろあ？」

白瑠さんは笑みを浮かべて答えた。

にんやりと、惑わずチエシヤ猫みたいな笑み。

「記憶をなくしたのはざあんねんだったなあ、飛び降りたのに助かったって知ったら番犬はどおんな顔をするか楽しみだったのになあ」

…すげえひねくれた人だ。

面白そうならそんなことまでするのか。

面白い顔を見たいがために自殺で死にかけた人を助けたなんて、ひきつる顔は隠さない。

「番犬の時と、記憶なくしたいのちゃんの違いすぎてさあ笑ったあ」

「……白瑠さん」

面白がって生かした。

なんて人なんだ。

まあ、怒っても仕方ない。

白瑠さんが篠塚さんを生かさなければ、あたしは篠塚さんに会えなかった。

「生かして正解だったねえ、なんだか楽しくなってきたあ」

……お、怒りたい。

楽しんでやがる。この人。

「じゃあこの剣や、番犬の武器はどうしたんです？」

「俺がもらったりいい売りさばいたあ」

ど、泥棒おおおっ！

「だってえ、裏を忘れた警察官が持つてるなんて不自然でしょお」
記憶をなくした篠塚さんへの気遣いなのか、それとも自分の私欲のための行為だったのか。真顔で言われてはどっちかわからない。

「しゅーくんには連絡したあ？しーのちゃんは無理でもしゅーちゃんには繋がるっしょ」

「……………ケー番を、忘れました」

「……………ふうん」

「……………」

「……………」

ガクリとあたしは俯いた。

秀介のケー番なら、思い出せると思う。

しかしなるべく彼を避けたい。

コクウとの交際が知れ渡ってから、秀介とは会っていないし喋っていないんだ。

これから会わなくてはならない。気が重いが、いずれ会わなくてはならないんだ。今から会おう。

番犬について話してから、それからちゃんと言わなくちゃ。

「それでコクウとの」

「まだ言いますか…」

「樁のハジメテを奪った俺としては知りた」

「やめてくださいってば！」

またその話を持ち出した白瑠さんからあたしはバツと離れて向かいの座席に戻る。顔は熱がまとう。

白瑠さんはやめてはくれなかった。

「幸樹には椿が戸惑ってるから話すなって言われたけど、もういいでしょ？ 椿はあの時酔ってたけどお、覚えてるよね？」

「…っ」

「俺がどんな風に触ったのか、椿がどんな風に俺を誘ったのか、どう愛したのか、覚えてるよね？」

「っ！ やめてくださいってば！ もうっ！ あの時は酔ってたし！ 今はあたし恋人がいますからっ！」

目の前にきて、あたしの頬に触れる白瑠さんは告げる。

「忘れちゃった？ 俺の告白。俺は今でもこれからも、椿を愛するし、触るし独り占めする」

あの時と同じ。

鈍感なあたしに伝えた告白。

真面目な顔で真っ直ぐに見据える眼。

あたしの熱が爆発的に上がる。

伝えられるまで白瑠さんがあたしに恋愛感情を抱いているなんて微塵も気付かなかった。激しいスキンシップは白瑠さんが奇人故だと思っ込んでいたのだ。

恥ずかしくて顔を伏せる。

「ねえ、椿」

「んっ…」

耳に甘く囁かれた。

「教えて」

太股に手が置かれ、短パンの中に指が入り込む。さつきと違う意味で身体が強張って動けなかった。

その時、ジェット機が大きく揺れてあたしの目の前に立っていた白瑠さんはよろめいて

ボタンツゴロドンツ。

白瑠さんは倒れて転がって反対側の壁にぶつかってしまった。

「あーすまない。暫く揺れるからくれぐれも立たないでくれ」

雇った裏現実者のパイロットの声が機内に流れる。遅いですよ…。

白瑠さんに目を向ける。

白瑠さんは俯せてしまい動かなくなった。……拗ねた。

あたしは聴こえないように溜め息をつく。

これってやばくない？

白瑠さんはまだあたしに恋愛感情を抱いている。そんなあたしには恋人がいて、その恋人が白瑠さんの最も嫌うコクウ。

鉢合わせたら、どうなることやら。

問題山積みだ。

連絡が取れなかった為、直接あたし達はアパートに向かった。いなかったら秀介に連絡を取ろう。

呼び鈴を鳴らして住人を呼ぶ。

それでも返事がなくて、ドアを叩いた。返ってくるのは沈黙。

でも中に人の気配がする。

白瑠さんと顔を合わせれば、バキツと白瑠さんは鍵を壊して開けた。中に入れば、すぐに篠塚さんを見付けられた。

「篠塚さんっ！」

倒れている篠塚さんに駆け寄ってあたしは見る。気を失っていた。外傷はない。ただ気を失っているようだ。

「篠塚さん!」

起こそうと揺らす、反応はない。

「しいーのちゃん」と白瑠さんもつつくが篠塚さんは目を開かなかった。

「きゅ、救急車?」

「大丈夫だよ、気絶してるだけだつてえ」

救急車を呼ぶべきかと白瑠さんの顔を見れば、いつものように笑って白瑠さんは篠塚さんを抱えあげる。
そして寝室のベッドに運んだ。

「なんで気絶してるんですか?」

「んうとお……さあ?」

あたしはベッドのそばに座り込んで、篠塚さんの顔を見つめる。
争った形跡はない。
どうゆうことだろう。

「あ、秀介を捜してください。近くにいるかもしれない」

「うん、わかったあ。…しいーのちゃんを襲っちゃだめだよ?」

「いってください!」

すんなり引き受けたかと思えば余計な一言。声を上げても篠塚さんは起きなかった。

二人きりになった寝室。

篠塚さんの寝顔は、病室以来だ。今は気絶してるけど。
癖のついた黒髪。人差し指でそれを退かす。

初めて会った病室とは真逆だ。少し笑う。病室ではベッドで眠るあ

たしを見守っていた篠塚さん。今はあたしが見つめている。指先でそつと額を、鼻筋を、頬を撫でた。そしたら、篠塚さんの瞼が開いて、あたしに目を。瞳を向けた。ぼんやりとした黒い瞳。

あたしは名前を呼ぼうとした。ただ篠塚さんの方が早かった。

ガチャ。

取り出された拳銃があたしの額に突き付けられる。冷たい銃口。そして冷たい眼差しに、あたしは目を丸めた。

「貴様、誰だ！」

発した声は、あたしの知る篠塚さんの温もりある声ではなかった。優しさの欠片なんてない、棘のあるドスの効いた声と言葉。

あ。

この人は。

あたしの知らない篠塚さんだ。そう悟った。

「あつれえ、しいーのちゃんおっはよお」

「誰だ」

「んう？あれ、番犬の方？」

「ああん？」

戻ってきた白瑠さんに銃口が向けられる。それだけで、白瑠さんも気付いた。

白瑠さんは会ったことがあるんだ。

あたしにだって、目の前にいるのが篠塚さんではないことはわかる。

「どこ　何処だ？」

眉間に深く寄せられたシワと、睨むような目付き。発する声音まで違う。篠塚さんじゃない。別人だ。

「記憶喪失ですか…」

白瑠さんの携帯電話であたしは幸樹さんに電話した。外科医である彼に外傷による記憶喪失について訊いてみた。

「外傷による記憶障害の場合、記憶を失っていた間の記憶を失うこともあります」

「忘れていたことを、忘れて…記憶を取り戻すんですか」

「はい。この場合、記憶喪失の間の記憶は…二度と思い出さないでしょう」

「……………そうですか」

あたしは寝室で白瑠さんと話す篠塚さんに目をやる。

「大丈夫ですか？椿さん。元気ない声ですよ」

「…大丈夫です。お忙しいのに時間を取らせてしまいすみません」

「構いませんよ。妹の電話なら、いつでも出ます。オペ中でも」

「それはいけませんよ」

冗談を言ってあたしを笑わせようとしてくれる幸樹さんの声に、少しでもだけ気が楽になった。

電話を切って、深呼吸。
もうあの篠塚さんじゃない。
これは仕方ないことだ。

「俺は警察官だ、デカじゃねえ！」

「だあかあらあ、君が記憶なくしてから刑事に昇進したんだよあ」

「意味わかんねえんだよ、貴様の話は」

白瑠さんが説明するも銃口を向けたまま、篠塚さんは聞き入れない。

「医者に聞いたところ、外傷による記憶障害は記憶をなくした間の記憶は失われる場合があるそうです」

「はあ？」

「へえーそおなんだあ」

感心する白瑠さんの隣に座ってあたしは記憶を取り戻した篠塚さんと向き合う。

「貴方は五年前、ビルから落ちて重傷を負いました。見付けて病院に運んだのは彼です。貴方は命をとりとめました、記憶障害で過去の記憶をなくしてしまっただけです」

カチャ。白瑠さんに向けられていた銃口があたしに再び向けられる。

「信じられるかよ、小娘。記憶喪失の間の記憶はなくなったただあ？騙すならもっと上手い嘘を作れ！」

「ねえ、しいのちゃん。銃口は俺に向けてよ」

「貴様は黙ってやがれ」

…どっしり。

こつも、違つのだらう。
全く別人。似ても似つかない。

「これは事実ですよ、篠塚さん。覚えてませんか？ビルから落ちた時」

「ほら、俺はあ？頭蓋破壊屋だよ」

「ビル？スカルクラッチャー？」

銃口を突き付けつつ、篠塚さんは眉を潜めて首を傾げた。

白瑠さん、殺し屋の名前を言っちゃっていいのか…。

最強の狩人だぞ。

「だめだあ、直前の記憶さえないみたいだよお。番犬、生き返っちゃったね」

白瑠さんはあたしに顔を向けて、さらりと言った。

生き返っちゃったね。

そうですね。

代わりにあたしの知る篠塚さんは死んでしまったけれど。

「篠塚さん、最後の記憶は？」

「最後？んなの、仕事で……」

五年前で止まったままの記憶を篠塚さんは探る。途中、顔を歪ませた。

頭痛でも起きたのか、額を押さえる。

「大丈夫ですか？篠塚さん」

「近付くな！」

手を伸ばそうとしたが振り払われた。

「クラッチャー！あの時の小僧だな！」

「うひゃひゃひゃあ、思い出したあ？」

「っ、お前に会って…それから…」

「うん。それからあ？」

「それから…」

「落っこちた！」

また白瑠さんに銃口を向ける篠塚さんは頭痛に耐えながら記憶を取り出そうとする。

白瑠さんの言葉に、ビクリと震え上がった。

どうやら。

自分が落ちたことを思い出したらしい。

「……んな…ばかな…」

驚愕したまま片手で頭を押さえ込む篠塚さん。

「あの、篠塚さん…」

あたしは顔を覗き込む。

見知らぬ目付きをした彼の瞳と目が合う。それはまた驚きに見開かれた。

「貴様っ！悪魔持ちだな！！」

「えっ」

その単語がすんなり頭に入らず、反応に遅れる。ガウン。雷のような銃声が轟く。

ただどあたしに銃弾は届かず、悪魔の力によって跳ね返り、二段ベツドの向こうの窓ガラスを貫いた。

ガウン。ガウン。

また発砲。

一つの弾丸があたしの頬をかする。

あたしは動けなかった。

篠塚さんに、撃たれた。

その事実にはシヨツクが隠せない。

あたしのことを忘れたのは、嬉しいことだ。もうあたしのために無茶をしなくなる。だから嬉しいことだ。あたしを忘れて生きてほしいと願った。

だけど、銃を向けられるのは嬉しくない。死ぬことを諦めたのに。今、彼に殺されたくはない。死ねないんだ。まだやらなくてはならないことがある。

蓮真君を見付けなきゃ。藍さんに謝らなきゃ。コクウに番犬は諦めろと言わなきゃ。色々。色々ある。

お願いだから、あたしを殺さないで。篠塚さん。

ガツチャン。

音がして俯いたあたしは篠塚さんに視線を戻す。篠塚さんの手から、銃が落ちていた。

銃を握っていた手は、指は、震えている。

「お前は …… 誰だ？」

篠塚さんは戸惑ったような表情であたしに問い掛ける。

「… 紅色の黒猫…」

あたしは静かに名乗った。

「殺し屋の、紅色の黒猫。篠塚さんには……椿と呼ばれていました」
殺し屋の名前、それから本名を名乗る。

「つ…ばき…？つう！」

「！」

「くそっ！なんなんだ！！」

頭痛が酷いのか、篠塚さんは頭を抱えた。

「身体は覚えてるみたいだねえ」

白瑠さんは立ち上がり、あたしの頬に伝う血を拭う。
もう傷は悪魔によって治された。

「悪魔くんは悪い奴じゃないよ。俺と会ってアイツの目的を話せば
知ることだったんだ。そう怒らないで」

頭を撫でてもう片方の手で銀色の指輪を外す白瑠さんはヴァッサー
ゴを庇う。傷を治すからって、いい奴とは限りません。悪魔ですよ。

「落ち着きましたか？」

「コーヒーを差し出してあたしは篠塚さんに訊く。少しして頭痛が
おさまったようだ。」

「…ああ」

「なんとなく、自分が記憶をなくしていたと理解しましたか？あと
は今が五年後だという証拠と、刑事だという証拠を」

「もうわかった。…クラッチャーが俺を気まぐれに救った。んで？」

「お前はなんなんだ？」

銃口はもう向けられなかった。

篠塚さんはじとつと睨んでくる。

「あたしは……」と最初から話すと長くなるため、簡潔にまとめて答えようと考えた。

「しいーのちゃんが守りたかった女の子さ」

先に一言でまとめた白瑠さんが答えてしまう。

「守りたかった……？」

「椿は殺戮中毒者。突然発症して殺し屋になった椿を、裏を忘れて表で刑事をやったあ君が、救おうとしたんだあよっ」

俺が止める！！お前の中毒を治す！俺が治るまで側にいて君を助ける！

最後に会ったあたしの知る篠塚さんは、まだそんなことを言っていたっけ。

「記憶を取り戻そうと狩人に戻って、ゼウスって名前で裏に復帰したんだ。相棒はポセイドンだから君はゼウスう。椿に過去の自分も知らないくせに！なんて言われて助けを拒まれちゃったからあ記憶を取り戻そうとしてたんだあけえど、その様子じゃあもう椿を知らないから、救うつもりはないみたいだねえ？ばあんけえんくうん」

ペラペラと雄弁に話す言葉は皮肉が混じっていて、吊り上げ笑みは嘲笑っているが眼が笑ってなんかいない。

そんな白瑠さんの眼なんて、篠塚さんは気にしてなかった。

篠塚さんはあたしを視ている。

ただ、信じられないといった様子で見張るようになたしを視た。そこで携帯電話の着信音が鳴り響く。聞き覚えがある。その音はあたしがいじって設定したものだ。白瑠さんの携帯電話。

「はあい？うーん、わかるう。椿い、怪盗くんから」
「遊太？」

白瑠さんから携帯電話を差し出されて慌てて出る。

「もしもし？遊太？何かあったの？」
「あ、いや、蓮の件は進展なしだ。黒から連絡あってさ、アメリカに戻ってるなら会いたいって」
「…なんだ、そんなことか」

あたしは落胆して肩を落とす。てっきり蓮真君の件で進展があったのかと思っただのに。

「そんなことかって、黒の奴なんかすげえ会いたがってたぜ？一応クラッチャーと居るってことは伏せたけど。早く会いに行かなきゃそっちに出向くかもしれないぜ」
「……それは嫌ね」

コクウと白瑠さんが会うなんて、それは絶対避けるべきだ。今は彼の狙う番犬もオマケに付いている今、こちらに来られては困る。

「オフィスに行けばいいかしら？」
「あー、椿から来るなら刺客を大返り討ちしたとこに来てくれって言うってた」

あの廃墟？なんでまたそんなところに…。

「わかったわ。二時間ぐらいでそっちに着くと伝えておいて」

「りょーかい」

「ああ、あと。コクウに会ったら日本に戻るわ」

「うん、りょーかい。待ってる」

「ええ…」

髪を掻き上げてで携帯電話を閉じる。

「コクウのところに行つてきます。行かないとこちらに来てしまいますから」

「ん……。そおだねえ」

「篠塚さんを連れて先に日本に戻ってもらえますか？」

「りょおかあい」

携帯電話を返して言えば、白瑠さんはすんなり頷いて腰をあげた。記憶を取り戻した篠塚さんにはもう用がないとばかり思ったが、白瑠さんは助けてくれるようだ。

「あ？日本だと？」

「後にしてください、とりあえずクラッチャーと日本へ。暫くはあたし達と居てもらいます」

「ああ？」

「行くよお、しいのちゃん」

「その呼び方やめやがれ！おい、待て小娘！小娘！」

秀介宛に書き置きを残してあたしは先にアパートを出た。バイクを盗んで、飛ばす。

「こりゃあ、驚きな展開だな。ククク！」

「黙んなさい、ヴァッサーゴ」

「まだ怒ってんのかよ」

「怒ってるわよ。こうなるって知ってた？」

「まさか。オレはあの犬ところが記憶を取り戻すなんて思いもしなかったぜ。奇しくも黒野郎の思惑通りになっちまったなあ」

ムカつく悪魔の声を振り払うようにスピードを上げるが、振り払うことなんて出来ない。重々承知。

いや、生きてる。だって誰も番犬を殺したという人間が名乗り出てないからね。地上最強だぜ？くく、そんな人間が殺されるわけがない。殺したら誰かしら自慢する。忽然と消えたのは意図的さ。番犬は生きてるよ、多分表にいるんじゃないのかなあ。俺達は彼を見付け出して裏に引きずり戻して息の根を止める

コクウの推測は当たっていた。全く嫌な奴だな、コクウは。全てはお見通し。

本当、敵に回ると面倒な奴だ。

彼が策略を巡らせなくても、番犬は再び復活した。そしてゼウスという名で、裏に舞い戻っている。

番犬を狙うなと言えば、怪しまれるだろう。篠塚さんを隠して、諦めさせる方法を何か考えなきゃ。

「犬っころ殺す気なら嫌いになるう、なんて言えば諦めるぞ」

アンタはコクウをなんだと思ってるのよ。

「お前に全てを捧げるアホ吸血鬼」

「アンタは何もない悪魔じゃない」

ケツ！とヴァツサーゴは鼻で笑った。

一時間と三十分程度で、待ち合わせ場所に着いた。早すぎたかしら？

まあ急いでも直ぐ様、日本には行けない。

白瑠さん達はもうアメリカを発つただろうか？

「ふう……」

あたしが無意識に殺戮をした場所。

死体は綺麗に片付いている。血の一滴も残っていない。

天井は壊れて、月の光を中へ洩らす。そこから夜の冷たい風が吹く。

「コクウ」

気付けばコクウが目の前に立っていた。

座ったばかりだったが、あたしは腰を上げて歩み寄る。

「やあ、椿。会いたかったよ…俺から離れちゃだめだって言っただけ？」

「貴方が黙って離れたんじゃない」

微笑んであたしの頬に触れるコクウ。

コクウ以外の吸血鬼の気配に気付いてあたしは周りに目を向けた。

この気配は、ラトアさんにハウン君。それからジェスタ。

なんで隠れているんだ？

「椿……」

両手で脆い物を扱うように頬を包むコクウは向き合わせて、唇をそつと重ねた。

吸い付くような深い口付け。くちやと舌を絡めてコクウはあたしを抱き寄せる。

「おい、何企んでやがる。黒野郎」

肩に腕が置かれ、実体のヴァッサーゴが凭れるように現れる。

「お前を引き離す企みさ」

どっ。

そう言い放って、コクウはヴァッサーゴを突き飛ばした。思いもしなかったのか、ヴァッサーゴはよろめく。

一瞬でジエスタがあたしの背後に立ち、ヴァッサーゴを蹴り飛ばした。

「くっ…！てめえらっ」

背中から倒れたがヴァッサーゴは受け身をとって立ち上がり、ジエスタに向かおうとしたが、更にラトアさんとハウン君が現れ立ち塞がる。

「なっ」

「これで邪魔されないな」

あたしの頭にジエスタの手が置かれた。

「やめろっ！！やめやがれ！！」

ヴァッサーゴが声を上げるが、ジエスタは聞き取れない言葉を口にして唱える。

「椿が死ぬ！オレを引き離したらっ椿が死ぬんだ！聞け！椿を殺す気か！黒野郎お！！！」

ラトアさんとハウン君に突っ込むも、ヴァッサーゴは弾き返された。

「椿を殺すなっ！！おいつ！」

ヴァッサーゴは自分の命が危ないみたいに必死に叫ぶ。

オレを引き剥がしてみる……椿が死ぬぞ。

コクウに向けたあの誓し文句。

今じゃああたしが死んでしまうみたいに聞こえる。ヴァッサーゴが引き離されただけで、あたしが死ぬみたい。

ふと、気付いた。

ヴァッサーゴは一度も。

一度もあたし以外の人間も吸血鬼も、名前で呼んだことがない。今だって、あたしの名前しか呼ばない。

ずっとあたしの名前しか呼んでいない。

寝てんじゃねえ！！

起きろ！起きろ！

起き

やがれ！椿！

起きろ！

おい！起きやがれ！

椿！

椿！椿！！

起きろ！椿！

バカヤロ

ッ！ 目を開け！

息をしろ！！椿！

起きや

がれ！

死ぬんじゃねえ！！

てめえつ椿！

許さねえぞ！！

おい！椿！

死ぬな！！椿！

この胸の鼓動が止まっていた時に、遠くから聴こえていたヴァッサーゴの声。

あたしを生かそうと、必死だった。今もそうだ。

「やめろおおおおおつ！！！！」

悪魔ヴァッサーゴの悲鳴のような叫びは虚しく響くだけだった。

ジェスタが掌を振れば、あたしと繋がっていたヴァッサーゴの影が
ブツリ、と切られる。

引き離された。

ヴァッサーゴが、あたしから出た。

ズキン。

「!!!」

胸に、痛みが走った。

押さえてあたしは俯く。

コクウの服を握り締めるが、それ以外何も出来ない。

「あつ…っ!」

「椿?」

鼓動を打つ度に、痛みがしてそれは徐々に酷くなる。

ズキン。ズキン。ズキン。ズキンズキンズキン。

やがて立てなくなり、その場に崩れる。痛い。

「お前、何をした!?!」

ラトアさんの声。

強烈な痛みには耐えられない。心臓に何か突き刺さってるみたいだ。
鼓動を打つために動く度、傷口が広がっているよう。
意識が遠退く。

コクウがあたしの名前を呼ぶ。ヴァッサーゴが叫ぶ。ハウン君の声。

ジェスタの声。

どれも遠退いていく。

落ちる感覚。

鼓動がない。

ぽつん、と。

暗闇に

落っこちた。

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、ピ。

耳障りな音にあたしは目を開く。

死んだと思った。

毎度のこと生きてる。

生きているが、最悪なことにあたしは嫌いな病室にいた。

真っ白な部屋。天井。白いベッドにそばには機械。そのモニターに

はあたしの心臓が動いていることを示す心拍数が映っていた。

心臓は正常に動いている？

医者に治されたのか？それとも。

鬱陶しい呼吸を助けるマスクを、あたしは外した。

「椿、おはよう」

ベッドのそばに座るコクウは微笑んであたしの髪を撫でる。

「気分は？」

「病室よ…最低…。一体なにが起きたの？」

出した声はあまりにも小さいがコクウは聞き取れたらしい。

「ごめん…椿」

申し訳なさそうにコクウは微笑む。「本当にごめんよ…」と謝った。

「なにが？」

「……」

コクウはあたしの足元に目を向ける。話してくれないため、起き上がってあたしは見てみた。

あたしの足元には、人間の姿のヴァッサーゴが丸まって眠っていた。コクウが握っているとはかり思っていた右手は、ヴァッサーゴの左手が握っている。

引き剥がしたはずのヴァッサーゴがまだ生きてる？

退治するために引き剥がしたはずではないのか？

「起きろ」

「痛っ！てんめえ！…椿っ！」

コクウに頭を叩かれ、ヴァッサーゴは飛び起きた。そしてあたしを見て目を丸め、右手を握り締める。

「おいつ、大丈夫か？」

「……どうかしたの？」

「どうかしたのじゃねえだろっ！バカヤロ！」

ヴァッサーゴの右手があたしの肩を掴む。心配した顔。初めて、ヴァッサーゴのそんな表情を見た。

「てめえは聞かねえから！死ぬって言っただろっが！このわからず

「屋！」

「……………」

「ポカーンって顔をしてんじゃねえよ！お前何も知らないうちに死ぬところだったんだぞ！！ふざけんじゃねえよ！」

「……………」

ヴァッサーゴが声を荒げている。

怒鳴ってあたしを怒る。

「このバカ猫がつ…！」

怒って、ヴァッサーゴが泣きそうになった。

なんなのよ？ヴァッサーゴ。

一体どうしたわけ？

喋るのが面倒であたしは言葉を発しず問う。しかしヴァッサーゴは無反応。

おい、ヴァッサーゴ？

「なんとか言えよ！」

「…いや、V…さつきから…聴こえないの？」

「はあ…？…ああ、今はお前と完全に引き剥がされてるから。お前の心の声は聴こえねーよ」

「そうなの？」

完全に切り離されたのか。

ならあたしの眼も、今は赤ではないのか。

「全然理解できてないから、ちゃんと説明して」

「…お前はほんと、バカだな」

呆れるヴァッサーゴをあたしの代わりにコクウは頭を殴った。

「椿を殺しかけたくせに！」

ヴァッサーゴはギロツとコクウを睨み付ける。コクウは顔を曇らせた。あたしはヴァッサーゴの胸を叩いて説明を急かす。

「お前は心臓の病気なんだよ。余命秒読みつてくらい……手遅れなほど重症でボロボロだった」

重たい口を開いて、ヴァッサーゴが告げる。

「心臓の奥底の欠陥までオレは治せない。……だが心臓を正常に動かすことはできる、死ぬことは防げた」

胸に手を置いて心臓を確かめる。心臓は動いていた。胸元になにかあることに気付いて見てみれば、手術跡。

「オレを引き離れたことで持たなくなった。幸い優秀な心臓外科医がいる病院の近くだったから……命をとりとめたが、お前は長くない」

手術をしたから、この病室に寝ていたのか。

もう長くない。

だから。

心臓を撃たれた時。

治すのに手こずっていたのか？

ヴァッサーゴはずっと。

この心臓を守っていたのか？

「……いつから？」

口を閉じてしまったヴァッサーゴと何も言わないコクウ。静まり返った病室にピピピツという煩い音だけがして不快だった。あたしはヴァッサーゴに問う。

「最初から？」

ヴァッサーゴは答えようとはせず、目を背けた。

「いつから知ってたのかって訊いてるのよ！」

「そうだ！」

顔を覗いて問い詰めれば、ヴァッサーゴは諦めて答える。

「お前をおちよくってやった時に気付いた！もう死期が間近に迫ってた！心当たりはあんたる！？不整脈に胸の痛み！無理してた！ただでさえ心臓が爆発寸前だったのに無茶な殺しの仕事やって自ら寿命を縮めてたんだよ！お前は！！」

始めから、ヴァッサーゴは知っていた。

あたしの心臓が、あたしが死ぬ寸前だと知ってて、あたしの中に入り込んで心臓を動かしていたんだ。

ヴァッサーゴはずっと、四六時中あたしを守っていた。あたしを生かしてたんだ。

「なんで言わなかったのよっ！？」

それをダシにすればいつまでもあたしの中に居れた。自分が生かしているから、追い出せないぞ。そう言えば、ジェスタヤコクウだってこんな強引な手で引き剥がさなかった。

「死にたがり屋のお前に言っても、ああそうですかって聞き流してた！」

「決めつけないでよ！」

「あの時のお前はそうなんだよ！」

ぐっ、あたしは押し黙る。

ヴァッサーゴは未来も見える。

どの時のあたしかは知らないが、確かにあたしなら聞き流しそうだ。心臓病で死ぬ？ああそう。

平然と受け入れて死ぬだろうな。

「でもアンタ、話してれば引き剥がされずに済んだじゃないっ！」

「何度も言っただろう！椿が死ぬって！」

「脅しにしか聴こえないのよ！バカ！」

「バカはてめえだアホ！」

「いつっ」

「椿！？」

「椿、無理しちゃだめだ……」

口論していれば胸に痛みが走り押さえ込む。ヴァッサーゴはギョツとして、コクウはそつと背中に手を置く。

「なんであたしを生かしたの？ヴァッサーゴ」

「……気紛れだ」

「全く素直じゃないね、ヴァッサーゴ。椿が好きだから、お前は椿を生かしてたんだろ？」

肝心な動機を訊いた。

コクウは呆れてそう暴露。ギーとヴァッサーゴはコクウを睨み上げ

た。

「はぁ？」

あたしは首を傾げる。

「椿が好きだから、生かしたかったんだろ。わかるよ、椿の可愛さにメロメロにならない男はいない、否、悪魔さえもメロメロにしちやうだろう。椿を目にしただけで気になって、一言話すだけでも惹かれて、一緒の時間を過ごす度に愛が膨れ上がったんだろ」

「どっかで聴いた台詞だ」

「椿が心臓止めて血塗れで倒れた時、ヴァッサーゴは必死こいて椿の名前を呼んでた。死ぬな死ぬなって何度も叫んでた。それでわかったよ。ヴァッサーゴは椿が好きで椿の中に居るってね。好きな女を自分の手で救えるならそうするさ、命の危機なら尚更」

生かしたかった理由は好きだからさ。

そうコクウはヴァッサーゴの代わりにあたしに答える。

あたしはヴァッサーゴに目をやった。

ヴァッサーゴは頬を赤く染めて顔を伏せている。

え？

凶星なのか？

「ヴァッサーゴ……あたしが好きだから助けてくれたの？」

「……………」

「あたしを生かすためだけに？」

「うるせえ！気紛れだって言ってるんだろ！」

ヴァッサーゴは吐き捨ててふいっとそっぽを向く。…凶星か。

「てめえで遊んでるだけだっ！このまま死なれたらオレが退屈なんだよ！気紛れだ！！」

そう言いつつも、顔は真つ赤だ。説得力の欠片もない。

そんな悪魔が可愛くて、あたしは笑ってしまう。

「本題だけど」とコクウは口火を切る。

「椿をこのまま死なせるなんてごめんだ。お前もだろ？ヴァッサーゴ。だから、これからも椿の命を繋ぎ止めてほしい」

コクウはヴァッサーゴに頼む。

このままではあたしの心臓は止まるが、悪魔が宿ればまた心臓は正常に動く。

ヴァッサーゴがいないと、あたしは死ぬんだ。

「殺しかけたてめえが言うんじゃないよ。…椿が決めることだ」

まだ根に持っているのか恨みがましくコクウを睨み付けるヴァッサーゴは、あたしに答えを求めた。

「あたしが決めたことに従うの？」

「ああ。生きたいか、死にたいか。どっちだ。オレから解放されたいなら死を選べ、生きたいならオレと生きなきゃなんねえぞ。お前が選べ」

死ぬか生きるかはあたしの選択次第。

髪と一緒にあたしの頬を、コクウが撫でる。

あの映画の中の吸血鬼と同じだ。君より長く生きるつもりはないよ。きつと君がいなくなつた世界なんて、全て何もかもなんの価値もなくなる。出来るなら、君が死ぬ前に俺を殺してくれるといいな。

吸血鬼って自殺するの苦労するんだよね

……殺すのだって苦労するでしょ

そうだな、焼死で心中しないかね

あたしが死んだらどうするか、そんなバカなことを訊いたらコクウはそう答えた。

まあ

椿のことは、死なせないけどな

死を選べば、コクウが心中してくれるのか。

どうしよう。

少し迷う。

コクウと心中すれば、篠塚さんは助かる。

そんなバカなことを考えたが、残念ながらそれは選べない。

あたしは死ねないんだ。

幸樹さんがいる、白瑠さんが篠塚さんがいる、藍さんに謝ってない、蓮真君を見付けてない。

あたしが選択するのは一つだ。

「答えはわかってるでしょ」

心の声が聴こえなくても。

「さっさと戻りなさいよ」

「……命令すんな」

両手を広げれば、ヴァッサーゴはあたしを抱き締めるようにして、やがてすっと消えた。

「……ごめん、椿。君を殺しかけた」

「いいわよ。生きてるし。知らなかったんだから」

「よくないよ」

ベッドに腰を下ろして、コクウがまた謝る。胸の痛みが取り除かれてあたしはホッと息をついて壁に寄り掛かり言うがコクウは首を振った。

「椿はわかってないね。本当に大変な手術だったんだぜ？優秀なドクターがいたのは不幸中の幸い。椿が死ぬかもって手術室の前で立ち尽くす俺の気持ちなんてわからないよな。愛する人を死に追い込んでしまった俺の気持ちなんて」

「煩いわね、生きてるんだからいいじゃない。そうよ、貴方の自業自得だわ。なんの罰を与えれば気が済むのよ？」

コクウは完全に自分自身を責めていた。全ては自分のせいだと思っている。

許す、とあう言葉ではきかないのなら、償わせるために罰を与えた方が楽になるだろう。

それをきいてコクウは嬉しそうに笑みを浮かべて、あたしに顔を近づけて唇を重ねる。

「椿が下す罰なら、なんでも受けるよ」

罰さえも嬉しそうに受けるDMな恋人は甘えてあたしに抱きつく。

そのまま押し倒されて、コクウの両手が身体をなで回す。

おい、罰はどうしたのよ？

引き剥がそうとしたら、コクウが忽然と上から消えた。

見てみれば、コクウの足を掴んでいるハウン君が。

コクウはベッドの下。どうやらハウン君に引っ張られてベッドから落ちたらしい。

コクウの足を放り投げてベッドに飛び乗ったハウン君はあたしに抱きついた。

「ハウン君…おはよ」

「おはよう、つばき」

白銀の髪を撫でて微笑む。

「ハウン…」と起き上がったコクウが笑みをひきつらせる。ハウンはつーんとそっぽを向いてあたしから離れない。

「いやいや、よかった。このまま目を覚まさなかったら私は姿を眩ませようとしてたよ、よかったよかった」

「ふざけるな、ジエスタ」

「いや、本気だった…。三日目も覚めなかったら墓場に隠れようと目論んだよ」

個室の病室に、ジエスタも入ってきた。そんなジエスタの逃亡を阻止するためにラトアさんがジエスタの首根を握り締めている。

「切り離しただけじゃあ椿は死なないってジエスタが断言するから、計画して実行したらこの通りだ」

「悪魔が少女に惚れててとり憑いてたのは少女を生かすためだったなんて今まで例外がなかったんだ」

コクウにチクリ言われてジエスタは疲れたように笑って言い訳をした。

「ねえジエスタ」

「私を責めないでくれ！私は救おうとしただけで」

「今三日目って言った!？」

「へ…?」

きよとんとするジェスタ。

「あたし、何日寝てたの!？」

「夜に倒れて朝まで手術：それから丸二日眠ってたけど」

「丸二日!？なんで起こさなかつたのよ!V!」

「心臓止まったのに手術直後に叩き起こせるわきゃねえだろ」

コクウの胸ぐらを掴めば、衝撃な事実を知らされる。心臓病より驚いた。

ヴァッサーゴは再び現れてベッドの上で頬杖をつく。

「もうお嬢サンを生かしてこの悪魔を退治する方法がない：お手上げだ」

そんなヴァッサーゴに目をやり、ジェスタは肩を落とす。ヴァッサーゴはジェスタを鼻で笑ってやった。

「どうしたの？椿。急ぎの用事？」

「そうよ！ジェット機！ジェット機用意できない!？」

「まあ、手配できるけどお。どこいくの？」

「日本よ！あたしの着替えは!？」

「ここだよ。俺以外の男がいる前で脱いじゃだめだよ、椿」

ベッドから降りて着替えを探しながら脱いだら、ベッドに乗っているハウン君とヴァッサーゴの下からシーツを抜き取り、コクウはそれで吸血鬼と悪魔から隠す。

「貴方も見るな」とあたしは脱いだ服をコクウの顔に乗せる。

「遊太から連絡は？」

「あー、なんだっけなあ、進展なしって伝えてくれって言われたな

あ。なんのこと？」

「あとで話すわ。まだ進展ないのか…大丈夫かしら…」

「けーたいでんわ」

ヴァッサーゴの声。ベッドの上にならしく寝そべっているヴァッサーゴは左足を揺らしながら言う。

「お前の携帯電話は小僧が持ってんだ。調べてみる」

「そうか！その手があった！電源がついてれば場所がわかるわっ。

コクウ、オフィスのパソコン持っていくわね」

「椿、手伝うよ」

「貴方はいいの。帰りを待ってて」

気付かなかったあたしのバカ。

コクウの肩を叩けば、コクウはシーツごとあたしを抱き締めた。あたしはするりとかわして軽くキスをする。

「え、でも椿」

「ヴァッサーゴ、行くわよ。あ、ラトアさん。幸樹さんが探してきました、一緒に戻りましょう」

「は？おいっ」

「椿い、せめて一晩二人つきりで過ごそうよぉ」

「帰ったらね」

コートを羽織ってヴァッサーゴを呼ぶ。目に入ったラトアさんにも手伝ってもらおうと腕を掴む。コクウが引き留めようとするがあたしはニコッと返す。

病室を出ようとしたが、思い出して顔を戻してジェスタに言う。

「ヴァッサーゴのこと、説明しといてね。吸血鬼達に。それぐらい

やってくれるわよね？あたしを殺しかけたんだもの」

皮肉混じりにあたしはそうジェスタに頼む。ジェスタは顔をひきつらせつつ頷いた。

「バイ、ハウン君」

「……」

ハウン君に手を振るが沈黙を返される。別れの挨拶は嫌いなのかな。

「コクウ」

「ん？」

「あたしの帰りを待っててね」

「…うん」

白と黒

白あつての黒。

黒あつての白。

白あつての黒。

黒あつての白。

光と影のように、対象でありながら繋がる存在。

けれども決して交わらない。

交わることなんて、溶け合うことなんて、ない色だ。

主張しあつて、灰色にはならない。

互いを塗り潰す。

互いを消し去るために

。

「白と黒つて、ぶつちやけどつちが強いんだろつなあ？」

柄にもなく新聞を開いて眺めている切り目のイケメン面の悪魔の
呟きに、そんな悪魔に生かされてる殺し屋と仏頂面の吸血鬼は目を
向ける。

しかし何度目かはわからないその呟きを今回も無視してあたしとラ
トアさんは話を続けた。

「那拓家の秘蔵っ子を救出か……お前は帰国早々忙しいな」

「ええ、全く。忙しいです」

悪魔の件で死亡寸前というかもう寿命0になっているのに、直ぐ様日本へ飛んで行方不明の友人探し。ラトアさんに話していないが、死んだと思われた黒の集団に狙われている番犬も匿ってる。全くもって忙しい。

「それでまたオレに鼻で見つけてほしいのか？コクウにやらせればいいだろうが」

「白溜さんと会わせられるわけないでしょ。コクウには日本に来てほしくないんです」

「二人を会わすのはよくないな」

「ご協力お願いいたします」

あたしはラトアさんに言いつつ、オフィスから持ってきたパソコンで自分の携帯電話の在りかを探していた。

「藍乃介に頼めばいいではないか。奴の得意分野だろ」

「藍さんは音信不通なんです。住みかもかえたらしく、白溜さんや幸樹さんも連絡取れないみたいで…ああくそ！間違えた！」

「…オレが藍乃介を捜すから、出来ないことを無理してやらんでいい」

「あたしにだってできます！」

むきになって声をあげる。

正直言うと携帯電話のGPSを追跡するスキルは持ち合わせていない。

なので苦戦中。

藍さんはすんなり出来ていたのに…。天才との差か。

すると、膝の上に置いたノートパソコンが忽然と消えた。探せば退

屈していたヴァッサーゴの手にノートパソコンが。カチャカチャと、キーボードを押していくヴァッサーゴ。暫くなにをしているのだろうと見ていれば、ノートパソコンは返された。

「この機械だけじゃあ場所までは見つけれねえ。日本へ戻ってリコン野郎を見付けるか、ほかの機械でやるしかねえぞ」

「……………アンタ、機械に強いのか？」

「悪魔は万能の知恵を持つというが……」

「散々機械にぶつこまれたんだぜ？ 知識はある」

ヴァッサーゴの口振りにあたしもラトアさんもポカーンとする。ヴァッサーゴは呆れたように頬杖をつく。

「……………アンタがまたパソコンに入れば追跡……………」

名案が出たが言いかけてあたしはやめる。ヴァッサーゴはあたしに目を向けた。

「ああ？んなことしねえぞ。オレはお前の恋人と違うぜ、下僕じゃねえんだからよお」

「あら、いいじゃない。あたしを生かす以外にやることないでしょ」
つつん、とあたしはヴァッサーゴの膝をつつく。自虐発言に顔の筋肉をひきつらせたヴァッサーゴは仰け反り離れる。

「きめえよ……………」

「失礼ね」

「つつくな、バカ猫」

「なによお」

その反応が面白くてあたしはからかう。

「けっ、質悪い！」とヴァッサーゴは煙になって消えた。
可愛いな。あたしはクスクス笑う。

「いや、マジな話。機械に入るのも可能でしょ？やってくれない？
蓮真君の命がかかっているのよ」

「てめえの命は尽きる寸前だがな」

「口が過ぎるぞ、悪魔」

「事実を言っただ、吸血鬼」

ヴァッサーゴの発言にラトアさんは不快になったらしくあたしを睨み付ける。あたしを睨まないでほしい。

「V、真面目に答えてよ」

「あんだよ、どうせ日本に着くまで時間があるだろ。くっちゃべようぜ」

答えを急かすあたしにヴァッサーゴは今度は黒い煙の状態で現れた。それは悪魔らしい姿。

宙にふわふわ浮いたヴァッサーゴは足を組んでソファに寝そべるかのように寛いで笑う。自分のペースを取り戻したようだ。

「この中に入って蓮真君を捜してくれって言うてるのよ」

あたしは膝の上のPCを指差す。

「断る。怪奇現象の幽霊じゃねえんだぞ、機械に入るだけでネットワークを移動できるわけじゃねえ」

「それを早く言いなさいよ。はあ、遊太に連絡したいけどケイタイ

がないのよね…」
「…てんめえ」

出来ないなら早く言え。

機内で他にできることを考えたら、遊太と連絡とることぐらい。だが残念ながらあたしは携帯電話を持っていない。ヴァッサーゴも当然。ラトアさんをじっと見たが、勿論彼も持っていない。

あたしの視線に気付いていないのか、ラトアさんは宙にいる煙を怪訝に睨む。

「椿：お前は通常に生きていられない質なのか？」

「心臓が通常じゃないからな」

「何を今更。」

ケタケタと笑うヴァッサーゴに投擲ナイフを放つ。

「裏の人間には一生吸血鬼や悪魔に会わない者だっているのに、お前は吸血鬼全員に会うし悪魔にとり憑かれるは吸血鬼には愛されるは…次々とトラブルが尽きないな。機内に吸血鬼と悪魔を連れた人間なんて、金輪際現れないだろう」

「あら？またあたしの不幸話ですか？アンラッキーを振り返りほど、今は余裕じゃないです」

「ならオレが語ってやる」

機内に天敵同士である悪魔と吸血鬼がいる。その事実に変更してラトアさんは驚愕したのかそんなことを言い出した。煙の状態で攻撃が効かないヴァッサーゴが調子に乗ってでしゃばる。
本当にお喋りな奴だ。

「少女の不幸の始まりそう、実の父親に生まれる前に捨てられたこ

とだ。継父には愛されず、家族の愛さえもわからなくなってしまうた可哀想な少女は、ある電車に乗り　境界線を踏み越えた。刃渡り三センチ以下のカッターで殺戮。幸か不幸か、居合わせた頭蓋破壊屋に気に入られ被害者のふりして失踪。裏現実に誘われた。殺戮中毒者が選ぶは死ぬか殺し続けること。愛を告げる狩人を振り払い殺し屋になった。初仕事はヤクザの抗争相手の始末。初の大仕事では矢で射抜かれ死にかけた。知らぬ間に付けられた紅色の黒猫の名は一人歩きして有名になりファンが模倣で表で殺人。気に入られお得意様になったクライアントには玩具扱い。頼まれた仕事では悪趣味の溝鼠にボコボコにされてコレクションにされるとこだったが、手に入れてプレゼントされた指輪には初めて存在を知ったばかりの悪魔と遭遇。その時点で既に心臓病は侵食して死のカウントダウンは始まっていたが、幸い気紛れな悪魔が心臓を動かした。その時点で死んでた方が、幸いだったかもしれないがな、クククッ！」

お喋りモードに切り替えたらしい。ペラペラと雄弁に話すヴァツサーゴの声をBGMのように聞き流してあたしは食事を摂る。コクウに渡されたチーズバーガーにお手製のサラダ。寝込んでて空腹だったのだから、食べなくては。

「頭蓋破壊屋のもう一つの二つ名は”白の殺戮者”。その名をつけられた理由は”黒の殺戮者”の存在が在ったから。裏現実で長年恐れられる目立ちたがり屋の吸血鬼は、紅色の黒猫に目をつけ、勧誘しようとした。本人の知らないところで白と黒は取り合いをしたが、決着はつかず。海外での仕事は溝鼠にクライアントを殺され、一人の初仕事は狩人の罠で撃たれて殺されかけた。黒の殺戮者からの追手を振り払うべき日本に帰国すりゃ、新しい家には見知らぬ女。兄のように好いた医者には恋人ができて居心地悪かった。だが次第にそれも悪くないと思えてきた頃、憎き溝鼠と獲物の取り合い、そこで溝鼠を取り逃がした。その過ちが最大の不幸の原因。溝鼠は仕返

しに医者 of 恋人を殺した。愛し始めた家族をぶち壊され、怒り狂って復讐しに向かい殺されかけたが
が めった刺しにして殺した」
まあ、殺されたのも同然だ

ごくん、と飲み込む。

味わって食べるには酷いBGMだ。

「少女にとって、愛は何よりの幸せ。家庭の愛さえもまともに感じられなかったが、新しい家ではそう…殺し屋達に囲まれ、愛されていた。愛をもらい愛に包まれていた。そんな時間も未来も、奪われたことは何よりも許せなかったのさ。全ては自分のせい。そう自分だけを責めて、家出。独りきりで苦しんだ。そう独りきりで。黒の殺戮者と出会うまではな。それは吉だ。ぽっかり空いた穴に、奴は座り込んだ。悪魔に憑かれた少女は吸血鬼に愛された、ククク。恋人ができて浮かれた吸血鬼は晩餐会へ連れていき、危うく恋人を同族に引き裂かれるとこだった。吸血鬼全員に睨まれることになったが、それだけじゃない。悪魔憑きに軽くストーリーカー」

「あつ！ジエスタに契約者がいるって言い忘れてた！」

「契約者だと？」

「家に戻るも、恋人に縛り付けられて」

「灰色の男、悪魔と契約してるみたいで。吸血鬼を狙っているみたいでした…悪魔の姿はハウン君くらいの白い少女で瞳は赤です」

「何故それを早く言わなかった！」

「……………」

「…忘れてました。あら、V。あたしのこれまでの不幸話は語り終えたの？」

ヴァッサーゴの話で思い出したあたしはラトアさんに報告。今更す
ぎた。

気付くとヴァッサーゴは黙りこんでいた。

「どうすんだ、ジエスタの奴…また墓に戻るかもしれんぞ」
「何処かに行つてしまわれたら連絡のしようがありませんよね…」
日本についたらダメ元でコクウに伝えてみます」
「そうだな……。契約者が…」

深刻そうに眉間にシワを寄せて考え込むラトアさん。
そんな顔が絵になつてて素敵だ。これ、アイルスさん描いてくれな
いかなあ…。

「見とれてんじゃねーよ」
「ぎゃ」

煙に頭突きをされた。けむい。

「動いてる最中って感じてました…計画者を見付けて殺すべきかしら
？それともジエスタに任せるべき？」

「この件だけでも避けるべきだな、椿は。我々だけで片付ける」
まとわりつく煙を振り払い、ラトアさんに問えばそう答えられた。
悪魔の契約者との戦いは避けるとのことだ。お気遣い感謝。
あたしは煙の悪魔に目を向けた。

「んだよ」
「別に」

流石に吸血鬼の手伝いはしてくれないか。悪魔殺しも。
まあ悪魔退治は吸血鬼に任せて、あたしはちゃんと蓮真君を捜して
篠塚さんを守らないと。

「……コクウだが」

沈黙したため眠ろうとしたがラトアさんがコクウの名前を出した。

「上手くいつてるのか？」

「……なんで」

そんな質問？と首を傾げる。

「その質問はなんだ？恋人という関係性が上手くいつているのか、それともベッドの方か？」

「……前者だ」

ラトアさんが後者を訊くわけないだろ。あたしはヴァッサーゴを追い払うべく煙を蹴散らす。

「それなりに。あたしが死ぬなら自分も死ぬって言うくらいですもん」

「……そうか」

いまいちな反応。

あたしはきよんとする。

「それは、上手くいつてると言えるのか？」

「……違いますか？」

「……」

ラトアさんは黙って少しの間、考えた。

え。なによ。

「なんですか、なんですか？なんなんですか？」

「あーいや。すまない、ちょっとな……見てて思ったんだ。コクウは、本当にお前を愛してる」

「……ええ、まあ……」

「椿もコクウを愛してる」

「………んー」

「…違うのか？」

誰から見ても、コクウのゾツコンぶりは一目瞭然。勿論愛を向けられたあたし本人も愛されていることは理解している。が、愛してるのかと問われると答えに詰まってしまふ。

「そのお…ええーと……」

くるり、自分の髪の毛を指に絡める。

「好きだけども、愛してるなんて言えなあい」

ケタケタ、とヴァッサーゴがあたしの心を読み上げた。全く気持ち悪い。

「別れちまえ」

「はっ？」

「もう別れちまえ」

「なによ？いきなり」

「云えないなら別れる」

からかいではなく、素っ気なく言われた言葉に戸惑つ。

でも確かに、あたしは 云えない。

云えない。

だからってヴァッサーゴの言葉に従う気はない。

「指輪を嵌めたらどうだ？」

「そうね、それがいいですね。悪魔を黙らせるには指輪が必要だわ。…あらやだ、白瑠さんが持つてるんだった」

嫌々になっていればラトアさんが指輪のことを言った。それで思い出す。指輪を取ったきり白瑠さんから返してもらってない。悪魔を黙らせる方法なし。

「まあ…悪魔がさっき言ったように、愛がお前の何よりもの幸せだ。愛がお前を救う…：藍乃介がぼやいていた」

「ロリコン野郎酔ってたのか？」

「クラッチャーはともかく、幸樹は反対しなかったんだろ？」

「え？ああ…まあ幸樹さんは多目に見てるというか…付き合ってる事実を受け入れつつあるってゆうか…反対はしてませんね」

別れてください。そう彼なら笑顔で言うところだが、一言もあたしに言わない。

幸樹さんは微妙なとこだ。

戸籍上兄になっただろうでるかしら…。そこが気になるところだ。微妙と言えはもう一人。

「白瑠さんも、別れるって怒りませんでしたよ？正直そう言われるのは覚悟してたんですけど…：言わないだけで…なんだろう…」

「白野郎とシスコンは、反対できないのさ。椿を迎えに行かなかつた間についた虫だ。不本意ながらその虫が少しからず傷を癒していた事実が在る。言いたくても言えないのさ」

白瑠さんの様子を理解していないから表現に困っていれば、ヴァッ

サーゴが推測ではなく事実を口にした。
余計なことを…、とラトアさんは睨み付ける。

「…そうなの？ラトアさん」

「……オレは愛し合ってるから、引き裂くことはするなと言っただけだ。コクウもお前も、愛し合ってると思った。だから悪魔のことを報告した時に伝えたんだ」

よく考えてみれば、可笑しい反応だった。秀介とのキス一つで怒っていたあの幸樹さんが、怒りもしなかつたんだ。

白瑠さんが最も嫌う者なのに、幸樹さんも会うなと言いつづけた人なのに、別れると言わなかつたのはラトアさんの言葉があったからだったのか。

本当は、別れてほしいのかな…。

「コクウのことは好きです、本当。だからこそ付き合っていますし… 例え二人に別れると言われても、聞き入りません」

あたしは仕方なく笑ってラトアさんに言う。

「コクウが居てくれて、救われた部分もあります……まだ愛してるなんて、言えませんけど… 大好きなんです」

「…そうか」

ラトアさんは似たような笑みを返して頷いた。

「別れちまえばいいのに」とヴァッサーゴが水を差す。

「あら、妬いてるの？」

にやりと笑みを向ければ、沈黙してヴァッサーゴは消えていった。

自分のことになると隠れちゃうのね。

「ラトアさんこそ、ディフォとは？」

「……それは挑発か？」

「冗談ですよ、クスクス」

笑ってあたしは窓ガラスに目を向けた。

…なんだがコクウに会いたくなっちゃったな。

日本に降り立ち、那拓家に向かった。

「こんな殺し屋どもが次から次へと上がり込むなんて……前代未聞！ 那拓家の恥！ 蓮真め！ 稽古ではもつとしごいてやるっ」

ぶつぶつと部屋の隅で殺気立つ爽乃。

そんな兄弟なんて見えないふりして遊太と神奈はテーブルを囲って話し合っていた。一名殺気立つ爽乃に怯え縮まっている。多度倉さんだ。

「蓮真君の携帯電話は電源切れてるのよね？」

「ああ、すぐ電源切れるんだ」

「試しにあたしの携帯電話にかけてみてくれる？」

「じゃあ僕がかけるよ」

神奈の申し出はさらりとスルーして遊太に電話をかけてもらったら繋がった。よし、追跡できる。

「蓮真君が所持していれば居場所がわかるわ。パソコンある？」
「ないよ。家はアナログだから」

にこりと神奈は答えた。

…そうだと思っただけだ。

あたしはショックを受けてテーブルに頭を打つ。

「じゃあ買いに行ってくるわ」

「機械などに頼るな！人ならば足を使え！」

「足を使って情報得ましたか？」

「うぐ…」

「考えたんだけど、椿ちゃんが狙ってるなら宣戦布告したらどうかな？相手は要求さえしてこないんだ、こっちから仕掛けなきゃ。レンが餓死するかも」

「それは迂闊にできないわね…。相手の目的はわからないし」

「相手の出方を待っているのは先手を撃たれる。だからこそ蓮真が奪われた！」

「相手を知る前に動いて彼を死なせたらどうするんです？」

那拓兄弟と険悪な口論。特に爽乃と。

「元と言えば貴様が巻き込んだのではないかつ！！」

「だから今捜してんのよ！！」

「黙れ！」

パンツ、と立ち上がりテーブルを叩くあたしと爽乃に、一喝入れたのはラトアさんだった。

「那拓蓮真の命を助けたいならば、争っている場合ではないだろう。」

それぞれやれることをやれ。さもなければ救える命も救えん」

「そうそう。とりま、追跡してみねーとな」

ラトアさんの言葉に遊太は頷いて立ち上がる。

「樁。幸樹の元に機械があるかもしれん」

「あー、幸樹さんのPCならばいけそうかも。いえ、このPCで合
わせればなんとか…」

「だめなときの場合の為に藍乃介を捜してくる」

「了解です。あたしは自宅に戻って、携帯電話の追跡をするわ」

「あつ、おれも行く」

「いえ、貴方は連絡を待っていて。その方がいいわ」

「かしこまりました」

遊太が同行すると言うから爽乃達と居てとっておく。蓮真君の居場所を突き止めたら連絡してすぐ動くためでもあるが、本当は家には番犬がいるかもしれないから来てほしくない。

「お、おれは!？」

「那拓さん達の手伝いをどうぞ」

ラトアさんと那拓家を出ようとしたら、多度倉さんが呼び止めた。構う暇がないので、軽く流す。

「樁っ、おかありい」

笹野家の前にバイクに跨がろうとしていた白瑠さんがいて、あたしを見付けるなり駆け付けて抱きついた。

「ただいま……お出掛けですか？」

「つばちゃん捜そうとしてたあ、遅いからさあ」

「すみません…待たせてしまつて」

「んーう。いいよお」

「苦しいッス…」

締め付けが、痛い。痛い。いい加減放してください。

「篠塚さんは部屋に？」

「あ、うん。リビングにいるよ」

「そうですか。幸樹さんは…いるみたいですね」

「いるいるう」

やっと放れた白瑠さんは玄関に行き、ドアを開けて待った。

「おい…心臓のことは言わないのか？」

「この件が済んだら話しますよ」

ラトアさんが耳打ちをする。番犬に蓮真君のことがある今、帰って早々トラブルを話してられない。忙しい。

「椿さん、おかえりなさい」

「ただいま、幸樹さん」

「あれえ？お兄ちゃんって呼ばないの？」

「幸樹さん、じゃあだめですか…？」

リビングにいけば、幸樹さんが笑みで出迎えてくれた。

白瑠さんは後ろから顔を出して呼び方を指摘。きよんとする。

「好きに呼んでいいですよ。にーに、でもいいですし」

「それはないっす。」

「くす、夕飯はもう食べましたか？」

「あ、いえ。大丈夫です。PCお借りしますね」

「食べていないなら、ちゃんと摂ってください」

「はい…」

夕食は断ったが幸樹さんはキッチンに行って作りにいった。

あたしはリビングのソファを一人占領する篠塚さんに目を向ける。

篠塚さんもあたしを先程から見ていたから目が合った。

「こんばんわ、篠塚さん。頭痛の方は大丈夫ですか？」

「ハンツ…三日前に治ってる。…今まで何してた？」

挨拶をすれば鼻で笑い退けられた。鋭い目付きは三日前とは変わっていない。

「ちょっと…。あ、ありがとうございます、白瑠さ…ん？」

悪魔を切り離したら心臓が終わりそうになって病院で手術して寝てました、なんてぶっちゃけて言えない。

頼んでもいないのにPCを持ってきたかと思えばあたしを抱えてソファに座った。つまりはあたしは白瑠さんの膝の上。

「あつれえー？つうばきい、ちゃんと食べてる？十キロくらい痩せたでしょ」

「ちゃんと食べてますよ…十キロは大袈裟です、てか下ろしてください」

「いいえ、大袈裟でもないですよ。私も抱えて気付きました、椿はちゃんと食べていなかったんでしょ？」

白瑠さんに言われ、ギクリ。慌てて膝から降りようとしたが腹に腕がシートベルトのように巻き付いて離れられない。更に幸樹さんからも言われ、ギクリ。

「どうなんですか？悪魔」

「九キロ落ちた。オレがいなきや栄養失調症で入院してたさ」

キッチンから幸樹さんに呼ばれ、ヴァッサーゴは出てきた。あたしの目の前。足の短いテーブルに腰掛ける。

目視するや否や、篠塚さんは銃口を突き付けた。

瞬時にあたしと白瑠さんは両手をあげる。

そしてラトアさんはその銃を掴み、向き先をヴァッサーゴから逸らした。

「ヴァンパイアが何故悪魔を庇う!？」

「悪魔を庇ってなどいない。弾丸など悪魔に触れることなく、椿に当たる」

「…!」

いくら人間の形の実体であっても、ただの弾丸なんてヴァッサーゴには効かない。

そんなことわかりきっていたからこそ、あたしと白瑠さんは手を上げた。

舌打ちをして篠塚さんは銃を下ろす。

「この過保護な兄どもも、悪魔憑きは黙認か」

「事情があるのだ…。どうゆうことだ？以前と雰囲気は全く違うではないか」

むすりと唇を突き出して篠塚さんは幸樹さんと白瑠さんを睨み付け

る。

彼に答えつつも、篠塚さんの変貌っぷりにラトアさんは困惑を見せた。

「あ」

「しいのちゃんは番犬でねえ、記憶喪失だったんだけどお今あ思い出してえ番犬人格なうなう」

「…は？」

白瑠さんが放してくれないため、膝の上で作業しようとPCを開いて答えようとしたら先に白瑠さんが言ってしまった。

「番犬…だと？」

「番犬だ」

「あの番犬か？」

「番犬だ」

「吸血鬼も殺した狩人の番犬か？」

「ああ、その番犬だ」

ラトアさんは番犬を凝視する。

吸血鬼を殺した…？

篠塚さんはどっかりソファに寛いだまま、冷酷な眼で答える。

ギロリ、ラトアさんは睨み下す。

「吸血鬼も狩ったんですか…篠塚さん」

「殺し屋である吸血鬼も狩人の獲物です。まあ、敵わない相手ですので殆どの狩人は手を引きますね」

「ヴァンパイアが逃げ足が速いだけだ。再起不能になるまで撃ち込んで燃やせば簡単に片付」

「篠塚さん！」

作った料理を運んだ幸樹さんが話せば、ラトアさんの怒りを煽るところを篠塚さんが言うからあたしは声を上げる。

「ラトアさん、藍乃介さんを捜してください。一時間後、ここへ」
「…わかった」

ラトアさんの手を掴んであたしは家を出るように急かす。ラトアさんも番犬とは居たくないらしく、踵を返した。

「くれぐれも黒には言わないでねえ？番犬のことお。ラトアってらあ」

白瑠さんだけは陽気に見送る。

玄関が閉まる音を聞いて、あたしはPCに向き直った。

「あの吸血鬼は黒の殺戮者側ではないのか？」

「ラトアは俺側だよ」

「白瑠さん、遊ぶなら放してください」

吸血鬼は仲間意識が高い。増えることのない身内だからだ。

白瑠さんはあたしの両手を掴んで手を振りながら答える。あたしは人形かつ。

どうやら自分がコクウに狙われていることは白瑠さんから訊いたようだ。

「いつまで俺は隠れなきゃならねんだ？身体が鈍ってる、仕事させる」

あたしに用意された料理を掴まむ篠塚さん。

「あたしがいいと言うまで、隠れていてください。黒の殺戮者はあ
たしがなんとかしますよ。身体は鈍っていないと思いますよ、三
ヶ月前から狩人に復帰していたんですし」

「表から狩人だろ？どんだけ腕が落ちたか、知るのがこえーぜ」

「神コンビと呼ばれるくらいですから…腕はあると思いますけど…。
そう言えば相棒の秀介から連絡は？」

「なあいよ」

「ポセイドンって、餓鬼だろ？たかが知れるぜ」

秀介から連絡がない。それは変だな…。

「あの若さで狩人の鬼と呼ばれてるんですよ、彼は」

「俺は知らねーし。噂の一人歩きじゃねえのか」

「……まあ会えばわかりますよ」

篠塚さんは秀介さえも覚えていないのか。

それにしても頑固というか、ひねくれているな。

「番犬が生き返ったって知ったしゆーくんの顔、見たあいなあ。

わくてかあ」

「…白瑠さん、いつから”なう”とか”わくてか”なんて言葉を使
うようになったんです？」

「友達のうけいりい」

んひゃひゃ、と楽しげに笑う白瑠さん。…きつと驚愕だ。相棒の正
体は憧れていた番犬。気絶するかもしれない。

なうやわくてかを使う白瑠さんの友達って……誰。

「白瑠。椿さんの手が塞がってるんです、食べさせてください。篠

塚刑事はこちらを食べていいですよ」

幸樹さんは篠塚さんにおつまみとビールを渡して、余計なことを白瑠さんに頼む。白瑠さんは喜んであたしに料理を食べさせた。食欲ないのに。

「はい、ああん」

「白瑠さん、くつつきすぎですから」

「そうですよ。私に譲ってください」

そうゆう話ではないですよ、幸樹さん。とりあえず邪魔だけはしないでほしい。

「ここは、姫様と甘やかす使用人の城か」

余所を向いてビールを飲む篠塚さんがぼやく。

「藍乃介に頼まないんですか？」と幸樹さんは篠塚さんのぼやきを気にせずあたしに問う。

「音信不通ですし……あたしだってやれますからっ！」

「むきにならなくても」

クスクスと幸樹さんはあたしの頭を撫でる。むう…。

「私が連絡してみますね」

「繋がる前に突き止めます！」

立ち上がり電話を掛ける幸樹さんを見て、あたしは集中してキーボードを打つ。

藍さんより早く見付けてやるっ。

カチャカチャカチャカチャ。
ピッ。

PC画面が地図に変わり、そこに赤い点滅。

「見つけたっ！」

「あっ、つうばあきい、良くできましたあ」

居場所がわかった。

これで蓮真君の居場所がわかる。

喜んで立ち上がるうとしたあたしの頭を白瑠さんが掌で撫でた。
よくできました。

彼の優しい手。師匠からの誉め言葉。

嬉しくて、笑みが漏れる。

「……椿、か」

ぼつり、と呟いたのは篠塚さんだった。

頬杖をついて、あたしを見つめている。

呼んだ、のかな？

「凜々しく咲き誇る花の名前とはあ……いい名前をつけてもらったものだな」

まるで独り言のような言葉。

あたしは驚いた。

だって。それは。

「椿さん、行きましょう。車がいるだろうっ？」

「あ、はいっ」

「よおし、出動っ」

「あつ、篠塚さんはここにいてくださいね」
「ん」

居場所は見つけた。早く救出に向かわなくてはならない。
立たされてあたしは直ぐに支度をする。一応篠塚さんに釘を刺す。
篠塚さんはビールを飲んで短く頷く。

「いこいこお」

「ちょ、担がないでっ、白瑠さんっ！」

「では留守番頼みますね」

何故か白瑠さんに担がれて外出。

幸樹さんのシルバーのクラウンに乗り込んで、赤い点滅に向かう。

凜々しく咲き誇る花。

椿。 椿の花。

以前篠塚さんに言われたことのある言葉だった。”凜々しく花”。

以前とは勿論、あたしの知る篠塚さんのこと。

優しい眼差しのあの人が、言った言葉なのに。

あたしを知らない篠塚さんが、今さっき言った。

…嗚呼、そうか。

根本的には、篠塚さんは篠塚さんなのか。

記憶が違うだけ、人格が違うだけ。

何かを記憶してるだけで、違う。

その記憶している何かが、あの冷酷な眼差しを作らせているだけで、
多分根はあの優しい篠塚さんなんだろうな。

君は凜々しい花だ、生きていける

「……………」

笑みが、溢れた。

「あっ！ラトアさんどうしよう！」

ハッとして思い出す。連絡手段がない。

「篠塚さんが見付けたと教えてくれるでしょう。それか悪魔に呼んでもらえばいいでしょう、吸血鬼は悪魔の声を聞き取るのだから」

「あ、もしもしい怪盗くん？手掛かりみいつけたよお」

運転しながら幸樹さんが言い、白瑠さんは携帯電話で遊太に連絡した。

そうね、ヴァッサーゴよろしく。

「貸してください、白瑠さん。もしもし？遊太、今何処？…うん、じゃあ」

一度合流してから現地に向かおう。

遊太にそれを告げて電話を切る。

「もうこの辺でいいです、降ろしてください」

「え？」

「那拓兄弟もいますし、二人の手を煩わせられません」

「何言ってるんですか、家族でしょう？」

「手伝うよお」

「……なんだか、嫌な予感がするんですよ」

蓮真君の生死を確認する直前のせいか、少し心拍数が上がっていた。それは当然だ。

だけど、嫌な予感がする。

このままこの二人を連れていると、妙なことが起きるような、そん

な予感。

未来も見える悪魔を宿しているせいならば、この予感は的中してしまっただろう。

「今度は、一人にはさせません」

説得しようとしたが、幸樹さんは頑なで引き下がってはくれなかった。

由亜さんの時と重ね合わせていると白瑠さんから聞いたのだらう。

これは何言っても無駄みたいだ。

まあ、白瑠さんがいるならば。

最悪な事態には起きないだらう。

「……………どっ？」

「……………これのどれか、よね」

あたしと遊太はポカーンと見上げる。

合流して、赤い点滅の元に来た。

そこは廃墟だらけの、ゴーストタウンみたいな場所だった。

廃墟がいくつもあり、多分その中の一つに携帯電話がある。多分携帯電話のそばに蓮真君がいる。

残念ながら、あたしの技術ではその一つの建物まで突き止められない。

「ラトアが必要ですね。その方が早い」

「吸血鬼が来るまで待つていらねん！！行きましよう！兄上！」
「あ、おいっ！兄貴！」

幸樹さんがヴァッサーゴにラトアさんと呼ぶよう眼で言われる。
しかし爽乃は待てず、手当たり次第建物を調べ始めた。

「これが罫で全員をバラバラにさせて殺す手筈だったら、どうしよう？椿」

神奈はあたしにそう問いつつも、突っ走った弟を追う。

「どおするう？椿い。待つ？捜す？」

「……」

白瑠さんに訊かれて、あたしは遊太に目を向けた。
遊太も爽乃のように手当たり次第捜したいようだ。

「捜します。二人はこちらでラトアさんを待つていてください」

「ええー俺もお？つうちゃんと行く」

「ラトアさんが来たら捜して先に向かつてください、お願いします。
白瑠さん」

「…わかった」

「お願いします」

ただをこねる白瑠さんにあたしは静かに頼み込んで頭を下げる。

「気を付けてくださいね、椿さん」

「幸樹さん、白瑠さんも」

それだけ言い、あたしは遊太と爽乃達とは違う方向から捜しに向か

った。

「遊太、両親は？」

「遠い親戚に会ってる。神奈の兄貴がさ、確証がないから父さん達の手は煩わせるなって。おれらで十分だってさ」

「まあ、十分よね。危険人物の兄弟だもの」

駆けながらあたしと遊太は話す。

一つの建物の中を隅々と捜した。

ヴァッサーゴはやる気無さそうな声で「仏頂面吸血鬼あ」とラトアさんと呼んでいる。彼が手伝わなくても、通常の間人より気配を感じることができるから問題ない。

「蓮真！」

遊太はあたしの携帯電話に電話をかけながら弟を呼ぶ。

屋上まで言ったが、蓮真君の姿は見えなかった。あたしの携帯電話の着信も聴こえない。動物一匹いなかった。

「…あと何件あるんだよ…」

屋上から見える廃墟を見回して、遊太は嘆く。

一件の屋上に着いただけで息が上がる。これではこちらの体力が足りない。

「あたしの携帯電話の電池も気になるから…長く電話をかけてられないわね。ラトアさんはまだ？」

夜空を見上げて、ラトアさんは見付からない。

「嬉しくないの？俺に会えて」
「……………もっっ」

あたしの髪を撫でながら見つめて言うコクウに呆れたが、会えて嬉しくないかと問われて怒る気が失せた。

ジェット機の中で、会いたいと思ったことを思い出してしまい恥ずかしくなる。

俯けば肯定と受け取ったコクウは嬉しそうに笑った。

「椿い」

「ちよ、やめなさい、今はっこんなことしてる場合じゃあ…」

口付けをしてくるコクウ。

こんなことしてる場合ではない。

蓮真君を捜さなくては。

しかしコクウは放してくれず、強引に唇を重ねる。

「こく、んっ」

舌が侵入して絡めとられた。熱く甘く深く、愛でるようなキスをされる。

最初は拒んでいたが、愛し合っているヒトだ。気が緩んで、抵抗をやめて受け入れてしまう。

間に挟まれて苦しくなったマフユは抜け出して、コクウはあたしを抱き寄せた。

「ふ……………椿……………」

「あっ、コクウ……………」

唇から落ちた唾液を舌で舐めとるコクウは、妖艶な笑みを浮かべて

甘く囁く。

「愛してる、椿」

「んっ…」

「愛してもいい？」

「っ……だめ……」

欲望には負けない。負けないぞ。

あたしは彼の胸を押し退けて、拒む。忘れていたがここに遊太がいたのだ。

「ん？遊太、最後まで見てる？」

押し退けるも無にしてコクウはあたしを抱き締めた。

なにが最後までだっ。

殴りたかったが、遊太の様子が変であたしは振り返る。

「っ、後ろ……」

青ざめた顔の遊太は後ろ　　つまりは、コクウの後ろを見ると言う。

振り返るより前にコクウはコンクリートを蹴り、その場から離れた。その場は、砕かれてクレーターが出来る。

「……」

コクウに抱えられたあたしは言葉を失う。

クレーターを作ったのは他でもない

頭蓋破壊屋の白溜さん。

ギロリ、と白溜さんはただ一点を睨み付ける。その表情には怒りしか見えなかった。

どうやら、先程から見ていたみたいだ。

「やあ　　白瑠」

「　　コクウ」

あたしを降ろして、コクウはいつもの微笑を浮かべて白瑠さんに挨拶した。

白瑠さんは殺気を向けて睨み付ける。

その殺気はこの場では指一本動かしてはいけないと思わせるくらい空気を凍らせていた。

「椿さん」

呼ばれて顔を向ければ、扉の前には幸樹さんとラトアさん。

「離れた方がいいです」

え？

その言葉の意味を理解する前に、二人は動いた。隣にいたはずのコクウは、消える。

次の瞬間、コクウは白瑠さんの前。

白瑠さんの顔を目掛け、コクウは右足を振る。それをしゃがんで避けて、白瑠さんは右手をコクウの腹に打ち込む。

当たる寸前でコクウは回避した。

「！…珍しいな、コクウが避けるなんて」
「デIFOオ！」

声が聞こえて後ろを振り向けば、腰を下ろしたデIFOオ。直ぐにあたしは白瑠さんとコクウに目を戻す。

白瑠さんは少し不可解そうな顔をしたが、コクウに攻撃を続ける。
コクウは回避を続けた。

「離れる、椿」

「ら、ラトアさんっ」

あたしの腕を掴み、ラトアさんが離れるように言う。

「こうなつてはコクウが飽きるまで止まらん」

「私達は那拓蓮真を捜しましょう」

「で、でもっ……」

腕を引つ張られ、二人から離される。

頭蓋破壊屋と呼ばれ、最も恐れられている白の殺戮者。

数々の伝説を残してきた、長年恐れられている黒の殺戮者。

その二人が今、顔を合わせて殺し合っている。

それが当然のように、それが自然のように。

前は二人の殺し合いを見てみたいとも思った。にこにこしたあの白瑠さんを唯一逆撫でできる余裕綽々のコクウを見てみたかった。ただの好奇心。

今は事情が違う。

初めて居合わせた二人を視た。

気が気じゃない。

二人は本気で戦っている。

コクウは人間より強靱で筋力もかけ離れているのに、腕を振り足を振るう。当たれば吹き飛び骨は折れる。

白瑠さんなんて片手で頭蓋骨を破壊する怪力なのに、その手を振り回していた。

当たればとんでもない。

それをギリギリのところで二人はかわしている。

流石は恐れられている殺し屋。

このどちらかに狙われても最期。二人に狙われても最期。いい死に方はしない。

対立する白と黒。

殺し合いを始めれば誰も止められない。

白と黒の衝突。

終わらない殺し合い。

決着のつかないぶつかり合いだ。

「俺の攻撃を避けるなんて…びびってんのか？」

白瑠さんが口を開いてあたしは腕を引つ張られていたが踏みとどまった。

「びびってないよ？お前の攻撃を受けてもすぐ治るけどお…恋人と約束しているんだ、椿以外の奴に身体を傷つけられちゃいけないんだ」

コクウは冷ややかに嘲笑う。

怒りに触れたのだらう、白瑠さんは更に目付きが鋭くなりスピードを上げて右手を振り下ろした。コンクリートに穴が開く。

「くひゃひゃっ」

コクウは笑う。白瑠さんは睨む。

「椿は俺の恋人だぜ？解ってる？」

「……」

「お前が放っておいてる間、椿の傍にいたのは俺。椿はボロボロだった」

「……」

「お前は椿を傷付けてるだけだ。もう近付かないでくれる？」

ドツカツ!

コクウの踵落としが、足場を崩していきボロボロと崩落していく。コンクリートに亀裂が走った。

「…いつもと」

「違うな…」

あたしと同じく見張るように二人を視ていた幸樹さんとヲトアさんが呟く。

いつもと違う？

いつもの二人の喧嘩と違うのか？

あたしは問い詰めたかったが、二人から目を放せなくて見張る。隣の建物の屋上で爽乃と神奈が見えたが、そんなこと気にしてられない。

「　　っんひゃひゃひゃひゃっ!」

不意に響いたのは、白瑠さんの笑い声だった。

コクウの話だけでも怒りを見せていたあの白瑠さんが、コクウを目の当たりにして笑う。

「黒と向き合って笑うなんて…珍しいこともあるんだな」

「!…カロライ?」

背後からした声。振り返らずあたしは声の主の名を呼んだ。

「なんで貴方まで」

「ウルフが番犬は”日本人だった”と言っていた情報をナヤが掴んだんだ」

「それで一緒に日本にきたんだーけーど……うおい、なにこれ修羅場？スクープ？」

カロライの他に、レネメンとナヤの声も聴こえてきた。警戒して幸樹さんが彼らと向き合うが、あたしは振り返らない。

番犬の件で、黒の集団が日本に来てしまったのか。日本人だってこゝとまで突き止められた。どうすればいい？

いや、それよりも今は。

裏現実で最恐の殺し屋二人を止めなくては。

「椿を自分のモノみたいに言わないでくれるう？椿は俺の弟子だし、傷付けてなんかない。傷つけてるのはお前の方じゃん。吸血鬼と人間、いずれ別れるんだろ？椿が老いに怯える前に別れてよ」

笑いながら白瑠さんは言っているが、全然笑ってなんかいない。笑みをつり上げているだけで、その目は射抜くように睨んでいた。

「師匠が弟子の恋人まで決めるのかい？愛し合ってるんだ、俺達は別れないよ」

「愛し合ってるんだって？椿が愛してるって言ったことあんのかよっ！？」

ピクリ、コクウの微笑に変化が。

白瑠さんはそれを見逃さなかった。

「うつひゃっひゃあ、何が愛してるだあひゃひゃ」

「……酔った椿を襲ったお前なんか言われたくないね」

「……あ？」

「俺達は同意の上で、熱く愛し合ったって言ったんだ」

「……」

「恥じらう椿の顔を眺めながらドレスを脱がしたよ、あれはほんと……忘れられない一夜だった。知ってる？椿とは毎晩同じベッドで寝てるんだ。寝顔が可愛すぎて毎晩襲いたくなっちゃうけど、誰かさんと違って俺はロマンチストだから。ロマンチックに誘って愛し合ったよ？何度もね」

「っ俺は椿から誘われた！キスしてきて迫ってくる椿に自分を押しさえられなかったよ、ああ！俺が椿のハジメテを奪ったさ！激しく抱き合って何度もイカせたよっ」

「たった一晚だけで、しかもそれは泥酔してた椿だろ！」

「それでも気持ちいいって言った！知ってるか！？椿は後ろから突かれるのが好きだって！」

「知ってるさ！テーブルでやったらおねだりされ」

「何の話をしてるのよっっっ！！！！！！！！！！」

戦いながらの会話はどんどん変な方向に行き、とても恥ずかしいことを暴露してきた。

わなわな真っ赤になって震えていたあたしはついに大声を上げて止める。

背中に突き刺さる視線を感じてあたしは絶対に振り返らないと誓った。

あたしの怒鳴り声に一度、あたしに目をやるが二人はまた向き合っ
てしまう。まだやめないつもりか。

白の殺戮者。黒の殺戮者。

鏡のようにそっくりなくせに対象になって対立する存在。

白と黒。

白あつての黒。黒あつての白。

光と影のように、対象でありながら繋がる存在。

けれども決して交わらない。

交わることなんて、溶け合うことなんて、ない色だ。

主張しあって、灰色にはならない。

互いを塗り潰す。

互いを消そうとする。

この二人が殺し合いを始めてしまえば、止められる者などいないのだ。

最恐の殺戮者だ。

誰構わずぶった切る狩人の危険人物である那拓爽乃もその場を動くとはしない。

吸血鬼のラトアさんとデイフォも、割って入ろうとはしない。

幸樹さんだって、白瑠さんを止めようとはしない。

あたしは　　止めることが出来ない。

互角な戦いを繰り広げる二人の殺し屋に、割って入っていく自信がなかった。

かつて幸樹さんが例えたように、白瑠さんは100レベル。あたしは恐らく90にも満たないだろう。

白瑠さんが100レベルならばコクウも100レベル。

これは100レベル同士の闘い　　否、殺し合いなのだ。

今までならばコクウの血で白瑠さんは真っ赤になっていただろうが、あたしとの約束でコクウは自殺行為の戦い方はやめている。

二人の会話には常にあたしの名前が出た。

これはあたしの取り合いでもある。

愛してるあたしを最も嫌う相手から奪い返そうとしている白瑠さん。愛してるあたしを最初に見付けた自分に似た者から守るコクウ。

寧ろあたしの取り合いだ。

こう言う場合は「あたしの為に争わないで！」と言うべきだとヴァッサーゴが笑う。

笑い事じゃない。

このモテ期はなんなんだ。あたしの不幸の一部のように悩みの種だ。なんでまた裏現実の殺戮コンビがあたしを愛して、取り合うように

殺し合うんだ？

あたしにそんな価値なんてない、なんて言えばまたガミガミ言い争うだけだから言わない。

取り合うような絶世の美女でなければ、ピュアな心の持ち主でもないこのあたしが。

なんでこうも愛される？

それも人外の領域の方々ばかりに。

あたしはコクウの恋人。

それでいいではないか。

白瑠さんはフラれたと理解して認めてくれれば、それで済むことなんだ。

思い通りにいかなくて癩癩を起こしてる白瑠さんとはもかく。

何故恋人であるコクウまでむきになって白瑠さんと喧嘩をするんだ。

あたしの恋人なのだから、それでいいではないか。

いつものように笑ってかわしてればいいじゃない。

どうしたの？コクウ。

「最初に椿を見付けたのは俺だし！最初に寝たのも俺！最初に好きになったのも俺だ！」

「……そうだ」

トッ。白瑠さんの手をかわして距離をとったコクウが笑みを失くす。

「お前が見付けて　　お前が椿を裏側に引き込んだ」

ギロリ、今度はコクウが白瑠さんを睨み付けた。

「は？なに？」

白瑠さんは顔をしかめて睨み返す。

「白瑠。お前に会ったのが、椿の最大の不幸だ」

そう吐き捨てるように告げたコクウの眼には、激情が秘められているように見えた。

いつか、どこかで見たコクウの表情。

いつ?どこで?あたしは思い出そうと記憶を探る。

「お前なんかに出会ったのが間違いだったんだよ、椿は裏側に来るべきじゃなかった」

観客なんてお構いなしにコクウは言った。白瑠さんは理解できていないのか、身構えたまま動かない。

「何言つて…」

「たまたま椿の殺戮現場に居合わせただけで、椿を裏に引き込んだ。それはなんでだ?白瑠」

「…?椿が中毒だから」

「中毒だつて?一回で中毒とは言わない。何度も何度もやって止められなくなるのが中毒だ。お前が椿を中毒にさせたんだよ!」

「!?!?」

中毒。殺戮中毒のことを言っているのか?

コクウは、一体何を言っているの?

「解らないのか?初めての殺しの時に、椿は捕まっていればよかったんだ」

「はあ?捕まれば死刑か病棟行きだったんだぞ」

「殺戮しながら生き地獄を味わうよりマシだ!」

コクウの言葉が不可解で理解できない白瑠さんはますます顔をしかめる。

「お前は椿を死刑から救ったんじゃない。生き地獄の道連れにしたんだ。自分とダブらせて、自分と同じ道に引き込んで引き返せない程真っ赤にさせた。何が”殺戮者で殺戮中毒でもう戻れない”だ。俺に言われた言葉を椿にまんまぶつけやがって。引き戻せないくらい手を引いたのはお前だ！椿が殺さずにいられなくなったのはお前のせいだ！お前が手遅れにさせた！」

「ちが」

「違うない」

コクウは否定しようとした白瑠さんの言葉を遮って肯定を押し付けた。

思い出した。

コクウの激情の秘めたその目は、あたしが意識を失って刺客を殺戮した後で視たんだ。

「椿の正常を異常にしたのは白瑠、お前なんだ。椿を殺戮者に仕立てあげたのは裏に引き込んだお前なんだよ、師匠さん。お前が椿をぶっ壊したんだ！」

びくっつ、コクウの怒鳴り声に白瑠さんは撃たれたように震え上がった。

あ…。

そうか。

あの時、コクウはあたしを見つめながら白瑠さんを思い出して睨んでたんだ。

無意識の殺戮で真っ赤になったあたしを視て、白瑠さんに憤りを感じてた。

こんなあたしを造り上げたのは、白瑠さんだからと。だからコクウは、白瑠さんと殺しあっているんだ。その憤りをぶつけるために。

白瑠さんは、否定できない。

コクウには言われた言葉は、事実だから。

例え意図的にそうしたわけじゃなくても、それは真実。

コクウは、よく解ってる。

白瑠さんのことを自分のことのように、理解している。だからこそ、言えたんだ。

白瑠さんが自分のことを理解していなくても、コクウは理解している。

言われて白瑠さんは今、気付いたのかもしれない。

言い返さない。

足元の穴を愕然と視ていた。

「もう椿に　近づかないでくれる？」

コクウは白瑠さんに同じことを言い返す。

ビル風が吹き荒れ、コンクリートが崩れ落ちる音がする。誰も動かない。指一本動かすのも気が引ける空気のままだ。

「　だが、俺は…後悔してないっ！！」

顔を上げて、口を開いた白瑠さんはまたコクウに向かう。

コクウが避ければ、巨大な穴が開く。足場が落ちて落下しそうになったが白瑠さんは、コンクリートを蹴って着陸をする。

「俺は無理強いなんてしてない！椿に選ばせた！」

「死刑or殺し屋？騙したようなもんだろ！選ばせてなんかない、選択肢は一つだけ与えて椿を嵌めたんだ！」

「その選択は間違っってなんかない！」
「間違ってる！」

白の殺戮者と黒の殺戮者が暴れ、足場は次々と破壊され崩れていく。全て攻撃は避けられているから。

「椿はっ！間違っってなんかない！！血塗れになってもっ椿は笑った！笑って笑ってっ幸せも手に入れたんだ！それを否定っっすんなああっ！！！！」

叫んだ白瑠さんの声は、響き渡った。

もう、堪えきれなくなっって。

あたしは。

あたしは幸樹さんに掴まれた腕を振り払い、コクウと白瑠さんの元に駆けた。

「椿！」

「やめろっ」

幸樹さんとラトアさんが止める声。

止めるのは、この殺戮者達だ。

「やめてください！二人とも！」

第三者の声なんて、耳に届いてないみたいに二人はまた攻撃しあう。あたしは穴を飛び越えて、二人の間に割っって入った。

「やめてっばっ！！！！！！」

出せる限りの声を出して二人に掌を向ける。白瑠さんの掌とコクウ

の拳は、あたしに触れる手前でピタリと止まった。

足が震えて、今にも崩れそうになるが踏みとどまる。危うく二人に殺されるところだった。

深呼吸して、あたしはキツと二人を睨む。

「あたしをネタに殺し合うのはやめてください！迷惑よ！」

「椿…」とコクウと白瑠さんがあたしの名前を口にする。

「あたしのことを勝手にとやかく言わないで！白瑠さんとコクウが取り合う玩具じゃないわ！白瑠さん！最初に見付けたとか愛したとかそんなの関係ありませんから！張り合うのもやめてください！馬鹿馬鹿しいです！」

「うっ…」

ビシッ、と白瑠さんに人差し指を突き付けてあたしは叱る。

「え、次は黒猫の説教タイム？」とナヤの声が聞こえた気がするが、あたしは続けた。

「貴方もよ！コクウ！張り合うな！それにっ」

次にコクウを指差す。

「選んだのはあたしよ、コクウ。牢獄も病棟も嫌だったから、生きることを選んだの」

「当然だ、それは選択肢じゃない」

「確かにそうかもしれない。でもあたしは生きることを選んだ。生き地獄でも。白瑠さんの手を掴んだのはあたしの方なのよ」

「違う」

「違う。決めつけないで。あたしはこれで良かったの」

「良くないっ！」

「裏に来なきや、あたしはただ死んでたのよ？コクウ」

首を振るコクウにあたしは静かに告げる。

牢獄に入れば、あたしはただ死んでた。

コクウは知っているだろう。

死刑宣告される前に、きつと心臓は止まっていた。

どちらにせよ、あたしは死んでた。死期は決まっていた。

だけど裏現実に来て、あたしはヴァッサーゴに出会い生かされた。

だからこうして生きてる。

裏を選ばなかったら、ただ死んでた。

「牢獄の中で、独り死ぬよりも……ずっとましだった。白瑠さんに会えなかつたら、幸樹さん達と会えなかつたらあたしは愛を知らないままだったわ。血塗れでも、真っ赤に染まっても、間違いだと周りから言われても……あたしはあたたかい場所に居られて幸せなの」

ここが居るべき場所。そう思った。

裏現実に入ってからトラブルの連続だったけれど、それでも表で生きた18年よりずっとマシ。

何度も死にかけたけど、すごく痛かったけれど至極苦しかったけれど、包んでくれる温もりがあるだけでそばにいてくれる人がいるだけで、幸せだった。

「貴方にだって会えた。あたしも、後悔なんてしてない」

裏現実に入ったことは、後悔してない。

「椿……」

「椿……それでも、俺は白瑠を許さない」

「コクウ……」

真っ直ぐ見つめて、あたしから言ってもコクウはその激情を消さなかった。

「椿をあそこまで壊したんだ、椿は解ってないのか？解ってるだろ？意識が飛んでも殺戮なんて、”異常”だ！”正常”を奪ったのは白瑠だ！」

白瑠さんを許さない。

あの殺戮のあたしを異常だと言うコクウ。笑えない。自分の血をぶち撒きながら食事をしていたコクウに言われたくない。本当に、酷いわ。

解ってる。

異常だつてことくらい。

そう壊れてる。

異常だと理解して納得してるあたしは壊れてるんだ。

それは元から。あたしが壊れてただけ。白瑠さんが壊したわけじゃない。

「コクウ!!」

あたしは怒鳴る。

「あたしは元から壊れてるのよ！白瑠さんは悪くない！」

「悪くないだつて！？椿っ、中毒にしたのは白瑠なんだよ！なんで白瑠を庇う！？」

「俺が悪い俺が悪い。それが何だよ？俺を殺さなきゃ気がすまないの？だつたら殺れよ！」

「やめてっ！白瑠さん!!」

白瑠さんが身を乗り出してまた殺し合いを始めようとしたが、あたしが片手で胸を押さえて止めた。

「椿は白瑠なんかと似てない！白瑠が似せようと重ねたんだ！同じ道を歩ませたんだよ！椿は俺達と違う道があったのに！アイツが壊したんだ！！」

コクウのことから、意識が逸れる。

遠くの街の光だけしかない暗い屋上。赤い炎に目が奪われた。

カロライ達の後ろ。

そこに篠塚さんがいた。

ライターで煙草に火をつけている篠塚さんを、あたしは視た。篠塚さんもあたしを見ている。

俺が止める！！お前の中毒を治す！俺が治るまで側にいて君を助ける！

あたしは、奥歯を噛み締めた。

そしてあまり深く考えないで、それを口にして宣言する。

「あたし、殺戮辞めるっ！！！！」

それを聴いた一同は、驚愕して茫然とした。

気に留めずあたしはコクウを見上げて告げる。

「やめてやるわ！殺し屋も辞める！これでいいでしょ！？辞めてやるわ！引き返さないなんて言わせない！あたしに選択肢がなかったなんて言わせない！文句は言わせないわ！！」

怒鳴り付けるように声を上げた。

「椿…そんなの……」

もう手遅れだ。

そう言いたげだったが、コクウは口にしない。この場にいる多数の人間もそう思っているだろう。

自他認める殺戮中毒者だ。

わかってるわよ。

あたしは深呼吸して、言う気がなかったことを告げる。

「別れましょう、コクウ」

「……え……？」

「別れて、コクウ」

「椿……？」

いきなり恋人から別れを告げられて困惑するコクウに背を向き、今度は白瑠さんと向き合う。

「コクウとは別れます。だからコクウと殺し合うのはやめてください」

「え？」

「殺戮中毒を治す。だから白瑠さんと殺し合わないで」

コクウにも顔を向けて頼む。

「殺し合うならば　あたしは死ぬから」

そして、最後に脅しをかける。

死ぬのは簡単だ。

ヴァッサーゴに心臓を動かすのをやめてもらえばいい。やめてくれるかどうかは、わからないが。

でもこうでもしなきゃ、二人は殺し合いをやめない。
二人には、死んでほしくはない。

「黒の集団は帰って、忙しいの」
「椿っ」

あたしはラトアさんの元に戻ろうとしたが、コクウに腕を掴まれて止められた。

「俺は別れない」

「別れて。別の人を愛して」

「君以外に愛せる人なんて、いない」

「いるわ。…あたしを愛さないで」

あたしは静かに首を振って、コクウの手をほどく。

「愛する」

それでもコクウは、引き下がらない。

「俺には君だけだ」

あたしは目を閉じて、コクウに背を向けてラトアさんの元に戻る。

「この辺にいるはずですが、捜し出せそうですか？」

「…ああ。廃墟ならば、見付けられる」

ラトアさんは頷く。

良かった。

あたしは扉の中に目をやる。篠塚さんの姿はなかった。

「蓮真捜しは再開？」

遊太が駆け寄り、あたしに問う。勿論。

「手伝う」

そう言ったのは、隣に立つコクウだった。

「話は終わってない。…それに、人手は多い方がいいだろ？」

微笑むコクウの後ろに、デイフォが立つ。

吸血鬼三体ならば、蓮真君を早く見付けられるはずだ。

「ええ、お願い」

頼みつつも、あたしは白瑠さんを気にして盗み見する。白瑠さんはそっぽを向いていた。

「誰捜すんだ？」

「おれの弟」

「遊太の弟？そんなばかなっ！遊太に弟…！つまりは那拓家に隠された末っ子がいたんだ！ビッグニュース…！」

レネメンに訊かれてすんなり答える遊太。ナヤに知られたなら、裏現実中に蓮真君の存在は知り渡るだろう。

人間より嗅覚と聴覚が優れている吸血鬼は周りを見回してにおいを嗅ぎ耳をすます。

「血のおいだ」

「！」

血のおい。

あたしと遊太は、顔を合わせる。

「急ぎましょう」

「レネメン、遊太」

コクウの指示で向かいの建物にレネメンと遊太は、銃を撃つ。放ったのは弾丸ではなく、ワイヤー。

ワイヤーを使って先に遊太が降りていく。

がしっ。左右の腕を掴まれた。

見てみれば、コクウと白瑠さん。

ギロリ、二人は睨み合う。

「あたしを取り合うのは…やめてください」

「違うよ。椿を抱えて降りようと思ったんだ」

「俺が椿と降りるからその手外せ」

「一人で降りられ…わぁ!？」

取り合いじゃない…。

二人の腕を振り払う前に、誰かに抱えあげられて驚く。幸樹さんだ。

「なにすんだよ!幸樹!」

「おい」

「椿さんは、私の妹です」

幸樹さんは有無言わせない微笑を殺戮者に向けた。奇跡的に二人は引き下がる。おお…シスコンパワー。

カロライ達も降り立てば、続いて爽乃達も降りた。爽乃達と一緒に、

火都も。

「行くわよ」

人数が多すぎだが、まあ人手は欲しい。二手に別れて、血が香る建物の中に入る。

遊太に電話するよう言えば「着信音が聞こえる」とコクウ。血の香り。あたしの携帯電話。ビンゴだ。

「何処！？」と駆け出す。

あたし達は音を頼りに上へ上がる。

あたしにも血のおいがした。

着信音が途切れる。

あたしはもう一度かけるように言った。

はつきりと、あたしの携帯電話の着信音が聞こえる。

「蓮真君！」

あたしが呼べば、遊太も声を上げて蓮真君を呼んだ。

「椿」

振り返れば、コクウは扉を指差していた。

もう一度、遊太が電話を掛ければその扉から着信音。

あたしは扉を開けようとしたが、鍵が掛かっているのか鉄の扉はビクともしない。

すると白瑠さんがあたしを押し退けて、片手でその鉄の扉を粉碎した。

灰色の暗い部屋。

埃の被った机の上に、あたしの紅い携帯電話。

「んんっ」

「蓮真君！」

柱には縛り付けられた蓮真君がいた。

口を布で塞がれた彼は、傷だらけでぼろぼろだったがそれでもちやんと生きている。

ホツとした。

「レン！」

「蓮真君！」

衰弱した様子でぐったりしているが、あたし達をぼんやりだがちゃんと見ている。

遊太が身体を縛り付けるロープをほどくから、あたしは口の布をほどく。

ほどいた途端だった。

「椿っ！結婚しようっ！！」

「えっ」

拉致られ監禁された少年の第一声に、あたしは…あたしだけではなくその場にいた全員がポカーンとする。

「あの時は断ってごめん！椿が結婚したいなら結婚してやる！結婚前提に付き合っつて結婚するから嫁ぐ前にちゃんと家に帰れ！フラれたくらいで家出なんかすんなっ！」

蓮真君は一体何を言ってるんだろっ。

頭の中で彼の言葉を繰り返して解読しようとする。

腹が痛い。

「あはははっ！あはっ………ありがとう……蓮真君」

あたしは蓮真君の頭を撫でて、お礼を云う。

「別に貴方にフラれたから家出したわけじゃないわ……結婚しなくていいから。ごめんなさい、こんなことになって。……生きてて良かった」

「…椿」

「あたしはちゃんと帰ったわ」

にこっ、と笑いかけた。

「レン！心配したんだぞ！」

「兄ちゃん……」

「このバカっ！心配かけんなよっ」

ロープをほどき終えた遊太は、生存していた弟の肩を掴んだ。泣きそうな表情を一瞬見せたが、ニカッと笑って頭をくしゃくしゃと撫でた。

「痛っ！痛いよ！兄ちゃん！」

「バーロー！」

そう言えば、この二人が一緒にいるところを見るのは初めてだ。本当に、良かった。

身体が痛いのか、蓮真君は立ち上がれないでいた。手を貸そうと手を伸ばしたが、蓮真君はその手を掴まず何処かを見てギョツとする。何を見ているのかと、振り返ればあたしもギョツとした。

白瑠さんは笑顔で殺気を放ち、コクウは無表情で睨み付ける。その標的は蓮真君だ。

この二人の前でプロポーズをしたんだ。睨まれただけで済んでラッキーだ。

爽乃と遊太も駆けつけて再会でガヤガヤし始めた。

「あ、幸樹さん。蓮真君を診てくれませんか？」

「……彼にプロポーズしたんですか？」

「え？まあ……しました」

「結婚したいんですか？」

「いえ、結婚願望はありません。ただ結婚してもいいなあと……鼠を殺した後、思ってたんですよ。家に帰れなくて行く場所がなくて蓮真君の元に行った時」

「……………そうですか」

医者の方幸樹さんに衰弱した蓮真君に頼むが、幸樹さんも怒ったのだろうか。

「本当に、椿！帰ったのか？」

「ええ、椿さんは帰ってきましたよ」

爽乃に説教され神奈にはからかわれて、救出早々ついていない蓮真君は確認する。それを代わりに診察を始めた幸樹さんが答えた。

「いつ？いつだ？」あの人”には会ったか？」

「あの人？」

あの人、では誰のことかわからない。

そう言えば、犯人は？

人質を監禁してたのに、見張り一人もいなかった。

着信音が鳴る。あたしの携帯電話だ。携帯電話は何故か、充電器がささったまま。

あたしはデイフォから携帯電話を受け取り、画面を確認する。藍さんからの着信だ。

「藍さんっ」

あたしは直ぐに電話に出た。ただ電話の相手は、女の声。

「アンタが”お嬢”？」

聞き覚えのある声だった。

「お願い。藍乃介を

止めて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4702p/>

裏現実紅殺戮 白と黒と紅

2011年9月11日23時50分発行